

白騎士物語 時をこえ
た物語

神無 龍希

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦争でアスヴァーン王国はイシユレニア帝国に勝った

だが戦いはそれで終わりではなかった

一万年後に起こると言われた戦いの時のために準備を整えて二人の勇士は時をこえる

イシユレニア帝国皇帝の野望を砕くために

帰還報告（3月19日追記）

ようやく続編の覚醒する魂の物語を一区切りつくところまで書いたので新規投稿し

ます

・この小説は白騎士物語の原作沿い再構成ものの小説です

・オリ主がチートな強さを持っています

・オリ主以外のオリキャラが登場する上一部原作キャラの設定を改変しています

・元々いくつか破たんしてると思われる原作に説得力を持たせるためとか作者の趣味とかで改変や独自解釈それに捏造などもしています

・原作キャラも含めて原作ゲームにないオリジナルスキルを使うことがあります

・この作品は白騎士物語というゲームの日誌機能を使って連載していた作品を手直しましたものです

上記の事項を納得出来ない人はこの小説を読まずに戻ることをお勧めします

小説を読もうというサイトでも同じペンネームで作品を投稿しています

それと白騎士物語では（レティシア）と名乗っていました

目次

序章

時をこえた賢士 1

時をこえた賢士 2

第一章

白騎士 1

白騎士 2

白騎士 3

白騎士 4

白騎士 5

白騎士 6

白騎士 7

白騎士 8

94

83

75

67

56

47

38

22

14

1

第二章

白騎士 9

白騎士 10

白騎士 11

白騎士 12

鬼械神 (デウスマキナ) 1

鬼械神 (デウスマキナ) 2

鬼械神 (デウスマキナ) 3

鬼械神 (デウスマキナ) 4

鬼械神 (デウスマキナ) 5

鬼械神 (デウスマキナ) 6

鬼械神 (デウスマキナ) 7

鬼械神 (デウスマキナ) 8

230

222

212

196

182

175

169

159

141

127

113

106

龍騎士 2	350
龍騎士 1	340
第三章	
鬼械神 (デウスマキナ)	240
鬼械神 (デウスマキナ)	253
鬼械神 (デウスマキナ)	262
鬼械神 (デウスマキナ)	272
鬼械神 (デウスマキナ)	283
鬼械神 (デウスマキナ)	295
鬼械神 (デウスマキナ)	305
鬼械神 (デウスマキナ)	314
鬼械神 (デウスマキナ)	324
鬼械神 (デウスマキナ)	330

黒騎士 3	504
黒騎士 2	489
黒騎士 1	477
第四章	
竜騎士 1 1	464
竜騎士 1 0	449
竜騎士 9	433
竜騎士 8	425
竜騎士 7	410
竜騎士 6	399
竜騎士 5	385
竜騎士 4	372
竜騎士 3	362

第五章

黑騎士 1 5	629
黑騎士 1 4	621
黑騎士 1 3	612
黑騎士 1 2	601
黑騎士 1 1	589
黑騎士 1 0	578
黑騎士 9	571
黑騎士 8	558
黑騎士 7	545
黑騎士 6	540
黑騎士 5	528
黑騎士 4	516

終章 2	733
終章 1	729
終章	
太陽王 6	715
太陽王 5	704
太陽王 4	695
太陽王 3	677
太陽王 2	658
太陽王 1	641

序章

時をこえた賢士 1

序章 1

時をこえる賢士 1



アスヴァーン王国のとある城の一室

そこでは13才くらいにしか見えない緋色の目を持つ可愛らしい少女が書類の山と格闘していた

(レティシア)

「ふああ、なんで妾わらわがこんなことをせねばならぬ、こんなのは城の中でふんぞり返つてる頭でつかちどもの仕事であろうが」

(レティシア)

「いや落ち着け、落ち着け、わかつてる、城の連中も突然のことでやたらと忙しいこと

も、妾に任せられる書類があつた戦いに関する表に出せないあれやこれやの書類であることも」

顔をぶんぶんと度に背中まで伸びた緋色のふわつとした巻き毛が左右に揺れる

子供が癩癩を起こしてゐるようにはしか見えないがこの少女は剣術や槍術を始めとする八極戦技をすべて修め、莫大な魔力で魔法を使いこなし、それ故賢士の称号を贈られた人物である

ひとしきり騒いだ後で癩癩の原因である50cmは積まれた書類を一睨みしてため息をつく

(レティシア)

(あの戦いが終わって白騎士が戻ってきた時にはミューレアスのやつは息をしておらなんだからの)

(レティシア)

(あやつは本気でワイルドの願いを叶えるつもりだったのか、後継ぎはちゃんと決めておつたから最悪の事態は免れておるが、戦後処理も済まぬ内にこのような事態になつておるからの、上も下もてんやわんやで大臣どもも首のすげ替えに忙しかろうのう)

(レティシア)

(その上に騎士の問題もある)

(レテイシア)

(月姫は契約者フラベルの親に返しておるし)

(レテイシア)

(黒騎士はクーデター軍に襲われて行方不明としかわかっておらぬし)

(レテイシア)

(龍騎士は空を舞い槍を自在に操ることから扱いは至極難しく、しかしながらその能力は至極強力、人が管理するには大きすぎる力故にバンカーロードの主に管理を任せ
ておるし)

(レテイシア)

(もつとも龍騎士だけは誰でも乗ることが出来ると言う危うい一面もあつてのことだがの、扱えるかどうかは別として)

(レテイシア)

(白騎士は次の契約者がワイルド程丈夫とし限らぬし、リミッターとして管理意識体のファントムを設置することで改造前の能力に戻し、いざという時にリミッターを解除出来るようにして城の宝物庫に封印されておるし)

(レテイシア)

(太陽王は帝国のくそつたれ皇帝と共に消滅…、したはずだったのだがのう)

(レティシア)

「ともかくこちらで押えてる騎士は一体だけか」

コンコン

その時部屋の扉がノックされ来客を告げた

(レティシア)

「なんじゃ、扉は開いておるから勝手に入つてこい」

癩癩を起したばかりで当然と言えば当然だが、レティシアは今虫の居所が悪い

「何か機嫌が悪そうですね」と言つて入つてきたのは金髪の優男だった

その優男はレティシアを見て目の前にあるものが理解の範疇をこえているのかそのまま固まつてしまった

(優男)

「あ…、あなたが…その…賢士レティシア殿？」

(レティシア)

「この部屋に他に人はおらぬぞ、ミューレアスのやつも魔力云々うんぬんがなければただの小娘であつただろう」

(レティシア)

「いい加減見た目で測れぬこともあると心底理解した方が良いでしょう」

(優男↓クライブ)

「あ…いやまったくその通りだな、返す言葉もない」

(クライブ)

「それでわざわざ元イシュレニア帝国の騎士である俺を呼び出してどんなご用件でしようか」

クライブが“元”騎士と言ってるように先日までアスヴァーン王国と戦争していたイシュレニア帝国は既に国としては滅んでいた

イシュレニア帝国の皇帝であるマドラスが後継に関しては何んの指示も出していなかったのが最大の理由であるがマドラス亡き後の滅亡ぶのはそれはもう早かったと風の噂で聞いている

(レテイシア)

「ふむ、それなんだがの、汝はフォーチュンテラーの称号を持つ男を知っておるか」
(クライブ)

「ええ、何でも彼の星詠みで示した未来は外れたことがないと評判ですよ」

(レテイシア)

「その星詠みのシーカーが汝もよく知るあの戦いに関して碌でもない予言をしておつてのう」

(レティシア)

「それであの戦いに関わっておった者たちを集めようと思ったのだがのう…」

(レティシア)

「結果としては汝しか集まらなかったということよ」

(クライブ)

「なるほど、それでその肝心の予言というのは？」

(レティシア)

「それは要点を抜き出して言うこととしようぞ」

(レティシア)

「シーカーの予言は長いのが欠点だからのう」

(レティシア)

「まずはイシュレニア帝国の皇帝マドラスだか汝が知らぬわけがないのう」

(クライブ)

「愚問だな」

(レティシア)

「そやつが一万年後に帝国を興おこすようだな」

(レティシア)

「そのマドラスと雌雄しゆうを決するためにミューレアスと騎士の生まれ変わり達がマドラスと戦うと出ておる」

(クライブ)

「はあ?、なんの冗談ですかレティシア殿」

クライブはマドラスが太陽王と共に白騎士によって消滅していることを知っているのでこの反応も仕方ない ことではある

(レティシア)

「いや…、まあ、そう言いたくなる気持ちはわかるがの」

(レティシア)

「妾と最初聞いた時は何の冗談かと思おたくらいだしの」

(レティシア)

「だがシーカーは予言で冗談や嘘うそをつくようなやつではないしの」

(クライブ)

「つてことは何か、あいつが倒したはずの陛下が生きていて、しかも一万年後に生まれ変わってまで戦うというのか」

(レティシア)

「決して外れぬ星詠みの予言かせそう言うのと違うことは、そういうことであろう

のう」

(レティシア)

「まあ予言通りになるとしてね一万年後ことであることだし今を生きる妾達に関係ないと言えれば関係ないことではあるがの(さて汝はどう答えるかの)」

(クライブ)

(ワイルド…、陛下…)

(クライブ)

「私の…、私の答えは決まっている、陛下に全力をもって仕えていたのも、あの戦いでワイルドと戦ったのもそれが帝国のためになると思つてのこと」

(クライブ)

「文武共に優れた陛下であれば間違いはないと信じればこそ」

(レティシア)

「そうか、なら汝はマドラスにつくと言うのか？」

(クライブ)

「いや、違う！」

(クライブ)

「私は知ってしまった、陛下はあの戦いで己のためだけに、不老不死を得るためだけに

動いていたことを」

(クライブ)

「帝国の錬金術の粹を集め、尽し、作られた太陽王もそのための乗り物とされワイルド達に止められたことを」

(クライブ)

「陛下が一万年後に興す帝国とやらも己の野望のために使うつもりではなからうか？」

(レティシア)

「うむう、星詠みの予言ではマドラスに転生とか生まれ変わりと言った言葉は使われておらぬのう」

(レティシア)

「ミューレアス達には使われておるし言い忘れとも思えぬが、人は一万年も生きておれるようには出来ておらぬし、どうということかの？」

(クライブ)

「だとしたら一体どういう事だ？」

(レティシア)

「一万年後のマドラスは人間をやめておるのではないのか？」

(レティシア)

「そして欲望のために人間をやめた者が国で暮らす人々のことを、民のことを考えるとは思えぬのう」

(クライブ)

(くつゝ、陛下が不老不死を求めたあの時のことを思えば十分にあり得ることだな)

(クライブ)

「陛下が人の道を外れるならば力づくでも止めなくては、それが陛下に仕えていた者として出来るせめてものことだ」

(クライブ)

「それにワイルドには会わせる顔もない、だからせめてワイルドの生まれ変わりを支えてやりたい」

(レティシア)

「汝はそれを本気で言うておるのか？」

(クライブ)

「ああ勿論だとも、一万年後だろうがどこだろうが関係ない」

(クライブ)

「今度こそ間違えたくない、今度こそその力の振るい所を間違えたくないんだ」

(レテイシア)

「それだけの決意ならばこの城に伝わるあの禁書を使えるかもな」

そう言ってレテイシアが部屋の一角で呪文を唱えると本棚が一つ消えてそこに隠された通路が姿を現した

どうやら特定の場所で特定の呪文を唱えることにより一時的に解除される高度な幻術で隠されていたようだ

(レテイシア)

「禁書の類が軽々しく外へ出せるものであつてはならぬからのう」

(レテイシア)

「ちと待っておれ」

レテイシアが隠し通路に入って数分してから一冊の本を持って出てきた

(レテイシア)

「これは四次元魔導書・移動術式という名の呪文書の一つよ」

(レテイシア)

「この魔導書に載つておる魔法の一つは魔法の力を持ちて時の流れを動き過去にも未来にも行けるものでな、ある意味リバーズ以上の禁呪よ」

(レテイシア)

「世界の理ことわりや時の流れかせ逸脱する魔法である以上使用すればどのような副作用が出るかわからぬぞ」

(レテイシア)

「それにじっくりと考えれば他に時をこえる方法が見つかるやもしれぬぞ、それでも今という時を惜しみこの書の禁呪を使うか？」

(クライブ)

「お気遣いありがとうございます、しかしながらこの想いを抱えたまま行動を起さずにいることが今の私にとっては何よりも辛いことになるのです、だからこそ今すぐにもミューレアス女王とワイルドの生まれ変わりほ探したいのです」

(レテイシア)

「…ふう、わかった、隠し部屋の禁書室で魔法陣を使えるようにしておくから汝はこの書のことから…、ここまでに載っておるクロノ・ドライブという名の術式をしかと覚えてまいれ」

(レテイシア)

「それと言うまでもないことだか、帰ってこれる保障がないのでな、親しい者には今のうちにきちんと別れの挨拶くらいはしてくるがよかろう」

(クライブ)

「そう…、ですな」

（レティシア）

「準備が出来ればこれを持って城までくるがよからう」

そう言つて直筆の紹介状をクライブに手渡す

（クライブ）

「ありがとうございます、一週間後には来るつもりですので」

（レティシア）

「うむ、達者でな」

時をこえた賢士2



あれから丁度一週間後にクライブはアスヴァーンの城にやってきた

(レテイシア)

「きつちり一週間で来るとは何時も律儀りちぎなものよ」

(レテイシア)

「しかと習得出来ておれば一週間も待たずともよかろうに」

(クライブ)

「いえいえ、この術式の重要性がわかればわかるほどに無意識レベルで行使出来るほどまでに習熟せねばならぬと思えたのでこれでもまだ足りないかと思えるほどです」

(レテイシア)

「ほう…、そこまで理解出来ておるならば今更注意せねばならぬことは何もありません」

(レテイシア)

「ではついてまいれ」

隠し通路を通った先にある禁書室には一揃えのデスクセットと壁一面に並ぶ禁書の本棚だけではなく、部屋の中央に外延部分に隙間なく術式を書き込まれた魔法陣が用意されていた

(レテイシア)

「では始めるぞ」

魔法陣の中央で座禅を組んでいるクライブはこくりと頷いた

(レテイシア)

「来たれ…、集え、大気に満ちるマナよ、コールサモン…、コールサークル…、コール

マナ…」

視認出来ない形無き魔法のエネルギーであるマナがレテイシアの呼びかけに応じて

集まりだす

(レテイシア・クライブ)

「マナストリーム…、マナスパイラル…、マナコーティング…、マナコントロール…」

視認出来るのではないかと思えるほど濃密なマナが魔法陣の中央に集まったところで二人揃って新たな術式を組立てマナをコントロールしてその支配権をクライブに集中する

(レティシア)

「マナクロノス…、フューチャーリーブ…、クロノリーブ…、リバーポイント…、クロノリーブ…」

そしてクライブをマナでコーティングして超濃密ちようのうみつに纏わりついてるマナごと三次元と四次元の間にある時の河へと放り出す

(レティシア)

「ふう…、後は汝次第ぞ、クライブ」

時の河に放り出されたクライブはというと

(クライブ)

(むう…、ぬぐう、これは、まるでマナの塊かたまりが濁流だくりゆうとなって時の彼方へ押し流そうとしているかのようだ)

(クライブ)

(このままではまずい、コーティングされてるマナが剥がれない内に術式を組み立てなくては)

(クライブ)

「マナコーティング…、マナコントロール…、マナスパイラル…」

(クライブ)

「マナモーメント…、マナブースト…、ストリームサーフィン…」

(クライブ)

(これで時の河の上方向に出れたな、下流方向が未来なのは間違いないが)

(クライブ)

(クロノ・ドライブの探査術式を使うか)

(クライブ)

「デジヨンアイ…、パラドクスアイ…」

(クライブ)

「クロノアイ」

(クライブ)

(…うむ、2000年ほど流されていたか、確認出来なければ危ういところであったな)

(クライブ)

(時の流れが見える程度に流れに乗ることにしよう)

クライブはコーティングされているマナを螺旋状むせんじょうに回転させて推進力に変えること

で元いた時代より一万年後の未来へと降り立った

だが降り立った時代が予言された時代20年前の時代であることも、クライブの金色

の色素が漆黒に変わり黒目黒髪になっていることも

色素が変わった事で「時をこえた人間が変わらずに存在することは許されぬのか」と
思いクライブの名を捨てエルドアと改名するのも

すべては後の話である



クロノ・ドライブが発動してから二年後

(レティシア)

(やれやれ、ミューレアスのやつも跡継ぎを選ぶのは失敗したみたいよのう)

(レティシア)

(まさかたつたの二年で復興の兆しが見えるどころか更に傾くとは思わなんだのう)

(レティシア)

(それに権力に群がる屑虫どもはこのままでは権力を掴むどころか国そのものが滅ぶ
ということに気づいておらぬしの)

(レティシア)

(これでは沈没寸前の船ではないか)

(レティシア)

(まあ、あれから副作用なしに時をこえる方法を見つけるのに半年、そして術の発動中に起きうるあらゆる事態を乗り切れるように亜空間結界エリアを準備するのに一年半、ようやくと妾も一万年後の世界へ行く準備が出来たのう)

(レティシア)

(もうこの国の行く末は見えておるしこの時代に妾が未練を持つ者もおらぬ、すぐにも行くとするかのう)

(レティシア)

(クライブのやつだけを禁術で送り出しといて妾だけ知らんぷりするわけにもいくまいしの)

(レティシア)

(それにマドラスのやつは妾も嫌いよ)

レティシアが亜空間結界へのアクセスコードを唱えると目の前に亜空間結界へ繋が
る黒い穴のようなものが開いた

レティシアが穴に入ってしばらくすると亜空間結界への穴は自動的に閉じた

レティシアが一年半かけて作った結界はひょうたんのような形をしておりそれぞれ
の部屋に魔法陣がセットされている

(レティシア)

(まずは幽体離脱せねばな)

大きい方の結界部屋の魔法陣の中央に呪文を唱えるとレティシアの体から意識体が抜け出してレティシアという存在は生霊になった

(レティシア)

(うむ、この多機能魔法陣は上手くいつておるの)

レティシアを生霊にした魔法陣には魂の^{たましい}抜出しの他にも肉体を仮死状態で保持する生体保護の効果と転移魔法の目標地点として機能するマーカーとしての効果も持ち合わせている

レティシアは生霊のまま隣の部屋に行き魔法陣の中央に座り込んだ

(レティシア)

(さて、意識体になれば意思の力のみで時をこえることも出来るがそりやり方だと地囷もなしに砂漠に入るようなものだからのう)

(レティシア)

(ちゃんと二万年後に行けるようにナビゲート用の魔法陣を使わなくてはのう)

レティシアが一度呪文を唱えて二度呪文を唱えるとナビゲート用の魔法陣からは気配の全てが消える

気配の消えたナビゲート用の魔法陣は亜空間結界から切り離されて消滅する

結界を維持するためには魔力を使い続ける必要があるために少しでもコストを減らすために使い道のなくなった部屋は切り離す必要があったのだ

レティシアがナビゲートに沿って時の流れから降りた先は森の中だった

(レティシア)

(結界を一部切り離すことでコストを減らしたのは良いがそれでも全開の半分程度の魔力しか使えなくなっておるのう)

(レティシア)

(まあそれでも竜種が群れてこぬ限りはどうとでもなろうぞ)

(レティシア)

(それよりもここがどこなのかを知らねばならぬのう)

第一章

白騎士1



バランドール王国農地パーム村郊外の森の獵師小屋

(レテイラ)

(さーて、そろそろ罨の確認にいこうかな)

小屋の中で粗末な昼食を終えた青髪のツインテールの少女が身支度を整えている

(レテイラ)

(ナイフは…、ちゃんと手入れ出来ている、弓は…、どこもおかしいところはないし予備の弦も二つちゃんとある、矢は…、ちゃんと20本あるし、獲物を持ち帰るための棒と縄と布袋もある)

(レテイラ)

「よし完璧」

レテイラが獵師小屋から罾を仕掛けたポイントにつくまでの時間を使って紹介しておくことにしよう

獵師小屋に住むこの少女の名前はレテイラで姓（せい）はない

獵師は生業にしているが罾以外で碌に獲物をとれたことがない

その理由は…

（レテイラ）

「…ほっ…、…ほっ…」

慢性の喘息にかかっている獲物に気づかずに矢を撃つことがなかなか出来ないためである

元は西方の田舎町で暮らしていたが彼女のかかっている病気が医者もお手上げレベルであったために他人に感染する可能性を嫌ってこの森に引越してきている

もうすぐ罾を仕掛けたポイントにつくあたりでレテイラはある意味かなり怪しげなものを見つけた

それは何かを見渡してはうむうむと頷いている緋色の髪の少女だった

（レテイラ）

（あの赤い髪の女の子すつつつごく可愛いな、それに何をやってるんだろ？）

レテイラはその可愛さへの興味と好奇心をそそられてとてと近づいて声をかけ

ることにした

(レティラ)

「あの一」

(赤い髪の女の子)

「ふむふむ…、あそこに山があつて…」

(レティラ)

「もしもーし」

(赤い髪の女の子)

「あそこに川かあるとなると…」

(レティラ)

「ちよつとちよつと」

無視されてるのが面白くないのか女の子の肩をポンと叩こうとしたらスカツとすり抜けた

(レティラ)

「わたたた」

(赤い髪の女の子)

「ぬわつ、なな、なんじゃ?」

レテイラは勢い余ってこけそうなところを両手をバタバタさせてなんとかバランスをとっている

赤い髪の女の子の方は急に自分の体に他人が重めりなこんで慌でてている

(赤い髪の女の子)

「吹きつける風」
ウインドトープラスト

赤い髪の女の子は風を巧みに操ってレテイラのバランスをとってやる

(赤い髪の女の子)

「まったく、なれ汝はいったい何なのだ？」

レテイラは驚き慌でてて勝手に声が出そうになるところを口を塞ぐことで耐えてから答える

(レテイラ)

「それはこっちのセリフだよ、こんな森の中で女の子が一人できよろきよろしてるなんて絶対普通じゃないよ」

(レテイラ)

「それに何かすかすかすり抜けるし、よく見たら半透明だし、どうなってるの？」

(赤い髪の女の子)

「妾は汝が思うほど幼くはないと思うのだが…、って汝は妾が見えておるのか？」

(レティラ)

「うん、あつたりまえで…、こほ…、こほ…」

(赤い髪の女の子)

「どうした、何かあつたのか？(普通は見えぬはずの妾が見えておると言うことはその手の素質持ちか)」

(レティラ)

「ちよつとばかり…、持病持ちつてやつでね、ずっと喘息で咳せきが止まらないの」

(赤い髪の女の子)

「ふむう…(これはチャンスか？、この時代で自由に動くには意識体のままでは不都合だしの)」

(赤い髪の女の子)

「妾ならその病を治せると思うぞ」

(レティラ)

「えつ、ほんとに？」

(赤い髪の女の子)

「その代り条件が二つ程あるぞ」

(レティラ)

「条件って？」

(赤い髪の女の子)

「一つは妾の汝に対する行動を承諾すること」

(レティラ)

「行動の承諾っていったい？」

(赤い髪の女の子)

「妾が肉体を持たぬ幽霊のようなものであることは理解しておろう」

(レティラ)

「と言うか幽霊じゃなかったの？」

(赤い髪の女の子)

「違うわ！」

……

(赤い髪の女の子)

「おほん、意識体である特性を生かして汝に対して三つの行動をとる」

(赤い髪の女の子)

「その行動がどのようなものであるかを知った上でその行動をとって良いかどうかを

汝に決めて欲しいのだ」

(レテイラ)

「何か回りくどいこと言ってるね」

(赤い髪の女の子)

「しかたあるまい、それだけ慎重を要する話しになるということだからの」

(赤い髪の女の子)

「実行してから取り返しのつく行動ではあるまいしの」

(レテイラ)

「そうなのか」

(赤い髪の女の子)

「それで汝にたいする行動というのは」

一つ目、妾の術で妾が汝の心を読むこと

二つ目、妾の術で汝が妾の心を読むこと」

(赤い髪の女の子)

「この二つ、特に二つ目の妾の心を読むと言うのは最低限の礼儀と思っておる」

(レテイラ)

「汝の病を治すためには病の状態を知るために汝の体の隅々までも知らねばならぬし、心や感情の動きといったものまで知ることとなろう」

(赤い髪の女の子)

「それにそこまで調べてなわからぬなどと言うことがあれば汝の過去まで見る必要が出るやも知れぬ」

(赤い髪の女の子)

「誰かて人に知られずに秘めておきたいことの一つや二つはあろうと思うし、それを見る可能性があるなら予め話しておくのが筋だと考えておる」

(レティラ)

(もしあたしの病気が感染^{うつ}するかも知れないと考えてることが知られたら、もしそれを知った人がどう考えているのかわかってしまったら)

(レティラ)

「うん…、わかるよ、何となく」

(赤い髪の女の子)

「そうか…、それで三つ目の行動というのとはな

妾が汝の肉体に入り込んで病を調べて治療することよ」

(レティラ)

「それはもう答えるまでもないね、あたしもこんな病気なんてとつととおさらばしたいもん」

(赤い髪の子)

(体の中に入ると言うとするのに気にしておらぬのか?)

(レティラ)

「それと一つ目と二つ目の行動だけど」

(レティラ)

「あたしの心の中全部見えちゃうんだよね」

(赤い髪の子)

「うむ、過去まで見ることになるかどうかはわからぬが、と先ほど言うたよな」

レティラは人差し指を突つつき合わせてもじもじしなかせに更に問う

(レティラ)

「きみの心も見えるんだよね？」

(赤い髪の子)

「そうでなくては不公平となるし、それに妾がここに至るまでのいきさつをただ話しただけではあまりにも荒唐無稽こんとうむけいで信じられるものでもないしのう」

(レティラ)

「ただあたしの心を見るだけだったらきつと…、ううん、絶対にすつごく嫌だったと思
うの」

(レティラ)

「でもね、自分の心も見せるって言ってるし、回りくどくなってもちゃんと話してくれ
るし、それに悪い人とは思えないもん」

(レティラ)

「だから全部承諾するよ」

(レティラ)

「だから、こほっ…、こほっ…、この病気ちゃんと治してね」

(赤い髪の女の子)

「うむ、任せよ」

(レティラ)

「それで二つ目の条件というのは？」

(レティラ)

「それについては一つ目の条件を完全に果たしてからと言うことにしようぞ(そうぞ
なくて意味がないし)」

(赤い髪の女の子)

「では早速心を見せあおうぞ」

(レティラ)

「う……うん」

(赤い髪の女の子)

「マナコンバート…、リードハート…、リードマインド…、トゥルービジョン…」

…

…

…

(レティラ)

「ふわあ…、レティちゃんってすごい人なんだね」

(赤い髪の女の子↓レティシア)

(他人と接することが極端に少なかったからなのか？、これほど純粹で素朴な善人が

おるとは)

(レティシア)

(良いのか、こんなきれいも汚いもない戦いに巻き込んで?)

(レティラ)

「レティちゃんどうしたの」

(レティシア)

「う……うむ、ちよつと考え事をな」

(レティシア)

「つてそのレティちゃんと言うのはなんだ!？」

(レティラ)

「えー、駄目なの?、すつごく可愛いのに」

(レティシア)

「い…いや、駄目と言うわけでは…(い…いかん流されておる)」

(レティラ)

「じゃあレティちゃんて決まり」

満面の笑顔で断言する

(レティシア)

「ちよちよつと、決まりなのか?(もしかして妾はこの娘にもすつごく弱いのでは?)」

(レティラ)

「うん、決まり」

(レティシア)

「…まあ良いか(どうしても勝てる気がせん)」

(レティシア)

「それで病の治療だが、これるすぐにとりかかるとしようぞ」

そう言うとレティシアは煙のようなものになってレティラの口から入り込んだ

(レティラ)

「え…あつ…いい、レティちゃん？」

(レティシア)

「驚かせてしまったかの、病の類は直接調べてみるのが一番でな」

(レティラ)

「ええー、頭の中でレティちゃんの声が聞こえる」

(レティシア)

「体の中から話しかけておるから当然と言えば当然だがのう」

その微笑ましきについつい笑いながら答えてしまうレティシアであった

(レティシア)

「ふうむ、なるほど」

(レティシア)

「トウルース、セイヤー、アナライシス」

(レティシア)

「ふうむ、やっぱりだの」

(レティラ)

「やっぱりってもうわかったの？」

(レティシア)

「まあもう、こう言っってはなんだが汝の故郷の医者というのはごく狭い世界での知識しかなかったようだよ」

(レティシア)

「これはただの慢性の喘息で誰かに感染するなどありえぬわ」

(レティラ)

「たんなるあたしの取り越し苦労ってこと？」

(レティシア)

「まあ、そうなるのう」

(レティラ)

「よかったあ、感染する心配なくて、それで治るの？」

(レティシア)

「治る治る、まずはこのまま汝の体の中で霊脈や気脈といった身体機能を調整すれば発作はまず起こらなくなるし病状も僅かずつではあるが改善しよう」

(レティシア)

「もつともこれだけでは時間がかかるのでは、自家製の漢方も処方しておくかの」

(レテイラ)

「漢方に：、処方ってお薬なの？」

(レテイシア)

「うむ、少々苦いが汝のような慢性の病には体質改善が出来る漢方が一番だからの」

(レテイラ)

「ええー、苦いのやだやだ」

(レテイシア)

「病を治したいのではなかったのか？」

レテイシアは苦笑しながら少し意地悪を言ってみる

(レテイラ)

「それはそうなんだけど、でも苦いのやだー」

(レテイシア)

(涙目に泣き言を言うておるのが可愛い、だがあまり意地悪するのも問題かの)

(レテイシア)

「わかったわかった、なるべく苦くしないようにするからの」

(レテイシア)

「それでは罨のチェックと狩りをしながら戻ろうかの」

(レテイシア)

「妾も魔法で手伝ってやるから今日は肉が食えるぞ」

(レテイラ)

「わーい」

(レテイシア)

「漢方に使う薬草はそのついでにとれるし一週間ほど治療ついでに漢方の処方箋と八極戦技の弓の戦技と神聖魔法と妾の術式を叩き込んでやるからの」

(レテイラ)

「うひー、お手柔らかにお願いしまーす」

白騎士2



レティシアがレティラの病の治療を始めて一か月

(レティラ)

「レティちゃん、今日はなんの練習をするの」

(レティシア)

「そろそろハチミツが食べたくなくなってきたからもう、ハチの巣でも探すかの」

(レティラ)

「うんうん、ハチミツ美味しいもんね、それじゃレッツゴー」

手頃なハチの巣を見つけてまずは撃ち落とす

そして臨戦態勢で出てきたハチを瞬時に魔力で実体化させた矢で矢継ぎ早に撃ち落とす

最初は普通に矢を撃っていたが20本一セットではすぐに矢が尽きるため魔力での

矢の生成を早い内に教え込んでいた

(レテイラ)

「ふうー、これではらくはハチミツに事欠かなくてすむね」

(レテイシア)

(この一週間色々教えてきたが飲み込みが良いのう)

(レテイシア)

(もつとも魔法に関しては何を使う際に妾がこやつ心に術式を刻み込みながら使っておるから大幅に手間が省けておるがの)

(レテイシア)

「うむうむ、1刺しももらわずに全滅出来たとなれば弓で妾が教えることはもうないのう」

(レテイシア)

「それに葉草と漢方の調合に魔法にと必要なことは大体教え終ったの」

(レテイラ)

「じゃあそろそろ?」

(レテイシア)

「うむ」

(レテイラ)

「汝の病に關しては打てる手はすべて打つたことだし、二つ目の条件を言うとするかの」

(レテイラ)

「心を見せ合つた時から二つ目の条件はわかつていたけど、こーゆーのはやっぱりレテイちゃんの方から言わないとね」

(レテイラ)

「だからずっと待ってたんだよ」

(レテイシア)

「う…うむ、そうか確かに心を見せたからにはわかっているって当然だったのう」

(レテイシア)

(つて、わかっているって何も言わなかったということは…)

(レテイシア)

「汝、もしやその条件を呑むつもりか？」

(レテイラ)

「うん」

(レテイシア)

「条件を呑むと言うことがどういふことかわからぬわけではなからう」

(レティシア)

「なのに…、なぜ汝はそれほど微笑んでいられるのだ！」

(レティラ)

(わかつてるよ、一万年前の戦いは戦争だもんね)

(レティシア)

「これは遊びではないのだぞ、一万年前の続きなのだぞ、踏み込んでしまえば辛いから
とって避けることも逃げることも出来はしないぞ」

(レティシア)

(第一戦いの日々に心が乾いてこやつ顔から笑顔が失われでもしたら…、想像もし
たくないわ)

(レティシア)

「それに汝はまだ妾の戦いに関係あるわけではないのだぞ」

(レティラ)

(一万年前の戦いの続き…、戦争の続き…、避けることも逃げることも出来ない…、そ
して今はまだ関係ないか…)

(レティラ)

(やつぱりレティちゃんは優しいな、色んな意味できつくて辛くて悲しいから巻き込みたくないんだ)

(レティラ)

(でもね、だからこそレティちゃんをほっとけないよ)

(レティラ)

「あたしね、レティちゃんに会うまでは一人だったんだよ」

(レティラ)

「レティちゃんと一緒になって一人じゃない楽しさを知っちゃったんだよ」

(レティシア)

「う…、うう…(これはやばいぞ)」

(レティラ)

「今一人になっちゃったらあたし寂しくて死んじゃうよ」

(レティシア)

「いや…、だから…、そのな…(こんな無邪気な顔でそんなこと言うなんてずるいではないか)」

(レティシア)

「それなら町に行ったらどうかの、病のことは心配なくなったことだし汝なら簡単に

友達が出来るであろう」

(レティラ)

「いや、レティちゃんがいいの」

実体があれば間違いなく赤面していたであろうくらいに心にザツクリと突き刺さる言葉である

(レティシア)

「いや、その、あのだな、妾の戦いに付き合おうと言うことは組織を相手にすると言うことになるぞ、人を殺すことになるのだぞ」

(レティラ)

(このままだだをこねてもいいけどそれじゃレティちゃんは納得しないよね…)

(レティラ)

(だからレティちゃんが納得するしかない強烈な理由を押し付けようつと)

(レティラ)

「それにレティちゃん、もしかして病気を治してくれた恩返しのために一緒に行くつもりだと思ってるの?」

(レティシア)

「ち…違うのか? (こやつとの関わりはこの一週間だけのはず、他に理由など…)」

(レテイラ)

「レテイちゃんがやつつきたいのはマドラスって言う一万年前の皇帝だよね？」

(レテイシア)

「うむ、そうだが、それが何か？」

(レテイラ)

「あたしもそのマドラスってやつやつつきたいもん」

(レテイシア)

「ええ!？」

(レテイラ)

(これもレテイちゃんと一緒に行きたい強烈な理由に違いはないもん)

(レテイラ)

「だってそうでしょう、一万年前の戦いでミューレアスさんに乗っ取ってミューレアスさんの能力でワイルドさんを殺した人でしょう」

(レテイラ)

(いくら戦争だからって、殺し合いだからってあれだけは許しちゃいけないよ)

(レテイシア)

「あ…、あーあー(そうか、妾の心を読ませた時にそこまでわかっておったと言うこと

か」

(レティシア)

(「ということは…、この言葉で逃げ道を塞ぐずるさは妾が心を読ませたせいと言うことか」)

(レティシア)

(「妾のせいでこやつ純粹さが損なわれてしまったということか?」)

(レティラ)

「連れてつてくれなきゃあたし一人でもマドラスつてやつやつつけにいつちやうよ」

これで止めと確信しているのか満面の笑顔でそんなことを言う

(レティシア)

「わかったわかった、一緒に行こうぞ(なにをどうしたってこやつに勝てる気がせんわ)」

(レティラ)

「わーい、つてあれっ、どうしたの?、何かズーンと落ち込んだりしてるとけど」

(レティシア)

「い…いや、何でもない、すぐに準備をすませるから汝も気にせず旅の用意をするがよい」

(レティシア)

(このままでよいのか、こやつ純粹さを穢してゆくようなことになってよいのか?)

(レティシア)

(いや、無駄であろうな、止めることなど出来るはずもない)

そしてしばしの時が経って

(レティラ)

「これで準備よしと、レティちゃんの方は準備出来た?」

(レティシア)

「よお考えれば妾は意識体だから準備も何も汝に宿ればそれでよしであったわ」

(レティ)

「なーんだ、じゃあ準備なんていらんないじゃない」

(レティシア)

「う、うるさい」

こうして一人の少女と少女に宿る意識体の旅は始まった

白騎士3



ブランドール領地パーモ村

ラパッチワイン商のワイン倉庫は目が回る程忙しくなっていた

その理由は昨日ラパッチワイン商で飼っているビッグロからの連絡でワインボトルとワイン樽を10樽以上もブランドールに運ばなくてはいけなくなったからである

なんでも近々行われるブランドール王国の王女であるシズナ姫の誕生祭と10年前に戦争したフォーリア国との和平会談をまとめて執り行うことになったそうである

その際に振舞われるワインを王宮御用達の店で用意していたのだが強盗に入られて店の人は殺されてワインもめちやくちやにされてしまったそうである

そこでワインはパーモ村で作ってるラパッチワイン商のことを聞きつけてシズナ姫の誕生祭に間に合うようにワインを用意するように頼まれたわけである

ワイン倉庫ではレティラと一緒にワイン樽を運んでいた赤毛のショートカットの娘がぼやいていた

(赤毛の娘)

「まったく商売繁盛なのはいいけどちよつとは休ませて欲しいわよねレティシア」

(レティラ↓レティシア)

「後2樽獸車に乗せればいいんだから頑張ろうユウリ」

レティラは森から出た後でブランドールの王宮へ入る方法を探してとりあえず手近なパーモ村へやってきていた

そこでワイン運び急募の張り紙を見てそのバイトがなんとなく気になって店に行つて面接したところ即採用となつた

あつさりと雇うあたりお店側はかなり切羽詰つていると思われる

(レティシア)

(ワイン運びを急募つて言葉に引つかかりを感じて行つてみたら誕生祭のワインだもんね、いきなり大当たりだよ)

ちなみにレティラがレティシアと名乗っているのはこの時代にいるはずのクライブにわかりやすくアピールするためにレティシア本人から頼まれて名乗っている

何しろ本人は意識体としてレティラの中にいるためレティシアという存在を知らせることはまず無理と言える

なのでレティラのセリフはレティシアとして、そしてレティシアのセリフは称号であ

る賢士として表記する

(レティシア)

「このままいけば王宮に入れるかな？」

(レティシア↓賢士)

「そこは上手くやってみせようぞ、何しろ予言を突き詰めて考えれば誕生祭の王宮ですべてが始まるのだからのう」

ワイン樽を運び終わつた後はユウリの家で夕食を食べ、その後は戦技の練習をしてからユウリの家 に泊まつた

翌日ユウリの家で朝食を頂いてから弓撃ちの練習をしていると

(ユウリ)

「レティシアー、どこいったのー」

ユウリが探している声が聞こえた

(レティシア)

「なあにー、ユウリー」

レティラが答えながら声のする方へ行ってみると

(ユウリ)

「あーいたいた、どこ行ってたのよー」

(レティシア)

「ちよつとこれの練習にね」

と弓に軽く触れながら言う

ユウリの方を見るとユウリと一緒に栗色のぼさぼさ頭の少年とも青年ともつかない
くらしいの男の人がいた

(ユウリ)

「紹介しとくわね、こっちは私の幼なじみのレナードよ」

(ユウリ)

「それとレナード、こっちが…」

(レティシア)

「ワイン運びのバイトで雇ってもらってるレティシアだよ、よろしくね」

ぺこりと頭を下げて挨拶する

(賢士)

「こやつ…」

(レティシア)

「どうしたのレティちゃん？」

(賢士)

「気のせいかもしれないぬがこやつの雰囲気がどこかワイルドのやつに似ておる気がしての」

(賢士)

「顔が似てるとか言った意味ではないがな」

(賢士)

「そう考えるとユウリのやつもどこか懐かしいような雰囲気がするのだがのう」

(レティシア)

「例の生まれ変わり」

(賢士)

(いやまさかな…、だとすれば出来すぎとるわ)

賢士はレティラの問いには答えずに一人思考に耽ふけっていた

(ユウリ)

「それで誕生祭が今日の夕方から始まるって言うの？」

(レナード)

「そうなんだよって知らなかったのか？」

(ユウリ)

「王宮から注文が来てからはずっと忙しくて街に行く暇ひまなんてなかったのよ、そんな

ことまでわかるわけないじゃない」

(賢士)

(いやいや、注文受ける時に締切りくらいはちゃんと覚えておこうな)

(レナード)

「とにかく急いで運ばないと…」

レナードがワイン蔵の方を見るとそこには高さ3mはあろうかという大型の草食獣に繋がれた山盛りのワイン樽を乗せた獣車が二台あった

もつともレナードは草食獣の迫力に圧倒されていたみたいだけど

それとワイン樽のいくつかにはワインの詰まったボトルが嚴重に梱包されて詰め込まれてる

(ユウリ)

「急いで運ぶためにはまず獣車を動かすラウスさんを探さないとね」

そんなわけで割と急いでるのにラウスという二足歩行のおっさんうさぎを探すことになった

まず一番可能性が高い村の馬の牧場を探すことになった

程なくして牧場の隅っこの切り株で空っぽの酒の瓶をまき散らして大いびきをかいてる酒臭いおっさんうさぎを見つけた

(ユウリ)

「朝っぱらから酔いつぶれて高いびきなんていいご身分ね」

その言葉に含まれた怒気を感じ取ったのかおっさんウサギが目を覚ます

(ラウス)

「いけね、すっかり眠っちまってたし」

(ユウリ)

「ラウスさん…、朝っぱらから飲んでんじゃないわよ、仕事よ仕事、さつさとその酒抜いてきなさい」

(ラウス)

「ユウリさん怒ってるし」

ユウリが怖くてこそそとレナードの後ろに隠れるラウス

その後でラウスにキュアポイズンをかけてアル^さコ^けールを抜いたけど一度酔っぱらってしまおうと頭がそれを覚えこんでしまつたため完全回復するまでしばらくかかるらしい

結局昼過ぎに出発することになった

ちなみに昼食はラウスさんだけ酔いから早く回復するための特別メニューになっていた
いた

その内容は一言でいえば罰ゲーム…

(ラウス)

「こんなの料理と言わないと思うし…」

昼食がすんでラウスが獣車の御者席について手綱をとる

(ラウス)

「こいつは結構荒っぽいんで俺が手綱をとらないと暴れちゃう」

(ラウス)

「そんなわけで俺も一緒に行くし」

(ユウリ)

「随分遅くなったし、さっさと行かないとまずいわね」

(レナード)

「ああ、日が落ちるまでには運んでしまわないといけないし」

(レナード)

「つてユウリ、お前も来るつもりなのか」

(ユウリ)

「そうよ、せっかくのお祭りなんだから私も行きたいわよ」

(レナード)

(せっかくのお祭りなんだし行きたい気持ちはわかるけど)

(レナード)

「……しようがないな、俺から離れるなよ」

(レテイシア)

「あたしも仕事が終わったら祭りにいこつかなー」

(賢士)

(その時間があればの)

白騎士4



パーモ村からバランドールへ行くためにはブラスタ平原の整備されていない街道を通る必要がある

整備されていない理由それは…

(レナード)

「ええい、あつちからもこつちからもわらわらと」

(ユウリ)

「騒ぎに気づいて大きなハチまでやってきてるわよ」

(ラウス)

「この辺の邪妖精達はみんな飲んべえなんすかねえ」

(レティシア)

「ハチはあたしに任せて、レナードとユウリは妖精の方をお願い」

(ユウリ)

「って私の方が雇い主よ」

(レナード)

「ユウリ、そんなこと言ってる時じゃないだろ」

整備されていない理由それは…

モンスターに分類されている邪妖精や巨大ハチがよく出てくるからである

(ラウス)

「もうちよつと頑張ってください、あの橋を渡ればもうすぐですし」

橋を渡ってブラスタ平原のバランドール側と言える部分に入ると邪妖精達の襲撃もおさまってきて騒ぎに反応する巨大ハチも鳴りを潜めるようになった

(ラウス)

「これなら何とか間に合いそうだし…、ってどうしたんすかレナードさん？」

(レナード)

「何か聞こえないか？」

(賢士)

(この距離で音に気付くとはなかなかやるのう)

(ユウリ)

「何かって何が？」

(賢士)

(お互い気づかなければやり過ぎたであろうが近づいてきおる)

(賢士)

(そうか、ワインの匂いか)

賢士が気づいた時にはその足音は地響きを伴ってみんなに聞こえる程近づいてきていた

地響きを伴って現れたその大きな姿は森の蛮族として知られてるトロールであった

(レナード)

「なな…なんだよ、あのでかいのは」

レナード達がトロールの大きさに怯えるのも無理はない

トロールは5m以上の高さを持つ巨人なのだから

そのトロールは獣車を見て舌なめずりしていた

(レテイシア)

「これって獣車の獣とあたし達を肴さかなにしてワインを呑む気なの？」

(ラウス)

「そうに違いないし、嫌ですよトロールのエサなんて」

(賢士)

「これはまずいのう、レナードもユウリも戦える状態ではないのう」

(レティシア)

「あたしはレティちゃんのおかげで1対1なら負けなと思うけど、守りながらだとちよつと不安」

(賢士)

「ふむ、ならばしばし体を借りたいが良いかの？」

(レティシア)

「なんとかなる？」

(賢士)

「なんとかなるではなくするしかならう」

レティシアの体の主導権が賢士に移り眼の色が緋色になったところで朗々とした声で歌い始めた

(賢士)

「剣をとれ 立ち上がれ 戦う時はくきくたく♪」

(レナード)

(なんだ、妙に心が落ち着いてくる)

(ユウリ)

(あんなに怖かったのが嘘みたい)

(レテイシア)

「レテイちゃん、これっていったい？」

(賢士)

「妾の知る秘術の一つで呪歌じゆかというものよ」

(賢士)

「声に魔力を乗せて呪文の織り込まれた歌を歌うことで主に精神に影響を与えることが出来る全体へ効果をもたらす術よ」

(レナード)

「これならいける」

自分に言い聞かせるようにあえて声に出してるその姿にもう怯えはない

(賢士)

「妾がトロールを引き付けるからレナードとユウリは足を狙え」

(賢士)

「でかい相手だけに動きをよく見れば対処出来ぬことはないはずぞ」

(賢士)

「ラウスはその間に獣車の避難をせよ」

(ラウス)

「それが動けないし」

獣車の獣がトロルに怯えて力一杯動いたせいか獣車の車輪の一つが街道のくぼみに嵌って動けなくなっていた

(賢士)

(ちい、これで獣車を逃がすという選択肢は消えたの)

(賢士)

「ふん、この凶体ばかりの木偶の坊が！、くやしければここまで来るがいいわ！」

トロルが「なんだこのちんまいのは」とでも言いたげに声を張り上げた賢士の方を見る

(賢士)

「そこだ！」

狙い定めて十分に引き絞った弓で生成を済ませた風の魔力の矢でトロルの右目を射抜く

その矢は矢先から風の刃を吹き出しながらトロルの右目に突き刺さる

(トロル)

「グキヤアアアアアオオウ！」

左手で射抜かれた右目を押え右手の大棍棒を振り回してどたばたしているが、賢士の呪歌で落ち着きを取り戻したレナードとユウリは既にトロルの後ろに回り込み攻撃するのに十分なだけの隙を見出していた

(レナード)

「よし」

レナードがブロードソードを両手に持つて逆時計回りに勢いよく振り回しつつ思いつき踏み込んでトロルの足首の裏のアキレス腱に叩き込む

(トロル)

「グアアアアアアア！」

アキレス腱を切ることは出来なかったが十分に手応えはあったようであまりの痛さに悲鳴をあげて膝をつくトロル

(レナード)

「ユウリ」

(ユウリ)

「わかつてる」

ユウリはショートソードを両手に持つて渾身の力で跳び上りトロルの足首目がけて勢いよく振り下ろすことで軽さ故の威力のなさわ補い切れかけていたアキレス腱を見

事に断ち切った

(トロール)

「グワア!、グワア!」

トロールは三度襲った激痛にいやいやをするように顔を振り立ち上がろうとして右足が動かないことに愕然とする

(賢士)

「風魔力精製完了、マナコンバート スプリング」

賢士はトロールよりも遙か高みへ飛び上り弓を構える

(賢士)

「もらった、降り注ぐ烈風^{レインストーム}」

先ほどトロールの右目を射抜いたのと同じ風の魔力の矢がトロールの上空から雨霰^{あめあられ}と降り注ぐ

(賢士)

(トロールの弱点は風、いかにライカンスロープ並の回復力を持つトロールでもこれで決まりであろう)

トロールは残る左目が白目となってそのまま動かなくなった

(ラウス)

「ふええ、皆さんすごいものだし」

(ラウス)

「それにしてもレティシアさん、さっきは何か言葉遣いがちがってたし」

(レティシア)

「そんなことは後々、今はどうやってこいつを動かすか考えなくっちゃ」
いつの間にかレティシアの眼の色は髪の色と同じ青色に戻っていた

(レナード)

「どうやってって、荷物を下ろすしかないだろ」

(ユウリ)

「ええー」

結局のところ獣車が動けるようになった頃にはとつくに日は落ちていた

(ラウス)

「ふいー、これでこいつも動けるようになったし」

(ラウス)

「ワインを積み直す間にレティシアさんの話しを聞きたいし」

(レティシア)

「どうしよう、レティちゃん？」

(賢士)

「あのうさぎはともかくレナードとユウリは一万年前からの生まれ変わりやもしれぬのう、話しておくかのう」

(レテイシア)

「そうねえ、じゃあまずはおたしの中にいるもう一人の人物のことからね」

それからはレテイシアに一万年前のアスヴァーン王国の賢士が宿っていることと名前前のこと

アスヴァーン王国の敵国であるイシユレニア帝国の皇帝がこの時代で国を興すこと

アスヴァーン王国の女王であるミューレアスを始めとして何人かがこの時代に生まれ変わっていること

ブランドールのシズナ姫の誕生祭で何かが起こること

賢士がレテイシアの体を借りている時は眼の色が緋色になること

などを話した

主に賢士の方が話していたがレテイシアも積極的に話しに参加していたのでレテイシアの中に賢士がいることと二人の手柄については理解してもらえたようだ

しかし他の話しに関してはと言うと

(ユウリ)

「まあ、レティシアのことはよくわかったけど」

(レナード)

「二万年前の皇帝とか言われても話しが大きすぎて何かピンとこないな」

(賢士)

「まあ、この話を信じるかどうかは汝等なれらの勝手ではあるがの」

(ラウス)

「それはともかくとして積み込みも終わりやしたし早く行きやすぜ」

(レナード)

「ひええ、もう夜だよ、殺されちゃうよ」

(ユウリ)

「そんなこと言ったって、こんなことになるなんて誰も思わないじゃない」

(ユウリ)

「ほらレナード、腹くくってきつきと行った行った」

白騎士5



(ラウス)

「すいやせん」

(レテイシア)

「トロールが出てきたんじゃしょうがないよ」

(獣車の獣)

「ぶもおおうう」

(レナード)

「お前も疲れたのか、もう少し頑張ってくれ」

そう言ってレナードは少しでも力になろうとして後ろから獣車を押す

(ユウリ)

「しょうがないわね」

(レテイシア)

「だね」

結局三人で押すことになった（ラウスは戦力外）

街の大通りに出ると賑やかな音楽が聞こえてきてそこそこ人だかりが出来ていた

（ユウリ）

「何あれ？」

（レナード）

「確かマーカス大道芸団というサーカス団だよ」

（ユウリ）

「ええーサーカス、観たい観たい」

（レナード）

「仕事先だろ」

（ユウリ）

「そんなあ（がつくり）」

（レティシア）

「帰りしに観ればいいじゃないの」

（ユウリ）

「はあい、そうとなればさつきと仕事を済ませないとね」

(賢士)

(帰りしに観ればいいがの)

(賢士)

「これから何か起こるはずの城下でサーカス団というのもなんかのう…」

(レテイシア)

「不安？」

(賢士)

「うーむ、だがなんとなくでサーカス団にちよっかいを出すわけにはいかないし、うレナード達はそのまま獣車を押ししたり歩いたりして城の通用門についた

(王国兵A)

「なんだお前達は？」

(レナード)

「ラパッチワイン商です、ご注文のワインを届けに上がりました」

(王国兵A)

「そうか、話しは聞いている、だがとつくに時間は過ぎていゑぞ」

(ユウリ)

「それが運んでる途中ででっかいモンスターに襲われまして…」

(王国兵B)

「言い訳するな！」

(賢士)

「むか、どうやら権力を笠に着て威張り散らすことを楽しんでおるクソ兵士のようだが、こんなのは相手にするだけ時間の無駄と言うものよ」

賢士が内心思ったことを証明するかのように王国兵Aの表情にはご愁傷様とか済まないとか書いてあるかのような暗さが見えた

(レティシア)

「どうする気？」

(賢士)

「マナコンバート、スリープ（こっそり）」

レティシアの眼の色が緋色になったかと思えば王国兵Bが糸の切れた操り人形のよう
うに急に倒れた

(王国兵A)

「おいどうした」

(賢士)

「どうやら威張り疲れて急に睡魔に襲われたみたいだのう、しばらく休ませてやった

方がよいのではないのか」

(王国兵A)

「そ…そうか？、ともかくワインはこの先にいる給仕達の所に届けてくれればいい」
どう見てもレテイシアが怪しく見えるが性格の悪い同僚を起こすよりはマシと考えたのかなかったことにするつもりらしい

(ユウリ)

「あつはい、これからもラパッチワイン商をよろしくおねがいします」

(レテイシア)

(もうレテイちゃんってば)

(賢士)

「すまんすまん、どうもあーゆー輩は我慢ならなくてのう」

???)

(街の外の道にトルダって、上手くいけば大儲けかも)

???)

(マーシャの姐さんに報告だ)



バランドール城

(レナード)

「ご注文のワインをお届けに上がりました」

(給仕長)

「確かに受け取りました、ご苦勞様でした」

(レナード)

「それじゃ、俺達はこれで…」

ユウリの鉄拳がレナードの頭に振り下ろされる

(レナード)

「いっ…つつう」

かなり痛いようだ

(ユウリ)

「それでは私たちはこれで失礼いたします」

通用口から離れたところで

(レナード)

「何すんだよユウリ」

(ユウリ)

「レナード、商売の時は言葉遣いに気をつけなさいって言わなかった？」

(レナード)

「いい…、それはそうだけど」

(ユウリ)

「あれでも緩いくらいよ、客相手の商売で言葉遣いは基本よ、それだけで印象ががらりと変わるんだから」

(レナード)

「わかったわかったからさ、それよりもさ、ちよこつとお城の中に入って見ないか？」

(ユウリ)

「ええ、それはちよつと、さすがにまずいんじゃない？」

(レテイシア)

「でもレテイちゃんもこの城で何か起こるって言ってたし、それも悪くないんじゃない？」

(ユウリ)

「でもばれたら大変じゃ？」

(レティシア)

「レティちゃんか姿を隠せる魔法があるからそれを使って入ればどうだって」

ユウリは慎重論を振りかざして逃げようとするがあっさり逃げ道は塞がれる

(ユウリ)

「(はあ…) それなら…まあいつか」

(レティシア)

「ただし集中力が切れたら魔法が切れるからはしやぎすぎないでね」

(レナード)

「りょーかいりょーかい、じゃあ行こう」

(ラウス)

「あのユウリさん…、つて置いていかてるし」

彼はストーリーモードではこのまま忘れ去られて出番がなかったりする不憫(ふびん)

な人だったりする

白騎士6

レティシア（賢士）の魔法で透明になつてゐる三人は趣味が悪くない程度に調度品に彩られた城内を歩き回つてダンスホールになつてゐる大広間に辿り着いた

（レナード）

「うわ、すごいなあ」

（ユウリ）

「浮かれて魔法がきれいなにね」

と言いつつユウリもきよろきよろしてる

（賢士）

（ここは…、地理的にも間違いないと思つておつたが元々はアスヴァーン城で間違いなからう）



ダンスホールではコートやドレスで着飾った貴族達がダンスを踊ってくるくと回っていた

三人の服装は片田舎丸出しだったので魔法で姿を隠していなかったら間違ひなく浮いていたところだった

貴族達のダンスが終わり左右に割れていくとそれに合わせるかのように二階からティアラをかぶった薄い栗色の髪の毛の美少女がメイドを伴って下りてきた

貴族達のあちこちから美少女のその美しさに感嘆の声上がる

(レナード)

「あれが…、お姫さま…」

レナードはお姫様を見て12年前のことを思い出していた



12年前に育ての親のラパッチに連れられて城の庭園を歩いてる時に廊下を歩く綺麗な女の子を見かけた

レナードがその女の子に見とれていると女の子はレナードがいることに気がついて嬉しそうな表情でレナードの方へ駆け寄ってきた

そしてレナードの方へそつと手を伸ばしたけど途中で残念そうな表情で少し上の方を見た

レナードもつられて女の子の見てる方を見た

そこにはひらひらと飛んでいくちよちよの姿があった

レナードは女の子がただ単にちよちよを捕まえたかっただけだとわかった

でも女の子が手を伸ばしてきたときなぜかとてもドキドキしたのは確かだった



(レナード)

(そうだ…、階段を下りてきてるお姫さまはあの時の女の子に違いない)

レナードはあの時の女の子がとても綺麗になっていることに今までにないほどの胸の高鳴りと切なさを感じている

(ユウリ)

「どうしたのレナード？」

(レナード)

「ユウリ…、脅かすなよ」

(ユウリ)

「んー？、もしかしてお姫様に見とれてた？」

もしかしくなくても見とれてました

(賢士)

「レナードの姿隠しの魔法が切れておったから掛けなおしたぞ」

(レナード)

「そうなのか、すまない」

(ユウリ)

「あはは…、私のせいかな？、ごめんね」

幸いにもお姫様に注目が集まっていたのでレナードは誰にも見つからなかったよう
だ

お姫様が階段を下りて上座の国王に近くまでくると国王が挨拶を始めた

(バルンドール王)

「諸君、今宵は我が娘のためによく集まってくれた、礼を言う」

(バルンドール王)

「10年前に妻を亡くし、その忘れ形見の愛しきシズナも今日で18になる」

(バルンドール王)

「この日を迎えることが出来たのも今日まで娘を慈しみしただってくれた皆のおかげと

思っている」

(バランドール王)

「私は今日という日に感謝しよう」

(バランドール王)

「皆にも今宵の宴を存分に楽しんでいただきたい」

(バランドール王)

「バランドールに栄光あれ！」

(貴族達)

「バランドールに栄光あれ」

国王の挨拶の締めには貴族達が唱和した声が大広間一帯に響き渡る

その中でレナードはお姫様の陰りのある違和感に気がつく

(レナード)

「なんだらう、なんかお姫さまの表情が寂しそうに見える」

(ユウリ)

「そういや10年前のフォーリアとの戦争で城まで攻めてこられて王妃様を亡くして以来お姫様が喋らなくなっちゃって聞いたことがあるけど」

その情報源がどこなのかはユウリ曰(いわ)く秘密とのこと

シズナ姫がダンスホールに登場した頃、城下町では

(ボロボロのローブを羽織った男)

(あの予言とこの20年で集めた情報を合わせて考えれば今夜ここですべてが始まるはず、その前に何か出来ることはないのか)

(サーカス団団長)

「そろそろか」

対照的な意味で来るべく時に備える男たちがいた

マーカス大道芸団は踊りながらバク転をしたり火のついたクラツカーを振り回したりしてどこをどう見ても一流どころのサーカス団にしか見えなかった

だがしかし…

(サーカス団団長)

「時間だな」

(サーカス団団長)

「時はきた、イツツ・ショータイム」

その掛け声と共にピエロ衣装を脱ぎ捨て軍服に変わった団長の顔はピエロが似合いすぎる程に似合うその顔のままこ狡い悪党顔へと歪んでいった

そして団長の掛け声に応じてサーカス団の山車(だし)の上半分が吹き飛んで中から

二本の角が篝火かがりびになっていて四足形合成獣のグレアデーモスが現れた

どうでもいいことだかこんな如何にも熱そうなモンスターが中に入っているのは即刻ばれそうなものだが仮封印でもして活動をとめることで隠しおおせていたのかもしれない

更に山車の下半分から隠し戸が開いて完全武装の戦士達がぞろぞろと出てきて無差別殺戮を開始した

芸達者なサーカス団員達はいつの間にか影も形も見えなくなっている

脱ぎ捨てられたサーカス団の衣装の一つもないことからサーカス団員も含めてほぼすべてが幻術による幻だったのかもしれない

逃げ惑う民達に容赦なく刃を突き立てる完全武装の戦士達

一人の女性が逃げる途中で転んで戦士に斬られようとしていたが…
ギーン！

ホロボロのローブを着た男が剣で防いで返す剣で戦士を切り捨てる

(ボロボロのローブの男)

「早く逃げろ」

(女性)

「あ…ありがとうございます」

(ボロボロのローブの男)

(やつらは…城の方へ向かっているのか、やつらも感じているということか)
そう考えると男はローブを脱ぎ捨てて城へと走り出す

その姿は紛れもなく20年前にこの世界へやってきたクライブ…、いやエルドアであつた

白騎士7



サーカス団が正体を表した時と同じ頃

王国兵が息を切らせてダンスホールへ駆け込んできた

(バランドール王)

「どうした、宴の最中であるぞ」

(王国兵)

「た…た…た…、大変です」

(王国兵)

「街に…、街に巨大モンスターが現れました」

(バランドール王)

「なんだと」

その言葉のすぐ後に城の正門をぶち壊しながらグレアデイモスが入ってくる

ちなみに作者個人としては10年前に戦争で攻め込まれた城にしてはお粗末な代物
としか言いようがない

ダンスホールを確保する必要があったとはいえ城に攻め込まれてすぐに国王に手が
届くような位置取りは戦争経験国としてありえないとしか言えない

それはともかくとしてグレアデイモスに続いて完全武装の戦士たちが雪崩れ込んで
くる

(レナード)

「なっ…、なんだ」

(ユウリ)

「あ…あれ、モンスター…?」

(騎士団長サイラス)

「一歩も引くでないぞ、ここで食い止めるのだ」

サイラスを始めとする王国兵達が迎え撃つ

戦士としての質は王国兵の方が上だが武装戦士達は二人で一人を叩くように徹底し
ており王国兵にも犠牲者が続出している

(サイラス)

「はっ!、くうう、むう、はあ!」

サイラスは舞うかのような見事な剣技で一人気を吐いていた

(シズナ姫お付きのメイド)

「シズナ様、陛下早くこちらへ」

(バランドール王)

「うむ」

バランドール王がシズナ姫とお付きのメイドと共に階段を上って逃げようとしていくと黒く厳いかつい鎧を着た人物が逃げ道を塞ぐように現れた。その人物はなんの躊躇いもなくメイドの胸を突き刺した。メイドは悲鳴を上げることも出来ずに血を吐いて倒れた。

(レナード)

「ぬあああああああー！」

もう姿を隠すことなんて気にしていられる余裕もなく

シズナ姫の元へ全速力で駆けつけるレナード達

けどまだ届かない

(バランドール王)

「お前は…?」

メイドを刺し殺した黒騎士は逃げ道を塞がれ背を向けることも出来ないバランドー

ル王の問いを無視して無造作に剣を王に突き刺す

剣を引き抜かれ力なく倒れる
バランドール王にシズナ姫は周りの状況も忘れて必死に絶すりつく

(シズナ)

「いや…、いやいやー！、父上、父上ー！」

その必死の想いは10年前のトラウマを塗り潰すものだったのかこの10年で食事以外で開かれることのなかった口が開く

(バランドール王)

「おおシズナ、やっとお前の声が聞けたな」

(バランドール王)

「これほど…ごふ…、嬉しいことは…ない…」

(バランドール王)

「さあ…、はやく…にげ…る…のだ…」

(シズナ)

「父上、父上しっかりして！」

(シズナ)

「いや、こんなのいや、一人ぼっちになっちゃうよ」

黒騎士はどうしたものかと試案するように剣を構えなおす

見ようによつては時間を持って余してるように見えなくもない

(レナード)

「ぬおおおおおお！」

その時レナードが全力で剣を黒騎士に叩き込んで黒騎士の体勢を崩す

(ユウリ)

「お姫様こっちへ」

(シズナ姫)

「でも父上か…」

(レナード)

「このままじゃ君も殺されてしまうぞ」

(賢士)

(ほんとにそうかの、殺そうと思えば十分に殺せたはずではないのか?)

(賢士)

(あれはもったいぶってたと言うよりは…、時間を持って余してたようにも見えるの)

賢士が考え込んでる間にも4人は階段を駆け下りていたが声聞たりで指揮をとって

る人物を見て驚く

それは国王を殺した黒騎士と同じ鎧を着ていた

(レナード)

「なんだあいつは、あれは幹部クラスの制服なのか？」

(ユウリ)

「そんなのわからないよ」

(レティシア)

「とにかく手薄な方へ逃げようよ」

王国騎士団が頑張つて食い止めているため手薄な方向となると自然とダンスホールの奥になる

襲撃者達から逃れるために走つてる途中でシズナ姫が走り疲れて膝をつく

(シズナ)

「はあはあ…、あなた達はいったい？」

(レナード)

「俺はレナード」

(ユウリ)

「私はユウリ」

(レティシア)

「あたしはレティシアだよ」

(シズナ)

「どうして私を？」

(レナード)

「それは貴方が大切な人だから」

(レナード)

「あついや…その、この国にとって大切な人だから」

いつの間にかユウリが幾分か怖い顔をしていたり

(ユウリ)

(しっかり聞いたからね、非常時に…こんな状況で…どさくさに紛れてお姫様に大切な人なんて、私にそんなこと言ったことなんて一度もないじゃない)

(ユウリ)

(何が何でも絶対についていくんだからねレナード)

その時駆け下りたと反対側の階段の影あたりから声が聞こえた

(エルドア)

「お前達こつちだ、地下へ逃げるぞ」

エルドアの顔を見て思うところがあるのかレティシアの眼が緋色になって賢士が表に出てくる

(賢士)

(この生命波動は、だがこの顔、この色は?)

(賢士)

「その顔、じっくりと話したいところだが、それも逃げ切つてからよの」

(エルドア)

「その言葉遣いは…わかりました、必ずや」

(ユウリ)

「何、レティシアの知り合いなの?」

(賢士)

「すべては逃げ切つてからの話しとしようぞ」

しばらく走ってアスヴァーン城であった頃の賢士の部屋のあたりまできた時

(賢士)

(ふむ…、このあたりに妾の部屋があつたはずだが)

(賢士)

「少しばかりやば用が出来てのう、しばし別行動をとらせてもらうぞ」

(ユウリ)

「ちよつとレテイシア、こんな時に何言つてんのよ」

(賢士)

「そう目くじらを立てるでない、用が済んだら合流転移魔法で合流するしの」

(エルドア)

「移動中の我々と転移魔法で合流することが出来るのですか？」

(賢士)

「なあに、シズナ姫の生命波動を目印にしてそれ用の魔法を使えば容易い」

(賢士)

「シズナ姫の生命波動ならこの城しだいに来る前からよう知っておるしの」

(エルドア)

「この城しだいで会う前から…、なるほど」

(エルドア)

「時代は違えど姫は姫であったか」

(賢士)

「それとレナードの生命波動は白騎士とよう似ておる、可能性は低くなかう」

(エルドア)

「なら目指すべき場所は…」

(賢士)

「うむ、宝物庫よ」

(ユウリ)

「ちよつとちよつと、どういうこと」

(レナード)

「わかるように説明してくれよ」

蚊帳の外に置かれていた三人の内二人から非難の声が上がる

(エルドア)

「なら結論だけ言おう」

(エルドア)

「まずはレティシア殿が別行動をとつても合流する手立てがあるのでなんの心配も不安もいらぬと言ふことだ」

(エルドア)

「そして我々は地下の宝物庫へ行つて彼レナードにあることを試してもらうのが我々にとつて助かる可能性が一番高いと言ふことだ」

(エルドア)

(おそらくはそれが、白騎士の復活が予言が示す始まりとなるのだらうな)

白騎士8



レティシアはレナード達と別行動をとり一万年前の自分の部屋へとたどり着いて
いた

(賢士)

(うむ、さすがにこの部屋の主は代っているようだが…)

本棚の片隅に結界があることを確認する

(賢士)

(やはりこの結界はそのまままで生きておったの)

それは一万年の間結界の効果で隠し部屋を隠し続けることが出来たということでも
ある

レティシアは本棚の片隅をいじり一万年も保ち続けた優秀な結界を一時的に解除す
る

そしてそのまま禁書部屋へと踏み込む

(賢士)

「懐かしいのう」

(レティシア)

《なんだかここって空気が重いよ》

(賢士)

《禁じられた書物を集め、隠した部屋だからのう、書物から負のオーラが染み出ているのやもしれぬのう》

(レティシア)

《こんなところ早く出ようよ》

(賢士)

《さてさて、用事を済ませてからよ》

(賢士)

《意識体になって一万年の時をこえたせいか亜空間結界とのアクセスが途切れてしまったからのう…、おっあったあった》

(賢士)

「アクセス・コード・ストレンジ・オブ・レルム」

亜空間結界と繋がる黒い穴が開きレティシア(賢士)はそこへ入る

黒い穴の中ではピラミッド型に結界に包まれて緋色の髪の幼くたまらない程愛らしい少女が胡坐を組んだ状態でいた

(レティシア)

《あつ…、あれがレティちゃんの体なんだ、レティちゃんの心を見た時に感じたよりもずつと…、ずつとかわいい》

レティシアは感嘆の溜息をもらしながらうつとりとした表情で賢士の体に見とれていた

かと思ったらガマンしきれなくて堪らなくなったのか悶えはじめた

(賢士)

《こ…こら、ちよつとまって、わかった、わかったから大人しくせい、悶えるな》

(レティシア)

《だってだってー》

(賢士)

《なんだかとしてつもない悪寒を感じるのだが気のせいか、誰か気のせいだと言つとくれ》

(賢士)

《と…、ともかくだ、先に用事を済ませておくぞ》

そう言つて亜空間結界の片隅へ行く

(賢士)

《これよこれ、念のためにこれを持って行かねばな》

賢士が拾い上げたのは刀身に枝が生えてるかのように更に刃が生えているレティシアの身長程に長い両手剣であつた

そのため一見すると剣に角か牙がついてるようにも見える

(レティシア)

《それなあに?》

(賢士)

《こやつか…、こやつの名はフアングとゆうての、言つてみれば異世界のシンナイトを呼び出すためのアークよ》

(賢士)

《まあこの世界のことはこの世界的能力で解決すべきだからのう、こやつの出番がないにこしたことはないのだがのう》

(賢士)

《では禁書部屋に転移の目印を置いてから合流するかの》

レティシアは禁書部屋で少しばかり作業をしてから転移呪文を唱えてこの場から消

えた



一方レナード達は走って走って走りぬいて宝物庫へとたどり着いた

(レナード)

「ぜえぜえ…、これで俺達逃げる事が出来るのか」

(エルドア)

「正しくはあいつらに対する対抗手段があるだがな」

(シズナ)

「対抗手段…ですか？」

(エルドア)

「あれだ」

エルドアが指さしたのは宝物庫の奥に鎮座するトロルくらいの大きさの白い甲冑だった

(シズナ)

「あれは王国が出来る前からあそこにあり続けてどのようなもののかもわからない

「ままなのですよ」

(エルドア)

「その甲冑の前にガントレットとナイフが置かれているだろう」

(レナード)

「ああ、確かに」

(エルドア)

「それをお前がとってくるのだ」

(レナード)

「えっ、俺が？」

(エルドア)

「そうだ、レティシア殿の見立てではお前ならこのガントレットも、甲冑も使いこなせる可能性が高いのだ」

(ユウリ)

「もしとらなっかたら？」

(エルドア)

「その時は皆殺しにされるだけだろう、さすがにここから逃げ出せるような隠し通路とかはないだろうしな」

(シズナ)

「どうしてあなたはそんなにこの城に詳しいのですか？」

(エルドア)

「今はそんなことしどうでもいいだろう」

(レナード)

「そうだな、今は生き残れるかどうかが大事だ」

(レナード)

「俺これをやってみるよ」

(ユウリ)

「やめてよレナード、そんな得体の知れないものなんて」

(レナード)

「でも上の化け物はトルルなんかとは比べものにならないくらいに化け物だろ、レ
テイシアがいたってどうにかなるとは限らないぜ」

(ユウリ)

「それはそうだけど…、大砲ついてるし…」

(レナード)

「だからやってみる」

レナードはそう言ってガントレットを左手につけた

レナードガントレットを左手につけるとそこから眩い光が溢れだし目を開けていられなくなった

レナードが目を開けるとそこは何もない真っ白な世界だった

この何もない世界に存在しているのはレナードと目の前にいる人型の異形だけだった

(人型の異形フアントム)

「我の力を欲する者よ」

(人型の異形フアントム)

「資格があるかどうか、その力もて試させてもらおう」

そう言うと言フアントムは右手を剣に変えて斬りかかってきた

レナードは思わず剣で受け止めようとしたがフアントムの剣はレナードの剣を通り抜けてレナードを斬った

だがレナードは剣が幻か何かのように通り抜けたことに驚いただけで傷一つついていなかった

(レナード)

「あれ?、あれ?」

レナードがわけもわからずに不思議がつてる間に再びファントムが攻撃を仕掛けてきた

だが今度も攻撃は確実に剣を通り抜けて直接レナードを斬りつけたにも関わらず傷一つついてなかった

(レナード)

(なんだかわからないけど平気みたいだな、なら思い切つて)

今度はレナードが攻撃してみる\$

レナードの剣もファントムの剣を通り抜けてファントムに突き刺さる

だがファントムがレナードに攻撃してきた時とは違ってレナードの剣はファントムに確かなダメージを与えていた

(ファントム)

「私が殺せない命、そして私を殺せる命、確かにあなたこそが契約者です」

(ファントム)

「マスターの能力に合わせた上で私のすべてを捧げましょう」

ガントレットから溢れ出した光はすぐに収まり

そして宝物庫の様子が再び見えるようになった

(ユウリ)

「急にピカーッと光ってなんだったの？」

(シズナ)

「レナード、大丈夫でしたか？」

(ユウリ)

(あゝ、先こされた)

ユウリが少しばかりふくれっ面になる

(レナード)

「ああ、大丈夫だ」

(ユウリ)

「そう…、よかった」

(ユウリ)

「それにしてもあの白い甲冑消えてるわねー」

(賢士)

「なら上手く契約出来たと言うことな」

(レナード)

「レテイシア、いつの間に？」

(賢士)

「たった今転移魔法で来たところにきまっておろうが」

(賢士)

「ともかくこれで上の合成獣を何とか出来る手段が手に入ったことになるの」

(賢士)

(まあ、どこの者とも知れぬがいくら完全武装で来ようが妾とクライブがおればお釣りがくるくらいだが、それでもあのでかぶつは生身では手に余るのう)

(賢士)

「頼りにしておるぞレナード」

(レナード)

「任せておけ」

(エルドア)

「では、上に戻るとしよう」

(賢士)

「その前に忘れておることはないかの？」

とどこか楽しそうにやつきながら言う

(レナード)

「何かって？」

(エルドア)

「何を？」

(賢士)

「汝の自己紹介がまだであろう」

(エルドア)

「あつゝ、そうであつたな、これは失敬」

(エルドア)

「まったく意地の悪いことをなさる」

(賢士)

「汝には感心されることはあつてもこういったことをする機会はなかつたからかう」

(エルドア)

「それはそうですが、まあいいでしょう、いい加減自己紹介をしなくては」

(エルドア)

「レテイシア殿の古い友人でエルドアと言う、居合わせたのは偶然だがよろしく頼む」

白騎士9



城の地上階へ戻るとダンスホールはボロボロになっており合成獣が暴れていたが武装戦士は格段に減っていた

おそらくは王国騎士団の踏ん張りによって足止めには成功したが合成獣には手も足も出なかったといったところだろう

(賢士)

「レナード、あのデカいのは任せるぞ」

(ユウリ)

「ちよっ…、レナードに任せるってどうやってよ」

(賢士)

「頭が悪いのう、先ほど手に入れたシンナイトの白騎士を使うにきまっておろう」

(レナード)

「こいつでか？」

(ユウリ)

「それって、練習も何もなしにいきなり使うっていうの？」

(賢士)

「主役は練習なしのぶっつけ本番と言うのは鉄則であろう？」

(ユウリ)

「いったいどこの鉄則なのよ！」

(賢士)

「違うのか？」

(エルドア)

「それは置いておいてだ、シンナイト、この場合は白騎士だが、その呼び出しは契約した時に契約者に刻まれる呪文によって行われるが最初の一回に限っては全文唱える必要があるぞ」

(エルドア)

「最初の一回は召喚の呪文を唱えることによって契約履行の証けいやくりこうになっている」

(エルドア)

「逆に言えば二回目以降は呪文を省略して白騎士を呼び出せるということになる

な」

リリカルマジカルなアニメの第一話で「我、使命を受けし者なり」から始まる一文でセツトアップするのと同じようなものと言えばわかりやすいだろうか？

(レナード)

「わかった、あの化け物をどうにかしないといけないしな、やってみるよ」

(レナード)

「みんなはシズナ姫を守っててくれ」

(賢士)

「任せておけ」

(エルドア)

「承知した」

(ユウリ)

「レナードも気をつけてよ」

(シズナ)

「レナード…」

レナードは合成獣のいる方へ駆け出す

(レナード)

「化け物め、俺が相手だ」

(レナード)

「古の剣をたずさえし 白き勇者ウイゼル 我に力を…」

ここまで呪文を唱えてからガントレットと一緒に置かれていたナイフをガントレットにセットする

(レナード)

「変身！」

光でレナードの中心にかなり大きな魔法陣が描かれ魔法陣の中が見えなくなる

そして光が収まり魔法陣が消えた時にはレナードの代わりに白き甲冑がそこにいた

白き甲冑はゆっくりと立ち上がると自分自身を確かめるように動いていた

(レナード)

(これがシンナイトなのか)

少しばかり感慨に耽った後で合成獣の方を見るとなにやら踏ん張るような姿勢になっていた

その合成獣の背中についてる大砲の中が少しずつ赤みを帯びて明るくなっていく

(レナード)

(まずい)

レナードがとっさに横っ飛びにとんだすぐ後でレナードのいた位置に大砲から打ち出された大火球が通過する

通過した大火球は城の壁に大穴を開けて大気による減衰作用によって少しずつ小さくなって消えていった

(レナード)

(あんなのを食らっていたらと思うとぞつとしないな)

(レナード)

(それに万が一にもあいづらが巻き込まれるなんてことがあつたらいけない)

レナードがさてどうしようかと悩んでいる間にも合成獣はレナードを狙ってその場でどンドン大砲を撃ってきている

(レナード)

(ちい、どーやって誘いだすか)

(レナード)

(背中の大砲が邪魔だな、背中の大砲が…)

(レナード)

(背中…大砲…、！、そうか、なら距離を詰めれば)

レナードは白騎士で斜め跳びに攻撃を避けながら合成獣の目の前まで距離を詰める

距離を詰められたことにより大砲の死角に入られた合成獣は白騎士を狙えなくなる。合成獣はそれならと右前足の鋭い爪で白騎士を引き裂こうとしたが簡単に左腕で受け止められる。

そして白騎士はその隙を逃さずに右の拳で合成獣の顔面の仮面に思いつきパンチを叩き込む

(合成獣グレアデイモス)

(グオオオオオオオオウ)

(レナード)

「そら、もう一発おまけだ」

続けて顔面の仮面にパンチを叩き込む

(合成獣グレアデイモス)

「グオオオオオオオオウ」

よほど堪^{こた}えたのかしばらく顔をぶんぶんと振っていたが立ち直るとひたすらに白騎士を引き裂こうを攻撃を繰り返している

ひたすらにあつちにいけと慌てているようにも見える

(レナード)

(そーだこつちだ、こつちにこい)

レナードは巧みに合成獣の爪攻撃を避けたり受け流したりしながら少しずつ後ずさり合成獣の開けた大穴から城の外へと誘き出すことに成功した

(レナード)

(よおし、もう遠慮はいらないな)

城の外へと誘き出し周りに気を遣わなくてもよくなった分白騎士の動きに余裕が出てきた

合成獣のがむしやらかな爪攻撃をきちんと掴んで止めるとぐいっと一押しして合成獣を後ろ足で立たせた

(レナード)

(よし、これで終わりだ)

白騎士はそのまま合成獣を後ろに倒して仰向けにすると合成獣を踏んで押さえつける

合成獣は前足の爪で白騎士をカリカリと引っかくが仰向けなので力も勢いもなく白騎士に傷一つつけることは出来なかった

こうなると合成獣もまな板の上の鯉こいである

白騎士は剣を抜いて一回二回と合成獣の首に剣を突き刺して止めをさした

白騎士10



一方レティシア達はと言うと

(賢士)

「このでかきで戦いとなると妾達に出来ることは何もないのう」

(賢士)

(少なくとも、皆が未熟な今はな)

(ユウリ)

「こんなすごい音がしてるんじやきつと声も聞こえないと思うし」

合成獣の砲撃で壁をぶち壊す轟音は城中に響き渡っていた

(エルドア)

「そうだな、ならレナードの邪魔にならぬようどこかに避難しておいた方が良からう」

(賢士)

「そうよな…」

賢士は禁書部屋に転移したり亜空間結界に隔離すればさすがに安全だろうが。さすがに閉ざされているべきそれらの場所を避難場所として使うのは抵抗があると考えていた

(賢士)

「ならば妾達の入ってきた通用口から出るとしようぞ」

(賢士)

「ミュ…、シズナ姫、エルドア、こちらぞ」

シズナ姫はレナードがガントレットに触れている間突然オーラが変化して人が変わったかのように雰囲気が変わり、ひざまづいて呪文を詠唱していた

その時にシズナ姫から感じたオーラで賢士はシズナ姫がミューレアスの生まれ変わりであると確信してついついシズナ姫のことをミューレアスと呼びそうになっていた
レティシア達は通用口へ避難を始めたがそれを見つけた者もいた

(ピエロ団長)

「ドレギアス様、目標を見つけましたぞ」

ピエロ団長ず通信用の道具を使ってそう言っていた

(ピエロ団長)

「はさみ撃ちにいたしましたし、ドレギアス様は通用口の表から追ってください」
そして通信用の道具を調整して今度は別の人物と話しをする

(ピエロ団長)

「影(シャドウ)は私と合流しろ」

ピエロ団長は指示を出し終わるとレティシア達の後を追いかけた



一方白騎士のおかげで合成獣がいなくなり少しは戦いに余裕が出てきた王国騎士団だが団長のサイラスの元に衝撃の情報が寄せられる

(王国兵A)

「団長…、フォーリア王国のラダム大公が…、ラダム大公が…」

(サイラス)

「大公殿がどうした、はつきり言え」

ラダム大公はシズナ姫の誕生祭と共に行われるフォーリアとの和平会談のフォーリア側のトップである

何かあつてはたまつたものではない

(王国兵A)

「お…、お亡くなりになっています」

だがこういう時の現実には常に最悪方向へと動くものらしい

(サイラス)

「なんだと、なんてことだ、これでフォーリアとの和平は白紙ではないか」

(サイラス)

「いや、そもそも10年前に戦争した相手と和平すること自体無理だったのだろう」

サイラスが凶報に衝撃を受けたのを隙だと判断したのか武装戦士が二人でサイラスに襲い掛かるが今のサイラスにとってそんなのは八つ当たりの的でしかなかった

(王国兵B)

「大変です、大変です、大変です！」

(サイラス)

「今度はなんだ」

(王国兵B)

「陛下が…、陛下がダンスホールの階段で…、お亡くなり…」

(サイラス)

「な…ん…だと」

サイラスは脇目もふらずに国王の元へ向かう

(サイラス)

「そんな…、陛下！陛下！」



レティシア達は通用口を使って戦場からの脱出を試みるが

出口の近くで黒騎士が待ち伏せていた

(賢士)

「汝は先ほどの、もう見つかっておったか」

(賢士)

「にしても汝は上で国王を殺した方が、それとも下で指揮をとっておった方が、どちらの方がの」

(黒騎士↓ドレギアス)

「そのようなことに意味はない、シズナ姫を渡してもらおうか」

ドレギアスの声は低く野太い声ではあるがどこか作つたような感じのする声だった

(賢士)

(こやつ男のような声をしておるがほんとに男か、何か引つかかるのう、それにこの生命波動…)

(賢士)

「汝は黒騎士か？」

(ドレギアス)

「それはこの鎧を見てのことか？」

(賢士)

「いや、古のアスヴァーン縁の者だかの」

(ドレギアス)

「…、貴様！、シズナ姫を置いていけば通してやろうと思ったが気が変わった」

ドレギアスが剣を抜いて構える

(ユウリ)

「ちよつとちよつと、何かまずいことになってない」

(エルドア)

「うるたえるな、どの道目の前の敵を倒さねば脱出はできん」

賢士が先手をとって風の矢を放つ

だがドレギアスは僅かに動いて風の矢を鎧に当てただけでなんともなかった

矢の軌道を見極めて最小限の動きで済ませるドレギアスの技量もすごいが風の矢で傷一つつかないドレギアスの鎧も相当なものである

(賢士)

「ちいいい(なら鎧の隙間を狙えば)」

(賢士)

「バーストクロス」

十字型に五本の矢を打ちそれぞれが意志を持つつかのように鎧の関節部を狙うが

(ドレギアス)

「無駄だ」

またもや僅かな動きですべての矢を鎧の分厚い部分に当てる

今度の矢は火の魔力を込めて当たると爆発するようになっていたが衝撃で少したりがせただけで次の攻撃に繋がられる程の隙を作ることは出来なかった

(賢士)

「ちいいい、手強い」

その時、隙が出来れば連携して攻撃をしようと控えていたエルドアが後ろを向いて剣を構える

(ユウリ)

「どうしたの？」

(エルドア)

「あつちはレテイシア殿に任せておけばいい、それよりもこつちに招かれざる客がきたようだ」

(エルドア)

「待ち伏せしてるといふことは見つかったといふことだからくるとは思っていたがな」

(エルドア)

「剣を構えろ、シズナ姫を守るぞ」

(ユウリ)

「は、はい」

戦闘態勢のエルドア達の前に現れたのはピエロ団長のベルシタンともう一人のドレギアスだった

(ピエロ団長↓ベルシタン)

「ようやく追いつきましたよ」

(エルドア)

「貴様は…、雑魚というわけではなさそうだな」

(ベルシタン)

「よくおわかりで、私は襲撃部隊指揮官のベルシタンと申します」

(ベルシタン)

「シズナ姫をいただきにまいりました」

(エルドア)

「そんなことさせると思うか」

(ベルシタン)

「吠えるだけならいくらでも、本当は白騎士も頂きたかったのですがあぁなつては諦めるしかなさそうですね」

(エルドア)

「シズナ姫も諦めてもらおうか」

(ベルシタン)

「そうはいきませんよ、シャドウ！」

その声に応じてベルシタンと同行していた方のドレギアスが剣を構えてエルドアに斬りかかる

エルドアもその攻撃を剣で受ける

(エルドア)

(こいつ、強い)

ドレギアス(影)もエルドアの強さを理解したのか剣を構えての睨み合いになつてい
る

それは隙を見せた方が斬られる静かな戦いとなつていた

そしてレティシア(賢士)と対峙しているドレギアスはドレギアス(影)に呼応する
かのように一気に距離を詰めてレティシアに斬りかかる

レティシアは素早く弓を手放して両手剣ファングを抜く

ギイインと音を立てて剣がぶつかり合う

(賢士)

(やばかったのう、ファングが戦闘に耐えられる鍵^{アイク}であることに感謝するぞ)

(ベルシタン)

(ふうむ、どちらも抑えられましたか、なら私があの小娘をなんとかしないとシズナ姫
は手に入りませんか)

(ベルシタン)

(だが見たところ素人のようですね、なら)

ベルシタンは懐(ふところ)から包みを取り出しユウリ達の方へ投げた
包みはユウリとシズナ姫の上空で解け中に詰まっている粉をばらまいた

(賢士)

「いかん」

(エルドア)

「吸うな」

だがユウリもシズナ姫もその意味を理解する前に吸ってしまい急激に睡魔すいまに襲われ
る

何の訓練も受けていない二人が睡魔に耐えられるはずもなく二人揃って倒れる

(ベルシタン)

「それではシズナ姫は頂いていきますよ」

(エルドア・賢士)

「そうはさせるか」

(ドレギアス)

「それはこちらのセリフだ」

(ドレギアス(影))

「お前の相手は俺だ」

レティシアもエルドアも敵を切り崩す隙を見つけないままベルシタン
がシズナ姫を担いで去っていくのを見ているしかなかった

(ベルシタン)

「そろそろモノシップが到着する頃なので適度なところで切り上げてきてくださいね」

(ドレギアス・ドレギアス(影))

「わかった」

(エルドア)

「モノシップだと、そんなものまであるのか」

ベルシタンはそのまま通用口から出ていきドレギアス達も十回以上剣を交わしてから引き上げた



一方では合成獣を倒したレナードは白騎士の視点で回りを見回し他に巨大モンスターがいまいかどうか確認してみた

そうすると通用口付近に見たことのない紋章が入っている飛行船が浮かんでいるのを見つけた

(レナード)

（あの飛行船はなんだ、バランドールの紋章は入ってないし…、ということはやつらの飛行船なのか？）

飛行船の近くまでいくとエルドアが飛行船を睨み付けているのが見えた

（エルドア）

「くそう、守ると誓ってここへ来たというのに、その誓い一つ守れぬというのか私は！」

（レナード）

（守る？守れぬ？、どういうことだ）

レナードははっと何かに気付いて飛行船を見上げる

（レナード）

「シズナ様……！！」

その声が響く中妖精族の眠り粉で眠らされていたシズナ姫が淡い光に包まれて目を覚ます

エルドアかレティシアが見ていればわかったことであろうがその光はレナードがガントレットに触れている時に呪文を唱えていた時のものと同じ光である

目を覚ましたシズナ姫は飛行船から身を乗り出し声の限りに叫ぶ

（シズナ）

「レナードー！」

(レナード)

(どうする、どうする、飛行船を落としたらシズナ様まで危険に、それなら…)

(レナード)

「必ず、助けにいきますー！」

(レナード)

(どこにいようと必ず、必ず助け出す)

その言葉を聞いてエルドアははっと気がつく

と言うより誓いに縛られて忘れていたことを思い出す

(エルドア)

(そうだ、シズナ姫は守れなかったとはいえ生きているんだ、取り返しがつかなくなる前に助け出せばいいだけのことだ)

数分後に眠りの粉から回復したユウリとレティシアがやってきて合流したが敵は既に総員撤退を始めていた

バランドールを襲った謎の敵との戦いは一旦終わり運命の歯車は回り始めた

そう、予言に記されたすべてはここから始まったのだ

白騎士 1 1



戦闘が終わった後のバランドール城では…

まず騎士団の隊長達は死傷者の確認と警備のスケジュール変更や申し送りなどで徹夜確定コースになっている

本来はサイラスもやらなくてはならない仕事だが国王とダラム大公の棺の前で涙を流して悔しがっていた

(サイラス)

「陛下を…、陛下を守れなかったなんて」

(サイラス)

「陛下のいないこの国になんの意味があるのか」

(サルベイン大臣)

「しかし、陛下がお亡くなりになった今サイラス殿、あなたに国をまとめただかなくてはありません」

(サルベイン)

「それにフォーリアの政治勢力のタカ派のこともあります」

(サルベイン)

「間違いなくダラム大公がお亡くなりになった責任をバランドールに押し付けて攻めてくる」とでしよう」

(サルベイン)

「そうなる前にサイラス殿に立っていただき国をまとめてもらわなくてはなりません」

(サルベイン)

「まあ、実権は私のものですがね、そのために彼らウィザードに協力して王宮御用達のワイン商を強盗に襲わせたり彼らの扮したサーカス団を街に入れたりしたのですからね」

(サイラス)

「だがそれだとシズナ姫は誰が助けるのだ」

(レテイシア)

「それはあたし達にやらせてよ」

(サイラス)

「誰だ!？」

(エルドア)

「これは失礼した、我々は昨夜の騒ぎの中シズナ姫を守ったり白騎士で巨大モンス
ターを倒したりしていたのだがシズナ姫を守りきることが出来なくてな…」

(サイラス)

「シズナ姫が守り切れなかったと…」

(サルベイン)

「確かに昨夜は情報が乱れてまともに状況を掴むことも出来ませんでしたしシズナ姫
の行方もわかりませんでした」

(レティシア)

「一度宝物庫に行つて白騎士をとつてから上に戻つてきたんだけどねー」

(ユウリ)

「国王様を殺したあの黒騎士が二人いたりとかやたらと強くて、隙をつかれてね…」

(エルドア)

「モノシツプで連れていかれてしまったというわけだ」

(サイラス)

「くそ!、くそ!、そんなこと信じられるものか…」

(サルベイン)

「確かに昨夜は所属不明のモノシツプが確認されてはいますが」

(レテイシア)

「アルバナ方面へ向かってるなら確定じゃないかな」

(レテイシア)

(レテイちゃんがシズナ姫の生命波動を遠距離から見てるから方向はわかるのよね)

(サルベイン)

「確定ですな…」

(サルベイン)

「そう言えば先ほど聞き捨てならない言葉があつたように思えたのですが」

(サイラス)

「そうだ、宝物庫に行ったとか白騎士とか、説明してもらおうか」

(エルドア)

「その前に自己紹介をしておきましょう、私は放浪の剣士でエルドアと申します、魔法も嗜んでおります」

(レテイシア)

「あたしはレテイシア、獵師だけど色々出来るよー」

(ユウリ)

「ええつと…、ラパッチワイン商のユウリと」

(レナード)

「レナードと言います、よろしくお願いします」

(ユウリ)

(ずれてるわよ、このバカ)

(サイラス)

「バルンドール騎士団の団長を務めるサイラスだ」

(サルベイン)

「バルンドール国、國務大臣のサルベインと申します」

(サルベイン)

「それで、なぜ白騎士のことを」

(エルドア)

「それは私が旅の中で予言を知ることが出来たからです」

(サルベイン)

「予言と言いますと」

(エルドア)

「一万年前のスターシーカーの予言です」

(レテイシア)

「運が良かったんだよね、あたしは普通だと見えないものが見える特殊な力があるしね」

(ユウリ)

「そうなの？」

(レテイシア)

「うん、だからレナードが白騎士を使えることもわかったんだ」

(エルドア)

「一つお聞きしますがあの巨大なモンスターを白騎士抜きで倒せると思いませんか」

(サイラス)

「あんなもの我ら騎士団の力があれば」

(サルベイン)

「強がりはやめましょう、してやられたことに変わりはありませんから」

(サイラス)

「ぐっ…」

(エルドア)

「それで一つお願いがあるのですが」

(サルベイン)

「なんででしょうか」

(エルドア)

「私達にシズナ姫の救出をさせていただけないでしょうか」

(サイラス)

「なっ、お前達に任せてなどおけん、俺が行く」

(サルベイン)

「それはなりません、先ほども言いましたがサイラス殿にはこの国を立て直していた
だかなくてはなりませんしシズナ姫を攫った組織ならあの巨大モンスターと同じよう
なものを用意してる可能性もあります」

(エルドア)

「昨日の襲撃者達の情報がもうわかったのか、早いな」

(サルベイン)

「伊達に国の重鎮はやっていません、シズナ姫を攫った連中の名前はウイザード、古代
遺跡の発掘などをしては古代兵器や古の呪術などを甦らせる連中です」

(賢士)

（古代のか、となるしやはりシズナ姫がミューレアスと知って狙ってきたということか）

（サルベイン）

「なので巨大モンスターが出てくる可能性が高くまだ奥の知れない組織を相手にしてサイラス殿に万が一のことがあつてはなりません」

（サイラス）

「なら白騎士を俺に渡せ、素人が使つて巨大モンスターを倒せるなせ俺ならもつと上手くやれる」

（エルドア）

「白騎士は所有者が決まったら変更は出来ん」

（サルベイン）

「確かに白騎士を含むシンナイトの伝承にもそのことは記されています」

（サイラス）

「なんだと…」

（サルベイン）

「なので不足なくシズナ姫の救出を行えるのはこの人達しかいないと思われます」

（サルベイン）

「私からもお願いいたします、どうかシズナ姫を助け出していただきたい」

(エルドア)

「承知した」

(レティシア)

「任せて」

(レナード)

「頼まれなくても行くつもりだったぜ」

(ユウリ)

「当然」

(賢士)

「それとなサイラス殿、シズナ姫は当面は安全なはずぞ」

(サイラス)

「どうしてそう言える」

(賢士)

「シズナ姫を攫ったということは利用する目的があるということ、ならそれが済むまで危害が及ぶことはなからう」

(サルベイン)

「一理ありますな、それはそうと先ほどからなにやら様子が違うようですが？」
(賢士)

「気にするな」

その日は城に泊まることになった

(エルドア)

「レテイシア殿、お話したいことがあるのだが」

(賢士)

「わかっておる、妾の部屋でよいか」

(レテイシア)

「あたしはレテイちゃんのこととは聞いてるけどエルドアさんのことも知りたいな」

(エルドア)

「レテイシア殿、これはいったい？」

(賢士)

「このことも含めて積もる話しとなるのう、後ほどじっくりとな」

(ユウリ)

「あの…レテイシア、私も話があるんだけどいいかな？」

(賢士)

「ふむ、なら妾とエルドアとの話しが済んだ後に汝の部屋へ行くが構わぬか？」

(ユウリ)

「うん、待ちくたびれて寝ていたとしても起こしてね」

(賢士)

「あい承知した」

その後ユウリは部屋に入り寝間着に着替えてかせ考え事をしていた

(ユウリ)

(レナードは白騎士があるしレティシアはすごいし、エルドアって人はすごく強そう
でレティシアの知り合いだし、私だけ何も無いな)

(ユウリ)

「ただレナードが行くから私もついていくだけ、それでいいのかな」

その時コンコンとドアをノックする音が

(ユウリ)

「はい、開いてますよ」

(賢士)

「うむ、お邪魔するぞ」

(ユウリ)

「あ…、レティシア」

(ユウリ)

「それで話しというのはいったい何かの？」

(ユウリ)

「話しというのは…、私このままじゃ何も出来ないから何か出来るようになりたいの」

(ユウリ)

「あの時レティシアとエルドアが敵を防いでいたのに私だけ何も出来なくてあっさりシズナ姫を攫われて…」

(ユウリ)

「このままじゃいけないと思うから、何か…、何か…レナードの役に立てるようになりたいから」

(賢士)

「そうか、なるほどのう」

(賢士)

(レナード||ワイルドにシズナ姫||ミューレアスとなつておるからこやつはフラベルの月姫の契約者で間違いなからうが、その月姫がどこにおるかも知れぬしのう)

(賢士)

(確かに今のこやつには何も無いと言えるし、それ故に焦るのも無理はなからうのう)
(賢士)

「ならユウリよ、汝は神聖魔法を覚えてみるきはないかの」

(ユウリ)

「神聖魔法を」

(賢士)

「どうも妾達の中で神聖魔法を使えるのが妾しかおらぬようだな」

(賢士)

「レナードと汝が使えぬのは当然としてもエルドアも初歩程度しか使えなくてのう」

(ユウリ)

「はあ…、それで」

(賢士)

「戦闘で追いつめられるようなことがあった時に妾しか神聖魔法を使えぬとなると神聖魔法で手一杯になって攻撃に回れぬようになるしの」

(賢士)

「妾が攻撃出来た方が良いのはトロルの時にわかっておろう」

(ユウリ)

「まあ、確かに」

(賢士)

「そこで汝がきつちりと神聖魔法を使いこなせるようになれば妾にも余裕が出来て全体的に強くなるということよ」

(ユウリ)

「なるほどね」

(賢士)

「だから神聖魔法を覚えてみる気はないかの、今なら最上級魔法までみっちり教え込むでの」

(ユウリ)

「……よろしく願います」

(ユウリ)

「もう何も出来ない自分は嫌だから」

(賢士)

「よく言った、明日から早速特訓開始といこうかの」

白騎士12



激動の日が終わりシズナ姫を救出するために旅立つ朝
崩壊した城門の前で誰かが衛兵と言いつ争っている

(レナード)

「いったいどうしたんだ？」

(衛兵)

「いや、こいつがレナードさん達に会いたいと言って、昨日の今日ですからうかつに入
れるわけにはいきませんし」

(衛兵と言いつ争つてた人)

「あつ、あなた達は、ちようどよかった」

(レナード)

「俺達、いったい何の用だ？」

(衛兵と言い争つてた人↓武器屋の店員)

「あつしは武器屋で働かせていただいでるもんで昨日たまたま通用口でのレナードさん達の話しを聞きやしてね」

(レナード)

「それで」

(武器屋の店員)

「それで急いでトロルの死体を回収させていただいたんでさあ」

(武器屋の店員)

「大分ぼろぼろになっちゃあいましたがいい値段で売れたんでさあ、それでトロルを叩いて儲けのチャンスくれたあなた達にちよつとお礼がしたいとマーシヤの姉御から言付かってきやしてね」

(武器屋の店員)

「ぜひともあつしらの店にきていただけやせんかね」

(エルドア)

「どの道レナードとユウリには装備を買う必要があるからな、行つて損はなからう」

(ユウリ)

「確かにいい装備があばそれだけ安全になるもんね」

(レナード)

「よし行こう」

(武器屋の店員)

「へい、それでは案内させていただきます」

武器屋に着くと

(武器屋の店員)

「営業中に表から入るのもなんなんでこちらからどうぞ」

と裏口に連れていかれて裏口から入るように言われる

中に入って店員に案内してもらい応接室で待っているとラフな格好がよく似合う活

発そうな栗毛の女性がやってきた

(栗毛の女性)

「へー、あんた達がトロールを穴ぼこだらけにしたんだ、トロールを倒した強者達がこんなかわいい子達だなんて、なんか意外ね」

(ユウリ)

(いきなりなんなのよこの人は)

ユウリの思っていることは顔に出ていたようで

(栗毛の女性)

「ああごめんごめん、悪気はなかったんだけどね」

(エルドア)

「あなたがこの店の主人で？」

(栗毛の女性↓マーシャ)

「その通りだよ、わたしの名前はマーシャ、この店を切り盛りする女主人さ」

(レナード)

(これはこれで意外と言う気が)

またもしつかりと読まれていたようで

(マーシャ)

「あはは、よく言われるよ、他にも似合うもんはいくらでもあるだろうって」

(エルドア)

「それでトロールのことで話しがあると聞いたんだが」

(マーシャ)

「うんそだね、その前にちよつと質問いいかな」

(エルドア)

「質問？」

(マーシャ)

「うん、その答え次第でトロルのお礼が豪華になるかもしれないからね」

(レナード)

「まあいいけど」

(マーシヤ)

「そんじや質問、あんた達はこれからもあんなでかいの相手にすることがあんの？」

(エルドア)

「敵が厄介だからな、旅が終わるまでにでかいのの二つや二つは出てくるだろうな」

(マーシヤ)

「うんうん、いいねいいね」

(マーシヤ)

「それじゃあさ、このビッグロを連れてってでかいのを倒す度にビッグロで連絡して場所を教えて欲しいの、こっちのビッグロにはいつでも店の人が張り付いてるからほんとに時間を選ばずにすぐに連絡を頂戴ね、したらこっちですぐに回収に向かうから」

ちなみにビッグロとは番いで映像通信が出来る偵察に便利な鳥のことである

(エルドア)

「つまりトロルの時のようなチャンスを実にものにしたいわけか」

(マーシヤ)

「えへへ、そういうこと、その代わりにお礼は弾むわよ」

(レナード)

「なあ、なんでそんなにでかいモンスターにこだわるんだ？」

(マーシヤ)

「あれ、あんた達知らないの」

(レナード)

「知らないって何を？」

(マーシヤ)

「あもう、他にわからない人は？」

(ユウリ)

「あもう、わからないと言うか…」

(レテイシア)

「ついていけなかったり」

マーシヤが呆れたようにため息をついた

(マーシヤ)

「わたしのとこみたいな装備の店にとってでかいモンスターの死体というのはいい素材確保出来る宝の山なのよ」

(エルドア)

「昨日レナードが倒したグレアデイモスがあるだろう」

(レナード)

「あの大砲背負ったやつか」

(エルドア)

「あれを合成屋に引き取ってもらって城に再建費用に回すように言ったら大変感謝されたよ」

(マーシヤ)

「ちなみに状態は？」

(エルドア)

「喉を潰して仮面がひび割れてるだけだな」

(マーシヤ)

「仮面以外全部使えるのか、なんて勿体無い」

(レナード)

「そんなにすごいことなのか？」

(マーシヤ)

「すごいものの、再建費用に随分と余裕が出来たことだろうね」

(レティシア)

「じゃあこれから先でかいのを倒す度に連絡すればマーシヤの店が儲かるってこと？」

(マーシヤ)

「そう言うことよ、だからお願いね」

(レナード)

「そうだな、そのグレアデイモスとかいうので悪いことしたような気がするし」

(ユウリ)

「それにもものついでだしね」

(マーシヤ)

「それで決まり？、ねっ、ねっ、それじゃお礼をあげるからこっちにきてくれる」
マーシヤに従って別の部屋にいくとそこには様々な武器が並んでいた

(ユウリ)

「なにこれー」

(エルドア)

「これはすごいな」

(レティシア)

「武具の山だね」

(マーシャ)

「お礼としてこの中から一人一個の武器と軽くて硬いミスリルチェインメール一式を人数分あげるよ」

(マーシャ)

「それにチェインメールには魔法がかかっていて自動的に寸法を合わせてくれるから普通は数日かかる寸法直しの手間がいらさないよ」

(エルドア)

「そんな便利な魔法がかかったミスリル鎧などトロルの儲けを差し引いても随分と損してるのではないか？」

(マーシャ)

「それはあんた達次第だよ、わたしのよく当たるカンはね、あんた達で大儲け出来ると出てるのよ」

(マーシャ)

「だから今損してる分以上にジャンジャンとでかいのを退治して儲けさしてくんないと困るのよね」

(レナード)

「ならせいぜい期待に応えなくっちゃな」

(レティシア)

「がんばろー」

(賢士)

「それはそうとちよつと気になるので妾にも武具を見せてもらえるか」

(レティシア)

「うんいいよ」

レティシアの眼の色が緋色に染まりレティシアの体の主導権が賢士に移る

賢士は手近なところにある切れ味の良さそうな短剣を手にとってしげしげと見つめ

る

回りをよく見るとそね短剣にも他の武器にも柄などに宝石がはめ込まれていた

(賢士)

(この宝石はもしや)

(賢士)

「この短剣に…、いやこの武器にはめ込まれているのは属性石ではないのか？」

(マーシャ)

「おおー、よく知ってるね」

(賢士)

「火の属性を与える紅き火のクリムゾンルビー」

(賢士)

「水の属性を与える清き水のアクアマリンサファイア」

(賢士)

「地の属性を与える深き地のガイアトパス」

(賢士)

「風の属性を与える蒼穹（そうきゆう）のスカイエメラルド」

(賢士)

「どれもこれも言葉や意志の一つで武器に属性を付与出来る代物よな」

(レティシア)

「えーと、属性付与ってレティちゃんがトロールに止め刺す時にマナコンバートって

言ってたやつ？」

(賢士)

「うむ、その通り」

(レティシア)

「じゃあこれ使えばマナコンバートってのは省略出来るってこと？」

(賢士)

「そうなるの、少しは楽に魔法が使えるようになると思うことよな」

(マーシヤ)

「すごーいすごーい、そんなことまでわかっちゃうんだ、その属性石はね、あんたが言うようにここににある武器全部につけてあるんだ」

(賢士)

「鎧と合わせたら一人頭だけでも目玉の飛び出るような金額になりやせんか？」

(賢士)

「こりゃ、シズナ姫を助けた後は冒険者として身を立てた方がいいかもしれんかう」

(マーシヤ)

「ああ、後で返してくれるなら儲けがなくてもうるさく言わないよ」

(マーシヤ)

「元々お礼としてあげるんだしレンタル料と考えるもトロールだけでじゅーぶんいけるから」

(ユウリ)

「あはは…、とつてもありがたいわ（絶対無事なままで返そう）」

(レテイシア)

「あたしは弓としてみんなはどんな武器を選んだかな？」

（レティシア）

「みんなはもう決まったの？」

と目の色が青色に戻ったレティシアが聞く

（ユウリ）

「あつ、レティシアは弓にしたんだね、私はこのショートソードにしたよ」

（賢士）

「ほほう、ショートソードか、らしいと言えららしいのう、それにミスリル鎧の軽さも相まってすごく身軽に動けるようになるのう」

（レティシア）

「ショートソードね、軽くて早くてユウリらしいね」

（ユウリ）

「そうかな、しっかしこうして身に着けてもちつとも重いつて感じがしないのよね」

（賢士）

「レナードはブロードソードか、バランスも良いしエルドアのやつにみっちり鍛えてもらうのが良いのう」

（レティシア）

「レナードはブロードソードにしたんだね、剣の扱いならエルドアにすっかり教えてもらえばいいんじゃない」

(レナード)

「ああ、せめてあの黒騎士は倒せないとシズナ様を助け出せそうにないからな」

(レナード)

「そのエルドアは…、何か少し成金趣味な片手剣だな」

確かにエルドアの持つてる剣は一見すると装飾過多で飾り物にも見える剣ではあるが

(エルドア)

「成金趣味に見えるかもしれないんが装飾に紛れていくつもの魔法陣が刻まれているのだ」

(賢士)

「なるほど魔法剣円陣加速(サークルブースト)か、それなら剣技も魔法も存分に使えよう」

(レナード)

「マーシャさんどうもありがとうございます」

(レティシア)

「でかいのやつつけたら必ずビグロでいの一番に教えるからねー」

(マーシャ)

「頑張ってねー」

(レナード)

「さてと。旅立つ前におやつさんに挨拶しとかねえとな」

そういうことでみんなでラパッチワイン商へ向かった

(ラパッチ)

「レナード無事で何よりだな、しっかしまたとんでもないことに巻き込まれたみたいだな」

(ラパッチ)

「今朝城の兵士がやってきた時には驚いたもんだが、その城の兵士が事情を説明してくれたぞ」

(レナード)

「心配かけて申し訳ありませんでした」

(ラパッチ)

「なーにいいってことよ、それより姫さん助け出すんだって、店のことは気にせずにしっかり助け出してこいよ」

(エルドア)

「シズナ姫は飛行船に囚われたままだろうか？」

(エルドア)

「今わかるか？」

(賢士)

「任せよ、遠かろうが生命波動を感知すれば容易い」

(賢士)

「ふむ、鉱山をこえて更に東へと向かっておるようだの」

(エルドア)

「ならとりあえずの目的地は砂漠の町アルバナか、よし出発しよう」

(ユウリ)

「そうだね」

(レナード)

「行こう」



その頃飛行船（モノシップ）では

ベルシタンとドレギアスがシズナ姫を監禁している部屋を見て話しをしていた

（ベルシタン）

「あの小娘が計画の鍵になるとは信じ難いくらいですな」

（ドレギアス）

「だがあの時の戦場の情報をまとめればシズナ姫は城にいるには場違いな連中と行動を共にしていた」

（ドレギアス）

「そしてその場違いな連中の中でも私の剣を止めた男が白騎士と契約したのは間違いないだろう」

（ドレギアス）

「なら以前からの情報通りシズナ姫にはアスヴァーンの能力が宿っていて、その能力を持つてあの短時間でシンナイトの封印を解いてあの男と契約したのは間違いないだろう」

（ドレギアス）

「黒騎士の封印を解くのに二年もかかったのがあの短時間で解けたのだ、五体のシンナイトの封印を解くまで手放すわけにはいかん」

(ベルシタン)

「なるほど、その能力を使えば我々の望むようにシンナイトを揃えて計画を進めることが出来るというものですな」

(ドレギアス)

(そう、兄さんの望むように出来るはず…)

第二章

鬼械神（デウスマキナ） 1

バランドールは平原に囲まれている



そして場所によって違う名前がつけられている

パーモ村のある南側はブラスタ平原と呼ばれ砂漠の町へ向かうのに避けることのない東側の平原はクレイドール平原と呼ばれている

もつともなんで破壊（ブラスタ）とか粘土人形（クレイドール）といった名前がついているのかは誰も知らないことではあるが

そのクレイドール平原を東へ歩いている四人の旅人の姿があった

（ユウリ）

「またハチが来てるわよ」

ハチの相手をしてユウリを妖精のポルカ族がスリングで狙っているが、そうはさせんとレティシアが弓で射倒す

(レティシア)

「狙われてたよユウリ」

(ユウリ)

「サンキュ」

(レナード)

「ブラスタ平原とは違って猪まで出るんかよ」

(エルドア)

「今夜は猪鍋ししなべにでもするかね？」

静かな旅路とは到底言えない状況であった

(レナード)

「ふう、地図で確認した分だとそろそろ平原を半分はこえてる頃だろうな」

(ユウリ)

「一応でも廃坑までの道がついててよかったわ」

(レティシア)

「確かにね、こんな広い平原で迷子になったらたまんないよね」

(エルドア)

「日暮れも近いことだしもう一頑張りしたらキャンプを張るぞ」

（レナード）

「えっ、進むだけ進んだら適当なところで野宿じゃないのか？」

（エルドア）

「いや、きちんとキャンプを張る、明日に疲れを残すようでは碌な事にならんど」

（ユウリ）

「それもそうよね」

（エルドア）

「それとな、残念ながら携帯用の風呂は用意しておらんど」

（ユウリ）

「ええ、ほんとに残念」

「そもそも携帯用の風呂があるのかどうかは突っ込まないように」

（エルドア）

「早い内からキャンプを張ると言った理由は他にもある」

（エルドア）

「キャンプを張ることでお前達二人を特訓する時間を確保するためだ、昼間の戦いでどう伸ばすかも見えてきたしな」

その日の特訓でレナードはエルドアから片手剣の心構えと初歩的な剣技を教えても

らいユウリは賢士から回復系と補助系の初歩的な魔法を教えてもらった



レナード達は一晩テントで休んでからキャンプの後片付けをしていた

(エルドア)

「片付けがすんだら出発するぞ」

(レナード)

「今日中にはノルディア坑道に着きたいしな」

(レテイシア)

「それじゃ、しゅっぱーつ」

平原を歩き続けてもうすぐでノルディア坑道のある山脈が見えてくるところでエルドアが立ち止った

(レナード)

「どうしたんだ」

(エルドア)

「この音が聞こえぬか」

レティシアは弓を構えてレナードとユウリはエルドアの言う音が何なのか確かめるために耳を澄ませてみる

（ユウリ）

「これは、何かが近づいてくる」

（レナード）

「でかいのがこつち目がけて突っ込んできてるのか？」

（エルドア）

「おそらくはこの平原の主……」

その言葉に堪えるに右手の丘から巨大な影が飛び出してくる

（エルドア）

「ビツクマウス」

それはネズミのような体に不釣り合いな大きなたたらこ唇（くちびる）を持った白い毛皮の巨獣だった

（ユウリ）

「こ…、こんなでかいの相手にならないわよ」

（賢士）

「だったら白騎士の扱いに慣れるためにもこやつを練習台にすればどうかの」

(レナード)

「それもそうだな、我に力を…変身」

レナードの姿が光に包まれ見えなくなる、そして光が収まった時には白い甲冑の騎士が立っていた

(エルドア)

「ユウリ、お前は今自分に何が出来るのかを考慮ろ」

(ユウリ)

(何が出来るのかって、あんなでかいのに剣を振り回してもしょうがないし、レナードもあんなでかいのを動かすのは大変だろうし…、うん、でかい？、でかいと普通は動きが鈍い、なら早くすれば)

(ユウリ)

「クロノクロノス・オーバertime・ブースト…」

(ユウリ)

「クロックアップ」

(賢士)

「マイティマイティ・ストレン・ガーディア・プロテク・クロノ・天地の精を断ち切れ

…」

（賢士）

「全値弱体」
マイティウィーク

（エルドア）

「ルーン・フレイム・ルーン・プリズン・ルーン・フレイム・サークル・マルチ」

エルドアの魔法剣に刻まれた魔法陣のいくつかが呪文に応えて光を放つ

その光はエルドアとビツクマウスを中心とした二か所に現れ魔法剣の魔法陣と同じ物を展開する

それぞれを中心に展開された魔法陣は一つ一つは単純だけどいくつも折り重なって複雑な魔法陣を形作る

（エルドア）

「プリズンフィールド・フレイム」

突如としてビツクマウスを取り囲むように火柱が立ち上り火を苦手とするビツクマウスを閉じ込める

レナードはなんとなく狙いを察したのか腰だめに剣を構えていつでも突撃出来る態勢をとった

（賢士）

「ここを決めるぞ、バーストクロス」

賢士の撃った火の矢はビックマウスの両目と額と鼻と喉を射抜きあまりの激痛に逆上したビックマウスは後ろ足で立ち上がり地団駄を踏んだ

(賢士)

「今を逃すでない」

白騎士は驚くほどの瞬発力で今は丸見えになっているビックマウスの喉を一突きに突き刺した

ビックマウスはじきに動かなくなりその身を大地に横たえた

(レナード)

「ふうー、終わったな」

(エルドア)

「まあまあだったな」

ビックマウスを倒したレナード達は2：2に分かれて武器屋への連絡と坑道前のキャンプ場所の確保をしていた

無論キャンプを言い出したのはエルドアである

(レティシア)

「さてとビッグロ、武器屋にいる相方に繋いでね」

(武器屋の店員)

「おや、レテイシアさんじゃないっすか、どうしたんすか」

（レテイシア）

「いい情報があるからマーシヤさんに代わって欲しいの」

（武器屋の店員）

「いい情報つてもしかして、すぐに姉御を呼んできまさあ」

一分もしない内にマーシヤが出てくる

（マーシヤ）

「レテイシア、いい情報つてなになに？」

（レテイシア）

「クレイドール平原のノルディア廃坑前でビツクマウスをやつつけたよ」

（マーシヤ）

「それってほんとにいい情報ね、ビツクマウスって毛皮が綺麗きれいだか高く売れるのよね」

（レテイシア）

「じゃあ追加でいい情報、顔に集中攻撃して止めに喉を突き刺したから体は無傷だよ」

（マーシヤ）

「もう最高、すぐに回収部隊を送るわね」

その後キャンプするのにいい場所を見つけたレナードとエルドアが戻ってくるまで

にユウリに少しばかり魔法に関する座学を施した

鬼械神（デウスマキナ）2



その頃ウイザードの飛行船では

一羽のビッグロがドレギアスの元へやって来ていた

（ドレギアス）

（これは兄さんのビッグロ…）

ビッグロは船室に備え付けられた止まり枝に降りて銀髪のハンサムな青年の顔を映し出した

（ドレギアス）

「これは閣下」

（銀髪の青年）

「いや、今はプライベートだ、素顔でいいぞ」

ドレギアスがその言葉に応えて兜を脱ぐとその中から現れたのは金髪の似合う美し

い女性だった

(ドレギアス↓金髪の女性)

「兄さん…」

(銀髪の青年)

「バランドールではご苦労だったカーラ、その活躍のおかげでまた一步私の望みに近づいたよ」

(金髪の女性↓カーラ)

「いいえ、兄さんの喜ぶことなら私も嬉しいもの」

(銀髪の青年)

「だがその活躍が見事なのは確かだな」

(銀髪の青年)

「アスヴァーンの能力を持つ姫を手に入れバランドールとフォーリアのトップを殺して和平を潰したのだからな」

(カーラ)

「え…、国王を殺したのは影の…」

(銀髪の青年)

「シスタードール」

その言葉と共にカーラの眼から意思の光が消え虚ろな表情になる

（銀髪の青年）

「バランドール襲撃に参加したドレギアスはお前一人だけだ、お前がドレギアスになつてバランドール襲撃の全てをやった」

（カーラ）

「わたしが…、やった…」

（銀髪の青年）

「バランドールとフォーリアのトップを殺したのはお前だ、私のためによく働いてくれて嬉しい」

（カーラ）

「うふふ…」

虚ろな表情のまま嬉しそうに笑うカーラ

（銀髪の青年）

「これからも私のために働いてくれよ」

（カーラ）

「はい…、兄さん…」

（銀髪の青年）

「メモリーハート」

カーラは今夢から覚めたかのようなきよとんとした表情になる

(カーラ)

「あ…あれ。わたし?」

(銀髪の青年)

「どうしたんだカーラ、ぼーっとして」

(カーラ)

「え…、何でもありません兄さん」

(銀髪の青年)

「さて、よほど愚かでもない限り姫の位置を掴んで救出隊を出すはずだ」

(銀髪の青年)

「そうなるに必ずノルディア坑道を抜けてくるはずだ」

(カーラ)

「確かに他に道がありません」

(銀髪の青年)

「そこでお前は姫を救出に来るやつらをノルディア坑道で歓迎してやれ」

(カーラ)

「私一人ですか？」

（銀髪）

「なに、黒騎士を使えばお釣りがこよう」

（カーラ）

「わかりました兄さん」

（カーラ）

（それにバランドールとフォーリアを戦争に引き戻すような真似をした私にはもう戻れない）

カーラは銀髪の青年の目論見通りに踊らされていた

そしてカーラはドレギアスに戻って指示を出す

（ドレギアス）

「私はこれからノルディア坑道へ向かう、お前達はアルバナへ向かえ」

（ベルシタン）

「いったいどうなされたのですか？」

（ドレギアス）

「姫を取り戻そうと迫ってくる者達へ少々挨拶をしようと思ってな」

（ベルシタン）

「確かに坑道を通る以外に道はありませんし、山越えをすることも思えませんしな」
(ドレギアス)

「そういうことだ、挨拶した後は黒騎士で合流するしお前達は普通に補給と情報収集をしていればいい」

(ベルシタン)

「ははあ、承知いたしましたドレギアス閣下」

鬼械神（デウスマキナ） 3



そして翌日、レナード達はベストコンディションでノルディア廃鉱に挑もうとしていた

（エルドア）

「気をつけることだな、ここには様々な魔物が住みついていると聞く」

（エルドア）

「噂ではドラゴンもいると聞いている」

（レナード）

「ま…まつさかあ、いくらなんでもドラゴンなんて…」

（賢士）

《何をドラゴンの噂ぐらいでびびっておるのだ？》

（レテイシア）

《いや、普通ドラゴンがいるって聞いたらびびるよ》

(賢士)

《そんなものか、妻の友の一人がドラゴンの王だったりするが怖くはなかったぞ》

(レティシア)

《ははは…》

賢士の非常識さは聞いて内心苦笑いするしかないレティシアだった

(レティシア)

(あたしが表の時にレティちゃんの声が聞こえるのはあたしだけで良かったのかも
しない)

とレティシアが内心冷や汗をかいてる間にも話しは進む

(ユウリ)

「でもそういう噂もあって鉱山としてはもう機能してないって話しも聞いたことある
んだけど」

(レナード)

「それにしては…、何か整備されてるような感じがするな」

(エルドア)

「バルンドールは東と西が平原に囲まれており北と南は海に囲まれている」

（エルドア）

「それぞれの恵みだけで十分に暮らしてゆけるし鉱物など他に必要なものがあればアルバナやグリードと交易すればいい」

（エルドア）

「そうなる」と魔物の恐怖に晒されながら鉱石を掘るものなどいなくなる」

（エルドア）

「鉱山として機能していない直接の理由はそんなところだろう」

（レナード）

「じゃあこの整備されている感じは？」

（エルドア）

「それはバランドールの方で巡回して維持しているからだろう」

（エルドア）

「何しろこの坑道がなくなつてはアルバナと結ぶ陸路がなくなるので交易相手が減り大ダメージを受けることになる、国の方で維持したがるのも無理はないということだ」

（レナード）

「そう言つてる間にお客さんが来たようだぜ」

（レティシア）

「蜘蛛だね」

(ユウリ)

「い…、いやー！、蜘蛛いやー！」

蜘蛛と聞いてユウリが顔を引きつらせて悲鳴を上げる

(レナード)

「そーいやユウリのやつ蜘蛛とかゴキブリとかカサカサしたやつが苦手だったな」

戦闘になったし判断してレティシアの眼が緋色になり賢士が表に出る

(賢士)

「やれやれしようがないのう、水っぽい色からしてこれでいけよう、バーストクロス」
的確にでかい蜘蛛5匹を射抜いて燃やすがすぐにあちこちから蜘蛛が湧いて出てく

る

(レナード)

「これじゃきりがないぞ」

(賢士)

「しゃあないのう、エルドア一つでかいの頼むぞ」

(エルドア)

「こんな閉鎖空間でか？」

（賢士）

「妾が守る」

（エルドア）

「レテイシア殿…、信じてますぞ」

（エルドア）

「サークル・フレイム・サークル・フレア・火の精霊王来たりて焦熱の破壊をもたらせ」
エルドアの魔法剣円陣加速の複数の魔法陣が光りエルドアを中心に巨大な魔法陣が展開される

（賢士）

「アウトフレア・アウトフレイム・シールシール・ブロックサークル」

賢士の呪文に応えて賢士を中心に全員を包み込むように青い光りの魔法陣が展開される

（エルドア）

「紅蓮紅円陣」

（賢士）

「炎気遮断陣」

見渡す限り一面が赤に染まる中でレナード達のいるあたりだけが青い光りに包まれ

て何事もなくすんでいた

やがて炎が収まって回りを見てみると岩盤が少しばかり溶けていた、無論のことながら蜘蛛なんてかけらも気配を感じることはなかった

(ユウリ)

「が…、岩盤が溶けるなんてどんだけとんでもないのよ」

(レナード)

「岩盤が溶ける程の広域魔法にそれを完全に遮断する魔法、どっちもレベルが違いすぎるな」

その後坑道の中を進んでいくとユウリが騒いだ時ほどではないがまた蜘蛛が出てきたり、でかくて黄色いトカゲのようなものとか、こういった洞窟にはつきもののコウモリとか、後は炎の塊かたまりみたいなものも出てきた

(レナード)

「あの炎の塊みたいなのは何なんだろ？」

(賢士)

「あれは火の精霊であろう」

(レナード)

「火の精霊…つてもしかしてきつきものすごい魔法のせい？」

（賢士）

「違う違う、恐らくはこの坑道の奥深くに潜む桁違いの魔物の瘴氣しやうきに当てられて自然の理ことわりから外れることによつて狂化してモンスターとなったものであろう」

（賢士）

「坑道の奥にドラゴンがいるという噂は噂ですまぬかもしれぬのう、それもいるとすれば火竜に間違ちがいなかろう」

（賢士）

「もつともこつちから会いに行く道理はないがの」

色々とおつたがもうすぐでアルバナ側へ抜けようかという時に出口の方に人影が見

えた

（???)

「また会つたな」

鬼械神（デウスマキナ） 4



その人影はバランドール城を襲撃し国王を殺した上にシズナ姫を攫っていった黒騎士の一人である

（レナード）

「きさまは…、シズナ様を返せ！」

（ドレギアス（カーラ））

「それはこちらのセリフだ、こちらこそ白騎士を返してもらおうか」

（ドレギアス）

「それはお前のような者が持つべき物ではない」

（賢士）

「確かにシンナイトはイシュレニアで作られたものであるし、ウィザードがイシュレニアの流れを組むならばそう言いたくもなるのはわかるがそれはお門違いというもの

よ」

（ドレギアス（カーラ））

「なに？」

（賢士）

「元々白騎士はイシュレニアの騎士ワイルドに授けられたものであるが、そのワイルドが囚われたアスヴァーンの女王ミューレアスが持ちかけた取引に乗りミューレアスを助け出したことからアスヴァーンの戦力となったものよ」

（ドレギアス（カーラ））

「だから今更返すつもりがないとでも言うつもりか？」

（賢士）

「違うな、白騎士のことを決めていいのは持ち主であるワイルドだけと言うこと」

（ドレギアス（カーラ））

「何をわけのわからんことを、そのワイルドとやらがイシュレニアやアスヴァーンが存在していた頃の人間だというのなら、それは一万年前の人間だということになる、そんな大昔の人間が現代いまにいるわけがない」

（賢士）

「シズナ姫を攫ったということは汝らが予言を、シズナ姫がミューレアスの生まれ変

わりであることを知っておったから攫ったということであろう」

(ドレギアス (カーラ))

「確かに知っている、あの姫の持つアスヴァーンの能力で全てのシンナイトを手に入れるのが我らウィザードの望みだ」

(賢士)

「ならイシュレニアのクソ皇帝を止めるために生まれ変わったのがミューレアス一人とは限るまい」

(ドレギアス (カーラ))

「なに、いったい何を言いたいのだ？」

ドレギアスは少し考ええるそぶりを見せてが今気づいたといった体でレナードを見る

(ドレギアス (カーラ))

「まさか、こんな小僧がワイルドの生まれ変わりだと…」

(ドレギアス (カーラ))

「面白い、なら確かめてみようではないか」

ドレギアスは闇のように黒い剣を抜き、正面に構えて宣言する

(ドレギアス (カーラ))

「古の闇を支配する、漆黒の翼ディニヴァスよ、我に力を…変身！」

その言葉に応えてドレギアスを中心に魔法陣が展開し黒い光に包まれる

その黒い光が収まるとドレギアスのいた位置にカラスのような漆黒の翼を持つシンナイトが立っていた

（エルドア）

（シンナイトの契約者は常に一人のはず、だというのにこんなことになるとは、これが時をこえたことによる矛盾なのか）

（レナード）

「ならばこちらも、古の剣を携えし、白き勇者ウイゼルよ、我に力を…変身！」

レナードを白い光が包みその中から白騎士が現れる

（ドレギアス（カーラ））

「貴様がワイルドとやらの生まれ変わりかどうか確かめてくれる」

黒騎士は剣を軽く構えると僅かな予備動作でダッシュして白騎士に斬りつける

だが白騎士はその攻撃を剣でがっしりと受け止める

黒騎士は剣を押し合う力勝負には持ち込まずに大きく後ろへジャンプして改めて剣を構える

（ドレギアス（カーラ））

「ならこれでどうだ」

黒騎士はそのままの位置で大きく剣を振り上げてから「ハアッ！」と気合の入った声と共に白騎士に向けて大きく剣を振り下ろす

白騎士は見えない何かを叩き付けられたかのように倒れる

(レナード)

「な…、何だこれは」

レティシア達は片隅で結界を張って勝負を見守っていたがレナードの言葉を聞いてエルドアが答える

(エルドア)

「あれはもしかすると剣技のソニックブレードではないのか」

(レナード)

「ソニックブレード?」

(エルドア)

「剣の達人はその一振りで空気をも斬り、その衝撃は見えない刃となって遠くの敵をも倒すと聞いたことがある」

(ドレギアス (カーラ))

「よくわかったな」

（賢士）

「だがあれは紛い物のようだのう」

（賢士）

「剣氣にありありと魔力が感じられるわ、おそらくは風の魔力を剣に纏まとわせて矢のよ
うに飛ばしたただけであろう」

（エルドア）

（誰が継承しているかは知らぬがよくもここまで使いこなしているものよ、紛い物に
してもああいった技は私には出来なかつたな）

（エルドア）

（だがああいった技を使えてしまっているためか技に頼りすぎてるようにも見える
な）

（レナード）

「本物だろうが紛い物だろうが見えなきや同じことだろ」

（ドレギアス（カーラ））

「そうだな、このまま貴様が倒れることに違いはない」

（賢士）

「それでもないぞ、妾がレナードに一つの言葉を送りレナードがその言葉の真意を理

解出来ればその技は通用しなくなるぞ」

(ドレギアス(カーラ))

「ふん、ハツタリを」

(賢士)

「聞けレナード！、見えないけど見えるものだ！、それがわかればソニックブレードなど恐るるに足らぬ！」

(レナード)

「なんだそりや、ナゾナゾか？」

(ドレギアス(カーラ))

「戦いの中で考え事とは余裕だな、それも一発くれてやる」

黒騎士が大きく剣を振り上げて気合の入った掛け声と共に一気に振り下ろす

白騎士は予め剣で受ける態勢をとっていたためにあまりダメージは受けなかったがそれでも立っていられずに膝をつく

(レナード)

(ちくしよう、やっぱり攻撃が見えない)

(レナード)

(どうすりゃいいんだ)

黒騎士は白騎士が剣で防御してるのを崩そうとソニックブレードから間髪入れずに剣を叩き込んだりしているがなんか崩せない

（ドレギアス（カーラ））

「しぶとい、ならもう一発」

黒騎士は再び距離をとって剣を大きく振り上げる

（ドレギアス（カーラ））

「もう一度こいつをくらええい！」

黒騎士は振り上げた剣を振り下ろしてソニックブレードを放つ

（レナード）

「ぐっうう…（剣で防御してるおかげで大きなダメージはないがこのままじゃまずいな）」

（レナード）

（しかしソニックブレードという見えない攻撃をする時は必ず剣を振り上げるな）

（レナード）

（剣を振り上げてから見えない攻撃…？）

（レナード）

（見えない攻撃をするために剣を振り上げるという動作が必要だと思ったら…）

(ドレギアス (カーラ))

「どうしたどうした、防戦一方ではないか、それでも白騎士の契約者か」

(ドレギアス (カーラ))

「しよせん貴様などに白騎士は使いこなせんということだな、そろそろ白騎士を返してもらおうか」

(レナード)

「それはどうかかな」

(ドレギアス)

「なに？」

(レナード)

「わかったぜ、見えないけど見えるもの」

(ドレギアス (カーラ))

「この後に及んで時間稼ぎのハツタリか、見苦しい」

(レナード)

「それは自分の目で確かめてみるんだな」

白騎士がくいくいつと右手を招く仕草をして黒騎士を挑発する

(レナード)

「こいよ、ソニックブレードを撃ってこいよ」

（ドレギアス（カーラ））

「よかろう、これで終わりにしてくれる」

黒騎士が大きく剣を振り上げる

（レナード）

（よく“見ろ”、やつのあの剣の動きを、あれが振り下ろされる時に“見えない攻撃”
がくる）

（ドレギアス（カーラ））

「くらええい！」

黒騎士が剣を振り下ろすのに反応して白騎士は右へ横つ飛びに避ける

そのまま横つ飛びに跳んだ勢いをバネに黒騎士の右手に剣を叩き込む

黒騎士はその一撃に耐えられずに剣を落としそれを見逃さなかつた白騎士が落とし
た剣を蹴り飛ばした

（賢士）

「ソニックブレード自体は確かに見えぬ、だがソニックブレードを撃つのに剣の振りが
必要であるとわかれば撃つタイミングを知ることが出来る」

（賢士）

「つまり攻撃は〃見えない〃けど剣の動きは〃見える〃ということよ」
(ドレギアス(カーラ))

「驚きだな、白騎士の封印が解けたのは我らウィザードがブランドールを襲撃した時で間違いはないな？」
(エルドア)

「ああ、間違いない」

(ドレギアス(カーラ))

「これほど短い時間で白騎士を使いこなし私の剣を飛ばすとはな」

(ドレギアス(カーラ))

「認めざるおえんな、貴様が白騎士の正当な後継者であることもワイルドの生まれ変わりだということも」

黒騎士はその姿を消して人間であるドレギアスに戻り、話しを続けながら黒騎士を呼び出す鍵である神器アーテクトを拾いに行く

黒騎士の剣は黒騎士が消えた時に人間の使うサイズに戻っていた

それを見てレナードは白騎士を消して元に戻った

それを見て賢士はしかめっ面になる

(賢士)

（ちい、レナードのうつけめ、相手を負かしたからって戦いが終わったとは限らぬと言
うのに）

（ドレギアス（カーラ））

「今回は私の負けだ、ここまで来ると言うことは姫を監禁している飛行船がアルバ
ナに停泊していることも見当がついているのだろう」

（ドレギアス（カーラ））

「まあ、今からアルバナへ急いだとしても追いつけないだろうが情報くらいなら得ら
れるだろうな」

（レナード）

「なぜそんなことを言う」

（ドレギアス（カーラ））

「次追いついてきた時に完全に決着をつけるのもいいかと思つてな、そう言えば白騎
士の契約者よ、まだ貴様の名前を聞いていなかったな」

（レナード）

「俺の名前はレナードだ」

（ドレギアス（カーラ））

「覚えておこう、姫を助けたければこれから飛行船を追うがいい、こいつを倒してか

らな」

ドレギアスは去り際に一枚の札ふだを地面に投げつけた

その札を中心に魔法陣が展開され光を放ち始める

(賢士)

「これは召喚符か、しかもこの大きさは巨大モンスター用かの」

(ユウリ)

「ちよつと、巨大モンスターって白騎士じゃないと相手にならないんでしょ、レナード」

(レナード)

「わかってる、我に力を…変身！」

だが神器であるガントレットは何の反応も示さない

(ユウリ)

「うそー、どうなってるの」

(賢士)

「ついさつき呼び出したとこだし大分派手にやりあっておったからもう、しばらくは無理よな」

(賢士)

「相手を倒したらそれで終わりとは限らぬと言うことよな、よく覚えておけこのうつけ」

（レナード）

「うつけって俺かあ？」

（賢士）

「白騎士を早々にしまうようなやつはうつけで十分よ」

（ユウリ）

「それよりあのモンスターが完全に出てきたらどうするのよ」

鬼械神（デウスマキナ） 5



ドレギアスを退けたのはいいけど巨大モンスターの召喚を置き土産にされて白騎士も使えなくなり状況は悪くなる一方だ

（賢士）

「巨大モンスターが完全に出てきたらどうすると言つてももう」

（エルドア）

「出てくるまでに迎撃するしかないだろう」

（賢士）

「アルバナへ行く陸路がここしかない以上撤退することなどありえぬの」

（レナード）

「そのとおりだな」

（賢士）

「良い機会だ、ユウリはG補助を試してみよ」

（賢士）

「妾は召喚中のモンスターを〃みやぶる〃」

（エルドア）

「我々はモンスターの正体がわかるまで手が打てんな、あの召喚陣が出口を塞いでる形になってるしな」

（賢士）

「これは…、巨大モンスターの正体がわかった」

（賢士）

「正体はここで倒した水色の蜘蛛の親玉よ」

（ユウリ）

「うげえ」

（エルドア）

「これでどうあっても逃げられなくなったな」

（レナード）

「なんでだ？」

（エルドア）

「ほとんどが紅蓮紅円陣で焼き尽くしたとは言えここにくるまでに水色の蜘蛛は数え切れぬほど倒しているしその痕跡こんせきを消してもいない」

(賢士)

「つまりあの巨大な蜘蛛にとって妾達は子供の仇ということになるわけよ」

(レナード)

「そりゃあ、逃がしてくれそうもありませんね」

(賢士)

「このタイプの召喚符では異界の魔人や魔獣を呼び出すことは出来ぬとはいえ厄介な置き土産を残してくれたものよ」



レナード達が召喚陣のモンスターの本体を知って騒いでる頃、坑道の出口の片隅で撤退するドレギアスにも見つからないように一羽のビグロがこっそりとレナード達の様子を窺うかがうかがついていた

そのビグロは間違いなくドレギアスカに指示を出していた銀髪の青年のビグロであった

（エルドア）

「とりあえずは円陣加速の能力でこの区域の属性を火の属性にしておこうか」（レナード）

「いくら属性とかいじつても白騎士が使えないんじゃしようがないんじゃ？」

（賢士）

「やれやれしようがないのう、この世界の力では\$ない故に秘めておきたかったがもうも言うてはおれぬ状況だしのう、妾の取って置きの切り札を使うことにするかのう」
 そう言つて賢士は両手剣フアングを抜いて構えた

（賢士）

「憎悪の空より来たりて 邪悪蔓延る大地に突き立たん

妾と汝が力持て 邪悪を砕く牙となる

現臨せよ 機械仕掛デウスマキナの神

妾が示す名に応えよ エビルブレイカー・フアング」

賢士の言葉に応えて両手剣フアングを構えた賢士を中心に超巨大な魔法陣が展開する

その魔法陣は上にゆっくりと伸びて円柱形になってくるとその中に何かがあるのがわかつてくる

円柱形の魔法陣の中にあるのは白騎士よりも一回り大きい鋼鉄の巨人だった

その巨人の姿は白騎士のような甲冑に見えないこともないけど白騎士と大きく違うのは膝ひざから下のブーツがやたらとでかいことだ

ガン〇ムのドムの足を更に極端にしたものと言えばわかりやすいだろうか

(レナード)

「……これはいったい」

(ユウリ)

「これもシンナイトなの？」

(エルドア)

「いや、こんなシンナイトは見たことも聞いたこともない」

(賢士)

「これは言ってみれば異世界のシンナイトと言ったところよ」

(賢士)

「これは本来であればこの世界で使われるべきではない力」

(賢士)

「故にこれを戦力として考えてはならぬぞ、これは今回限りとしたいからのう」

賢士の召喚に応えて現れたファングは胸の宝石のようなものから光を放ち賢士を照

らす

賢士はその光に吸い込まれるようにファンングの中に入る

レティシアはファンングの操縦席に直接転送され物珍しさにきよろきよろしてる

（賢士）

「これこれ、物珍しいのはわかるが余りきよろきよろせんでもらえるかのう」

そんな声がレティシアの後ろから聞こえた

（レティシア）

「えっ、レティちゃんいつの間に？」

レティシアがびつくりして振り向くと計器類の多い操縦席のようなものに半ば埋め

込まれるような恰好の賢士がいた

（賢士）

「まあ、妾はこんななりになってはおるが何の不都合はないから気にするでない」

（賢士）

「妾とファンングのことを説明したらひどく長くなる上に面倒で、別に他へ影響が

あるわけでないし説明……しなくてもいいよのう？」

（レティシア）

「いやあ、レティちゃんのあれやこれやはすつこぐ興味あるんだけど外の状況が状況

だから時間がないんじゃない？」

(賢士)

「それもそうなのう、だが汝がメインパイロットになっおるようだし、いくつか話しておかねばならないことがあるからのう、出来るだけ手短に話そうぞ」

(賢士)

「まず妾はフアングに関する多くの権限を持ち操作することが出来る」

(レテイシア)

「へえー、それってレテイちゃんの持ち物だから？」

(賢士)

「いや、元々妾はフアングの一部であつた故よ、だがこのことに関しては突っ込みはなしとしてもらおうか」

(レテイシア)

「うんわかつた(さわさわ…)」

(賢士)

「それで汝は何をしておると言うのだ(呆れ)」

(レテイシア)

「普段のレテイちゃんは幽霊みたいなものなのに今は触れるんだなーって」

（賢士）

「どうやらフアングのやつが操縦しやすいように自分の魔力で仮初の肉体を作ってくれたようだよ」

（レテイシア）

「外に出てもこれ維持できないかなー？」

（賢士）

「フアングのやつが魔力による肉体生成のレシピを覚えてくれたので魔力が確保出来れば不可能ではなからう」

（賢士）

「ってそれよりも次の話しへゆくぞ」

（賢士）

「フアングが元いた世界では妾は魔術師とパートナーを組みパートナーの魔術師がメインパイロットとなってフアングを操縦しておったのだ」

（賢士）

「だが汝は本職の魔術師ではない故に十分な力を発揮することは出来ぬであろう」

（レテイシア）

「ふむふむ」

(賢士)

「故に妾はこの世界に合わせてプログラムを逐一更新してゆくので汝は普段の戦いをイメージしておれば何とかなるはずよ」

(レティシア)

「なるほど、いつも通り出来ることを目一杯やればいいだけね」

シヤアアアアアアアアア

その時フアングに無数の蜘蛛の糸が絡みついた

巨大な蜘蛛はフアングを力任せに引き倒そうとしているようだ

(賢士)

「うかつ、話しに夢中になって蜘蛛の動きを見落とすとは」

(レティシア)

「レティちゃん、フアングは燃えても大丈夫よね」

(賢士)

「そりや大丈夫だがいったい…、あつそうか敵は水色の蜘蛛、ならば任せよ」

賢士が急いで攻勢術式プログラムの修正にかかる

(レティシア)

「牙よ燃え上がれ、ヒートボデイ」

フアングの青白い鋼鉄の体が赤熱して燃え上がる、フアングに絡みついた糸は熱に耐えられず瞬く間に溶けていく

（レティシア）

「レティちゃん、このまま一気に倒したいんだけどいい技ある？」

（賢士）

「大技はあるにはあるが外したら寒いし、まずは動きを止めんな」

（賢士）

「それとヒートボディはもう止めとるぞ」

（レティシア）

「どーして止めるの？」

（賢士）

「閉鎖空間での高熱技は危険を孕はらんでおるのが原因よ」

その間も水色の巨大蜘蛛はかぎ爪を振り上げて攻撃してきてるがフアングは少しずつ後ろへ動きながら腕で受け流している

（レティシア）

「ねえレティちゃん、このままちよろちよろと水を流したら面白いことにならない？」

（賢士）

「水を、それって…、ははーん、なるほどのう」

水色の巨大蜘蛛は糸が通用しないことを理解しているのか執拗にかぎ爪で攻撃してくる

フアングは足元に水を流しながらじりじりと下がりつつ攻撃を受け流している

水色の巨大蜘蛛はフアングが下がるのに釣られて少しずつ前に出てきてフアングが流した水を踏む

(賢士)

「よーし、かかった」

(レティシア)

「くらえ、スパークウェイブ」

フアングの足元の水を伝わって電撃が水色の巨大蜘蛛を捉える

パチュンと大きな音がした後は水色の巨大蜘蛛は焼け焦げていた

だがそれでも水色の巨大蜘蛛はひくひくと動いていて致命傷になっていないことがわかる

(レティシア)

「ここで後は止めだね」

(賢士)

「よし、大技で仕留めてくれる、この技で行こうぞ」

レティシアの座るメイン操縦席のモニターに技の名前と手順が送られてくる

（レティシア）

「位相干渉式シフトジャンプシステム起動」

位相干渉式シフトジャンプシステム

それは空間の位相に干渉することで瞬間的に空間を断絶しそり空間が元に戻ろうとする力を利用して空中に刹那（せつな）の瞬間だけ足場を作るシステムである

ファングの膝から下のパーツが展開しスラストターやエアインテークのようなものとか文様が姿を表しバシユバシユと音がする度に空中を蹴って空高く舞い上がる

そして十分高く舞い上がったところで今度はつま先までピンと伸ばして水色の巨大蜘蛛目指して勢いをつけて落ちて落ちる

（レティシア）

「シユーティイングブレエエイク」

ファングの全体重を乗せたジャンプキックは水色の巨大蜘蛛の腹をあつさり貫き坑道の地面にめり込んだ

下半身を失った蜘蛛はしばらくヒクヒクした後動かなくなった

その後ファングから下りて（下りる前に賢士は再び意識体になってレティシアの中に

戻ってた) ビグロでマーシャに報告してからレナード達四人は坑道の出口に向かった

レナード達は黒騎士や水色の巨大蜘蛛と戦った広場を抜けてノルディア坑道のラグ
ニツシユ砂漠側の出口にいた

(ユウリ)

「うーん、やっぱり外は気持ちいいわね」

(エルドア)

「さてと、ここです…」

(レナード)

「キャンプだ、だろ？」

(エルドア)

「やつ、はは、確かに休む必要はあるがキャンプの準備をする必要はない」

(レナード)

「キャンプの用意をする必要がないってどういうしてだ」

(エルドア)

「坑道が伸びる道の周囲にある小屋はなんだと思う」

(ユウリ)

「えーと旅人の休憩所と…」

（レティシア）

「王国兵の詰所つて書いてるね」

（エルドア）

「そり通りだ、この坑道はバランドールとアルバナの交通の要所になってるからな、旅人の共計所はラグニツシユ砂漠ほ渡つてアルバナへ行くための保存食とか水など置き、あるいは坑道を抜けてバランドールへ行くために必要になるであろう道具などを置いてある小屋だ」

（レナード）

「なるほど、キャンプを張らなくてもここで休めるわけか」

（ユウリ）

「じゃあ私達も砂漠に備えて備蓄品を分けてもらいましょう」

（エルドア）

「あまり欲張らん方がいいかもな、バランドールの状況が状況だけにしばらくは備蓄品の補充が滞るかもな」

（レティシア）

「砂漠越えは予定通りだけど食料と水に余裕を持たせた方がいいからね、ちよつとばかりもらつていこう」

(ユウリ)

「ラツキー、この休憩所シオワーがあるわ」

(レテイシア)

「じおあ一晩休んでさっぱりしてから出発しようね」



その頃ビッグロを通してレテイシア達の一部始終を見ていた銀髪の青年は

(銀髪の青年)

(確かにレナードというやつは戦闘センスはずば抜けているな)

(銀髪の青年)

(蜘蛛は予定通りといったところか、なつ…なんだあれはつ、あれはシンナイトなのか?)

(銀髪の青年)

(いや、五体のシンナイトのどれでもない、デウスマキナ?、異世界のシンナイト?)

(銀髪の青年)

(わけがわからんがうの小娘がああ巨人をこれ以上使うつもりがないのは幸いだな、

あまり小娘を追い詰めすぎないように上手くやればもうあの巨人は出てこないということだな）

鬼械神（デウスマキナ） 6



ノルディア坑道を抜けたレナード達は砂漠の町アルバナを目指してラグニツシュ砂漠に入っていた

（ユウリ）

「くうく、あつついわね」

（レナード）

「そりゃあ、砂漠だもんな」

（エルドア）

「この砂漠にも当然のことながらモンスターは出る、戦えるだけの最低限の体力を残しておくんだな」

確かに砂漠にも色々とモンスターが出てきた

砂漠らしくサソリが出てきたり砂漠なのにイノシシやハチが出てきた

もっとも一発でももらうとやばいサソリやハチはレティシアとエルドアが遠距離攻撃を徹底して過剰なくらいの攻撃を叩き込んでいたし、ユウリは魔法でサポートしていたわけだからイノシシがいなかったらレナードに一番はなかったとも言えるけど

時折サイクロプスと呼ばれる赤い巨人や雷光魔獣と呼ばれるメガロティグリスを見かけることもあったが消耗を避けるために賢士の魔法でやり過ごした

やがて砂漠のほぼ中心にある町アルバナにたどり着いた

（エルドア）

「ここが砂漠の町アルバナだ、前に来た時は人の心まで乾いていると思ったものだが今はどうなっているだろうか」

（レナード）

「さてとまずは…」

（ユウリ）

「お風呂お風呂よねー、お風呂に入れる宿屋はどこにあるのかしら」

（エルドア）

「大抵の町において宿屋は酒場を兼ねるものだ、情報を集めるにしても拠点を確保するにしても、食料など物資を補充するにしても、無論風呂に入るにしてもまずは酒場を探さなくてはな」

(レナード)

「それにしても砂漠の町なのに意外なくらい人でごみごみしてるんだな」

(エルドア)

「バランドールにもグリードにも繋がっている交通の要所だからな、むしろ人が多くて当たり前とも言える」

町の雑踏を歩いていると広場の片隅にある酒場を見つけた

酒場の看板には「サソリの尻尾亭」と書かれていた

(エルドア)

「とりあえずはここで情報を集めるか」

(ユウリ)

「まず最初にお風呂つきの宿屋かどうか確認してよね」

(レナード)

「わかったわかった」

レナード達四人はサソリの尻尾亭に入っていた

酒場に入るとまず酒場にいる人達から値踏みするような視線の洗礼を受けた

(ユウリ)

「何かすごく見られてない？」

（レナード）

「俺達がよそ者だからじゃないのか？」

（レティシア）

「それはそうとどの席が空いてるかなー？」

レティシアがきよろきよろ見渡すと奥まったところのテーブルが一つ丸ごと空いてるのを見つけた

（レティシア）

「ほら、あそこのテーブル空いてるよ」

（エルドア）

「うむ、そうだな（おかしい…、これだけ人がいてテーブルが丸ごと空いているとは）」
他に四人がまとめて座れるところがなかったので奥まったテーブルに着くことになった

その間酒場のステージでは肩や胸元の露出度の高い衣装を着た踊り子が金髪的美丽髪をなびかせタップを交えた切れのいいダンスを踊っていた

レナードがそのダンスを物珍しく見ていると

（ユウリ）

「あれえ、レナードもしかして見とれてた」

(レナード)

「あ…、いやこういうの初めてだからな」

(ユウリ)

「ふーん、そう（私もダンスの一つくらい習おうかな）」

(エルドア)

「さて飛行船の情報が欲しいところだが四人でぞろぞろ行っても怪しまれるだけだな」

(レナード)

「確かに」

(レテイシア)

「じゃああたしとレナードで別々に聞いて回るよ」

(ユウリ)

「そうだねお願い、その間に私はと」

そう言つてメニューを確認するユウリ

(レナード)

「はいはいわかったよ」

レテイシアとレナードは飛行船について聞き回ったが忙しいと相手にされなかった

り何かと話しを逸らされたりで飛行船に関する情報は一つも聞けなかった

（ユウリ）

「何かおかしいわよね、こんなに人がいるのに情報一つ聞けないなんて」

（エルドア）

「それよりも気づいたか？」

（レナード）

「ああ、何か変な感じがするな」

レティシアはもによもによと小声で呪文を唱えていた

（レティシア）

「戦神の加護（ぼそり…）」

（エルドア）

「ありがたい（ぼそり…）」

戦神の加護は四人に行き渡った

レティシア達が何が起ると待ち受けているとステージで踊ってる踊り子が踊りながら下りてきた

（エルドア）

「踊りの演出にしてもステージから下りるものか？」

(エルドア)

(まあいい、保険はかかっている)

踊り子は踊りながら少しずつレナードに近づいていき至近距離まで近づいたところ
で懐(ふところ)からナイフを取り出してレナードに斬りかかった

レナードは首を振ってナイフを避けユウリ達も戦闘態勢に入る

踊り子の動きを合図に酒場にいる人間の全てが武器を構える

(レナード)

「いったい何のつもりだ」

(ユウリ)

「これって全員グル？」

(踊り子)

「ここまでできて何のつもりかなんて、相当鈍いわね」

(踊り子)

「妹を助けるためにあんたには死んでもらいたいのさ」

(踊り子)

(そうだよ、やつらの要求通りこいつらを殺さないと妹は…)

(レナード)

「妹を助けるってどういうことだよ」

（踊り子）

「そうだね、何も知らずに死んでいくのも何だし冥土の土産に一から話してやるよ」

（踊り子）

「事の始まりはほんの三日前のことだけだね、ウイザードって連中がやってきて金を物を言わせてガマローネのやつを抱え込んだのさ」

（ユウリ）

「ガマローネ？」

（踊り子）

「この町を牛耳るガマローネ商会のことさ」

（踊り子）

「この町では何をするにしてもガマローネ商会の許可がいるのさ」

（踊り子）

「そうして何でもやりたい放題に出来るようになったやつらは私の妹を人質にとつたんだ」

（踊り子）

「そして金はいくらでも使わせてやるからお前を殺して白騎士のガントレットを持つ

てこい、そうしたら妹は返してやると」

(踊り子)

「その時に色々と教えてもらつたよ、白騎士とかいうシンナイトつてやつは一度契約が結ばれると契約者以外触ることも出来ないとか、契約者が死なない限り契約が解除されないとかね」

(レナード)

「それで俺を殺すつてのか」

(踊り子)

「妹の命がかかっているからね」

(賢士)

《これはいったい何の茶番よ》

(レティシア)

《茶番?》

(賢士)

《あの女の生命波動は黒騎士の契約者であるドレギアスと同じものよ》

(レティシア)

《ということは…》

（賢士）

《あの女がドレギアスということよ》

（レテイシア）

《それって教えた方がいいんじゃない》

（賢士）

《いや待て、やつらが平気で他人の命を奪う連中だというのはわかっていよう》

（賢士）

《裏付けもとらずにうかつに動いてほんとに犠牲者が出れば寝覚めが悪くなるとゆう

ものよ》

（レテイシア）

《じゃあどうすりゃいいの？》

（賢士）

《しばらく様子を見るしかなからう》

（踊り子）

「話しは終わりだ、それじゃそろそろ死んでもらおうか」

（踊り子）

「お前達やっちまいな」

鬼械神（デウスマキナ） 7



片手で剣を構える者、弓で狙いをつける者、杖を持つて呪文を唱える者など踊り子に雇われたゴロツキ達は数に任せて様々な攻撃を繰り返してきたが、バランドール城襲撃という本物の戦場を駆け抜け旅をしながらモンスターを倒すことで戦術が安定してきたレナード達にとってはなんの問題もなかった

酒場の外での乱闘に変わりはしたものの数分後に立っていたのはレナード達と踊り子だけになっていた

（レナード）

「どうした、これでおしまいか？」

（ユウリ）

「大したことないのね」

（踊り子）

（随分と手強いね、これを使うしかないのか？）

（踊り子）

（この魔人召喚ギガースのアドベントカードを）

（踊り子）

（やつらのアドベントは術者の体を捧げて異界の魔人を呼び出す術、使えば元には戻れない）

（踊り子）

（だがやつらはこのカードは新技術によって開発したもので一か月以内に呼び出したギガースを処理すれば確実に戻れると言っていたな）

（踊り子）

（どうせこのままでは勝ち目もないし妹も助からん、やつらの言葉を信じるしかないのか）

（踊り子）

「まだだ、まだ終わってないよ」

そう言って踊り子は一枚のカードを取り出す

（エルドア）

「ぬう、まさかあれは」

(踊り子)

「アドベント」

その言葉に応えて踊り子を中心に魔法陣が展開し黒いもやのようなものが踊り子を包み込む

やがて踊り子はトロールや白騎士と同じ巨人サイズの馬のような顔をした紫色の魔人に姿を変えた

(エルドア)

「なんてことを、あのままではあの娘も助からんぞ」

(賢士)

(黒騎士の契約者を使い捨てるような真似など考えられぬ)

(レナード)

「いくら妹のためだからって自分も無事でないという意味がないだろうが、我に力を…変身！」

レナードを中心に魔法陣が展開され白騎士が姿を現す

(レナード)

「そーいやあれをぶった切っても踊り子の方は大丈夫なのか？」

(賢士)

「この時代の技術についてはエルドアの方が詳しくかろう、どうなのだエルドア？」
（エルドア）

「娘の体を媒体にしているだけで変身しているわけではないはずだ、魔人を倒せばなんとかなるはずだ」

（レナード）

「それなら安心してたたっ切れるぜ」

そうとわかって安心したレナードが魔人の方を向いて剣を構え直している間に魔人「ブル、ブルウ」と唸りつつ片足で地面をかいて突撃態勢になっていた

どうやら媒体になった踊り子の精神状態に影響されて白騎士に全力攻撃を仕掛けるつもりのようにだ

（レナード）

「迂闊だな、そのまま突進してくるつもりなんだろうけど来るとわかっていればかわすことなんて…」

（レナード）

（ちよつと待て、かわしたらこいつそのまま後ろへ突っ込むよな）

白騎士の後ろにあるのは広場に面した家屋だ

（レナード）

(やべえ、かわしたらあのあたり無茶苦茶になるぞ)

魔人が白騎士めがけて痛烈な勢いで突進してきた

白騎士はそれを真正面から受け止めたが勢いを抑えきれずに後ろの店に押し付けられる

白騎士が押し付けられた店は多少はひび割れたものの倒壊することは免れた

だが白騎士の受けたダメージは大きく足をガクガクと震わせながら剣を杖にして何とか立ち上がることが出来た

(ユウリ)

「もうレナードのやつ何やってるのよ、あんな見え見えの攻撃を食らって」

(賢士)

「だが白騎士が受け止めねば魔人の突進によってあの店も含めあの区域一帯はボロボロになっていたのであろうな」

(ユウリ)

「え、じゃあレナードは被害を出さないようにするために」

(エルドア)

「そうだろうな」

そりレナードは体中に走る痛みを耐えながらズタボロな状態でどうやって魔人を倒

すか考えていた

（レナード）

「うぐつ…、あつ…、はあはあはあ…、これじゃあ後一発攻撃出来るかどうかだな」

（レナード）

（さっきの攻撃を思い出せ、あれがもう一度くれば…、うん、今度は確実にやれる）

（レナード）

（なら問題はどうかやってあの攻撃を誘うかだな）

（レナード）

（考えてもしようがない、正攻法でいってみるか）

白騎士は剣を肩に掛けて左手で人差し指を立ててクイッククイックと魔人を招くような
仕草をした

（レナード）

「こいよ、さっきのやつをもつかいやってこいよ」

魔人になつても言葉が理解出来るのか白騎士の方を向いて再び突撃態勢に入った

（レナード）

（よく見極めろよ、タイミングが全てだ）

白騎士は剣を鞘に納めさっきと同じように受け止めると言わんばかりにどっしりと

した構えをとった

(エルドア)

「なんのつもりだ、さっきのやつをもう一度食らって耐えられるとは思えんぞ」

(賢士)

「レナードのやつ、何か考えがあるのかのう」

(ユウリ)

「レナード……」

ユウリは自分の無力を嘆きレナードの無事を祈ることしか出来ない

魔人が突進を開始したそのタイミングで白騎士は素早く剣を抜き魔人の突撃の直撃を避けながら剣を魔人の腹に差し込んだ

(賢士)

「これは見事なカウンターよな」

(エルドア)

「この短時間で…、なんとというセンスだ」

(ユウリ)

「レナード！」

エルドアはレナードのあまりの成長の早さに驚きを通り越して呆れユウリはレナード

ドの無事を喜んだ

魔人は白騎士と交差した場所より少し先の場所で倒れつつ踊り子の声と入り混じった奇妙な悲鳴を上げて消えていき踊り子だけが残っていた

ちなみに白騎士はカウンターの構えをとる際に少し前に出ていたので魔人が倒れた時の被害はなかった

鬼械神（デウスマキナ） 8



魔人との戦いが終わった後レティシア達はダメージの大きなレナードと魔人から戻ったまま意識の戻らない踊り子をサソリの尻尾亭の二階の部屋へ運び込んだ

レナードはレティシアとユウリが治療して踊り子はエルドアが見ている

治療と言っても魔法一つで簡単に回復出来るほど単純な話ではない

ダメージを受けたことに代わりはないからどれだけ治療魔法を唱えても体がダメージを受けたことを覚えていてその事実をなかったことには出来ないのだ

だけど治療魔法を使うことによって大きなダメージを小さなダメージだと体をごまかして自己回復能力を上げることが出来る

レナードが部屋で数時間寝ていれば治ると今まで治療出来たのはレティシアの…、いや賢士の治療魔法レベルの高さの証明と言えよう

そして踊り子の様子を見ていたエルドアは

（エルドア）

「これは…、思ったよりも浸食が進んでいるな」

（ユウリ）

「え…、浸食って」

（エルドア）

「アドベントを使用した術者は身体がじわりじわりと魔人の色に染まり身体の全てが魔人の色に染まった時、身体は完全に魔人に捧げられ二度と戻れなくなる」

（ユウリ）

「そんな…」

（エルドア）

「だが私の知る限り短時間でここまで進行の早い魔人はいないはず」

（賢士）

（となると契約者故に浸食が早い代わりにギリギリで戻っても浸食の影響を受けないようになっているのか、それともこの魔人召喚そのものに何か細工をされておるのか）

やがてレナードも起き上げられるようになって夕食を終えた夜遅くに踊り子が目を覚ました

（踊り子）

「ここは…」

(レナード)

「気がついたか」

(踊り子)

「お前達は！」

(レナード)

「無理すんな」

(レティシア)

「それに色々とお話しを聞きたいしね」

(賢士)

(妾ではなくてレティシアが表にでておつて正解だの、ごく普通に話すだけでこれほど和むとはもう、やはりこういった話しの時には小手先の話術よりもその在り方や性質といった雰囲気の方が大事になる時があるのう)

(レナード)

「確か妹を助けたいとか言つてたみたいだけど」

(踊り子)

「そうだよ妹…って、この状況だと失敗したということか」

（踊り子）

「これでは妹は…」

（レナード）

「まだ諦めるのは早いんじゃないか」

（踊り子）

「え…」

（レナード）

「俺達もウイザードのやつらかせ助け出したい人がいる」

（レナード）

「だからお前の妹もついでに助けるよ」

（踊り子）

「え…、でも私はお前の命を狙ったのに、お前を殺そうとしたのに」

（踊り子）

「普通魔人を倒したらそのままにしとくか止めを刺すものかどどと思ってた」

（踊り子）

「それなのに…、私の妹を助けるなんて…、どうしてそんなことを言うんだ」

（レナード）

「どうしてって言葉は俺の方が言いたいよ、どうして人を助けるのに理由が必要なんだ、それに敵がウィザードなら当然だね」

(踊り子)

「お前…」

踊り子は驚いたような、それでいて泣き出しそうな表情でレナードを見ている

(レティシア)

「まあとりあえずさ、お姉ちゃんの名前とか妹さんのこととか色々教えてくれない、情報があればどうやって助けようかって考えようもあるかもしれないし」

レティシアが話しをぶった切ってそんなことを言う

それでも話しをぶった切ったことを不快に思われることもなく「ああそうだな」とすんなりと話しを合わせてくれるのはレティシアの人徳か？

(踊り子→カーラ)

「私の名前はカーラ、酒場の踊り子が本業でその稼ぎで妹のレンと二人で暮らしている」

(カーラ)

「妹は私と同じ金髪で見た目はそうだな…、酒場の評判でき私はかつこいいとかセクシーとか言われることが多いがレンは可愛いと言われることが多いな」

（カーラ）

「その分バカがレンに寄って来るとも多いから何度か叩き潰したけどな」

（レティシア）

「それでウィザードに命令されたことが済んだらどこで妹さんを解放してもらえるところになつてるの？」

（カーラ）

「ここから南の古代遺跡だ」

（エルドア）

「あそこか…、砂嵐でも吹いていないと隠れて近づくのは無理そうだな」

（レティシア）

「エルドアその遺跡知ってるんだ、どんな形してるの？」

エルドアが「ここはこう」と見取り図を描いて説明してくれる

（レティシア）

「見晴らし良さそうな遺跡だねー、だったら魔法で姿を消して近づいたら？」

（エルドア）

「砂漠を渡る疲労に加えて魔法を使えばなしか、さすがに無理があるだろう」

（賢士）

《さすがにそこまできついと今の妾の魔力ではな…》

(レテイシア)

「そっかー、無理かー」

作戦が決まらない中カーラは言い出した

(カーラ)

「妹を助けに行く時は私も連れて行ってくれ」

(エルドア)

「それでレナードを不意打ちして殺すことが出来れば妹が約束通り返ってくるかもしれないと」

(カーラ)

「違う、私はそんなんじゃない」

(ユウリ)

「エルドア、あまり意地悪なこと言わないでよね」

(エルドア)

「するぬ、だがこの町が心も乾いていると言われるのはこういうことだ」

(エルドア)

「だからこそレナードが妹を助けると言った時に驚いたのではないのが」

（カーラ）

「そうだよ、この町にそんなお人好しはいないからね」

（レナード）

「さて、それはそうとどうやれば助け出せるかだな」

（カーラ）

「ちよつと待て、その前に南門を通る方法を考えなくてはならん」

（レナード）

「えっ…、それはどうということだ」

（カーラ）

「遺跡に行くには南門を通っていくのが一番いいんだが、この町では何をすることもガマローネ商会の許可がいるからな」

（ユウリ）

「つてことは南門を通るにもその…許可つてのがいるわけ？」

（カーラ）

「そういうわけだ」

（レナード）

「なーんだ、じゃあまずは明日の朝一番にそのガマローネつてのに会わなきゃいけない」

いつてことじゃないか」

(ユウリ)

「人質救出作戦を考えるのは南門が通れるようになってからね」

(レナード)

「そうと決まったら今夜はもう寝るか」

(レティシア)

「さんせい」

それぞれが各部屋に入った後でレティシア：いや賢士はエルドアの部屋に行った

(賢士)

「(コンコン) エルドア」

(エルドア)

「どうなされたレティシア殿」

(賢士)

「エルドアもカーラに何かと聞きたいことがうるのではないかと思おてのう」

(エルドア)

「それは確かに色々聞きたいものですが」

(賢士)

「だから今夜の所は妾とカーラの二人つきりにさせてくれぬかのう」

（エルドア）

「それはまた、なぜに？」

（賢士）

「黒騎士との話しとなると随分と繊細なものになりそうだな、皆を交えて話すというわけにはいかぬ」

（エルドア）

「なんと、彼女が黒騎士だと」

（エルドア）

「…わかりました、その代わりどんな話しをしたのか後で聞かせてください」

（賢士）

「うむ」

そして今度はカーラの部屋へ向かった

鬼械神（デウスマキナ） 9



そして賢士はカーラの部屋へ向かった

カーラの部屋の前まで来てからカーラリードレギアスであることを知っている賢士はずるいことだと思いつつこの後のカーラとの話して状況を有利に運べるかもしれないと考えて部屋の中の様子を確認してみることにした

（賢士）

「ピーピング・ピーピング・エアウエイ・アリミット・イヤー

音波収拾（パルスコネクト）（ぼそ…）」

魔法の効果でカーラの部屋の中の音を細部漏らさずに聞くことが出来るようになった

部屋の中ではカーラが窓辺にやってきたビッグロに気がついたところだった

（カーラ）

「このビッグロはどこかで見たことがあるような…、まあいい、用があるみたいだし入っていい」

カーラは窓を開けてビッグロが入れるようにする

するとビッグロは部屋に入ってきて一人の男の姿を映し出す

銀髪その男は「今のカーラ」にとっては見覚えのない人間だった

（カーラ）

「お前はいつたい、それに何の用なんだ？」

（銀髪の青年）

「そうだったな、今はそういう設定だったな」

（カーラ）

「いつたい何を言っている？」

（銀髪の青年）

「では一度戻すとするか、リバースドール」

その言葉と共にウィザードとしてのカーラの記憶が蘇る

（カーラ）

「兄さん作戦は順調です、このままやつらの仲間としてシンナイトの情報を集めて位置情報とかをリークすればいいんでしょうか？」

(銀髪の青年)

「ああ、一万年前にマドラス皇帝と共に消滅したと思われていた太陽王の目星がついたのでな、後は準備が出来て封印を解けば太陽王は手に入る」

(銀髪の青年?)

(そう、太陽王は元々私の物だからな、あの忌々しいミューレアスの封印以外はまったく問題ない)

(銀髪の青年)

「その準備をしてる間お前にはやつらと同行して龍騎士と月姫の場所を掴んで欲しい」

(カーラ)

「わかりました兄さん」

(銀髪の青年)

「五体のシンナイトが手に入ればその時こそ私の望みが叶う」

(銀髪の青年)

(そう…、私の望みがな)

(カーラ)

「お任せください兄さん」

（銀髪の青年）

「では任せただ、シスタードール」

カーラの眼から意思の光が消える

（銀髪の青年）

「お前は再び踊り子カーラになる、私の妹としての記憶はなくなるが私のためにシンナイトの情報を集め私のビグロを見かけたら必ず接触する、これは心に刻まれているので覚えてなくても必ず実行する」

（カーラ）

「かならず…、じつこうする…」

（銀髪の青年）

「ビグロが見えなくなつて10秒後に踊り子カーラとして目を覚ます」

そう言うつと銀髪の青年の姿は消えてビグロは飛び去つていく

（賢士）

（さて、どうすればほんとの意味でカーラを救えるものかのう）

（賢士）

（仮に今カーラを問い詰めたとしてもウィザードとしての記憶がないわけだからカーラの方として困惑するだけだしのう）

……………(何とか出来ないか考え中)

……………(ウィザードとしてのカーラの記憶だけを消せないか考え中)

……………(今のカーラのままで説得出来る可能性がないか考え中)

(賢士)

《うう…、良い案が出てこなくて頭から煙が出そうよな》

(レテイシア)

《あたしもこれとっていい方法は思いつかないし》

(賢士)

《う……、う……》

不意にプツンと何かが伐れた音がしたような気がした

(賢士)

《もうよい、少々強引だが単純な方法をとるとしようぞ》

(レテイシア)

《わ…、わ…、レテイちゃんが短気起こしちゃった

でもしようがないかな、あたしもアイディアないし》

(賢士)

「(コンコン) カーラ入るぞ」

（カーラ）

「ああ、構わんぞ」

（賢士）

「入って早々なんだが込み入った話しがあるのでな、音が外に漏れないように結界を張らせてもらうぞ」

（カーラ）

「なんだい突然、わけよかんないね」

（賢士）

「サイレンス・サイレンス・サンド・レンス・ヴォス・ミュト

消音結界（サイレントフィールド）」

（賢士）

「これで普段話せないことでもじっくりと話せるようになったのう、ドレギアス」

（カーラ）

「ドレギアス…？、あんたいつたい何なんだい、その名前たまに私の夢の中に出てくるんだけどなんで知ってんだい？」

（賢士）

「ふむ、自覚がないのか、やはり記憶を消されておるのは確かなようだのう」

(賢士)

「それどころかいよいよに操られておるのう」

(カーラ)

「操られてるって誰が？、あんた頭大丈夫なの？」

(賢士)

「めんどくさいのは嫌いでの、これ一つですつきりさせるとするかかう」

(賢士)

(妾の予想通りならばウィザードとしてのカーラの方がいいように操るための仮初の人格であろうしな、記憶を精神の障壁さえ壊せば良いはずよ)

(賢士)

「クリア・クリア・ディペル・マイン・ロック・ブラスタ・クラスタ

鏡水精神 (クリアマインド)」

賢士の術が暗示によって築かれたカーラの記憶の防壁を打ち崩す

(カーラ)

「うう…、なに、何これ、夢と同じ？、でもこの生々しさ、この記憶、ウィザード？、ドレギアス？、私？」

(カーラ)

「私がドレギアス？、バランドールの国王を殺したのもフォーリアの大公を殺したのも私？…、わたし…、もうもどれない…」

（カーラ）

「え…、でもこの記憶…、大広間で部隊の指揮をとっていてベルシタンに呼ばれてそのままシズナ姫を攫うのを手伝ったのも私？…、シズナ姫を攫う時にもう一人ドレギアス？わたし？、違う…、違う…、これシャブール、それに部隊指揮とっていたら他に動けないのに国王…、越してる…？、殺してるの…ドレギアス」

（カーラ）

「ドレギアス？、わたし？…、シャブール？…、わたしはなに？、わたしはだれ？…」

（賢士）

「うぬぬ…。ぐぬう、ここまで人の人生を弄ぶとは」

（賢士）

「それにこのままではカーラが壊れてしまう」

（賢士）

「仕方がない、今起きてることは夢ということにして忘れてもらうかの
マナコンバート・スリープ」

カーラは「わたし…、わたし…」と呻きながら倒れた

(賢士)

「後は精神障壁の修復と国王を殺したなどというねつ造記憶を消しておかねばなしばらくして何とかカーラへの精神干渉は終了した

(賢士)

「ふいー、何とかすんだがそれにしても解せんもう」

(賢士)

「仮にも妹を操り人形にするかのう、それも記憶の捏造^{ねつぞう}までして人生を弄ぶなんてことを」

(賢士)

「人がやることではないのう」

(賢士)

「そう言えばカーラの兄とやらはどこか不自然だったような…、気のせいかなのう？」

(賢士)

「ん…、どこか不自然な兄に操り人形な妹…、それに兄の方は人とは思えぬ所業^{しよぎょう}…」

(賢士)

「そう言えばあの戦いにおいてマドラスはミューレアスを罠にかけて捕り憑き操り人形にしてワイルドを殺したことがあったのう」

（賢士）

「まさかのう…、まさかのう…」



賢士はカーラの部屋を出た後で約束を果たすためにエルドアの部屋へと向かった

（エルドア）

「レテイシア殿、何か成果はありましたか？」

（賢士）

「いや、それがの…」

賢士はカーラの部屋での出来事を話した

（エルドア）

「ひどいものですな」

（賢士）

「ああ…、もしかするとカーラは人生の半分以上を操られて過ごしてきたのやもしれぬな」

（エルドア）

「まあ、それは今どうにか出来ることとは思えませんので置いておくとして、問題なのは情報が漏れることですな」

(賢士)

「構わん、シンナイトに関する情報くらいくれてやれ」

(エルドア)

「何故ですか、問題ではないのですか？」

(賢士)

「よく考えてみよ、仮にシズナ姫を助け出したところでそのままバランドールに帰ったりしたら再び襲撃されるのは目に見えておるぞ、そして惨劇のおまけつきでシズナ姫が再びやつらの手に落ちるのは想像に難(かた)くなかろう」

(エルドア)

「むう…、確かにあの城では守れますまい」

(賢士)

「それにやつらが欲しがってるのはシンナイトよ、ならばこちらもシンナイトを探して遺跡なりなんなりゆけばやつらはシンナイトの封印を解くためにシズナ姫を連れてくるであろうし、その時は幹部クラスの一人や二人おるのは当然であろう」

(賢士)

「その時に幹部クラスを確実に叩いてあわよくばシズナ姫を助け出すくらいでよいのではなからうか」

（エルドア）

「なるほど、確かにやつらも上層部が減れば統制が甘くなるだろうし城攻めどころではなくするのは間違いない、それに情報が筒抜けならシンナイトを探せばやつらの方からやってくるから探す手間が省けると」

（エルドア）

「シズナ姫を助け出すのはそれからでも遅くはないということですか」

（賢士）

「よおわかっておるではないか」

（エルドア）

「しかし随分と無茶なことを考えなさる」

（賢士）

「妾達なら大抵の罠に踏み込んでもそのまま踏み潰せるしの」

（エルドア）

「違うない」

翌日南門の通行許可の申請に向かったが…

ここから南門を通るまでの話しは誰もがそのあまりのばかばかしさに語りたがらないのでバツサリとカットすることになった

ただ…、その話で一つだけ言いたいことがあるとすればガマローネは正妻のアマムダよりイボンヌの方がお似合いの化けガエルであるということである

鬼械神（デウスマキナ） 10



レナード達はガマローネからもらったプラチナVIP会員証を使つて旅装を整えていた

プラチナVIP会員証

これは数多く存在するガマローネ商会の会員の中ほんのでも一握りの特別な人しか持つていないもので普通の会員証の効果に加えて次の追加特典がある

一つは合成費用の割引（9割引）

もつともマーシャのおかげで随分と上質な装備をしてるレナード達にはあまり関係のないことである

もう一つは旅装の無料支給である

保存食や水、その他消耗品の買い込みなどは数が多いと値段もバカにならないのでレナード達にとって随分とありがたい特典になっている

そしてレナード達は順調にモンスターを叩きつつもうすぐ遺跡が見えてくるあたり

で一休みして作戦会議をしていた

(エルドア)

「風が強くて砂塵が舞っているおかげで視界が悪いのはありがたいな、上手く利用したいところだな」

(カーラ)

「いや無理だろう、あの遺跡はかなり見晴らしがいいからな」

(エルドア)

「確かに遠くまでよく見えそうだな、砂塵で視界が悪くても不意打ちは無理か」

(賢士)

「不意打ちするなら正確な位置情報が必要となるが、近づけもしないのではそれも無理よな」

(カーラ)

「それなら私の作戦にするか」

(ユウリ)

「確か上手く私達を生け捕りしたことにする作戦だったね」

(レナード)

「この作戦だと俺達は後ろ手に縛られて捕まってるということになるんだったな」

（カーラ）

「無論いつでも解ける結び方にするけどな」

（レティシア）

「そうなるかと作戦の成否はカーラの演技力にかかってるんだね」

（カーラ）

「ああ、上手くやってみせる」

カーラの作戦でいくことになりレナード達はキャンプの後片付けをした後で手品で使われるような結び方で解く練習をした上で後ろ手に縛られた

そしてそのままカーラにひかれて遺跡の階段を上る

そこにはピエロ団長なウィザード幹部であるベルシタンと眼帯で右目を隠した緑色の髪の痩身なフォーレス族の男とウィザードの兵士達、ダーズと兵士達に囲まれているシズナ姫がいた

（ベルシタン）

「おやおやこれは、アルバナでお友達になったカーラさんじゃないですか」

（ベルシタン）

「それにしても皆さんお揃いでぞろぞろと連れてきたのはどういことですか、確か

お約束では白騎士の契約者を殺して神器アーキを持つてくるはずではありませんでしたか？」

(カーラ)

(友達だと、どの口がほざくか、だが今は…)

(カーラ)

「上手いこと生け捕りにすることが出来てね、こうしておけば使い道があるんじゃないかと思つてね」

(ベルシタン)

「なあるほどなるほど、それもそうですなあ」

(カーラ)

「縛り上げておけば契約者を殺すことなどいつでも出来る、もう約束は果たしたようなものだ、妹を返してもらおう」

(ベルシタン)

「まあまあ落ち着いてくださいよ、じきに会わせてあげますよ、じきにね」

だがカーラの妹らしき人影はどこにも見えない、おそらくはウィザード兵士にでも拘束されて物陰にでも隠されているのだろう

(賢士)

(ちい、視認さえ出来れば手はあると言うのに)

（ベルシタン）

「それよりも皆さんがお揃いなのは丁度良かったかもしれせんね」

（ベルシタン）

「あなた達からも姫様を説得して欲しいものですな」

（ベルシタン）

「いやはや、この遺跡に眠る古代神器レリツクが欲しいのですが姫様が封印を解いてくれないものでしてな」

（シズナ）

「封印なんて知らないわ、ほんとに知らないわ」

（ベルシタン）

「嘘を言っては困りますな、貴女には古代の封印を解くことの出来る古代アスヴァー
ンの力が宿っているはずですよ」

（エルドア）

（確かにシズナ姫は女王ミューレアスの生まれ変わり故にミューレアスの力が宿って
はいるがシズナ姫ではなくあくまでもミューレアスの意思が使っているにすぎない）

（エルドア）

（もし白騎士が解放された時が初めて力を発動した時だとすれば、シズナ姫とミュー

レアスの意思が上手く同調出来ずにミューレアスの意思が表に出て力を使っている時
のことを認識出来ない可能性がある)

(エルドア)

(だが今それを言ったところで何になるうか)

(シズナ)

「そんなこと言ってもほんとに知らないのよ」

(ベルシタン)

「ならあの白騎士はいつたい何ですか、貴女が封印を解いたからこそ使えるようになったのではありませんか」

(シズナ)

「あの時はレナードが白騎士のガントレットに触れて光に包まれて、ただ…ただ無事でいて欲しいと祈っていたの」

(賢士)

「その間シズナ姫は淡い光に包まれてたり何やらぼそぼそと呪文を唱えておったがどうやら自覚がないようだの」

(シズナ)

「ええ…、そうなの？」

シズナ姫は意外なことを聞いたようなきよとんとした表情をしていた

その様子を見てさすがにベルシタンも信じる気になったようである

（ベルシタン）

「まあいいでしょう、それなら白騎士の神器をいただきましょう」

（カーラ）

「それなら本人に持っていていかせたらどうだい」

そう言つてカーラは人質であることを主張するようにレティシアの首に細身の剣を突きつけた

（ベルシタン）

「おお、それはいいアイディアですね、くつく…、それでは確かレナード君でしたね、早くその白騎士の神器をこちらへ持ってきてください」

（カーラ）

（ここまでは作戦通りだ、あのエルドアとかいうやつと言う通りなら契約者のいる神器は契約者以外に触れないはずだから必ず隙が出来るはず）

（レナード）

「シズナ様を返すのが先だろ」

（ベルシタン）

「おやあ、いいのですか、仲間がどうなっても」

(レナード)

「くうう、わかった神器アーックを渡す」

その言葉を聞いてカーラがレティシアから離れてレナードを縛るロープを切る
勿論手品結びがばれないように結び目自体を切っている

(カーラ)

「迫真の演技だな(ぼそ…)」

(レナード)

「先にシズナ様を助けたいのは本音だからな」

(ベルシタン)

「では神器アーックを置いて下がってください」

レナードは言われた通り神器アーックである白騎士のガントレットを置いて下がった

幸いなことにベルシタンは白騎士の短剣も必要であることに気付いていないようだ

(ベルシタン)

「それではこいつはいただ、うわっ、なっなんだ」

ベルシタンが白騎士のガントレットに触ろうとしたらガントレットが眩い光を放ち

ベルシタンを拒絶した

何が起きてても素早く対応出来るようにレナードが白騎士のガントレットを置いてから目を閉じて待っていたレティシア達はベルシタンの声を合図にパンパンと小気味よい音を立ててロープを解いて行動を開始した

レナードはガントレットを回収し

ユウリは補助魔法でレナード達を強化し

エルドアはベルシタンに剣を突きつけ

レティシアはベルシタンに狙いをつけ

カーラはガントレットの光に兵士達の目が眩んだのをいいことにシズナ姫を連れ出した

ベルシタンの視力が回復して回りを見ると劇的に状況が悪くなっていることに気付いた

（ベルシタン）

「やや、これはまずいですね、ならば奥の手といきますか」

鬼械神（デウスマキナ） 11



あと一步のところで形勢を逆転されたベルシタンは切り札を切ることにした

（ベルシタン）

「ドール達ー」

その言葉に応えてウィザードの兵士三人が前に出てくるが雰囲気人間と言うよりは人形とかマネキンみたいな感じがしてあまり存在感を感じられない

（ベルシタン）

「こいつらは我が主の御力で命令に従うだけの人形にすぎません、だからもう私を殺しても意味がありませんよ」

（エルドア）

「なんだと」

（レナード）

「どういう意味だ」

前に出た兵士達は懐からあのカードを取り出し躊躇いなくあの言葉を唱える

（ベルシタン）

「こういうことですよ」

（兵士（人形））

「アドベント」

カードから光が溢れだし兵士達を包む、その光が収まると兵士達の代わりに魔人達が立っていた

（ユウリ）

「こうも簡単に命を捨てるようなことが出来るものなの？」

（エルドア）

「自分の命を考えることも出来ずにただ闇雲に命令に従うだけだから人形ということなのだろう」

（ユウリ）

「そんな…、ひどすぎる」

（カーラ）

（人形…、命令…、命…、なんだろう、こういうの知ってる気がする

でも…、どうしてなのか、どうしてなのか、…わからない）

(レナード)

「くう…、なら俺も、我に力を、変身！」

(ユウリ)

「レテイシア、フアングは」

(賢士)

「だめだ、今は見ているものが多すぎる、あれはこの世界の力ではない故出来るだけ知られとうない」

(ユウリ)

「そんなあ」

(賢士)

「それにレナードの操縦センスと戦闘センスには目を見張るものがあるわい、ここはレナードを信じて待とうぞ」

(ユウリ)

「レナード（レナードが無事でいてくれたらそれでいい）」

(賢士)

（それに妾には他にもやるべきことがあるしの）

(賢士)

（今はカーラがシズナ姫のガードについておるが、やつがそれを想定した仕込みをカーラに施^{ほどこ}しておる可能性が極めて高いしいう）

（賢士）

（それにレンの居場所を見つけなくてはならないしいう）

賢士が隙なく回りを探ってる間にも魔人達はメイスや斧などそれぞれの武器を振るって白騎士に襲い掛かってきた

白騎士は剣で弾いたり受け流したりするが隙のない連携攻撃のため反撃に移れない

（レナード）

「ぐ…、ぐう（こいつら、強い）」

（ベルシタン）

「どうです、異界の魔人兄弟は強いでしょう」

（ベルシタン）

「普通アドベンドしても術者の影響を受けるのでこうはならないのですが、ドールなら自我も意思もなくアドベンド出来ますからね」

（ベルシタン）

「術者の影響のない素の魔人を喚び出すことも出来るのですよ」

実に楽しそうにそんなことを言うベルシタンにユウリは寒気を覚えた

寒気と言うよりは悍ましい悪寒と言った方が適切かもしれないが

(ユウリ)

「あ…、あ…、あんたねえ！、人の命を何だと思ってるのよ！」

(ベルシタン)

「命ですか、そんなものでウイザードの役に立てるなら光栄ではありませんか、ねえ」

(ユウリ)

「…、こいつだけは許せない！」

ユウリをそのあまりの異常さに怖気を震いながらもベルシタンを睨み付けてはつき

りと断言する

(エルドア)

「待て、今こいつらと戦って魔人達との戦いに巻き込まれでもしたらシャレにならない」

(エルドア)

「熱くなるのはわからんでもないが冷静になれ。今やるべきことを見失うな」

(エルドア)

「白騎士の戦いに直接参加出来なくても魔法で援護することくらいは出来るのではな

いのか」

(ユウリ)

「くううううう、はあ…、はああ（深呼吸）そうね、レナードを助けなくっちゃね」
 エルドアとユウリは魔法で白騎士の反応速度を上げたり魔人達の反応速度を下げた
 後で気配を消して移動したりして決して狙われないようにしつつ白騎士の援護をする
 のに忙しくなった

（賢士）

（白騎士と魔人達の戦いに敵味方問わずに注目が集まっておるのう）

（賢士）

（だがこの戦いに1段落ついたらまたシズナ姫が狙われるのう）

（賢士）

（何か仕込みがされているであろうカーラがガードしておると言うことはウィザード
 にとってはノーガード同然だからどうかせんとこのう）

（賢士）

（まあ、魔人になるような手の込んだやり方で妾達の懐へ入ろうとしてるからには
 カーラへの仕込みは直接シズナ姫を攫うようなものではないと言うのは確かだしのう）

（賢士）

（その線で考えるとありそうなのはガードの役に立たなくする仕込みくらいかのう）

（賢士）

（シズナ姫を中心に悪意あるものを捕縛する移動式結界でも張るかのう）
（賢士）

（いや、それだと人形兵か何かで悪意なく攫いにこられたら役に立たぬか）
（賢士）

（なら味方登録しておる者以外の全てを捕縛する結界を半径10mで張るかのう）
賢士は密やかに呪文を唱えて誰にも気づかれずにシズナ姫を中心とした感知・捕縛結界を張った

その頃カーラとシズナは白騎士と魔人達との人外の戦いを茫然と見ているしか出来なかった

（カーラ）
「これが白騎士シンナイトと魔人ギガースとの戦いなのか、こんな凄まじい戦いでは何も手出し出来ん」

（カーラ）
「私が魔人になった時もこんな感じだったのだろうか（ぼそ…）」

（ベルシタン）
「はーはっはっはっは、いいですねいいですね魔法で援護してもらって何とか防いでるみたいですがそれで精一杯のようですね」

（ベルシタン）

「これなら今度こそ白騎士の神器アーケを手に入れることが出来るというものですね」
（ベルシタン）

「その後でちゃんとシズナ姫は返してもらいますよ」

（レナード）

（くうう、確かに斧とメイスと爪の連携攻撃を捌くさばのもきついがこのまま倒れるわけにはいかない）

（レナード）

「みんなを守るんだ、そして今度こそシズナ姫を助け出すんだ」

だが魔人の横殴りに打ってきた斧を剣で上へ受け流した時の隙をついて白騎士の腹にメイスが突き込まれる

白騎士はそのまま吹っ飛ばされて遺跡の壁画が描いてある壁に叩き付けられる

（シズナ）

「ああ、レナード、レナード！」

（シズナ）

（レナードを、レナードを助けて、誰かレナードを助けて）

シズナ姫はただ一心にレナードのことを想い祈り続ける

（???)

(そうよね…、ワイルドを…、レナードを…、ううん白騎士を助けないとね)
シズナ姫が淡い光に包まれて輝き始める

(カーラ)

「こ…、これは？」

(レナード)

(ぐっ…、このままじゃ…、このままじゃ…、やられちまう)

(レナード)

(いや、俺がやられたらシズナ様が、ユウリが、レティシアが、カーラが、エルドアが、
…そんなの、そんなの認めるわけにはいかない)

(レナード)

(守るんだ、…俺がみんなを守るんだ！)

???)

(危機の中でも迷うことなき真つ直ぐで強き意志、欲するは守る力)

???)

(これを聞かせたかったのか、古代の女王よ)

???)

(はい、彼ならきつと…)

（???)

（良からう、レア・メタリカを守護する遺跡の守護者として守る力を持つ形としてレア・メタリカを与えよう）

シズナ姫の祈りに応えるかのように白騎士が叩き付けられた壁の一部がひび割れ壁画が剥がれ落ちる

そして壁画が剥がれ落ちたその中から巨人サイズの盾が現れた

鬼械神（デウスマキナ） 12



（ファントム）

「主よ、コンタクトがありました」

（レナード）

「ま…け…ら…れな…い」

（ファントム）

「主の意志を、守りたい者を強く想ってください」

（レナード）

「そうだ…、シズナ姫を…、みんなを守るために…、負けて…、いられないんだ」

白騎士にその想いが届いたのか白騎士は操縦を介さずに遺跡の壁画が崩れた壁から出てきた白地に青い文様の入った盾を掴み取った

（ベルシタン）

「な…、なんなのですか、もしやあれが古代神器レリツクなのですか」

（賢士）

「否」

（ベルシタン）

「ではあなたはあれがなんなのか知っていますのですか？」

（賢士）

「まさか実物を拝めるとは思わなんだがの」

（賢士）

「あれはレア・メタリカ製の盾に違いあるまい」

（ベルシタン）

「レア・メタリカ？」

（賢士）

「アスヴァーンだのイシュレニアなどといった太古においてさえ天然ものは掘りつく

され伝説の中のみ存在となっておった希少金属レアメタルよ」

（賢士）

「どこに隠されているとも知れず誰も見たことがない故に幻とまで言われておる金属よ、それだけに偶然とは思えぬ」

(賢士)

「レナードはレア・メタリカを持つ何か選ばれたということかの？」

(賢士)

(だとしたらそれは間違いなくシズナ姫に転生したミューレアスのおかげであろう)
の

(ベルシタン)

「なんでですか、なんでウイザードの指揮官である私を差し置いてあんな青二才が選ばれるというのですか」

(ベルシタン)

「まあいいでしょう、お前達さつさと白騎士を叩きのめして盾を奪い取ってきなさい」

(ベルシタン)

「こうすれば同じことですからね」

(賢士)

「それはどうかのう？」

(賢士)

「レア・メタリカが盾という形で出てきた以上、レナードを選んだ理由をすぐに目の当りにするのではないかのう」

白騎士はまだ少しふらつきながらも剣と盾をしっかりと構えて立ち上がった。そこへ素手の魔人が右から殴りかかるが盾に弾かれる。

殴る時に勢いをつけすぎたのか少しよろめいたがすぐに態勢を立て直した。

（レナード）

「すごい…、この盾軽々と弾き返した」

素手の魔人のフォローをするためかメイスの魔人が先ほど白騎士を吹っ飛ばした時と同じように腹へ突き込もうとした。

だが白騎士はメイスの正面にくるように盾を構えてメイスを受け止めた。

メイスを受け止められた魔人は逆に吹き飛ばされかねない勢いでたたらを踏んで後ろに下がる。

（ベルシタン）

「いったいなんなのですか、あれほど追いつめていたというのに盾を構えたくらいでここまで状況を引き戻されるなんて」

斧の魔人がデッドスイングという技で白騎士に仕掛けるがやはり盾で正面から受け止められて勢いよく弾かれる。

だが斧の魔人はその場で回転して二回転目で弾かれた勢いを乗せて右拳で裏拳を叩き込もうとしていた。

だが白騎士はその拳の軌道上に剣を立てることで迎撃して斧の魔人の右手を切り落とした

(ベルシタン)

「なんなのですかいったい」

(賢士)

「ふむ、どうやらレナードは守る力を求めたようだね」

(賢士)

「そしてレア・メタリカが理想とする守る力はただ防ぐだけではなく盾に込められた反発力によって継続的な攻撃能力を奪うことにあるようだね」

(エルドア)

「継続的攻撃力を奪う？」

(賢士)

「つまりはあの盾で攻撃を防ぐことによってコンボによる連続攻撃を不可能にし、なおかつ敵の隙を作ることによって反撃のチャンスとして生かすということよの」

(ユウリ)

「なんかそれってすごくない」

必死で白騎士の補助をしていた二人も状況が好転したことによって口を挿む^{はき}余裕が

出来たようである

慌てて素手の魔人とメイスの魔人が斧の魔人を助けようとして仕掛けてくるが焦りで攻撃が大振りになり白騎士に楽々と避けられる

そして白騎士は剣を構えて手がなくなった右腕を押えて痛みで吠えている魔人に必殺の二撃を叩き込む

（レナード）

「クロスレイジ」

クロスレイジは逆袈裟ぎやくけさに斬り素早く返して袈裟懸けに斬る必殺技である

白騎士に深々と斬られた斧の魔人は耐えきれずにそのまま倒れた

三体での連携攻撃があるからこそ強い魔人達はこうなるともう白騎士の敵ではなかつた

（レナード）

「さあ、これ以上痛い目にあいたくなければカーラの妹をさっさと返すんだな」

（ベルシタン）

「いやーさすがですね、今回はいけると思っただのですが残念です」

（ベルシタン）

「ならば更なる奥の手といきますかね」

(ベルシタン)

「お前達、出番ですよ」

ベルシタンが後ろの遺跡の柱の残骸に向かって呼ぶと柱の影からウイザードの兵士二人が金髪の可愛い娘を引きずるようにして出てきた

その娘は後ろ手に縛られて猿轡さるくわを噛まされて何も出来なくされていた

(カーラ)

「レン」

その声が聞こえたのか金髪の娘は声のした方向を見てカーラを見つけると嬉しそうな表情になってから何とかして自由になろうともがくがウイザードの兵士に押えられて果たせずにいる

(賢士)

(やつと見つけたぞ、早く転移術式を組み立てねば、まずは座標固定から始めねば)
カーラはレンを解放しようとシズナ姫のガードを放り出して駆けつけようとするがベルシタンがレンの首にナイフを突きつける

(ベルシタン)

「確かあなたとの約束は白騎士の神器アーキと交換に妹を返すでしたね」

(ベルシタン)

（さあ、じっくりとこの娘の顔を見なさい、それによって予定通りの行動をとるようになるのですから）

（ベルシタン）

（そのための仲の良い姉妹という設定なので）

カーラは怒りの形相でベルシタンを睨み付けてからどえすれば妹を助け出せるのかを考えつつレンを見ていた

レンを見ているうちにカーラの頭の中に誰かの声が繰り返して聞こえてきた

（頭の中の声）

（シズナ姫から離れる…、シズナ姫から離れる…）

カーラはその声を訊いてるうちに\$ぼうつとしてきて何も考えられなくなってきたその声に逆らうことが出来なくなってシズナ姫から離れた

（ユウリ）

「カーラどうしたの」

（カーラ）

「…なんでもない」

（ユウリ）

「なんとしてもあの娘を助けないとね」

(カーラ)

「…うんそうだね」

(ユウリ)

「どうしたんだろ、変なカーラ」

(賢士)

(ビーやらカーラに仕込まれたものが動き始めたようだの)

(賢士)

(だが妾は感知捕縛結界の維持及び自動化と転移術式で忙しくて手が打てん、結界に期待するしかないのう)

ユウリはカーラの様子が何か変だと思ったが緊迫した状況になっているためその意味を深く考えることはなかった

レナードも白騎士のままどうすればいいのか考えあぐねていた

(ベルシタン)

「それではそろそろ更なる奥の手を使いましょうかね」

ベルシタンはレンを押えてる兵士に言っつてレンを三体の魔人が倒れてる場所に連れて行った

そして懐からカードを取り出し、そのカードをレンに突きつけて呪文を唱える

（エルドア）

「あいつ…、まさか、やめろー！」

（賢士）

（ちい、結界の維持自動化を優先したために転移術式が遅れてしまった）

賢士は遅まきながらも転移術式を無詠唱で発動する

だがカードの力が渦巻く場は魔力をかき乱すのかレンを強制転移させることは出来なかつた

（賢士）

（なろう、転移させることが出来ぬなら）

レンを転移させることが出来ないならレンの元へ転移して守ればいいだけのこと

（賢士）

（幸いにも座標はそのまま使える、ならば間に合わせてみせる）

再び無詠唱で転移を行いレンの元へと瞬間移動する賢士

（賢士）

「妾をなめるなー！」

カードによって作られた力場はウィザードの兵士も含めてありとあらゆる力を吸い出していた

魔力も、気力も、魂の力さえも、命に関わるありとあらゆる力が抜けていく
それは凄まじい痛みを伴う

(賢士)

「うわあああああー！ー！」

(レン)

「きゃあああああー！ー！」

アドベントカードによって作られた力場が吸い出した力によって光に包み込まれて
賢士もレンもウィザードの兵士も魔人の死体も全てを隠していく

鬼械神（デウスマキナ） 13



アドベントカードが力場の中に存在する全ての命を吸い出しその力で力場が光に包まれる

その光が収まると力場の中にいたはずのギガース達の死体もレンもウイザード兵士二名も…、そしてレテイシアの姿もなかった

その代わりなのかグラン・ギガースの名を持つライトグリーンを基調とした硬い皮膚に黒い文様の入った巨大な三つ首の魔獣の姿があった

レナード達はベルシタンの術中に嵌っているカーラを除き誰もがその姿を呆然と見ていた

（ユウリ）

「あ…、あ…ああ…、そんな…な…」

（エルドア）

「まさか…」

鎮痛なその空気を読んでないのかそれとも読むつもりがないのか

今のユウリ達にとってひじょうに神経を逆撫でにする声が耳を突き刺す

(ベルシタン)

「はっはっはっはっはっ、どうですこれが我々の真の切り札合成魔獣グラン・ギガースですよ」

(ベルシタン)

「力場の中にある命の全てを魔力に変換して魔人達を融合したこいつは今まで戦っていた魔人達よりも遥かに強いですよ」

(エルドア)

「命の全てを変換だと」

(ユウリ)

「そんな、レティシアは、レティシアは」

(ベルシタン)

「ああ、あの小娘ですか、予定ではあの三人を生贄にするつもりでしたがあの中に飛び込むなんて生贄が増えただけですよ、まったくバカなことをしたものですね」

(ベルシタン)

「もつとも、その分グラン・ギガースは強くなったでしょうね」

（レナード）

「きさまー!!」

白騎士が一足飛びに間合いを詰めてベルシタンに剣を振り下ろす

派手に埃が舞ってベルシタン達が見えなくなるがしばらくすればその埃の煙幕も収まる

再びベルシタンの姿が見えた時には右目に眼帯をした青年がベルシタンを抱えて倒れていた

（眼帯の青年）

「安い挑発をするな、貴様死にたいのか」

どうやら眼帯の青年の働きで一命を拾った結果倒れていたようである

（レナード）

「守ると…誓ったのに…」

（レナード）

「レテイシアも…、カーラの妹も…、みんな…守ると…ちかつたのにい…」

（レナード）

「それなのに守れなかった、守るための力を手に入れたのに守ることも助けることも

出来なかった！」

その叫びは痛みとなって仲間の人に突き刺さる

(ユウリ)

「レナード……」

ユウリはその悲痛な叫びにレナードの名前を呟き

(カーラ)

「あ…、ああ…」

カーラはその叫びでベルシタンの暗示は断ち切れたものの過酷な現実に関心が責め苛まれていく

(エルドア)

「確かに命の全てを魔力に変換して融合召喚するとかいつていたな」

(エルドア)

「生贄を必要とするためにその召喚術は邪術として禁じられている、そしてその術は呼び出した存在を滅さない限り召喚した存在に縛られ死して安らぐことも出来ないという説がある」

(レナード)

「あれに…、あれにレティシアが」

（エルドア）

「まだ彼女達に出来ることがあるとすれば、あの召喚された魔獣を滅することによってその魂を解放することくらいか」

（レナード）

「なら、なら叩き潰してやる」

（レナード）

「俺の命に代えても叩き潰してやる！」

レナードの叫びと共に白騎士を中心に魔力とも気ともつかない力が膨れ上がっていき

く
バシユバシユ…

白騎士の各所から何か機能がしてるのを告げるような音がする

（エルドア）

（あれはブーストモードか、しかし契約者にかかる負担が大きすぎて命に関わることもあるため一万年前の戦争が終わった後に封印されたはず）

（エルドア）

（レナードが何も知らないまま感覚で封印を破ったとでもいうのか）

（エルドア）

(あまりにもデタラメすぎるな)

白騎士の体はレナードの心を映すかのように赤みを帯び左手の盾は右手の剣とよく似た剣に姿を変えた

白騎士が重心を前にかけて走り出したと思われたその時には白騎士の姿は消えていた
そして消えたと思つたらグラン・ギガースの目の前に現れてハの字型に剣を振り下ろし
グラン・ギガースの左右の首を切り落としていた

(ベルシタン)

「ひいい、何ですかあれは」

(ベルシタン)

「モノシツプ、急いで私達を回収しにきなさい」

その声に応じて近くに停泊していたモノシツプのスクリューが動き出しこちらの方
へと船首を向けた

(眼帯の青年)

「姫を回収するぞ」

(ベルシタン)

「ああ、頼みますよシャブール」

シャブールとウィザード兵士達は白騎士と魔獣の戦いに巻き込まれないように大回

りして未だに光に包まれているシズナ姫に近づいた

だがシズナ姫に触れる距離まで近づくと前にカーラがシャブールに斬りかかる

（カーラ）

「シズナ姫の守りを任されているのでな、通すわけにはいかない」

（眼帯の青年）

「正氣に戻ったのか、ベルシタンのやつめいい加減な仕事をしやがって」

（カーラ）

「どういうことだ？」

（眼帯の青年）

「いや、どうでもいいか、それより一人で守り切れると思ってるのか」

（カーラ）

「くう…」

確かに眼帯の青年の言う通りで青年を止めることは出来てもウィザードの人形兵を止めることまでは出来ない

エルドアとユウリが牽制しても絶対的に人手が足りない

だがシズナ姫に近づいたウィザードの人形兵は足元から浮かび上がった魔法陣に拘束され身動き一つとれなくなってしまう

(エルドア)

「これはレティシア殿の魔法陣か」

(エルドア)

(魔法陣が生きてるといふことはレティシア殿も生きているのか)

(ユウリ)

「形勢逆転ね」

眼帯の青年は形勢の不利を悟って素早く逃げ出す

そう魔法陣に捕まった兵士達を置いて

(カーラ)

「仲間を見捨てて逃げたのか」

(眼帯の青年)

「どうせ人形だ」

(眼帯の青年)

「失敗だ、退却するぞ」

(ベルシタン)

「こゝも色々とおつては仕方ありませんね」

白騎士に左右の首を落とされた魔獣は悲鳴を上げるように吠えた

たがその声は悲鳴ではなく呪文だったようで魔獣の回りに無数の光球が生まれた
無数の光球は白騎士を狙って打たれたが白騎士はそれに臆さず、意にも介さずに当
るに任せて二本の剣で乱れ突き魔獣を滅多刺しにした

魔獣はその攻撃に耐えきれずにハチの巣になって倒れた

白騎士はそれを見届けると左手の剣は盾に戻り体の色も白に戻ってから消えた

それと共にシズナ姫を包む光も消えてシズナ姫は倒れた

（ベルシタン）

「それではみなさん、またお会いしましょう」

この僅かな時間でベルシタンと眼帯の青年はモノシツプから降ろされたハシゴに捕
まって空高く上がっていた

（カーラ）

「逃げられたか、それにしてもレナードは大丈夫か？」

（エルドア）

「さあな、白騎士で無茶をしたからかなり負担がかかっているだろうしな」

既にユウリが何度も回復呪文を使っているが目を覚ましていない

（カーラ）

「それにシズナ姫も目を覚ましていないな」

(エルドア)

「白騎士の封印を解いた時もこうだったから大丈夫だと思うがな」

(カーラ)

「そうか」

(エルドア)

「ともかくアルバナに戻った方がいいだろう」

(カーラ)

「そうだな」

(エルドア)

「シズナ姫は私が運ぶからカーラとユウリでレナードを頼む」

(カーラ)

「わかった」

そしてエルドアはシズナ姫を背負って、カーラとユウリは左右からレナードに肩を貸して引きずるようにして歩き出した

そのまま歩いて遺跡の入り口の階段を下りたところでそれを見つけた

(エルドア)

「もしかしてとは思っていたが」

（カーラ）

「レン…」

（ユウリ）

「レテイシア…」

三人の目の前に倒れたまま動かないレテイシアとレンの姿があった二人ともレナードのことも忘れて駆けつける

レナードはそのまま地に倒れるが砂漠なのでダメージはない

（カーラ）

「ああ…、生きてる、レンが生きてる」

（ユウリ）

「レテイシアもちゃんと生きてるよ」

それぞれに脈をとって生きてることを確かめる

（エルドア）

「生きてるのはいいがこのままでは運べないな」

（ユウリ）

「それならマーシャさんのお店の人に迎えに来てもらったらどうかな」

（エルドア）

「なるほど、その手があつたか」

戦いに巻き込まれないように放していたいたビッグロを鳥笛で呼んでマーシヤに迎えに来てもらうように頼む

二日後にマーシヤの店のアルバナ支店の人達が迎えに来てなんとか全員無事にアルバナに帰ることが出来た

鬼械神（デウスマキナ） 14



砂漠の町アルバナ ガマローネ商会本部救護室

マーシャのモンスター回収部隊を要請して回収してもらったユウリ達だが今はガマローネ商会の救護室にレティシア達を寝かせている

ガマローネ商会の方がマーシャの店の支店より設備がいいからだ

悔しそうにしながらをそれを薦めていたマーシャの表情が印象的だった

そしてレティシア達三人を救護室に運んでから三日は過ぎたがまだ目を覚ましはしなかつた

（ユウリ）

「だめ、回復系以外にも状態回復や戦闘復帰系の神聖魔法も使えるだけ使ってみただけだ
ど誰も目を覚まさないよ」

(エルドア)

「神聖魔法は私の得意とするところではないしな」

(カーラ)

「私もその系統は得意ではなくてな、すまない」

(シズナ)

「私も魔法を使えば良かったのですが」

普通お姫様が戦闘技能を持っているわけがないのでシズナ姫が気にすることではないと言えるのだが

それでも出来ることがなくて気に病むのは仕方のないことではある

ユウリはレティシアにみっちりと仕込まれることで神聖魔法のエキスパートといえる領域にまで達していた

それだけにレティシアが意識不明でユウリに打つ手のない現状ではどうしようもなかった

出来ることがなくて沈んでる空気を嫌がってかカーラが少し気になってることを聞いてみることにした

(カーラ)

「なあ、何かレティシアの呼吸だけおかしくないか？」

（ユウリ）

「呼吸が、別に異常があるわけじゃないし気にしたことなかったけど」

（エルドア）

「ふむ…、その呼吸がおかしいのはいつ気づいたのだ？」

（カーラ）

「回収部隊とアルバナに戻る途中でだ、おそらくはレンと二人揃って倒れていた時からあの呼吸だったのではないかと思う」

（エルドア）

「だとすると、これもレテイシア殿の技の一つかもしれないな」

（???)

「よくわかったの」

（ユウリ）

「レテイシア、気がついたんだね、よかったあ」

（シズナ）

「本当に気がつかれてよかった、今更ですが助けていただいてありがとうございます」

（賢士）

「何、妾達のしたいようにしただけだし、それにウィザードを何とかせねばならぬから」

礼を言うにはまだ早いぞ」

(賢士)

「それと心配をかけたようだの、まだ全開とは言えぬが普通に過ごせるくらいには回復したぞ」

(賢士)

「それとカーラの気にしておったものについて教えておこうかの、あの呼吸は氣功法の一つで氣功調息きこうちようそくと言うもので特殊な呼吸法によつて体内の氣の流れを整えて自己回復力を底上げする技よ」

(エルドア)

「やはりか、我々が魔力を扱うように遥か東方の方では氣という命の神秘の力を持つて様々な技を駆使するものがあるとか聞いたことがある」

(カーラ)

「なるほど、その呼吸法とやらも神秘の力の内と言うことか」

(賢士)

「さてと、あれからどれだけ時間がたったかの？」

(エルドア)

「あの戦いから三日と言ったところだな」

（賢士）

「そうか、急いでレンの容態を確認せねばなるまいな」

（ユウリ）

「ちよちよつとレテイシア、もう…色々聞きたいことがあったのに」

（エルドア）

「後でまとめて聞くしかないだろうな」

賢士は魔法による診断も込みでレンの容態を確認する

（賢士）

「ふむふむ、思ったよりも余裕があるのう、外部から十全な回復を施されておるのか」

（エルドア）

「それはユウリが頑張ってくれてな、毎日三人に治癒系魔法を一通り掛けて回ってい

たぞ」

（賢士）

「そうか、世話をかけたな」

賢士がユウリを労って自然と柔らかな微笑みを向けるとそれがたまらなく可愛いと

感じたのか緩みきった笑顔で賢士に抱き付いていた

「こらそこ、ユウリにそういう属性がとかタグに百合が必要とか言ってる人は良く考え

て欲しい

一つは今レティシアが歴戦の戦士でもあり賢者でもあるということ

それだけ過酷な時を生き抜いてきただけに真剣な時の表情はやたらと鋭い表情になる

そのレティシアが今はレティラという娘の体を借りている状態だ

ユウリよりも一回り小柄でツインテールの青い髪がよく似合う可愛らしい少女がやたらと鋭く厳しい表情で色々とやっっている

しかも中身がレティシアであるために補正が働くのかその可愛らしさと鋭さのアンバランスに違和感を感じさせない

そんな少女が厳しい表情をしたのに自分のことを褒めた上にその厳しい表情を崩して笑顔と向けたとなればユウリのようになるのはむしろ当然といえよう

(賢士)

「つておいこら、離さぬか、このままではレンが持たぬからなんとかせねばならぬのだ」

話しが盛大に脱線してしまったので元に戻そう

(カーラ)

「なんだって」

（ユウリ）

「そうなの？」

（カーラ）

「それでレンを助ける方法はあるのか」

レンのことになると熱くなるのかカーラが賢士に詰め寄る

（賢士）

「ある、今からそのために必要になるものを用意するから落ち着け」

そう言つてカーラを宥めると賢士は自分の荷物から薬草の粉末やら何やら神秘的な粉末やらを取り出して

（賢士）

「うーむ、これだけでは足りんな」

「賢士」

「至急用意して欲しいものがあるが」

（エルドア）

「なら商会の方に言つておこう」

（賢士）

「うむ、必要なのはハイポーションとハイエーテルとそれから…」

などなどしばらく話してからエルドアは商会へと向かうことになったがその前に

(エルドア)

「後でレナードの方も見てやってくれ、おそらくは白騎士のブーストモードが原因だろうがな」

(賢士)

「なんだと、確かにレナードのやつを見かけぬと思っておったがそんなことになっておったとは」

(賢士)

「しかしブーストモードの封印はしっかりと噛ませておったはずなのにいつ解けた」

賢士はレナードの荷物から白騎士のガントレットを探し出しガントレットを媒介に特殊な術式でフアントムとの接触を試みる

(フアントム)

「これはグランドマスター、お久しぶりでございます」

フアントムは賢士によってブーストモードのリミッターの側面も持つて後付けされたものなのでフアントムにとっては創造主グラントマスターにあたる

(賢士)

「ブーストモードの封印が解けたと聞いたのでな、あれだけしつかりと封印を噛ませ
ておったというのに」

（フアントム）

「どうやら貴女達二人が殺されたものと誤解したようでして、その時の激情によって
封印を吹き飛ばされてしまいました」

（賢士）

「妾の封印を吹き飛ばすとはの、まったく呆れたやつよの」

（賢士）

「ならレナードのやつはほつといっても大丈夫そうだの」

（フアントム）

「ええ、今も順調に回復にむかっています」

（賢士）

「なら問題ないの、しつかりと再封印してから戻るかの」

（賢士）

「ではレナードのことは頼むぞ」

（フアントム）

「お任せください創造主」
グランドマスター

賢士白騎士内部の世界から戻ってきた時カーラはシズナ姫と話しをしていてユウリはレナードの看病をしていたが賢士にそっけなくされて聞きたいことも聞けなかったため微妙に拗ねた雰囲気が出ていた

(賢士)

「ああユウリ、レナードのやつなら問題ないぞ、白騎士の特殊な機能を無理矢理使った反動で疲れておるだけだからの」

(ユウリ)

「でも、三日も目を覚まさないし」

(賢士)

「なに、あまりにも寝ぼけるようならレンを起こしたついでに起こしてやるからの、ユウリも一休みしておけ」

(ユウリ)

「ううう、わかったよう」

その後賢士はエルドアが持ってきたアイテムを受け取ると商会の工作室を借りて薬の調合を始めた

気械神（デウスマキナ） 15



賢士はガマローネ商会の工作室に入ってから数時間で出てきた

ユウリが「色々と聞かせて欲しいと」詰め寄ったが「どうせならみんなが起きてから話した方が良からう」と言ってシズナ姫もそれでいいと言ったのでレンとレナードを起こしてから話を聞くことになった

そして翌日、賢士が調合した薬を定着させるために一晩寝かせた薬を持ってきた

（ユウリ）

「これがレナード達を起こすことの出来る薬なの、すごくきれい」

賢士の用意した二本のビンに入るのは透明でキラキラと少し眩しいくらいに輝く神秘的な液体だった

（賢士）

「復活の神薬とやらでも起きる可能性はあったがとても貴重な薬ですぐには用意出来

ないそうだな」

(賢士)

「代わりに妾の独自の調査を施したエリクサーを触媒にして特殊な術式で起こすことにしたぞ」

そう言つて一度薬をしまつてから重力魔法系の重量操作ウエイイトコントロールを使つて眠り続ける二人を予め商会から借りて魔法陣を書いている部屋へ運び込んだ

みんなまったく知らない未知の魔法である重量操作に驚いて色々聞いてきたが「妾は元々この世界の存在ではない故にこの世界では知られておらぬ魔法にも通じておるだけよ」といつて結局は詳しいことは教えなかつた

そして部屋の中央に書かれた魔法陣にレナードとレンを寝かせて薬を一口ずつ口に含ませる

その後で魔法陣の中央に立つてくるりと一回回りながら両手に持ったビンの薬を魔法陣に沿つて振り撒く

その様子は舞のように華麗でビンの角度とか遠心力とかが計算され尽されてるかのように魔法陣の外円にピッタリと重なつていた

(賢士)

「妾は望む 秘薬を対価とし命の炎を燃やすことを」

フエニックスアルケミー」

魔法陣が輝き眠り続ける二人と賢士を隠す

光が収まるとそこにはやりきった表情の賢士と眠り続ける二人がいた

（ユウリ）

「これで二人とも目が覚めるの？」

（賢士）

「疲労も消耗も全て回復したからの、今はただ寝ているだけであろう」

（カーラ）

「確かに、レンの顔色も随分と良くなっているな」

描写こそはしていなかったがレナードと違ってレンの方は随分と顔色が青白くなっ
ていてまずい状態になっていた

そして賢士はレティシアと交代して裏に引っこみ他の女性陣は二人が目 wakes ますま
で部屋に残った

二人は昼遅くになってから目を覚まし夕食を食べてから宿泊部屋に集まった

（賢士）

「さて一番気になっておることと言えば」

（レナード）

「そりや当然…」

(ユウリ)

「どうやって助かったのかよ、それもレンさんも一緒に」

(賢士)

「だろこのう、話すからそう興奮するでない」

(賢士)

「妾はあの時まずアドベントカードの力場から強制的にレンを転移させようとしたのだがな」

(賢士)

「力場の影響なのか転移で力場から出すことに失敗しての」

(賢士)

「それで妾の方がレンのいる場所へ転移で飛び込むことにしたのよ」

(ユウリ)

「なんでそんな危険なことになってるのよ」

(賢士)

「転移の術式は他人を中心に使おうよりも自分自身を中心に使った方が容易く使えるし格段に強力になるのよ」

（賢士）

「だからこそ自分自身を中心にして使えば力場の影響があらうと必ず成功するとの自信があつた」

（エルドア）

「だからこそ無茶をしたということか」

（ユウリ）

「もうそんな無茶はしないでよね、レティシアに何かあつたらなんて考えたくもないんだから」

（レナード）

「そうだぞ、あまり心配させるなよ」

（賢士）

「レナードにだけはそんなこと言われたくないのう」

（レナード）

「そりやどういう意味だ？」

（賢士）

「白騎士のブーストモードを使いおつたからに決まっておろうが」

（エルドア）

「やはりあれはブーストモードだったか、今は封印されていたはずだが」
(レナード)

「そのブーストモードって何なんだ？」

(賢士)

「白騎士の全ての能力を底上げするリミッター解除の類のことよ、それだけに契約者にかかる負担が生半可ではないがの」

(賢士)

「レナードが眠り続けたのは間違いなくブーストモードのせいであろうからな」

(ユウリ)

「そんなに危険なんだ」

少々頬を引きつらせて引き気味に呟く

(賢士)

「前契約者のワイルドがこれのせいで寿命が縮んでおったとしても驚きはせぬぞ」

(ユウリ)

「レナード、もう使っちゃだめだからね」

(シズナ)

「私からもお願いします」

（レナード）

「ああ、わかった」

レナードは二人の勢いに押されてついつい素直に返事をする

（賢士）

「それはともかくとしてだ、自分自身を中心に転移を連続してレンと共に遺跡の入り口まで着いたのはよいがアドベントカードの力場に随分と命の力そのものを吸い出されてしまつての、気功による自己回復を促すのが精一杯でそのまま倒れてしまつたわけよ」

（カーラ）

「それを私達が回収したと」

（賢士）

「そうなるの」

（エルドア）

「それにしても色々私達の知らない魔法とかを使っていたがそれらもフアングのようによこの世界にはない能力なのか」

（賢士）

「そうなるの、この世界では伝統的な技能ばかりで進歩がないが違う世界では能力の

ある者は自分の技術を開発しておったからの」

(賢士)

「気功はともかくとしてもフアングのような機械巨人や錬金術といったものはこの世界には存在せぬであらうな」

(カーラ)

「確かに、酒場でもそういう話しは聞いたこともないしな」

(レン)

「酒場か、みんな心配してるだらうな」

(カーラ)

「とはいえ今は戻るわけにはいかんな」

(レン)

「そうなの？」

(カーラ)

「ああ、ウィザードにいいようにされたからな、やつらを何とかするまで安心して預けることが出来なくなったな」

(エルドア)

「そうか、そういう問題もあつたな」

（賢士）

「丁度良いからこれからの予定を話しておくか」

（カーラ）

「その前にきちんと紹介しておくよ、この娘が私の妹のレンだ」

（レン）

「話しを聞いたところ皆さんには大変お世話になったみたいでありがとうござい
ます、レンと言います」

その笑顔は眩しいくらいでカーラが大切に思うのもわかる気がした

気械神（デウスマキナ） 16



レンが自己紹介をしたことでちょうどいいとばかりにみんなも自己紹介をすることになった

（シズナ）

「バランドール国王女のシズナです、この度はウィザードなる組織から助けていただいたことを皆様に感謝しています、本当にありがとうございます」

（レナード）

「俺はレナード」

（ユウリ）

「私はユウリ」

（エルドア）

「私はエルドアだ」

（レテイシア）

「あたしはレテイシアだよー、ほんとにはレテイラって言うんだけど理由があつて今はレテイシアと名乗っているよ」

（カーラ）

「私はこの町の酒場の踊り子でカーラだ」

（レナード）

「俺達四人はウィザードに誘拐されたシズナ姫を助けるために旅をしていたんだ」

（カーラ）

「私は生まれも育ちもこの町だからこいつらとは違うが妹のレンがウィザードの攫われたのでな、色々とあつてこいつらの話に乗ったというところだ」

（レン）

「それで、お姫様はもう助けたんだから後は帰るだけなんですか？」

（エルドア）

「そう簡単な話ではないな」

（レン）

「ちゃんとお姫様は助けてるんでしょ？」

（エルドア）

「そもそもシズナ姫が誘拐されたのはバランドールに攻めてきたウィザードに思いつきり負けたからだ」

(カーラ)

「なるほどな、お姫様だけを連れて帰ってももう一度攻めてくださいといってるようなものだな」

(エルドア)

「そうなたら今度はもつと悲惨なことになりそうだな」

(シズナ)

「そうですか、ならどうすればよいのでしょうか」

(レナード)

「ウィザードがいるから帰れないんじゃないやウィザードを叩き潰すしかないじゃないか」

(エルドア)

「基本的にはそれしかないだろうな」

(ユウリ)

「基本的にはそれしかないって言っても具体的にはどう動くの」

「レティシアが何か考えてる風にうんうんと頷いてから意見をだす

(レティシア)

「これは『妾』からの意見なんだけどね、ウィザードの狙いがシンナイトなんだからこっちもシンナイトを狙っていけばいいやでもウィザードとぶつかることになるしその時にガツンとやっちゃえばいいと思うよ」

ここには賢士のことを知らないシズナ姫とカーラとレンがいることをレティシアはわかっているのでそのことを気にして言葉に気をつけている

（エルドア）

「確かに、確実にシンナイトを手に入れようとするならそれなりの実力者が出てくるだろうし、そういうった実力者を倒していけば」

（レナード）

「ウィザードが弱体化していつて国を攻めるようなことは出来なくなると」

（ユウリ）

「そうなればシズナ姫も国に帰れるようになるよ」

（カーラ）

「でもさ、それまでお姫様はどうするんだい、下手なところには置いとけないだろ」

（エルドア）

「確かに、シンナイトのことも考えれば私達と行動を共にするのが一番だろうが」
（シズナ）

「それは私も旅をするということでしょうか」

(シズナ)

「私に皆様ののように旅をすることが出来るのでしょうか」

(レナード)

「それなら大丈夫ですよ、俺達が助けますから」

(エルドア)

「そうだな、旅をするなら共に行動することになるでしょうし足りないところは補い合えばいいのですよ」

(シズナ)

「でもきつと足手まといになってしまいます」

(カーラ)

「ならお姫様に出来てあいつらに出来ないことで助けてやばいいじゃないか、作法とかはきつとお姫様の方がよく知ってるんじゃないのか？」

(ユウリ)

「うふふふ、それは言えてるわね」

(レナード)

「ちえ、笑うなよなあ、もう」

（レティシア）

「ただここにいてるってだけで笑うことだって出来るんだ、足手まといとかそんな暗いことなんて考えてないで一緒に旅をすることを楽しめばいいと思うよ」

（シズナ）

「そういうことでいいんでしょうか？」

（レティシア）

「気にしちゃおう？」

（レティシア）

「なら友達になろう」

（シズナ）

「友達に…ですか？」

（レティシア）

「友達ならそーゆーの気にしないもんだもん」

（レン）

「あー、なら私もー」

（カーラ）

「まったく、しょうがないな」

(シズナ)

「え…、ええ？（侍女とかそういうった身近な人はいましたけど友達なんてのは…）」

(レティシア)

「いや…、なの？」

レティシアが上目づかいに不安そうにシズナ姫を見上げる

シズナ姫はこのままだとレティシアが泣きそうな気がして「このままじゃいけない」とか「泣かせたくない」とかいった気持ちがかみ上げてくる

(シズナ)

「い…いえ、そうことではなくて、その…今まで友達と言えるような人は…」

(カーラ)

「そっか、お姫様って立場があるから友達なんて気軽なもの…」

(レティシア)

「ならあたし達が最初の友達だね、よろしくねシズナ」

(シズナ)

「え…ええ、よろしく、その…」

(レティシア)

「レナードみたいにレティシアって呼び捨てにしてよ」

（シズナ）

「あつ、はい、よろしくレティシア」

（レン）

「私のこともレンって呼び捨てにしてね」

（シズナ）

「はい、そうしますレン」

（カーラ）

「まあ、大分なし崩しだけどお姫様も一緒に行動するということでもいいんだな」

（シズナ）

「はい、皆さんとなら」

（シズナ）

「あつ、と皆さんも友達ということでもいいの…ですよね？」

（レナード）

「もちろん」

（ユウリ）

「よろしくねシズナ」

（シズナ）

(「そういえばレナードだけ呼び捨てにしてましたね、どうしてでしょう、どうしたでしよう?」)

シズナ姫が今更ながら呼び捨てしてたことに気付いて内心わたわたしつつ赤くなつてたり

(カーラ)

「それで私達も一緒にいこうと思う」

(レナード)

「一緒に来てくれるのか」

(カーラ)

「私もレンも助けてもらったからね、このままはいさよならってわけにはいかないだろう」

(カーラ)

「それにアルバナは安全とは言えないからね、グリードまで行って信頼出来るところを見つけてレンを預かってもらおうつもりだよ」

(エルドア)

「確かにウィザード相手ならそうした方がいいかもしれんな」

(レナード)

「そうなるよここにいる全員で行動することになるわけか」

（レテイシア）

「旅支度するならいいお店知ってるよ」

（エルドア）

「それもどこに向かうかによるだろう、まず情報を集めなくては」

（カーラ）

「シンナイトってレナードのでかい鎧のことだよ、それらしい話しならグリードから来た人に聞いたことがあるぞ」

（カーラ）

「確かバンカーロードの遺跡に鎧を着こんだドラゴンがいたりとかいう眉唾もの話しだけだな」

（エルドア）

「それでも確認した方がいいだろうな」

（レテイシア）

「それじゃ、お店には明日いくことにして今日はもう休もう」

（ユウリ）

「そうね」

鬼械神（デウスマキナ） 17

そして時は立ち、夜遅くのカーラの部屋

コンコン…

（カーラ）

「誰だ」

（賢士）

「妾だがちよつとよいかの」

（カーラ）

「レテイシアか、カギは開いているぞ」

（賢士）

「では遠慮なく」

（カーラ）

「それで何の用だ、何か用があつてきたんだろ」



（賢士）

「うむ、妾の荷物を整理しておったら面白いものが出てきてのう」

（カーラ）

「面白いと言えばお前も面白いけどな」

（賢士）

「そうか、（レティシアが）人付き合いがいいくらいで面白がられるような愉快な人間ではないと思うがの」

（カーラ）

「そうか、人付き合いがいいのはいいことだと思うけどね」

（カーラ）

「つてそういうことではなくて、時々言葉遣いも性格も変わるじゃないか、二重人格つていうのかな、まるで中にもう一人いるみたいだよ」

（賢士）

（確かに二重人格とゆうか二人いるのだがの）

（賢士）

（しかしよくそんなことを聞く気になったの、そこまで思ったことを口に出来るくらい軽くなるだけの理由は…）

(賢士)

(今日は色々とありすぎて理由を特定出来ぬのう、特にカーラは)

(賢士)

「まあ、先にそのことを話しておくかの」

賢士はレナード達に話した賢士とレティシアについてのことをカーラにも話した

(カーラ)

「ということはレティシアには大昔のアスヴァーン王国の人間が守護霊か何かのよう
にくっついていてることか」

(賢士)

「そういうことになるのう」

(賢士)

「それで、これは大昔の人間からの贈り物よ」

賢士は花をモチーフにしたおしゃれなブローチを見せた

(カーラ)

「見たところセンスがいいだけのただのブローチみたいだけど？」

(賢士)

「ただのブローチではないぞ、暗示をかけられたりして操られそうになった時に自分

の意思がブローチの中に移ることで己を保つことが出来る効果があるぞ」

（賢士）

「それにブローチの中から干渉することで途中まで操られたふりをしてタイミングみはからって己を取り戻すということも出来るからの」

（賢士）

「遺跡の戦いでシズナ姫を守れなかったなどという無様なことにならずにすむぞ」

（カーラ）

「そうか、これがあれば約束を守れなかったりレンがあんなことになってるのに気がつかなかったなどという無様なことにならずにすむのか」

（賢士）

「そのためのものだからの、だが効果はそれだけではないぞ」

（カーラ）

「他にも効果があるのか」

（賢士）

「うむ、このブローチをつけて眠れば夢の中で好きなように行動することが出来るぞ（カーラ）」

「夢の中で行動出切るになるのか、だがその何処に意味があるのだ？」

(賢士)

「夢の中で暗示などによつて築かれた精神障壁を打ち壊せば障壁によつて閉ざされていた記憶を解放することが出来るぞ」

(カーラ)

「それは……つまり……」

(賢士)

「ドレギアスとしての自分のこととか誰が暗示をかけているのかとか色々わかるぞ」

(賢士)

「もつとも中にはトラウマとか思い出したくない記憶もあるだろうから障壁を壊す前はくれぐれも慎重になつて覚悟をきめておくようにの」

(カーラ)

「ああそうだな、ありがたくもらつておこう」

(賢士)

「よかつた、汝が誰かに踊らされるのではなく自分の意志で立ち位置を決めること、それが大事なことと思うからのう」

カーラはその後で早速ブローチの力を使い砂漠の遺跡でのこととかアルバナで使つ

たアドベントカードが確かにウィザードの新技术で作られたものでちゃんと魔人化から助けるための力と方法がウィザードにあったという情報とかが得ることが出来た

鬼械神（デウスマキナ） 18



翌日レナード達はマーシヤの武器屋・アルバナ支店に向かった

（店員）

「いらつしやい、昨日はガマローネ商店で療養していたと思つたけどもう大丈夫なんですか？」

（ユウリ）

「神聖魔法とか色々使ったからね」

（店員）

「それは何よりです」

（レナード）

「それよりマーシヤさんと連絡とれないか」

（店員）

「それなら部屋に案内しますので少し待っててください」

（レナード）

「わかった」

（レテイシア）

「その間にこの三人の服のサイズを測つといてねー」

（店員）

「わかりました」

男性陣＋ユウリとレテイシアは応接室に案内されてシズナとカーラとレンの三人はサイズを測るために店員と同行していった

しばらく立ってから三人は水晶玉を抱えた店員と共に戻った

水晶玉はマーシヤと連絡をとるためのもののように設置してなにやら呪文らしきものを唱えたら水晶玉にマーシヤが映し出された

（マーシヤ）

「あんた達、お姫様を助け出すことが出来たみたいだね、おめでとう」

（レテイシア）

「マーシヤさんにもほんとお世話になったよ、ありがとー」

（マーシヤ）

「ドーも、それにしても話しは聞いたけどお城に帰すのってそんなにまずいの」
(エルドア)

「まずいな、たつた一体の巨大魔獣にいいように蹂躪されていたからな」

(マーシヤ)

「あちゃー、そりやだめだわ」

(レナード)

「俺達ならそういうのも何とかなるけどな」

(マーシヤ)

「実際何匹も倒してるから説得力あるわね」

(レティシア)

「そこでお願いなんだけど、この三人の防具とカーラの分の武器を用意して欲しいの」

(マーシヤ)

「オツケーオツケー、サイズからのリストアップと転送で少し時間がかかるからまた

明日になるけど構わないよね」

(シズナ)

「何分初めてなものですのでよろしくお願いします」

(レン)

「お願いしまーす」

（カーラ）

「いいもの期待してるよ」

（マーシヤ）

「用意する武器は一つでいいんだよね？」

（レティシア）

「うん」

シズナ姫やレンが武器を持って戦うところなんて想像も出来ないし当然のことと言
えるだろう

（マーシヤ）

「その辺ちゃんと釘刺しとくよ、そうしないと余計なことしそっだよ」

（ユウリ）

「あはは…、お願いね」

その後はガマローネ商会で一晩泊まってから三人の装備を受け取るためにマーシヤ
の武器屋にやってきた

昨日と同じように応接室に通されて頼んでいた装備が届けられた

（店員）

「シズナ様には女性冒険者の方たちにも評判のいいエアロスロープのセットを揃えさせてもらいました」

(店員)

「レン様にはアリストダルマデイカのセットを、カーラ様には戦いになることを想定してローゼスメイルのセットを用意させていただきました」

(店員)

「それとカーラ様の武器ですが特にいいものが見つかりましたので用意いたしました」

(賢士)

「エアロスロープはこう見えても結構丈夫で魔法耐性も高いから万が一巻き込まれても大事にはなるまい」

(エルドア)

「アリストダルマデイカはほとんど白一色で露出部分がないので砂漠に向いているしな」

(カーラ)

「このローゼスメイルとかいうのはなかなか動きやすそうだな」

(賢士)

「そしてカーラのために用意されたいいものとはダンシングシミターか」
（賢士）

「ピンと反った細身の刃といい飾り付けられた文様といい芸術品のごとき逸品でありながら実用本位の剣に劣らぬ切れ味、舞ってよし斬ってよしの良い剣だの」

（カーラ）

「これならいい感じに全力を出せそうだね」

（カーラ）

「しかしこれもこれもいい品だけに高そうだね」

（店員）

「いえいえ、お代はあなた達が退治した巨大モンスターから出していただくことになつていきますので気にすることはありませんよ」

（エルドア）

「ウィザードは巨大モンスターを手駒として使ってくることがあるのでな、そいつらを倒す度に連絡を入れて回収してもらおうことでこの装備を使わせてもらっているんだ」

（カーラ）

「あのさ、そんなので儲かってるの」

（店員）

「レナードさん達がどんどん巨大モンスターを倒してくれてるので大丈夫ですよ、巨大モンスターからとれる素材って高く売れるんですよ」

(カーラ)

「そうなのか」

(レナード)

「それでこれからはどう動くんだい」

(ユウリ)

「グリードに行くことは確定っぽいけど」

(エルドア)

「それはレティシア以外の女性陣が隣の部屋で着替えてる間に決めておこうと思う」

(ユウリ)

「レティシア以外って私も着替え、なんで？」

(賢士)

「王族というのは基本的に侍女に着付けてもらうのでな、自分で着替えるということはしないものよ」

(ユウリ)

「マジ？」

（シズナ）

「衣装とは自分で着るものなのでしょうか？」

（ユウリ）

「マジだ…」

（カーラ）

「私とレンも着替えなくちゃいけないんだから誰か手伝ってくれないと困るよ」

（ユウリ）

「なるほどね、手伝いますよ」

ということとで女性陣の四人は隣の部屋で着替えることになった

（賢士）

「さてと、これからどうするかだが」

（エルドア）

「シズナ姫は助けたことだし後はウィザードか」

（賢士）

「あやつらは確か予言の大いなる目覚めとやらを實現するためにシンナイトを狙っておったの」

（エルドア）

「なら古代に関わる所をよく狙うということか」

(レナード)

「それなら俺達も古代遺跡を狙わないか、運が良ければウイザードを潰せるかもしれない」

(エルドア)

「シンナイト目当ての幹部くらいは潰せそうだな」

(賢士)

「なら目指すのはドグマ神殿かバンカーロードかの（バンカーロードの主は龍騎士を預けてるしの）」

(エルドア)

「ドグマ神殿は今は神殿跡だがな、それにカーラの言った鎧を着た龍のことを調べる必要もあるだろう」

(エルドア)

「拠点の確保も必要だしバンカーロードを所有するグリードを目指すのはどうだ」

(賢士)

「確かにそれが良さそうだな」

三人の着替えが終わってから念入りに旅支度をしてもう一泊してから自由都市グ

リードを目指して出発した

第三章

龍騎士 1

フランダー山脈登山口



(レナード)

「砂漠をこえてようやくここまでこれたな」

(ユウリ)

「ほんつと疲れたわ、大丈夫シズナ」

(シズナ)

「ええ…、何とか…」

と口では言ってるが疲れが溜ってるのは明らかだ

(カーラ)

「と愚痴ってるやつもいるが平気か？」

(レン)

「あー、シズナよりはね」

強がってはいるが結構汗をかいているようだ

ユウリとレティシアが魔法で回復や強化をしても旅慣れていない二人にはきついよ
うだ

(エルドア)

「キャンプをするぞ」

(レナード)

「明日は朝から山登りだな」

(カーラ)

「大丈夫なのか？」

(シズナ)

「なるべく足手まといにならないように頑張ります」

(レン)

「最悪誰かにおんぶしてもらおうよ」

(カーラ)

「その時は私がおぶって行く」

(エルドア)

「険しいのは山だけではないぞ」

(レナード)

「わかつてるよ、そつちの方は俺達の仕事だろ」
モンスター

(レテイシア)

「あたしもいるからね、どっから来たって指一本触れさせないよーだ」

(ユウリ)

「なんにしてもこの険しい山を一度こえた先にグリードがあるんだね」

(エルドア)

「そう言えばグリードが今どこにいるかわかるか？」

(カーラ)

「確か今はオフシーズンだから下だね」

(エルドア)

「そうか、少々面倒だな」

(ユウリ)

「面倒って？」

(エルドア)

「なに、実際に行ってみればわかることだ」

(エルドア)

「まあ、話しはこれくらいにして寝るとするか」

(ユウリ)

「そうね、明日は朝からきつくなるし」

ローテーションで見張りを立ててそれぞれおやすみなさいと言って毛布に潜り込んだ



ウィザードの飛行船

船室で眼帯の青年シャブールはビッグロを通して銀髪の青年に報告していた

(銀髪の青年)

「お前がついていながら神器はまだ手に入らないのか」

(シャブール)

「申し訳ありません」

(銀髪の青年)

「そろそろベルシタンも潮時か？」

(銀髪の青年)

「よく踊ってくれたがな」



フランダール山脈登山口

キャンプをして一泊してる時にカーラはブローチの能力で封印された記憶を少しずつ解放していた

だがそれは同時にカーラの悩みを大きくするものであった

(カーラ)

(思えば私はいつも兄さんと一緒だったな)

(カーラ)

(昔は人を操るなんてことはあり得ない優しい兄さんだったのに…)

(カーラ)

(いつからだろう、兄さんが変わってしまったのは)

(カーラ)

(いつからだろう、兄さんの操り人形にされていたのは)

(カーラ)

(いつか兄さんかこいつらかのどっちかを選ばなくてはならない時がくるのだろうか
…)

(???)

「カーラ、カーラ」

(カーラ)

「え…」

(ユウリ)

「カーラ、何ぼーつとしてるの、出発するよ」

(カーラ)

「あ…、ああすまない、今行く」

(カーラ)

(今は考えていても仕方がないか)

この山は道が険しいだけでなくモンスターも色々出る

とはいえ倒したことがあるモンスターかその色違いにしか出くわさないので楽勝

だったが

登山口の中腹あたりでフランダー山脈の中央にある窪地（くぼち）を一望出来る見晴らしのいい場所に出た

その窪地を見て目につくのはのんびりと歩いている亀のような生き物である
だがその亀は甲羅の代わりに甲羅に収まった町を背負っていた

（シズナ）

「あれはいったい何なのですか？」

（エルドア）

「あれは超古代文明の遺物と言える人造都市生命体デミトールでございます」

（エルドア）

「そしてデミトールに背負われている町こそ自由都市グリードでございます」

（シズナ）

「巨大生物に背負われた町ですか、見るのは初めてですがすごいものですね」

（エルドア）

「二万年前のアスヴァーンやイシュレニアの書物にも巨大生物に背負われた町については書かれてありましたがその謎に迫ったものはありませんでした」

（エルドア）

「それ故に更に古代の存在なのではと噂されているぐらいですしグリードのような町は他にはないでしょう」

(カーラ)

「観光もいいけどこの先ちよつと厄介そうだよ」

(レナード)

「何かあつたのか？」

(レティシア)

「みんながグリードに気をとられてる間に二人でちよつと先を見てきたんだこの先の広場にアースドラゴンがいたよ」

(カーラ)

「ああ、それも機嫌悪そうに尻尾をビタンビタンと打っていたぞ」

(エルドア)

「確かに厄介だな」

(レナード)

「何が厄介なんだ、今までだってでかいやつは倒してきたんだしドラゴンといつても一頭だけだろ」

(カーラ)

「確かにアースドラゴンだけだったか」

(レナード)

「なら白騎士で倒せばいいだけじゃないか」

(エルドア)

「お…、おい」

(レナード)

「我に力を…変身！」

(賢士)

「ちよつと待て、ちい、もう行きおつた、あのバカが」

賢士が遠慮なく舌打ちするあたりよほどまずいことをしたようである

(ユウリ)

「シズナの前だからってかっこつけたいのね、レナードは昔っからこういうところが
あるんだから」

ユウリは幼馴染だけによくわかっているのかレナード悪癖だと呆れてやれやれといった様子になっている

(エルドア)

「まずいな」

(カーラ)

「ああ」

賢士とエルドアとカーラの三人だけがレナードの行動が招く危険をよく理解して
いた

(ユウリ)

「ドラゴンを倒すのってまずいの？」

(賢士)

「非常にまずい、ドラゴンは同族を倒した者を決して許さぬからの、ドラゴンの血の臭
いが落ちるまではドラゴンに狙われると思った方がいいのう」

(ユウリ)

「やばいじゃん」

急いですぐ先の広場に行くと白騎士とアースドラゴンは既に睨みあっていた

龍騎士2



アースドラゴンからしてみれば巨人サイズの白い甲冑が歩いてくれば敵以外の何者でもないだろう

アースドラゴンは先制攻撃としてポイズンブレスを吐き出したが盾を構えた白騎士には通用しなかった

それどころか逆に盾を構えた白騎士に詰め寄られてブレスを吐き出す口を盾で張り飛ばされた

口ごと顔を張り飛ばされたアースドラゴンは脳震盪を起こしたのかそのまま横向きに倒れた

白騎士はアースドラゴンが倒れた好機を逃さずにドラゴンの首に剣を叩き込んだ

(アースドラゴン)

「ギャオオオオオーン」

一回ではドラゴンの首は落ちずに断末魔の叫びをあげるアースドラゴンだがアースドラゴンは白騎士の攻撃をかわすことが出来ずに二度三度と首に剣を叩き込まれて切り落とされた

(賢士)

「やってしもうたか」

エルドアが拡声魔法を使ってレナードに呼びかける

(エルドア)

「レナード元に戻るな、白騎士のままにいる！」

(賢士)

「シズナ、レン、失礼するぞ」

(賢士)

「ウエイト・レスト・オント・飛翔(フライト)」

賢士の魔法でシズナとレンの体が宙に浮く

(シズナ)

「これは？」

(レン)

「わっ、わっ、空飛んでる？」

(賢士)

「これで空を飛びイメージを持てばその通りに移動することが出来るぞ、これなら荒事に慣れてなくとも妾達と離れずにすむであろう」

(シズナ)

「感謝します、レテイシア」

(レン)

「わっ、とっ、とっ、よつと、空飛ぶのってなんか面白いね」

(カーラ)

「急げ、他のドラゴンに気づかれる前に登山口終点のゴンドラ乗り場へ急ぐのだ」

皆がそれぞれに全速力で急いだがゴンドラ乗り場に着く前の広場でドラゴンの姿が見えてしまった

(カーラ)

「ちいい、見つかったか」

(エルドア)

「しかもあれは古エリシエンドラゴンドラゴンの竜か」

古竜はアースドラゴンのような属性竜より上位に位置する存在で喧嘩っ早い属性竜と違って状況次第では話しをすることも出来る

もっともドラゴンの血が臭う今は戦闘以外あり得ないから「お話し」の余地はなくどこぞの白い魔王にとっては不満なことかもしれない

???)

「魔王じゃないもん」

どこからかゆかり声が聞こえたような気がしたが気にしたら負けだろう

回りを確認しながら走っていたカーラは皆より少し後ろを走っていたがそれが災いしたのか古竜が空から爪で引つ掛けようとして襲ってきた

カーラは古竜の攻撃はなんとかかわしたもののそのはずみで足を滑らせて崖から落ちてしまう

(レナード)

「カーラ!」

だがそのすぐ後にカーラの落ちた場所に下からフック付きロープが伸びてきて引かかる

(エルドア)

「なんとか無事なようだな」

(賢士)

「しかし空から来るのは厄介よのう」

(レナード)

「あんなに高いんじや白騎士でも届かない、どうすればいいんだ」

白騎士がまごまごしてる間に古竜は一声吠えて無数の光の柱を降らせてくる

白騎士は盾で光の柱を防いだが光の柱を食らった衝撃は消えずに白騎士のダメージになっている

そしてこの攻撃のせいで賢士達も万が一にでも巻き込まれないようにするために広場の隅っこで結界を張って大人しくしておくしかなかった(特に非戦闘員のシズナとレオンを守るため)

一方カーラは

(カーラ)

(フックロープを引っ掛けたすぐ下に岩棚いわだながあつて良かった)

(カーラ)

(さてあいつらはどうなっているかな)

(カーラ)

(…音波収集バルスコネット)

(レナード)

「くそ、空にいるやつ相手にどうすればいいんだ」

(シズナ)

「何か手助け出来る方法はないの？」

(ユウリ)

「無理ですよ、結界から出て万が一光の柱に当たったらどうするんですか」

(エルドア)

「あれはかなりバラバラに降ってくるからな、ないとは言えんな」

(カーラ)

(情けない、それでも私に勝った男か)

……

……

(カーラ)

「仕方がないな」

カーラは縮小符を使ってアクセサリーサイズにしていた黒騎士の剣を懐ふところから取り出して元の大きさに戻してから岩棚から飛び降りる、そして空中で冷静に剣を構えて

(カーラ)

「我に力を…変身！」

空中で黒騎士になったカーラはそのまま羽ばたいてレナードのいる広場の先へ行つ

てから上空へ躍り出た

(レナード)

「黒騎士、何でお前が」

(黒騎士(カーラ))

「そんなことはどうでもいいが、あまりに情けないな」

(レナード)

「なんだと」

(黒騎士(カーラ))

「空を飛ばただけで立ち往生とは…、貴様それでも私に勝った男か」

(レナード)

「ぐう…」

(賢士)

「確かに現在進行形で無様を晒しておつては言い返す言葉もないのう」

(黒騎士(カーラ))

「仕方がないか」

黒騎士空中は古竜の方へ向くと一旦翼を畳んで思いつきりエビ反りになったかと思つたと両手に持った剣ごと思いつきり前へぶん回して前方宙返りをする

その時に剣気と風の魔力が入り混じった三日月形の衝撃波が古竜へ向かって撃ち出された

(黒騎士 (カーラ))

「クレセントソニック」

黒騎士の撃ち出した三日月形の衝撃波は古竜の左翼の被膜を切り裂き古竜は広場に軟着陸することを余儀なくされた

(黒騎士 (カーラ))

「仮にも私に勝った男がこの程度で死なれてはそれこそ私の立つ瀬がない」

(ユウリ)

「ん…、どういうことなの？」

(賢士)

「レナードのやつはノルディア坑道で黒騎士のやつに勝っておるからのう」

(賢士)

「レナードがあんな野生のドラゴンごときに負けるようなことがあらば

それはレナードに負けた黒騎士もまたドラゴンより弱いということになってしまいうというわけよ」

(黒騎士 (カーラ))

「腹立たしいがその娘の言う通りよ（レティシアには色々と読まれているな）」

そう言ううち空中浮遊ホバリングしていた黒騎士は古竜にまたがり左腕でガツチリと古竜の首を捕まえて右手の剣で古竜の首や胴をチクチクと突き始めた

そうなるうち古竜は白騎士に集中出来なくなり白騎士は悠々と態勢を整えることが出来た

攻撃を避けた白騎士は剣を構えて狙いをつけて古竜に攻撃する

（レナード）

「クロスレイジ」

古竜の胸に大きく×の字型の傷がつけられる

古竜はもう戦いたくないのか悲鳴をあげ哀れっぽく鳴き声をあげた

（ユウリ）

「あれってもう戦意がないんじゃないの？」

（黒騎士（カーラ））

「仲間を呼んでいるのかもしれない（それにドラゴンがどんな形でシンナイトを守っているのかわからないしな）」

（黒騎士（カーラ））

「とどめをさす」

黒騎士は古竜から離れるて着地すると猛烈なダツシユで古竜との距離を詰めて白騎士のつけた傷の中心を突いて古竜の心臓を串刺しにした

(ユウリ)

「ちよつと、あのドラゴン降参してたんじゃないの、なにもとどめを刺さなくても…」
(エルドア)

「これはどちらが正しいとも言えんな、ただ一つ言えることは今の我々ではドラゴン達を怒らせるだけということだ」

(賢士)

「それはレナードがアースドラゴンを倒してから決まっていたことよな」

(ユウリ)

「ああ…、そうだったね、レナードがやっちゃったからどの道無理か」

(シズナ)

「あのう、話しをしている間に黒騎士は去っていきましたよ」

(レン)

「えん、そりや空を跳んでビューンとね」

(賢士)

「それは気にせんでもよかろう、その内また出てくるだろうしの」

(賢士)

「それより今は…」

(カーラ)

「薄情なもんだね、誰も私のことを心配してなかったのか」

(エルドア)

「フックロープが見えていたから大丈夫だとわかっていた」

(レン)

「それに姉さんは強いからきつと大丈夫だって信じていたよ」

(エルドア)

「それよりゴンドラ乗り場へ急ぐぞ」

…

…

…

一人の男が古竜の死体へ近づいて呟く

(???)

「誰がこんなひどいことを」

男が竜の目を取り出して離すとそのまま宙に浮いて少しずつ古竜の死体に近づいて

いき竜の目が死体の目の前で止まったところでゆっくりと優しく蒼あおい火に包まれる
???)
「今度は人間にでも生まれ変わってみるか？」

龍騎士3



レナード達は古竜の死体から逃げるように急いでゴンドラ乗り場へ向かった

途中で出くわすモンスターにはバーストクロスやウインドスラッシュなどの弓や魔法の強力な遠距離スキルを遠慮することなく使い一時も止まることなく駆け続けた

ほどなくしてゴンドラ乗り場にたどり着いたがそこは崖を栈橋とした港のような場所。待合室らしき建物がいくつか建っていた

その中には宿屋もあったので全員風呂に入り賢士の魔法で血臭の類は完全に消した

(賢士)

「これで一安心よな」

(シズナ)

「これでもうドラゴンに狙われることはないのですか？」

(賢士)

「うむ、訓練された犬でも追えぬほど徹底的に臭いを消したからのう」

(シズナ)

「ならあのゴンドラに乗ってグリードに行くのですね」

シズナの指し示したゴンドラというのはムカデを足の代わりに羽を付けて平べったくしたような巨大な虫にぶら下げた部屋のことである

(ユウリ)

「まあ、あんまり見ていたとは思えない虫だけどこれに乗るしかないのよね」

(シズナ)

「そうかしら。結構かわいい虫だと思うけど」

(レン)

「目とかよく見るとかわいいよね」

(レティシア)

「ひらひらした羽とかが愛嬌あるしね」

(ユウリ)

「さっ…、三人とも平気なんだ」

(カーラ)

「なんならお前はゴンドラに乗らずに直接デミツールを登ってグリードに行くか？」

(ユウリ)

「…え…、遠慮しまーす」

なんだかんだと言ってる内にレナード達に順番が回ってきてゴンドラに乗ることになった

たくさんの羽でバランスがとれているのか快適な乗り心地で自由都市グリードのステーションにたどり着いた

グリードのステーションはとても大きい駅の中みたいになっていた

そして回りを見渡してみると都市列車の時刻表が貼ってあったり真ん中に受付と書かれたカウンターがあったりしていた

そして奥には一軒の大きな屋敷が見えた

(エルドア)

「あれがグリードの市長の屋敷だな」

(レナード)

「市長ってことはバンカーロードのことも色々知っているんじゃないか？」

(カーラ)

「そりゃ知ってるだろうけどアポもないんじゃないや門前払いは間違いないね」

(レナード)

「アポ？」

(カーラ)

「事前に会う約束を取り付けておくことよ」

(レナード)

「そんなこと出来るわけないじゃないか」

(エルドア)

「なら商業区にでも行つて情報を集めるか」

だが商業区の宿屋兼酒場で市長であるドリストールにアポなしで会う方法を知ることとは出来なかつた

(カーラ)

「厄介なことだな」

(エルドア)

「ああ、市長に頼んで採掘シーズンの時のようにデミツールを張り付かせてもらわな
いとちよつと行けないからな」

(レナード)

「そんなに厄介なのか？」

(エルドア)

「ああ、採掘場の入り口は断崖絶壁の岩棚にくり貫かれた巨人サイズの穴しかないからな」

(カーラ)

「だからどうしてもその出入りに慣れたグリードの協力が必要なのよ」

(レナード)

「そうか巨人サイズの穴ならファングで入れるような気も…」

(賢士)

「やめい！、妾のファングを晒し者にする気か？」

(レナード)

「ご…、ごめんごめん」

(カーラ)

「となると、どうしても市長に会う方法が必要だな」

(エルドア)

「となると、もう少し突っ込んだ所で情報を集めるとするか」

(カーラ)

「そうなるとシズナとレンと…」

(賢士)

「レナードとユウリはここで留守番をしてもらうかの」

(ユウリ)

「ええー、どうしてー」

(レン)

「ぶーぶー」

(賢士)

「後そういう所にいる間は、あたし」の方も眠ってもらうことにするかの」

(レティシア)

「えー、そんなの聞いてないよー」

(賢士)

「今言ったからの」

(カーラ)

「今のはなんなんだい、何か変な感じだね、一人二役と言うか、二人いるみたいというか？」

(賢士)

「うむ、この際だから妾のことも話しておくかの」

賢士はレナード達にも話した賢士とレティシアの今までのことをカーラ達にも話し

た

(カーラ)

「とんでもない話しかもあったものだな」

(レン)

「レティシアの中にはレティシアを守る守護霊みたいなのがいるんだね」

(シズナ)

「今までレティシアに違和感のようなものを感じることがありましたがその理由がよくわかりました」

(シズナ)

「目には見えないというだけでレティシアの中にもう一人私達を守ってくれていた人がいたのですね」

(シズナ)

「これからもよろしく願います」

(エルドア)

「まあ、その話しは置いておいてだな、今から行くところはお前達を知る必要がないような薄汚れた所だ、だから一緒に行くわけにはいかない」

(カーラ)

「その代わりこの辺には転がっていない情報を拾える可能性もあるけどな」

その時賢士がユウリに近づいてひそひそ話を始める

(賢士)

「ここまで言えばどういう所に行こうとしておるか見当がつくのではないのか(ひそひそ…)」

(ユウリ)

「いわゆるスラムみたいはどこ？(ひそひそ…)」

(賢士)

「そういうことよ、シズナやレンを連れて行けないのもわかるであろう？(ひそひそ…)」

(ユウリ)

「確かに(ひそひそ…)」

(賢士)

「それに妾達が情報を集めてくる間は汝等にシズナとレンを守っていてもらいたいからの(ひそひそ…)」

(ユウリ)

「(やれやれ)わーかった、ちゃんとシズナとレンを守ってみせるよ(ひそひそ…)」

(ユウリ)

「しょうがないわね、ちゃんと留守番しててあげるからいい情報^ネ掴^タんできなさいよ」

(レナード)

「おい、いいのかよ」

(ユウリ)

「しょうがないじゃない、シズナとレンを連れて歩くわけにはいかない所みたいだし、二人だけにするわけにもいかないし」

(ユウリ)

「かといってレナードだけお守りにつけるのも別の意味で危ないしねー」

カーラと賢士がそれを聞いてくすくすと笑う

(レナード)

「おいおい、いくらなんでもそりやないだろ」

(エルドア)

「それではちゃんと留守番しておるようにな」

(レナード)

「わかったよ」

(ユウリ)

「はーい」

(レン)

「お土産買ってきてねー」

(シズナ)

「はい、行ってらっしゃい」

エルドア達は都市列車でダウンタウンへと向かった

龍騎士4



ダウンタウンは正にスラムと言っていくらいゴミゴミとしていて人も物も汚れている区域だった

いや、訂正しよう、本来ダウンタウンは繁華街や都心部といった意味があるがごく一部の場所においてはスラムと変わらない有り様を見せることがある

エルドア達はそこで酒場を探してそこそこの酒を注文してから酒場のマスターに市長に会える方法を聞いてみた

(酒場のマスター)

「市長に会う方法ねえ、普通は紹介状がない限り事前予約して待つしかないんだけどね、それとも急ぎかい？」

(エルドア)

「なるべく早い方がいい」

(酒場のマスター)

「ならちよつと面白い噂があるんだけどね」

(エルドア)

「面白い噂？」

(酒場のマスター)

「えーと…、どんな噂だったかな…」

と言いながら酒場のマスターは意味ありげにエルドアの方を見ている

(賢士)

「(そういうことか) 麦茶をもう一杯もらおうかの」

賢士だけは本来の体の持ち主であるレティシアのことを考えてあまり酒を飲まない方がいと判断して麦茶を頼んでいた

(賢士)

「麦茶の代金を前払いしておくぞ」

賢士はそう言って500Gをカウンターに置く

グラス一杯の麦茶の料金にしては勿論高すぎる

つまりはこの500Gで面白い噂を売ってくれということである

マスターはその金を「どうも」と言って受け取り面白い噂について話し始めた

(酒場のマスター)

「市長の御屋敷には「レパーヌの女神」と言う見事な彫像があるのですがどうやら最近その「レパーヌの女神」が闇市のオークションにかけられているそうなんですよ」

(酒場のマスター)

「それについて最近お屋敷にお邪魔したある人から聞いたのですがお屋敷にはちゃんと女神像はあったらしいんですよ」

(カーラ)

「確かに面白いな、闇市に出てるということは本物は盗まれて屋敷に偽物を置いて誤魔化してる可能性もあるということか」

(賢士)

「なら妾達で女神像を手に入れば」

(エルドア)

「少なくとも話しをすることは出来るだろう」

(カーラ)

「大変美味しいお酒ね、それで闇市についても何かあれば教えてもらえないかい」
カーラはそう言つて少なくともお金の入った袋をもてあそぶ

(酒場のマスター)

「闇市へいくんでしたら許可証が必要ですよ、そこにいるお客さんに認められれば売ってもらえますけどね」

(エルドア)

「(聞けるのはこんなところか) 思ったより美味しい酒だった」

エルドア達は席を立ってエルドアは値段よりも多めのお金を、カーラはお金の入った袋をカウンターに置いたままマスターが教えてくれた客のいる席へ移動した

(酒場の客↓闇市商人)

「ほう三人か、何の用だ」

(カーラ)

「ちよつと闇市のオークションに興味があつてね」

(闇市商人)

「それで」

(カーラ)

「ここで闇市の許可証を売っているそうじゃない」

(闇市商人)

「なるほど…」

闇市商人は懐からトランプを取り出すとシャッフルしてから扇状おうちぎじょうに広げて

(闇市商人)

「この中から一枚引きな」

と言った

カーラが一枚引くと

(闇市商人)

「そのカードを数字を見ないで俺に見えるように掲げろ」

そう言いつつ闇市商人もカードを引いて数字を確認せずに額に当てて掲げた

(エルドア)

「インディアンポーカーか」

(闇市商人)

「さあ、勝負するか、降りるか？」

闇市商人が掲げてるカードはクラブの10である

(カーラ)

「勝負」

そう言ってお互いのカードを確認する

闇市商人はクラブの10でカーラはスペードのQ(クイーン)だった

(闇市商人)

「合格だ、一枚1000Gだ」

(カーラ)

「二枚もらおう」

その後闇市商人から教えてもらった場所で許可証を使い闇市オークションの会場へ入った

そこにはバニースーツを着た女性やきわどい衣装を着た生のネコ耳の女性などが給仕をしている大人の男のいかげしい欲望を刺激するような会場だった

そしてこの会場に来ている客でメガネやマスクを着用して素顔を隠している人も少なくない

(賢士)

(さすがに社会の闇の部分に位置するだけのことはあるのう、いかがわしいことこの上ないわ)

(賢士)

(レティラを眠らせておいて正解だったの)

(オークションのオーナー)

「さて、本日のトリを飾る一品をご紹介いたしましょう」

オークションそのものは終盤に入っていたようだ

(オーナー)

「これこそ正に美の造形、美術品の中の美術品と言える一品」

(オーナー)

「エントリーナンバー100を飾るその一品は…」

(オーナー)

「レパーヌの女神」です！」

(オーナー)

「どうです、これほど美しい彫像はなかなかお目にかかれないでしょう」

(オーナー)

「ですがこのレパーヌの女神はオークションによる競り落としはいたしません」

オーナーのこの言葉が出ると競売客達は少しずつ席を立ち疲れた様子で会場から退

場し始めた

(競売客A)

「またこれか」

(競売客B)

「オーナーも飽きないね」

(競売客C)

「こだわりというものかね」

(オーナー)

「それというのもこの「レパーヌの女神」には一つ大きな欠点があるからです」

(オーナー)

「よくご覧になればわかると思いますがこの「レパーヌの女神」は一番の特徴であるファイアストーンの瞳ひとまなこが一つ失われているのです」

(オーナー)

「私は収集家コレクターの端くれとしてこれを見過すごすことはできません」

(オーナー)

「そこでこの「レパーヌの女神」の目に収まるファイアストーンを用意してきた人に完成品のレパーヌの女神をお譲り…」

ここでオーナーは競売客が全て帰りエルドア達しか残っていないことに気づいた

(オーナー)

「はあ、やっぱりファイアアザードを退治してまでファイアストーンを手に入れようって人はいないのか」

(エルドア)

「そうでもないぞ」

(カーラ)

「むしろ大金を使わずにすみそうでありがたいくらいだね」

(オーナー)

「ということはファイアストーンを手に入れるつもりがあるのですか？」

(エルドア)

「この都市の市長に早く会いたいのでそれが必要なのだよ」

(オーナー)

「なるほどなるほど、私はこの女神像を修復出来ればそれで十分です」

(オーナー)

「その後でよろしければどうぞご自由にお使ください」

(賢士)

「それではファイアストーンを手に入れるためにファイアリザードに関する情報をも
らえないかのう」

エルドア達はファイアリザードが群れを作っていることと群れのボスが別格の強さ
を持っていること

それに赤水晶を好み巨大赤水晶のある洞窟を好むこと

肝心のファイアストーンはファイアリザードのボスの爪を加工する以外に制作方法

がないこと

闇市の一角のモンスターハンター御用達の区域でファイアリザードを誘き寄せ、エサを買えることなどを聞き出した

(カーラ)

「なるほどね、お金で解決しようなんて輩には無理な話ね」

(エルドア)

「近い内にファイアストーンを用意出来ると思うぞ」

(オーナー)

「その時を楽しみに待っております」

闇市でファイアリザードのエサを買ってからレナード達の待つ商業区の宿屋へ戻っていった

(エルドア)

「これこれこういうことで…」

(賢士)

「かれこれそんなわけで…」

(賢士)

「登山口まで戻ってトカゲ退治をすることになったぞ」

(レナード)

「とにかくそのファイアリザードを倒せば市長に会える可能性が出てくるんだな」

(賢士)

「それでシズナとレンの守りについて考えておったのだが」

(賢士)

「万が一攫われたとしても妾が位置を特定することで助けに行くことは出来るがの、そもそもが攫われないように、危険なことに巻き込まれないようにすることが肝心よ」

(エルドア)

「なら二人ほどシズナとレンの護衛に集中してもらって三人で戦ってもらうことにするか」

(賢士)

「戦闘はレナードとユウリとカーラの三人に任せたいがどうかの？」

(レナード)

「えっ…、俺？」

(賢士)

「人一倍経験を積んでおかねば今度黒騎士に会った時もきつと笑われるぞ」

(カーラ)

「確かにな、黒騎士にとって白騎士はライバルみたいだしな、いつまでも無様晒してるようだ」と嘲笑するしかないかもな」

(レナード)

「それはやだな」

(賢士)

「後は状況によってはカーラとエルドアが交代するということで」

(エルドア・カーラ)

「わかった」

仲間内での位置取りも決まってオークシヨンのオーナーが地図に書き込んでくれた道順に従って登山口の中でも普通はいかない洞窟の中にある巨大な赤水晶のある場所までやってきた

(賢士)

「では戦闘準備にかかるかの」

賢士がシズナを中心に広範囲に防御結界を張ってる間に敵が火属性のファイアリザードだとわかってるのでカーラが護衛になりエルドアが戦闘メンバーに入る

ユウリはそれらに並行して補助魔法で仲間の強化をしている

(賢士)

「そろそろやるとするか」

賢士が巨大水晶にお供えでもするかのようにファイアリザードのエサを置いて魔法でエサの匂いを広げる

(エルドア)

「かかったようだな」

巨大水晶のある洞窟広場のあちこちから何かの気配が出てきた

龍騎士5



エサの匂いに釣られて出てきたのはレナードの胸くらいの大きさはある四足の赤いトカゲの群れだった

そして群れの中からのつそりと出てきたのは群れのトカゲよりも風格とか雰囲気と違ったものが桁違いにすごくてレナードよりも遥かに大きな赤いトカゲだった

群れのトカゲよりも厳つくてトゲトゲしいウロコといい纏う雰囲気といいそれがファイアリザードのボスであることはあまりにも確定的に明らかであった

(レナード)

「……、これがファイアストーンを持つてるファイアリザードなのか……」

(エルドア)

「どうやらそうらしいな」

(ユウリ)

「うそでしょ…」

(レナード)

「それにこの状況どうするんだよ」

(ユウリ)

「辺り一面トカゲだらけね」

(レナード)

「これって白騎士でやった方がいいんじゃないか？」

(エルドア)

「だめだ」

(レナード)

「なんでだよ」

(エルドア)

「シンナイトの強さは契約者の強さが上乘せされて決まる」

(エルドア)

「そしてシンナイトは五体ある」

(レナード)

「それがどうしたんだ」

(エルドア)

「もし黒騎士以外に敵になるシンナイトが出てきたら」

(エルドア)

「もし今のお前で1VS2になったら」

(エルドア)

「勝てると思うのか」

(レナード)

「うっ…、それは…」

(賢士)

「そうよな、黒騎士だけでも苦戦しておったし、竜相手は飛ばれたら手も足も出せなんだしの」

(エルドア)

「ましてやシズナを守れるわけもない」

(レナード)

「なんだと」

(エルドア)

「食って掛かるのはいいが考えてもみろ、古竜との戦いで黒騎士が味方でなく敵だつ

たら勝てたと思うのか」

(レナード)

「う…、それは…（まず勝てない）」

(エルドア)

「まずお前自身が強くならねば白騎士も強くならぬ」

(エルドア)

「そして生身での強さを求めるなら日頃からのたゆまぬ鍛錬とこんなギリギリでの実践が一番効果的なのだ」

(カーラ)

「そーだぞレナード、この程度で怖気づいていては黒騎士に笑われるぞ」

(レナード)

「…、ええいやつてやる、だけど群れの方はなんとかしてくれよエルドア」

(エルドア)

「わかった、なんとかしよう」

(エルドア)

「まずは全員結界に入れ」

エルドアは賢士の結界に重ねるようにもう一つ結界を張って物理と属性攻撃の両方

を遮るようにした

そしてエルドアはそれとは別にファイアリザードで溢れかえる広場全体を包み込む結界を展開した

(エルドア)

「クール・クール・ヒトパース・クルサーク・ハーダザード・アスイージ・氷炎の魔王よ我が領域に永久とこしえの寒気を」

(エルドア)

フリーザーキングダム
「凍りついた王国」

エルドアの呪文に応えて広場を包み込む結界は目に見えて気温が下がり空気中の水分が凍りついて粉雪まで降り始めた

(ユウリ)

「わあ、きれいな…」

結界に守られてる人はこんなおんきなことを言っているがファイアリザード達にとつてはたまったものではない

ボスも含めて全てのリザード達の動きが鈍り群れの大半は命まで凍りついてしまった

(レナード)

「しかしエルドアの得意な魔法って火属性の魔法じゃなかったのか」
(エルドア)

「世の中にはあえて逆を知ることによつてのみその深淵に迫ることの出来ることも多々あるのだ」

(エルドア)

「薬草学にしても薬草の知識を詰め込むばかりではある一定のところまで成長が止まってしまう」

(エルドア)

「真に薬草学を修めるためにはあえて毒草の知識を知り薬へ転化することも覚えなくてはならぬ」

(エルドア)

「そして、それは魔法にも言えることよ、火の魔法を極めんと欲すれば自然と氷の魔法にも強くなるということよ」

(賢士)

「二例を上げればな、右手に火属性、左手に氷属性の魔力を込めて纏めて撃ちだす、そのまま着弾地点で撃ちだした魔法を解放することにより火属性と氷属性を反応させて水蒸気爆発を引き起こす複合属性攻撃魔法も存在するぞ」

(カーラ)

「随分と過激な魔法もあつたもんだね」

(レナード)

「ほんとはんでもないな、おつとまだ動いてるトカゲがいる、魔法が切れる前に止めを刺さないと」

レナードがファイアリザードに止めを刺そうと結界から一步出たとたんに体の芯まで凍りつくような寒気に襲われた

(レナード)

「ぎ……、ぎ……、ぎぎぎぎ。ぎむい… (ガチガチガチガチガチガチガチガチ)」

(ユウリ)

「わわ、ちよつとレナード」

(エルドア)

「外は絶対零度に近いことを忘れるなよ」

(レナード)

「ずず…ずいばぜん」

ユウリが神聖魔法でレナードの治療をする

(ユウリ)

「んー、ならこれでどうかな」

(ユウリ)

「アチアス・アチマジ・テクト・パソナル・アイスマジックバリア」

ユウリが対氷系魔法用バリアを張ってから結界の外へ出てみる

(ユウリ)

「ひゅー、さむさむ、でもこれなら何とかいけるわよ」

(レナード)

「よーし、じゃあ俺とユウリで雑魚の掃除といくか」

二人はアイスマジックバリアに守られながらエルドアの作り出した氷雪の世界へ飛び出した

レナードが力を込めてファイアリザードに剣を叩き込むが思ったほどダメージを与えることが出来ないようだ

ユウリはそれを見てリザードのつま先を狙ったり、ブレスを吐こうとしてる時を狙って口にショートソードを突っ込んで水の属性石の力で氷の槍を生み出して串刺しにしたりしている

(レナード)

「そーいや水属性の攻撃が良く効くんだったよな」

レナードは剣に冷気を纏ってもう一度ファイアリザードに剣を叩き込んだがやはりウロコに阻まれて致命傷にはいたらなかった

(レナード)

「ウロコの硬さに属性は関係なしかよ」

(ユウリ)

「だからウロコのないところを狙ってるでしょ」

そしてエルドアの魔法で動きが鈍ってるファイアリザードを数匹倒したあたりでエルドアが状況が悪化していることを告げた

(エルドア)

「おい、ボスの方をよく見てみる、まずいことになっているぞ」

ファイアリザードのボスは絶対零度に近い世界にも関わらず体中から蒸気のようなものが吹き出し普通サイズのファイアリザードに比べて随分と動きが活発になっている

(ユウリ)

「う…うそ、こんな寒い中で湯気出してる…」

(レナード)

「何か熱くなってきたという事なのか」

(エルドア)

「おそらくではあるが、血臭に興奮しているのと仲間を殺された怒りで寒さを打ち消しているのだろうか」

(レナード)

「てことはこれ以上ファイアリザードをやっつけたら…」

(賢士)

「おそらく寒さによるペナルティが完全に消えよう」

(レナード)

「先にボスを倒せってことか」

(ユウリ)

「あのボス相手に口の中を狙っても通用するかな？」

(レナード)

「なんでだ、ファイアリザードの弱点なんだろう？」

(ユウリ)

「いや、この状況で湯気出すくらいなんだから、口の中に氷の槍を叩き込んでもすぐに溶けるんじゃないかなーって」

(レナード)

「う…、ありそう」

(ユウリ)

「ならどこを狙おうか」

(レナード)

「ウロコのないところを狙えばいいんだけどな」

(ユウリ)

「ならここで」

ユウリがファイアリザードのボスの懐に飛び込んでショートソードに冷気を纏わせ
てボスの腹を叩き斬る

(ファイアリザード(ボス))

「キユオオオオオオオオ」

ボスにザツクリとした傷が付き確実にダメージを与えたがまだ致命傷にはいたらな
い

(レナード)

「そうか、胸とか腹にはウロコはないんだよな」

(レナード)

「じゃあちよつと試してみるか」

(レナード)

「ユウリ、これを見といてくれ」

レナードは剣についている水の属性石に集中して力を引き出して地面に突き立てたするとそこから何かが地面の中を進み壁にぶつかって地面から氷柱が生えてきた

(ユウリ)

「確かに面白けれどこれがどうしたの？」

(レナード)

「わからないか、リザードのボスをはさんで「いっせーのっせ」てやれば……」

(ユウリ)

「あ…、なるほど、それは面白そう」

(レナード)

「それじゃ、やるぞ」

ファイアリザードのボスはまだ寒さの影響で結構動きが鈍いのでボスの前後のポジションをとるのは難しいことではなかった

(レナード・ユウリ)

「いっせーのっせ！」

レナードとユウリが地面の中に打ち出した氷の力は地面の中を進みボスの真下でぶ

っかりあった

そしてぶっかりあった氷の力は特大の氷柱となって地面から生えてきてボスを串刺しにした

その後はエルドアが魔法を維持してる間に残りのファイアリザードの群れを倒すだけだった

ファイアリザード全滅後

(レナード)

「ふう、なんとか倒せたな」

(シズナ)

「お見事ですレナード」

(ユウリ)

「レナードすごいすごい」

(カーラ)

「あなたも十分すごいじゃないか、最初にウロコを避けて狙ってたしな」

(エルドア)

「確かにあれは見事なものだ」

(レン)

「レナードもユウリもすごいよ」

(賢士)

「うむ、この戦いはきつと良い経験になったであろう、それはそれとして……」

(レティシア)

「早くマーシヤに連絡してどっさりのファイアリザードを渡してファイアストーンを加工してもらわないとね」

その日はマーシヤに連絡を入れた後で洞窟広場で一泊し翌日やってきたマーシヤの店のグリード支店回収隊と一緒にグリードに戻った

その後ファイアリザードのボスの爪からちゃんとファイアストーンに加工できるのを確認してから店の在庫にある加工済みのファイアストーンを一つくれたので加工出来るまで待つ手間が省けたことを追記しておく

龍騎士6



エルドア達はファイアストーンを手に入れた後で一度宿屋に戻ってからレナード達には待っててもらってからエルドア達で闇市のオークション会場へ向かった

(オーナー)

「これは正しくファイアストーン、よくぞ…、よくぞ手に入れてくださいました」

(賢士)

「これでレパーヌの女神は修復され妾達の手に入るとのことよな」

(オーナー)

「はい、私も収集家コレクターの端くれとしてレパーヌの女神が欠けたままというのはどうにも我慢が出来なかつたのです」

オーナーはレティシアからファイアストーンを受け取って女神像の白目にはめ込んだ

(オーナー)

「完全な形の女神像を見ることが出来てようやくほつとしましたよ、どうぞこの女神像をお持ちください」

(カーラ)

「これでようやく市長に会えるんだね」

(オーナー)

「もしレア物をお探しになることがありましたら今後とも私の闇市《ブラックチエリー》をよろしくお願いします」

(賢士)

「まあ法に触れるのは仕方ないとしても非道とか不義理なことはせずに息災でな」

(オーナー)

「はは、勿論ですとも」

宿屋に戻ったエルドア達は今度は全員でゴンドラと都市列車の総合ステーションの奥にある市長の屋敷へ向かった

(ユウリ)

「大きい屋敷ねー」

(レン)

「おつきー」

(シズナ)

「伯爵の称号をお持ちですしこれで普通なのでしょう」

(レナード)

「そんなものなのか」

(賢士)

「まあ、こういうのはいつの時代でも変わらぬものだからのう」

(レティシア)

「ま、とりあえずはその門番っぽい感じがっしりとしたおじさんに女神像のことを言
て入れてもらわないとね」

(ユウリ)

「すいませーん」

(門番)

「どうしましたか」

(ユウリ)

「市長がレパーヌの女神をお探しと聞いて持ってきたのですが」

(門番)

「レパーヌの女神を持ってきたって？、何言ってるんですか、レパーヌの女神は既に見つかって屋敷の中にありますよ」

(ユウリ)

「ええ？」

(エルドア)

「どうやら闇市に女神像が出回っているという話しは知らないようだな（ぼそぼそ…）」

(レナード)

「ちよつと、それじゃあどうするんだよ、アポとつてたら何日かかるかわからないんだろ（ぼそぼそ…）」

(エルドア)

「女神像でだめなら他の方法を探すしかないが」

(???)

「どうしたんだ、何かあったのか」

声のした方を見るとそこには赤を基調とした少し派手で夏向きの服装をしたドレッツドヘアの浅黒い優男が立っていた

(門番)

「ああ、シーザー様、この方達がレパーヌの女神を持つてきたと申されました」
(??↓シーザー)

「なに、レパーヌの女神」

(ユウリ)

「ねえねえ、あれが噂の御曹司」

(ユウリ)

「バカ息子って聞いてたけど、結構いけるんじゃない?」

(レン)

「うんうん、何かかっこいいよね」

(レナード)

「そうかあ?」

(カーラ)

「ふん、どうだか」

ユウリ達がそこそと話してる間にシーザーはユウリ達をじつと見ていた

(シーザー)

(ん…、竜眼が何か訴えてる)

(シーザー)

(あつ…しまった、また視る能力が出ちまった)

(シーザー)

(…あのドラゴン達を倒したのはこいつらか…、でも原因はアースドラゴンにあるんじゃない)

(シーザー)

(属性竜はドラゴンの中でもまだまだガキで喧嘩っ早いからな)

(シーザー)

(あつちから仕掛けなくても普通に喧嘩になつてたな)

(シーザー)

(それに古竜のやつも融通の利かねえ頑固者だからな…、アースドラゴンをやつちまつた後じゃしようがねえ)

(シーザー)

(結果として二頭やつちまつてるけどある意味事故のようなもんだししゃーねえか)

(シーザー)

(それに何よりこいつらドラゴン狩るのが目的じゃないしな)

(門番)

「あおう、シーザー様？」

(シーザー)

「ああ…、わりい、ちよつとぼーつとしちまつてた」

(シーザー)

「あんた達、そのレパーヌの女神をよく見てみたいからちよつと家の中まで入ってくれないか」

(レナード)

「それじゃお邪魔します」

ドリスドール邸応接間

(レナード)

「これがレパーヌの女神です」

(シーザー)

「どれどれ」

シーザーはそう言つて女神像に目を向けつつ竜眼の能力を使った

(シーザー)

(さつきはドラゴン関係しか見れなかったけどちよつと気になったこともあつたからな)

(シーザー)

(こいつレナードは…、やっぱりドラゴンと戦った白騎士の契約者か)

(シーザー)

(それと黒騎士はと…)

(シーザー)

(おいおいこいつは何の冗談だ、黒騎士の契約者がウィザードで暗示による人格もあ
るって…)

(シーザー)

(でも今は自意識が急速に育ち始めてるのか、いい女だけにこのままいい方向で収
まってほしいよな)

(シーザー)

(カーラの自意識が育ってるのはこのレティシアって娘のおかげか、それにしても共
生意識体なんてややこしいな、このレティラって方は無邪気でかわいいけど時折とんで
もなく鋭かったりするしな)

(シーザー)

(こりゃ才能だな、それにレティシアの方は…、何でも出来る上に色々知ってるって
…、何この超人)

(シーザー)

(いろいろな意味で深く知ろうとしない方が良さそうだな)

(シーザー)

(それにレティシアの“知ってる”情報でユウリがシンナイトの月姫の契約者の可能性が高いって?)

(シーザー)

(そーいや、契約者と言えばあのエルドアっておっさんの黒騎士の契約者っていったいどうなってんだよ)

(シーザー)

(まてまて落ち着け…、確かレティシアが“知ってる”情報を“読んだ”限りじゃエルドアがクライブという名前で黒騎士の契約者だったのは一万年前…てちよつと待てい、人間だろうが幽霊だろうが一万年も存在出来るか)

(シーザー)

(それに…、なんでバランドールのお姫様なんてもんがいやがるんだ?)

(シーザー)

(うう…、もうこいつらについて色々考えるのはよそう)

(シーザー)

(悪い奴らじゃないのは確かだし最低それさえわかってりやいいんだからな)

(シーザー)

(それとレンと話す時は気をつけねえとな、血の繋がった姉妹じゃなくウイザードが都合よく動かすために用意した記憶を弄った赤の他人なんて真実は知らなくていいことだしな)

(レナード)

「あのう、それでこのレパーヌの女神は？」

(シーザー)

「ああ、間違いねえ、こいつは本物だ」

(ユウリ)

「良かった」

(シーザー)

「それにしてもこの女神像を持ってきてどうするつもりなんだ」

(レティシア)

「市長のおじさんに早く会いたいから持ってきたの」

(ユウリ)

「アポから始めてたら何日かかるかわかんないしね」

(シーザー)

「へえー、こいつで賄賂とかそういうことじゃないんだ」

(レナード)

「しないしない」

(ユウリ)

「そんなわけないでしょ」

(シーザー)

「冗談だよ冗談」

(シーザー)

「それにこの女神像が本物だったのは最初からわかってるしな」

(レティシア)

「どーして?」

「と言ってかわいらしく小首をかしげて見せるレティシア

(シーザー)

「そりゃこの屋敷にある女神像は俺が作った偽物だからさ」

龍騎士7



シーザーの偽物発言にレティシアは小首を傾げレナードは驚く

(レナード)

「なんだって」

(シーザー)

「いやー、みんな上手く騙せてただけだな、本物が出てきたんじゃしょうがないわ、親父にばらしにいくわ」

(カーラ)

「とんだバカ息子だな」

(シーザー)

(ちえ、こんなことなら偽物なんか作らずに気休め言っただけで時間を稼いどきや良かったぜ、つてえ、傷が痛むな)

賢士はその僅かな表情の変化を見逃さずにくっそりとヒールを唱えた

(シーザー)

「お前…」

(賢士)

「ほんとに隠すのが上手いのもう、だがやせ我慢も程々にせえよ」

(ユウリ)

「シーザーさん怪我してたの？」

とユウリが心配そうな表情で言うと

(シーザー)

「ああ…もう、そういうのが嫌だから隠してたのによ」

(ユウリ)

「あ…、ごめんなさい」

さすがにほとんど初対面の相手にどう話せばいいのか掴みきれないようだ

(シーザー)

「いや、だから…(しまった、こんなつもりじゃ)」

(賢士)

「青いのう(ぼそ…)」

市長の寢室では初老の男性が天蓋てんがいつきのベッドに横たわっておりその傍には老執事が控えていた

(ベッドの男性)

「どうしたシーザー、何か用か」

(ベッドの男性)

「それにそちらの方たちはいったい？」

シーザーが話しをしてる間にエルドアと賢士は部屋の壁の棚に置かれたレナード達
が持ってきたものより幾分か質素な作りになつてゐる女神像に気付いた

(賢士)

(これは!?)

(エルドア)

(この女神像の眼は!)

(シーザー)

「いやあその、親父実はさ…、この前贈つた女神像なんだけどさ、あれ俺が作つた偽物
なんだ」

(シーザー)

「いやー、本物は闇市に流れたつて聞いてたし偽物でもバレなきやいかなつて思つ

ててさ、でも本物が出てくるなんて思わなかったな」

(ベッドの男性↓市長)

「本物？」

(レティシア)

「このことだよ、その闇市から引つ張り出してきたんだよ」

(シーザー)

「まあそんなわけではらさないわけにはいなくなっちゃってね」

(シーザー)

「それと本物を持ってきたこの人達がなんか話しがあるってさ、女神像のお礼にちよつと聞いてやってくれない」

(市長)

(偽物とはいえあの女神像の眼は間違いないはず、だが市長として…、それに妻との思いでをこんな形で…、こんな形で…)

(市長)

「ええい、貴様など出て行け、勘当だ！」

(シーザー)

「おーこわ、それじゃ退散させてもらいますよつと」

シーザーが退散した後市長はベッドの上で咳き込んだ

(市長)

「(い)ほ(つ、い)ふ(い)ふ…」

そして当然のように市長が落ち着くまで老執事が世話をする

(ユウリ)

「大丈夫ですか？」

(市長)

「いやすまない、少し興奮するとこれだ、お客人には恥ずかしいところをお見せしてしまい申し訳ない」

(市長)

「あの女神像は今は亡き妻と初めて一緒に行った美術館で見た思い出深い一品でして私にとって美術品として以上の価値があるものです」

(市長)

「それをあいつときいたら」

(市長)

「おお、そう言えばあなた方にはこの女神像を持ってきてくださったお礼に何かしな
いといけませんな」

(市長)

「私に出来ることであればなんなりと望みを言ってください」

そこで初めてレナード達をじっくりと見る余裕を持った市長はシズナが同行していることに気づいた

(市長)

「ど…、どうしてシズナ姫様がこのような所に？」

(シズナ)

「お久しぶりですドリストール伯爵」

(市長)

「はい、一別以来です、姫様におかれましては大変お美しくなりご健勝であられることを喜ばしく思っております」

(シズナ)

「ありがとうございます、伯爵はあまりお加減は…よろしくないようですね」

(市長)

「ははは、私に残された時間も少ないようです」

(市長)

「それなのにあのバカ息子ときたら（ぼそ…）」

(シズナ)

「どうかなさいましたか？」

(市長)

「あ…、いえいえなんでもございません」

(市長)

「それにしてもどうしてシズナ姫様がご一緒なのかわからないのですが？」

レナード達はブランドール城が襲われたことやシズナ姫が攫われたこと、砂漠の遺跡で助けてから行動を共にすることになった経緯などを話した

(市長)

「なるほど…、もしよろしければあのバカ息子も連れて行ってもらえないでしょうか」

(カーラ)

「あのバカ息子をか？」

(市長)

「足手まといにはならないと思いますし、皆さんと旅をすることで色々と学ぶこともあると思います」

(賢士)

「確かに足手まといにならないだけの實力はあると言えよう」

(レナード)

「そうなのか？」

(エルドア)

「気づいてなかったのか」

賢士がエルドアの言葉を引き継ぐ形で偽物の女神像を指さす

(賢士)

「あの女神像の眼には本物のファイアストーンが入っておるぞ」

(カーラ)

「なに!？」

(エルドア)

「ファイアストーンを得るための苦労は我々もよくわかっているはずだ」

(ユウリ)

「それをあの人は父親のためにとってきた」

(レン)

「あのおつきなトカゲを倒したんだね」

(レテイシア)

「そんだけ強くて優しいってことだよ」

(市長)

「私もそれはわかってるのですがあの通りの性格なのでどうも素直になれなくて」

(レナード)

「じゃあさっきの怪我は」

(賢士)

「まちがいなくファイアリザードに囲まれてできたものであろう」

(賢士)

「戦士としての実力はあるだけにそうして背中に出て来た傷は未熟の証明としか思えぬのやもしれぬな」

その時扉の向こうからくしゃみや音が聞こえた

(???)

「ふえ…、くしゅん」

(カーラ)

「誰だ！」

と勢いよく扉を開けると

(シーザー)

「くうう…、すんげえバタだよなこれ」

と言ってるシーザーがいた

(市長)

「シーザー聞いておったのか？」

(シーザー)

「まあね、ほんととは後でちゃんと話すつもりだったけどちようどいいや」

(シーザー)

「俺からも頼むよ、あんた達の旅に連れて行ってくれよ」

(レティシア)

「仲間は多い方が楽しいしみんないよね」

と言いながらもうレティシアは答えがわかっているとわんばかりの楽しそうな微笑みを浮かべている

(エルドア)

「面白い男ではあるしな」

(ユウリ)

「いいんじゃない」

(カーラ)

「勝手にしろ」

(レナード)

「まあまあそう言わないで、歓迎するぜ」

(シズナ)

「よろしくお願いします」

(市長)

「女神像を持ってきてくれただけでなく息子がお世話になるとは…、これは私の出来る限りのことで何かお礼をしなければいけませんね」

(レナード)

「それだったらグリードをバンカーロードの古代遺跡のある入り口へつけてもらえませんか」

(市長)

「おお、それでしたらすぐにでもと言いたいのですが…」

(レナード)

「難しいのか？」

(市長)

「今は採掘のオフシーズンですのでデミツールを採掘場の入り口まで動かすことから始めなくてはなりません、それを仕事としてる調教師のアミルにはただいま休みをと

らせておりました」

(エルドア)

「それは仕方がなからう、普通オフシーズンで仕事もないのに働かせるわけにはいかんしな」

(市長)

「その通りでして、それともう一つ問題があるのですが」

(シーザー)

「いやー、デミツールを動かすにはアミルのやつがグリードの地下経由でデミツールの頭へ行く必要があるんだけど」

(シーザー)

「そーゆーとこっつていつの間にかモンスターが居ついたりするだろう、しかも今はオフシーズン」

(レナード)

「わかった、アミルを護衛すればいいんだろ」

(シーザー)

「まっ、そういうことだな、なーに俺がいるから楽勝楽勝」

(カーラ)

「バンカーロードへ行くのはそれでいいがもう一つお願いしたいことがあるのですが」

(市長)

「なんだね」

(カーラ)

「私の妹を、レンをここで預かってもらえないでしょうか」

(市長)

「ふむ、詳しく聞かせてくれないかね」

カーラはアルバナや砂漠遺跡であったことやウィザードのことを話してレンを守ってほしいと頼み込んだ

市長は表向きは侍女見習いとして雇うということにしてレンを守ることを承諾してくれた

シーザーが「こんなかわいいこちゃんと一緒にいけないなんて選択間違ったかな?」とか「これなら残つときやよかつた」とか言つてたが全員一致で黙殺した

市長との話しが終わつた後でレティシアはビッグロを用意した

(レティシア)

「ビッグロでマーシヤにちよつと頼んでおこ」

(ユウリ)

「何を？」

(レティシア)

「シーザーさんの装備とレンの装備の回収」

(カーラ)

「確かにあんな高い防具を借りっぱなしというのは気が引けるしこいつの装備もいるしな」

(シーザー)

「おいおい、こいつつてのはどうかと思うぜ、さんはいらないけどな」

(レティシア)

「えーと、それじゃあシーザー」

(シーザー)

「それにしても今から装備を頼むなんてそんなに急ぐものなのか？」

(レティシア)

「うん、ミスリルの鎧があれば段違いに安全だもん」

(レナード)

「確かにこれいい鎧だよな」

(シーザー)

「そうか、ならゴンドラ使つて運び込むように手配しとくぜ」

(シーザー)

「それと良い槍があつたらそいつも持つてきてもらえないか」

(レティシア)

「オツケーオツケー」

(シーザー)

「まあゴンドラ使つても明日にならなきや届かないだろうから今日はとりあえずうちに泊まつてけよ」

(レナード)

「お言葉に甘えさせてもらうよ」

(ユウリ)

「だけど宿のチェックアウトと荷物の持ち出しはしておかないとね」

レナード達はドリスドール邸に泊まつて明日シーザーの装備が届いてからアミルを探すことになった

龍騎士8



翌日ドリストール邸で昼食を食べて一休みしているところにシーザー宛ての荷物が届いた

(シーザー)

「おお、きたきた」

(レナード)

「きたみたいだな」

早速シーザーの部屋に運んで中身を確認する

(シーザー)

「おお、この鎧レナード達とお揃いじゃねえか」

(レナード)

「ミスリルの鎧まだあったんだな」

(シーザー)

「それとこれは槍と冊子？」

(シーザー)

「この冊子は槍について書かれてるな」

(シーザー)

「なになに、これは蒼紅槍そうこうそうと言つて火の属性を持つ短槍と水の属性を持つ短槍の二つで一セットになつてる槍だとき、簡単に繋げることが出来るから繋げて長槍として使うこともばらして短い双槍として使うことも出来るんだつて」

(シーザー)

「それと火の槍に風の属性石を水の槍に土の属性石をつけてるから魔法的な使い方として炎風を起こしたり泥流を作ったり出来るんだつて」

(レナード)

「すごいじゃないか」

(シーザー)

「ほんとにこりゃいいもんだな」

(レティシア)

「それじゃ、用意が出来たらアミルさんを探しにいこつか、つてどこにいるんだつて」

(シーザー)

「アミルのやつは普段はダウンタウンの酒場にいると思うね、あそこの常連だしな」

(レティシア)

「ラウスさんもそうだけどハピタルって酔っ払いのことだっけ？」

(ユウリ)

「そんなことはないは…ず？」

(エルドア)

「ダウンタウンか…、まあ今回はいいか」

(レティシア)

「やったね」

(レナード)

「前は留守番だったからな」

(ユウリ)

「ダウンタウンってどんなところなんだろ」

(シズナ)

「エルドアが止めるような所なんてほんとにどんな所なんでしょう」

レナード達は全員で都市列車に乗ってダウンタウンへと向かった

場所は変わってダウンタウンの酒場

(酒場のマスター)

「おや、人数が増えているようですね、どのようなご用でしょうか」

(エルドア)

「調教師のアミルを探しているのだが来ていないか？」

(マスター)

「ああ、それならそこに座ってるメガネをかけたハピタルがそうですよ」

(レナード)

「あのう…、アミルさんですよ？」

(アミル)

「はっ、確かに自分がアミルであります但何かご用件がおりますか!？」

メガネをかけたウサギがハキハキと答えている

(レナード)

(しかしなんで軍人口調?)

(レナード)

「まあとりあえずこれを見てくれ」

そう言って渡したのはドリストール伯爵の紹介状である

(アミル)

「これは正しく旦那様の字！」

(アミル)

「旦那様の望みあらば全力を持って働く所存であります、ありますが……」

(レナード)

「どうかしたのか？」

(アミル)

「今はオフシーズンでモンスターの掃除がされておりません、なのでグリードの地下を通ってデミトールの頭へ行くなんてことは自分一人ではとてもとても……(がつくり)」

(シーザー)

「心配すんなよアミル、俺がいるんだからしっかり守ってやるぜ」

(アミル)

「おお、坊ちやまにそう言っていただけなんて自分は……、自分は……、感激であります！」

(レナード)

「それに俺達は大抵のモンスターなら軽く蹴散らせるぜ」

(シズナ)

「本当に皆さん強くて頼りになりますのよ」

(カーラ)

「やれやれ、勝手にやってな」

そしてグリードの地下に入ったがうるんな者が入れないように色々と仕掛けがされていたり

地下のどこかで自動生成されたゴーレムの類が無差別に襲うように命令された上で徘徊していたり

やたらと大きい蜘蛛があちこちにおいてユウリが軽くパニックを起こしたり

その蜘蛛をシズナが見ても以外と平気だったり

とにかく突っ込み所満載なグリード地下である

(レナード)

「なあアミル」

(アミル)

「なんでありますか」

(レナード)

「仕掛けとかゴーレムとかなんとなんないのか？、ただの無駄だと思うぞ」

(アミル)

「自分はこの地下に関してはデミツールまでの道しか知らないので無理であります」
(シーザー)

「俺んともグリードの地下を網羅してるわけじゃねえしな、望み薄だな」

(レナード)

「そうか…」

(エルドア)

「安全な場所でキャンプをすろぞ」

そしてあれやこれやとあつた後でデミツールの頭の近くへ出ることが出来た

(レナード)

「すごいな、これがデミツールか」

(レテイシア)

「こうしてでつかい頭を見てると改めてすごいなーってのがよくわかるね」

確かにとんでもなくでつかいサイズのカメラのような顔を見てるとそんな気分にもなるというものである

(シーザー)

「それじゃ頼んだぜアミル」

(アミル)

「はっ、お任せであります！」

アミルはデミトールの顔がよく見える位置に行つて自分の体をロープで固定する

(アミル)

「ウォーン！、ウォーン！」

そして大きな声でデミトールの注意を引きつつ体全体で大きな身振りゼスチャーでデミトールに指示を出す

それを見たデミトールはすり鉢状の大地の壁になっている断崖へ向かつて歩き前足を上げて断崖へ張り付くことで断崖に開けられた採掘場の一つへの道を繋いだ

(アミル)

「やりました、上手くいったであります」

(シーザー)

「よしでかした、んで俺達にとってはここからが本番だな」

(レナード)

「ああ行こう、採掘場の古代遺跡へ」

龍騎士9

ウイザード 飛行船

(銀髪の青年)

「ベルシタン」

(ベルシタン)

「ははあ」

(銀髪の青年)

「なぜ砂漠の遺跡で契約者が生きてままの状態で白騎士を手に入れようとした」

(ベルシタン)

「まさかあのようなことになるとは思ってもみなくて」

(銀髪の青年)

「貴様のやるべきことはシンナイトの奪取だというのはよくわかっていよう」



(ベルシタン)

「それはもちろん」

(銀髪の青年)

「ならなぜシンナイトについて調べておかぬ、調べておけば契約者が存在する間は契約者以外に触れること叶わずとの決まり事がわからぬはずがないだろう」

(ベルシタン)

「申し割りません…(ガクガク)」

(銀髪の青年)

「やつらはバンカーロードの遺跡へと向かっている」

(銀髪の青年)

「これが最後のチャンスだ、シンナイトを奪ってこい」

(ベルシタン)

「はっ、ははあ」

ベルシタンが慌てて出て行った後で

(銀髪の青年)

「シャブールよ」

(シャブール)

「なんでしようか」

(銀髪の青年)

「ベルシタンが失敗した時は…、わかっているな」

(シャブール)

「お任せください」



バンカーロード採掘場入り口

(シーザー)

「さーてさくさく行きますか」

(レティシア)

「ちよつと待ってー、なーんかおかしいような気がするよ」

(レナード)

「おかしい？」

(レティシア)

「ねえシーザー、採掘のオフシーズンっていつから？」

(シーザー)

「そりゃあ、二か月前からだけど」

(レティシア)

「じゃあやつぱり沢山入っていった形跡があるのはおかしいよ」

(シーザー)

「なんだって」

(エルドア)

「ウィザードか」

(レティシア)

「多分ねー」

(レティシア)

「だからこんなものを用意してみたよー」

レティシアが担いでいた大きな袋を地面に置いて中を見せるとそこにはマナポーション(MP回復)が山盛り入っていた

(レティシア)

「お城の時みたいにあたしの魔法で姿とか気配とかを消しながら奥までこっそりいっちゃおうってわけ」

(レナード)

「なるほど、それで魔法を使いまくるレテイシアはマナポーションをがぶ飲みすると」
(賢士)

「まあ…、やろうと思えば出来るが、そんなにがぶ飲みすると太るぞ」

(レテイシア)

「ポ…、ポーションの類は飲んだ分だけ消費すれば太らないもん」

(賢士)

「ふふ、なら良いがの、それと遺跡への道案内は汝に任せたぞ」

(シーザー)

「任せておけって」

賢士の魔法の大盤振る舞いで遺跡の少し前の安全なポイントまでたどり着いたレナード達はレテイシアの作戦が正しかったことを思い知らされた

採掘場の中にはあちこちに…、そりやあもう石を投げればウィザード兵に当たるんじゃないかというくらいあちこちにウィザード兵が溢れかえっていた

巨大なトカゲとかたまにドラゴンとかいたりするけどウィザード兵達はモンスターには手を出さずに何かを探してるようだった

そしてモンスターは普通なら縄張りを荒らされてケンカを売っているとところだが

ウィザード兵があまりにも多すぎてどうしようか戸惑っているばかりだった

(レナード)

「あれ見つかったたらとんでもないことになってたな」

(シーザー)

「ああ、間違いない」

(レナード・シーザー)

「レテイシア様々」

(レテイシア)

「あはは」

(エルドア)

「このすぐ先に遺跡があるんだな」

(シーザー)

「ああ、そのはずだ」

(レナード)

「よし、行こう」

バンカーロードの遺跡に踏み込むと噂のドラゴンはいなかった

その代わりそろそろ見飽きた顔の一団が遺跡のあちこちを探していた

(ベルシタン)

「おや、またあなた達ですか、それに姫様もおいでとは丁度いい」

(賢士)

「よっ、ピエロ^ら面、おおかたドラゴン目当てであろうが留守のようだの(どうやらあやつは龍騎士を肌身離さず持つておるようだの)」

(ベルシタン)

「ええ、わかっていますよ、だから巢を漁っているのです」

(ベルシタン)

「ドラゴンは縄張り意識が強いと聞いておりますのでこうして巢を漁っておればその内帰ってくることでしょうし、それに何か組織の役に立つものでも見つければ儲けものですからね」

(ベルシタン)

「ですがこのまま待つているのも芸がありませんのでね、あなた達を殺してシンナイトと姫様を頂くことにしましょう」

(ベルシタン)

「お前達ー！」

ベルシタンの声に応じてウイザード兵二人が懐からカードを取り出す

(レナード)

「また命を簡単に捨てる気かよ」

(エルドア)

「あれはおそらく人形兵だな」

(ウィザード兵)

「アドベント」

人形兵が喚び出したのは槍を持つ緑色の魔人と剣を持つ黄色の魔人だった

(レナード)

「こんちくしょうが！、我に力を…変身！」

白騎士は変身と共に剣の魔人の方へ飛び込みクロスレイジを叩き込んだが剣で受け止められた

だが白騎士の攻撃はそれで終わらずにクロスレイジからそのまま足払いで横に薙なぎ隙なく剣で攻撃を繋げていく

剣の魔人は白騎士の勢いに押され剣で辛うじて受けながらも膝をつく

槍の魔人が剣の魔人を援護するように白騎士に攻撃を仕掛けるが何かに弾かれてしままう

(ユウリ)

「戦神の加護」

ユウリがあらゆる物理攻撃を一度だけ防ぐ防御魔法で白騎士を守っていた

(賢士)

「妾達で汝を倒せるかどうかはわからぬ、だが白騎士の援護はしてみせようぞ」

(槍の魔人)

「うが？、がああああ！」

槍の魔人がやつきになってレティシア達に攻撃を仕掛けるが

(ユウリ)

「戦神の加護」

事前に戦神の加護を行き渡らせて攻撃を受けるたびに掛け直すことで鉄壁の守りを維持してるレティシア達には通用しない

(シーザー)

「こりや飛び道具じゃねえと届かねえよな、ならこれでどうだ」

シーザーが槍に風の力を乗せて突きを連発することで真空波の乱れ打ちをしたが当たってもかすり傷にしかならなかった

(賢士)

「ならここでも食らえや、命を容易く捨てるうつけが！」

賢士はその叫びと共にバーストクロスを打ち込み槍の魔人の両目を潰した

(槍の魔人)

「ぐぎやああああおー！」

(シーザー)

「レティシアって見た目と裏腹にえぐいことすんのな」

(賢士)

「このやり方がでかぶつ相手には効果覿面でのう」

レティシア達が奮闘してる時も白騎士は五月雨のごとく剣劇けんげきの雨あられを降らせていたが劍の魔人の守りを崩すことまでは出来ないでいた

(レナード)

(ちいいい、思ったよりもしぶとい、このまま叩き込んで倒せるのか?)

齒列な攻撃を仕掛けながらもレナードは何かいい手はないかと模索していた

(レナード)

(そう言えば黒騎士の技は直接斬られるのと同じくらい効いたな)

(レナード)

(ならあれにもう一撃加えて強化出来ないか?)

(レナード)

(敵は防戦一方だし試す余裕はありそうだな)

(レナード)

(確か風の力を使って剣気と風の衝撃波をまとめて飛ばしてたとか言ってたっけ、なら)

白騎士は一度バックジャンプして距離をとると剣の魔人に対して大上段に剣を構えると左足を大きく踏み込みながら剣を振り下ろし衝撃波を打った

ここまでは黒騎士のソニックブレードとほとんど同じだが白騎士は左足を踏み込んだ勢いを利用して衝撃波を追うように走り剣を左から一の字形に叩き込んだ

一撃目の衝撃波と重なり十の字形に剣を叩き込まれた剣の魔人はその威力を剣で防ぎきれずに吹っ飛ばされた

白騎士は吹っ飛ばされて無防備になつて剣の魔人に容易く止めを刺すことが出来た

(レナード)

(これはもう必殺技だな、名前をつけるとしたらソニッククロスか)

そう考えつつ白騎士が振り向くと槍の魔人が左手で顔を押えながらジタバタしてるのが見えた

(レナード)

「隙だらけだぜ、クロスレイジ」

(ベルシタン)

「おやまあ、こんなにあっさりやられるとは思いませんでしたね」

(シヤブール)

(役立たずが、まだ魔法が敵味方を判別するための識別式も唱えきっていないのに)

(シヤブール)

「せめてもう少し時間を稼いでいただきたいものですね」

(ベルシタン)

「いや、そう言われてもどうしましょう(もう切り札を出さねばなりませんか)」

その時ばっさばっさと何かの羽ばたく音が聞こえてきた

(レナード)

「この音は?」

(シーザー)

「どうやらお帰りのようだな」

皆の視線が遺跡上空に集まる

そこには赤い鎧を身に包んだ巨大な竜がいた

その竜は羽ばたきながらゆっくりと遺跡内部に下りてきた

(賢士)

「よう、久しぶりだのうマスタードラゴン」

(マスタードラゴン)

「姿は違いますがその喋り方には覚えがありますね」

(賢士)

「龍騎士は鎧として装備はしておるがシンナイトとしては封印されておるのう、一万年もの長きに渡る妾との約束を守ってきちんと肌身離さずに守ってくれたようだの」

(マスタードラゴン)

「それはもう文字通り肌身離さずにつて、もしかしてレティシア殿ですか？」

(レティシア)

「その通りよ、かれこれ一万年ぶりになるかのう」

(マスタードラゴン)

「お久しぶりです、もう二度と会えるものではないと思っていました」

(賢士)

「そう思うのは当然よのう、ドラゴン族と違って人間は一万年も生きられぬしのう」

(マスタードラゴン)

「それにしてもレティシア殿、一万年も立ってどのようなご用でこられたのですか？」

(賢士)

「そう、あれから一万年、つまりは予言の時よ」

(賢士)

「だから汝に預けた龍騎士を返してはもらえぬか」

(マスタードラゴン)

「龍騎士は元よりレテイシア殿からお預かりしたものの、返すことに異論はありませんが龍騎士の契約者がいなければ宝の持ち腐れではないのですか？」

(賢士)

「その契約者だが、面白い人物がおる」

(賢士)

「あのドレットドヘアの槍を持つ青年はシーザーと云うての、グリードの領主のドリストール伯の息子であり竜の眼の持ち主よ」

(マスタードラゴン)

「あのドリストールの？」

(マスタードラゴン)

（それに竜の眼ですか、これは偶然とは言えませんね、私が待ち望んでいたのは彼なのでしょうか、確認してみなくては）

(マスタードラゴン)

「直接そのドリストール伯のご子息を話しをしてみたいですね」

(賢士)

「シーザー、マスタードラゴンが汝と話しをしたいそうだ」

(シーザー)

「おつ…、おう…、それにしてもすげー迫力だな」

マスタードラゴンがシーザーの方へ数歩歩き出したところで突然赤い魔法陣が現れてマスタードラゴンを包み込んでしまう

(マスタードラゴン)

「!？」

(ベルシタン)

「ビンゴ、ドラゴン相手ともなればそれなりの備えはするとうものですよ」

(レナード)

「これは」

レナードの脳裏にラグニツシユ砂漠の遺跡での戦いのことが鮮やかに蘇る

(レナード)

(やつが碌な事をしないのは確実だ)

白騎士がマスタードラゴンの方へ駆け出す

(シャブール)

(くくく、ここまで時間を稼いで頂ければ十分です)

レナード達は皆ベルシタンに氣をとられていてシャブールのことをすっかり忘れていた

(シャブール)

(これで我らの勝ちです)

(シャブール)

「識別式・魔力沈降(マナシンク)」

龍騎士10



(シャブール)

「マナシンク魔力沈降」

レナードは魔法陣から判断してマスタードラゴンに何か仕掛けられたと思い守るため
の行動に出た

(レナード)

「させるか、守れ、守れ、守るんだー！」

盾を投げて盾の持つ能力で魔法陣からマスタードラゴンを守ろうとしたが…

だがレナードの予想と違い盾はマスタードラゴンの遙か手前でごく普通に失速して
ガランガランと地に落ちた

(レナード)

「なに」

(賢士)

「まさかこれは、…魔力が押さえつけられてるといふのか？」

(賢士)

「くっ…ならこれは、…出来るのか、間に合うのか」

(賢士)

「トユル・トユオーラ・トユーリ・トユーリ・簡易魔力消去」
デイスベライザ

だがマスタードラゴンを包む魔法陣に変化はなくマスタードラゴンの足元から黒いもやのようなものが出てきてマスタードラゴンを拘束する

(賢士)

「やはり簡易式では魔力が足りぬか、だが本式の魔力消去をするには時間がなさすぎるわ」

マスタードラゴンを拘束した魔法陣は上空に無数の光の矢を作りその全てがマスタードラゴンに降り注ぐ

(マスタードラゴン)

「クオオオオオン！」

マスタードラゴンは倒れこみ魔法陣はその役目を終えて消滅する

(賢士)

「マスタードラゴン！」

(ベルシタン)

「ふひひひひ、もうあのドラゴンもこれで終わりでしょう、その後で龍騎士を頂けばいいだけです」

(マスタードラゴン)

「早く…、早く…、あの方に…龍騎士を」

(賢士)

「くうっ…」

賢士はシーザーの元へ駆け出してその腕を引っ掴む

(賢士)

「シーザーこっちこい」

(シーザー)

「だけどあいつらをなんとかしないと」

(エルドア)

「シズナは魔法陣で守られているはずだしここは私とカーラで守りきる」

(カーラ)

「早く行け」

(シーザー)

「わかった、頼んだぜおっさん、カーラ」

(賢士)

「こつちだ、早うせい」

(シーザー)

「わーてる、わーてるって」

(シーザー)

「きたぜ、俺に何の用なんだ鎧のドラゴン」

(マスタードラゴン)

「おお…、やはり…貴方が…そう…でしたか…」

(マスタードラゴン)

(一目で…わかり…ました…)

(マスタードラゴン)

「貴方に…貴方に…この…ちか…ら…を…」

マスタードラゴンは最後までその言葉を紡ぐことが出来ずに力尽きた

そしてその体は無数の光となって消えたがその光はシーザーの体に纏わりつき龍を

模^{かたど}ったベルトになった

(シーザー)

「おいドラゴン、消えるなよ、俺は…、俺はまだ何も話しちゃいねえんだぜ」

(シーザー)

「消えるなよ、何とか言えよドラゴン！」

(賢士)

「…：マスタードラゴンが…、よくも妾の友を」

(賢士)

「ゆるっさーん！、レイニアロー襲雨」

賢士はベルシタンを狙って凄まじい量の氷の矢を降らせた

シーザーはその殺気に反応して殺気を向けられているベルシタンを睨みつけた

(シーザー)

「てえめえかー！」

シーザーの闘志に反応して竜眼が光り闘気となってシーザーを包み込む

(ベルシタン)

「これは避けられませんね、なら切り札です」

(ベルシタン)

「アドベント」

(シーザー)

「龍閃」

ベルシタンを睨みつけたまま構えをとっていたシーザーがそのセリフと共に消え瞬きするまもなく槍を構えたままベルシタンを貫くため突撃していた

だが一瞬早くアドベントを起動してたベルシタンは黒い光の柱に包まれた

その黒い柱は賢士の矢の雨もシーザーの闘気を纏った突撃も跳ね返した

そして黒い光が収まるとそこには馬の代わりに虫の体をつけたケンタウロスのような黒い魔獣が立っていた

(賢士)

「あれは…、まさか…、サルガタナスか!？」

(シャブール)

(上手く注目を集めてるようですね、このまま魔法で姿を消したままシズナ姫へ近づくことが出来れば…)

そのシズナは白い光に包まれて呪文を唱えていた

(???)

(今こそ龍騎士の復活する時、マスタードラゴンの魂と共に)

(シーザー)

(そうか…、こいつは…、このベルトは…)

(シーザー)

「よおおおーし！、てめえをぶっ倒してやるぜ」

(シーザー)

「古の大地を焦がす、紅き翼竜ラーヴェインよ我に力を…変身！」

そのセリフに応えてシーザーが光に包まれその光が収まるとマスタードラゴンが身に着けていた赤い鎧が人型ひとがたとなって現れた

(シーザー)

(こいつが…、龍騎士か…)

(???)

(そうです、これが龍騎士です)

(シーザー)

(この声は…、お前はさっきのドラゴンなのか?)

(マスタードラゴン)

(はい、こうしてお話するのは初めてですねマスター)

(シーザー)

(え…、ええー、お前確かさっき、それにマスターって?)

(マスタードラゴン)

(はい、確かに肉体は滅びましたが精神は龍騎士の守護者として龍騎士の契約者を助けるために存在してるようなのです)

(シーザー)

(もう何が何だかわかんねえな)

(マスタードラゴン)

(ですが一つはつきりしてることがあるはずですよ)

(シーザー)

(そいつは…、あの魔獣をぶっ潰すってことだな)

(シーザー)

(そのために力を貸してくれるか)

(マスタードラゴン)

(はい喜んで)

(シーザー)

「いくぜレナード、あのくそつたれをぶちのめす」

(レナード)

「その声シーザーか」

小手調べのつもりか白騎士はサルガタナスの正面から挑んで剣を振るうがサルガタナスの外骨格に包まれた腕で軽々と受け止められている

だが白騎士が魔獣を攻撃してる間に龍騎士は空を飛んで魔獣の背後の上空を位置取り槍で魔獣の背中を突き刺した

(シーザー)

「ビーやら見た目通り背中が弱いみたいだな、から空きだぜ」

空を飛ぶことが出来るため立体的な動きが要求される龍騎士は本来は動かすだけでも一苦労となるところだが、シーザーの操縦イメージにマスタードラゴンが応えて様々な操縦補正を行っているために龍騎士初心者でも華麗に戦うことが出来るようである

(サルガタナス)

「グギャアアアアアアオー！」

背中をグツサリと刺されて悲鳴を上げる魔獣

だが魔獣は苛烈な反撃に出た

(サルガタナス)

「グロロロロロウロウロウ」

魔獣が唸り声を上げると魔獣も騎士達も取り囲む巨大な魔法陣が展開され魔法陣の

中に無数の黒炎が生まれて無差別に攻撃し始めた

白騎士は普通に盾で防ぎ龍騎士は空中でひらひらとアクロバティックに避けるが魔獣へ攻撃を仕掛ける余裕はなくなった

(レナード)

「くうっ…、これじゃ攻撃出来ない」

(サルガタナス)

「グフオッフオッフオッフオッフオッフオッフオッフオッフオッフオ…」

魔獣は黒炎が当たるのも構わずに愉悦の笑みを浮かべている

(シーザー)

「ちい、あいつは当たっても平気なのか…よっと」

攻撃を避けながらグチをこぼすシーザーであった

(レナード)

「ちくしよう、守れ、守ってくれ、力を出してくれよ！」

レナードの叫びに応えて盾の能力が胎動するのは感じられるが発動するところまで力が溜まらないようだ

(賢士)

「くうう…、あやつ弱点は？」

(賢士)

「見当たらぬか、あやつが苦手とする攻撃があるのかどうかもわからぬ」

(エルドア)

「せめてあの魔法陣を解除出来れば」

そう言つてエルドアは、デイスベルの呪文を唱え始める

その時、パンと軽く叩いた音はたが聞こえて取り込み中のエルドアと騎士達以外はそちらを向いた

そこらは結界魔法陣に入り込みシズナの背中に何かを押し当てているシャプールの姿があつた

(シャプール)

「シズナ姫は頂きます」

(シズナ)

「えっ…？、えっ…、えっ…？」

シズナは光に包まれて消えてしまった

(シーザー)

「なっ…、結界で守っているはずだろおっさん」

(エルドア)

「いつの間…」

(賢士)

「もしや魔力沈降とは」

(シャブール)

「お気づきのようですね、想像してる通りだと思いますが説明してさしあげましょう」

(シャブール)

「魔力沈降とは効果範囲内のアイテムや陣によつて発動する魔力、つまりは充填された魔力を最低レベルまで沈静化して魔法陣やマジックアイテムの無効化あるいは最弱化する魔法です」

(賢士)

「それで白騎士のレア・メタリカの盾が効果を出さずシズナを守っていた結界魔法陣も用を果たせなくなるほど弱つたと、そういうことかの」

(シャブール)

「ええ、その通りです」

(カーラ)

「ちよつと待て、それはおかしいぞ」

(カーラ)

「ならドラゴンを倒したトラップとかシズナを転送したアイテムとか使えるのはおかしいだろ」

(賢士)

「確か魔力沈降を使う時に識別式とかほざいておらんだか？」

(シャブール)

「よくおわかりで、時間をかけて準備することで味方の充填魔力を対象から外すことが出来るのです」

(賢士)

「ぬかったわ、これを使われた時点で妾達の負けよ」

(賢士)

「魔力沈降マナシンクを破るためにはそれ以上の魔力で解除するほかないのだが先に使われては魔法陣でどうにかすることも出来ぬ」

(賢士)

「まあ儀式魔法消去リチュアルデイスベルなら何とか出来るが準備にやたらと時間がかかるから論外だしの」

(シャブール)

「さすがと言いたくなる洞察力ですね、貴女に早い内に対処されていたら危ないところ

ろでした」

(シャブール)

「その彼方の注意を逸らすことが出来たのですからあの男も役に立ってくれたものです、これで最後というのが勿体無いぐらいにね」

(賢士)

「よくわかっておるではないか、妾が気づいておれば結界を無効化して攫うなどというふざけた真似など許しはしなんだぞ」

(シャブール)

「それでは皆さん御機嫌よう」

そう言ってシャブールは自分の体に転送符を押し当てて発動させた

それはベルシタンもウィザード兵達も全てを見捨てて逃げたということの意味する

(カーラ)

「ちい、逃がしたか」

シャブールが逃げてからも白騎士と龍騎士はサルガタナスの魔法陣に苦勞していたがいきなり白騎士がバリアに包まれて黒炎を弾いた

(レナード)

「これは…、盾の力か」

(賢士)

「あやつがいなくなったことで魔力沈降^{マナシンク}も解除されたようだのう」

白騎士はバリアに包まれたまま盾を前に押し出してサルガタナスに突撃した

その勢いに思わず防御態勢をとったサルガタナスの上空から龍騎士が攻撃を仕掛ける

(シーザー)

「龍閃」

龍騎士の槍は闘気に包まれサルガタナスの背中から内臓深くまで貫いた

竜騎士11



(サルガタナス)

「グロロロロロロウ…」

魔獣はしばらくすると動かなくなりチリとなって消えていった

(賢士)

「珍しいものがとれるかと思おたが残念だのう」

(レティシア)

「まったくだね、…と出た出た、マーシャさんに伝えといて、魔人の死体二つ確保したって」

連絡してる間にレナードとシーザーが元の姿に戻ってやってきた

(シーザー)

「姫さんはどうした、…攫われたか」

(エルドア)

「ああ、結界を無効化された上で転送された」

(レナード)

「そんな…、あなた達がついていながらどうして？」

(賢士)

「あのピエロ顔が派手にやってるのを隠れ蓑に魔力沈降マナシンクを使われた時点で負けてしも
うたのよ」

(レナード)

「どういうことだ？」

(賢士)

「途中で盾の魔力が使えなくなったことがあつただろう、それも魔力沈降マナシンクの効果の内
よ」

(エルドア)

「それに魔法陣とかも効果もなくなる上に味方には魔力沈降マナシンクの効果が及ばないようにな
なっていたようだ」

(レナード)

「なら早く追いかけてシズナを取り戻そう」

(エルドア)

「待て、落ち着け」

(賢士)

「シズナを取り戻すより他にやらねばならぬことがあるのを忘れるでないぞ」

(カーラ)

「まだ封印されたシンナイトは二体残っているんだからシズナの力はウィザードにとつても必要だろう」

(エルドア)

「それに何よりシーザーは市長の息子だ、バンカーロードのことに片付いた以上家に報告しないわけにはいくまい」

(レナード)

「う…、そうか…」

(ユウリ)

「まっ、あのウィザードの連中をなんとかすればシズナも安全になるんだから頑張ろう」

(レナード)

「ああ、そうだな」

(シーザー)

「それじゃあ、いざ故郷へつてのは俺だけか」

ドリスドール邸に着くと執事のお爺さんがものすごく慌てふためいてやってきた

(執事)

「ああ…、坊ちゃん、坊ちゃん」

(シーザー)

「どうした」

(執事)

「旦那様が…、旦那様が…」

(シーザー)

「なんだと」

シーザーは急いでドリスドール伯の寝室へ駆け込んだがベッドにドリスドール伯が寝てるのを見て手近な所にあつた椅子をベッドの側に持つてきて座つた

(シーザー)

「ただいま父さん」

(シーザー)

「(なんて言やいいんだろ…) 見ろ、父さんまるで寝ているみたいだろ、これでも死ん

でるんだぜ」

とある有名な青春野球マンガの名セリフが出てきてしまうあたりシーザーも相当テ
ンパっているのかもしれない

(シーザー)

「つて何言ってるんだ俺、目：開けてくれよ父さん」

(執事)

「坊ちゃん、旦那様からこれを渡すようにと」

執事から渡されたのは一包みのメッセージだった

(メッセージ)

「息子よ、いつも悪く言ってしまったてすまなかつた」

(メッセージ)

「あのレパーヌの女神が偽物であることは最初からわかっていた、その眼の意味もな」

(メッセージ)

「命がけで私のために作ってくれた偽物なんだ、誰がなんと言おうとあれは私にとつ
て本物以上の価値がある物だ」

(メッセージ)

「だが私には市長としての立場もある、素直になれなくてすまなかつた」

(メッセージ)

「それとシーザー、お前に伝えておかなくてはならないことがある」

(メッセージ)

「12年前にお前を預けていった男のことだ」

(メッセージ)

「ミディアスと名乗ったその男はお前を預ける時にこう言ったのだ」

(ミディアス)

「どうかこの子を大切に幸せに育ててやって欲しい」

(メッセージ)

「と、今となればその意味もわかる、その子は穏やかに生きることの出来ない運命の子なんだと」

(メッセージ)

「シーザーよ、お前の人生はお前のものだ、思うように生きるといい」

(メッセージ)

「だが忘れないでほしい、お前は何かあると私の息子だということ」

(メッセージ)

「お前の帰る家はちゃんとここにあるということ」

(シーザー)

「く…くう…、父さん…」

しばらくして…、応接間

(エルドア)

「シーザーが12年前に預けられた時のミディアスという男の言葉と市長の確信、それとシーザーが龍騎士の契約者であることが無関係とは思えないな」

(カーラ)

「それに残り二体のシンナイトに関しては手がかり一つないときてる」

(賢士)

「そうなるにあやふやで穴だらけであろうともそのミディアスという男を探さねばシンナイトに関しての進展はなさそうなのだ」

(シーザー)

「なら明日ゴンドラでバランドールまで行くから今日はうちに泊まっていけよ」

(レテイシア)

「そーだねー、そうしよっか」



深夜のドリストール邸ベランダ

(ユウリ)

「何してんのレナード」

(レナード)

「ああ、ちよつと星を見てた」

(ユウリ)

(シズナのビッグロでも待ってたんじゃないかな)

こんなに時についてそう勘ぐってしまつてそんな自分が少し嫌になつた

(ユウリ)

「シズナ攫われちゃったね」

(レナード)

「ああ、それも二回目だ」

そう二回も守れなかつた

(ユウリ)

「何かレナードってシズナのことになると必死だね、お姫様だから？」

またこんなこと言つてしまつてる、やっぱり今の自分は何か嫌だ

(レナード)

「お姫様だからってわけじゃないよ、こんなにも会いに行きたいって思えるのは初めてなんだ」

(ユウリ)

「初めて、じゃあ私は？」

なんとなく見当はついている、わかっているのに聞かずにはいられない

(レナード)

「何言ってるんだ、ユウリとはいつでも会えるだろう」

(ユウリ)

(そういう意味じゃないんだけどな)

わかってはいたけど欲しい言葉はそれじゃないよ、鈍感男

(ユウリ)

(何か遠いな)

心の距離が…、ダメージは大きいよレナード

(レナード)

「俺シズナとは小さい頃に会ったことがあるんだ」

(ユウリ)

「え…、そうなの」

(レナード)

「あの時は親方の用事で城の方に行つて庭園で偶然出会つたんだ」

(レナード)

「シズナは俺の頭に止まつたちようちよを捕まえようとして手を伸ばしてき、あの時のシズナはとても綺麗に笑つてたんだ」

(ユウリ)

「そうなんだ」

(レナード)

「でも誕生祭で見た時は悲しい表情をしていて、だからその時思つたんだ、もう一度あの時の笑顔を取り戻してあげたいと」

(ユウリ)

「シズナは最近いい表情するようになってきてたよね」

(レナード)

「うん」

ユウリはレナードに体を寄せてもたれかかる

(ユウリ)

（レナードがこれだけで慌てて動揺してる…、私のことを女として意識してるから？、それとも遠くなっちゃったってことなのかな？）

（ユウリ）

「ううん、何でもない」

ユウリはレナードから体を話しておどけた風に言った

（ユウリ）

「それじゃレナードお休み」

レナードのことはどうしようもないかもしれないけど

だけどシズナはお姫様だけど友達で

だから助けたいって想いはきつと同じ



同じ頃、カーラの部屋

（賢士）

「毎日のようにブローチを使って記憶の封印を解いてまわっておるのう」

（カーラ）

「私は私だからね、いくら操り人形でもその自覚が出てくれば自我も芽生えるし操り人形のままでいようとは思わないさ」

(賢士)

「違いないの、それだけモチベーションがあるなら随分と記憶を取り戻したのではないかの」

(カーラ)

「もう完全に取り戻してる、レンとは赤の他人だったよ」

(賢士)

「そうか…」

(カーラ)

「だが血の繋がりがだけが家族ではないだろう、最初はどうかあれレンは私の家族だ」

(賢士)

「そうだな」

(賢士)

「だが記憶を完全に取り戻したということはこれからのことを決めなくてはならぬという事ではないかの」

(カーラ)

「これからか…、何があっても兄さんは兄さんだ、家族には違いない」
(カーラ)

「たとえ今は人が変わっていても小さい頃からずっと一緒にいた優しい兄さんには違いないんだ」

(賢士)

「わかった、それ以上言うでない」

(カーラ)

「すまない…、その時がもしきたら…、決して卑劣な真似はしないから」

(賢士)

「それは信用しとる、その時がくるまでは仲間だからの」

(カーラ)

「ありがとう…」

翌日レナード達はゴンドラに乗ってバランドールへ向かった

第四章

黒騎士1



ミディアスに会うためにグリードからゴンドラでバランドールに戻ってきたレナード達は早速情報収集に駆けずり回り町の南西の青い屋根の家がミディアスの家であることを突きとめた

(ユウリ)

「青い屋根の家ってここくらいしかないね」

(レナード)

「となるとここがミディアスという人の家か」

(エルドア)

「そうなるな」

シーザーがコンコンとノックして呼び出してる

(シーザー)

「もしもし、もしもし、ミディアスさんいませんか？」

その声が聞こえたのか洗濯籠を持ったお婆ちゃんが口を挿んでくる

(お婆ちゃん)

「あら、ミディアスさんに何かご用？」

(レティシア)

「うんそうなの、グリードでミディアスさんのこと聞いてどーしても会いたくなつたの」

(お婆ちゃん)

「あらそうなの、でも残念ね、去年悪質な流行病があつてね、ミディアスさんもそれでおつくり死んじゃつたのよね」

(レティシア)

「そんなあ…」

(お婆ちゃん)

「あの人もいい人だったんだけどね、ほんとに残念だよ」

(シーザー)

「これで俺の出生の秘密もわからずじまいか…」

(おばちゃん)

「でもせっかくミディアスさんに会いに来たんだし、せめて息子のセティに会っていったらどうかしらね」

(ユウリ)

「息子がいるんですか」

(おばちゃん)

「ええ、今の時間なら滝の洞窟に石を取りに行ったんじゃないかしら」

(エルドア)

「滝の洞窟というとブラスタのやつか」

(おばちゃん)

「ええそうだよ」

(シーザー)

「洞窟うぐ、めんどくせえな、どうせ居留守でも使つてんじやねえのか？」

(エルドア)

「いや、それはなさそうだな、人の気配がしない」

(賢士)

「確かに家の中には人並みの生命波動も感じられぬし留守なのは間違いないだろう」

(シーザー)

「ちえー」

(ユウリ)

「まあまあ、そんなことくらいで拗ねないの」

(おばちゃん)

「あよやだ私ったら、こんなことしてる場合じゃなかったわ」

そう言っておばちゃんは洗濯籠を抱えて行ってしまった

(レナード)

「それじゃブラスタ平原の洞窟へ行くか」

レナード達は道中のモンスターを蹴散らしながらブラスタ平原北東の洞窟へやって

きた

(ユウリ)

「ここにセテイさんがいるのね」

(賢士)

(確かに人の気配は感じるがそれだけではないのう)

(賢士)

(ほんの僅かだが次元の揺らぎのようなものを感じるのう)

(賢士)

(まあ、他に気がついたものがおらぬ程僅かなものであるし、何かが起こるとも思えん
のう)

(レナード)

「洞窟の中へ行くこう」

洞窟の内装は単純な造りになっており道なりに進むと大きな広場に出た

広場の奥には叩き潰された大蜘蛛の死骸とトロールキングとトロールが二体いた

トロールキングとトロールの一体は大蜘蛛の死骸をいじっておりもう一体のトロールは広
場に繋がるもう一つの通路へ棍棒を突き入れ盛んに威嚇していた

(レナード)

「あれはもしかして」

(シーザー)

「まずいんじゃない?」

(レナード)

「ああ、いくぞ」

(レナード)

「我に力を…変身!」

変身した白騎士はそのまま剣と盾を構えて慎重に様子を見ている

そして龍騎士は派手に槍を振り回して威嚇してトロールの注意を引きつける

(エルドア)

「我々も援護するぞ」

(ユウリ)

「ええ」

レティシアも援護に加わろうとしたが肩を掴まれて止められた

(レティシア)

「カーラ?」

(カーラ)

「さすがに騎士二体ではきついんじゃないか、洞窟で龍騎士が全力を出せるかどうかわからない」

(賢士)

「ならどうすると?」

(カーラ)

「私を向うの通路へ転送しろ」

(賢士)

「なるほどのう、リープ・リトル・リープ 小転移」

白騎士と龍騎士はトルル達と戦っているがさすがに二体でトルル族三体を相手にするのは厳しい

白騎士の盾の力もあつてよく持ちこたえているがトルルキングは並のトルルよりかなり強く戦いが始まってすぐに無視出来ないダメージをいくつかもらってしまった

だがトルル達が白騎士と龍騎士にかまけてる間に広場の奥の通路の方から黒騎士が飛び出してレナード達が入ってきた通路の方へ行き手に乗せていた人間を下した

(ユウリ)

「なんで黒騎士が」

黒騎士はそのままトルル達の方へ向き直り剣ほ構えてソニックブレードを叩き込んだ

こうなると形勢は逆転する

黒騎士との距離が遠くて油断していたトルルはソニックブレードをまともに食らい広場の壁に叩きつけられた

その隙を狙って白騎士と龍騎士は立っているトルルの方に狙いをつけてコンビネーションで攻め立てる

いくらトルルキングが戦上手でも…、否、戦上手だからこそ傾きすぎた形勢を理解し

て逃げ出した

(シーザー)

「こいつ逃げるのか、待ちやがれ」

(レナード)

「待て、それよりこっちだ」

白騎士は黒騎士に対して剣を構えていた

(シーザー)

「そいつ味方じゃないのか？」

(レナード)

「そいつはウィザードの黒鎧の男ドレギアスのシンナイトだ」

(ユウリ)

「バランドールの王様を殺したのもこいつよ」

(シーザー)

「ふーん、つまり仇つてことか」

(シーザー)

(それにしては、見える)のはカーラなんだよな、わけわかんないぜ、もつとよく見て

深く知らないとな)

黒騎士はしばらく様子見でもするようにじっとしていたが体の各所から黒い煙のよ
うなものを吹き出して煙幕を張った

(カーラ)

「レテイシア、今の内に私をお前の後ろへ飛ばしてくれ」

(賢士)

「わかった」

煙幕が晴れた時には既に黒騎士の姿はなかった

(ユウリ)

「大丈夫でしたか」

(黒騎士に救われた青年)

「ああ、この通りケガ一つしてないよ」

(レナード)

「あなたがセテイさんですか」

(黒騎士に救われた青年↓セテイ)

「はい、私がセテイですがそれが何か」

(カーラ)

(名前を聞いた時からそうではないかと思っていたがやはり兄さん、それに何か昔の

兄さんみたいだ)

(エルドア)

「あなたの父のミディアスにシンナイトのことについて色々聞きかけたのですが」

(セテイ)

「そうですね…、ですが父は去年…」

(ユウリ)

「ええ、聞いています」

(ユウリ)

「そう言えばどうして黒騎士はセテイさんを助けたんだろう」

(セテイ)

「それは私にもわかりません、ですがあれは間違いなく漆黒の翼ディニヴァス」

(レナード)

「やはり知っているんですね」

(セテイ)

「ええ、ですがこの話は家に戻ってからにしましょう」

(賢士)

「そう言えば汝はよくここに石を取りに来てるそうだが、どんな石を取りに来ておるのかの」

(セテイ)

「この奥で取れるヒスイ苔の薬石ですよ、趣味が高じてこういった薬石などを採取して生活費にあてています」

(賢士)

「ならば妾は薬石をとってから戻るから汝はレナード達と一緒に町へ戻ってくれぬか」

(レナード)

「いいけど大丈夫なのか？」

(賢士)

「心配いらぬ、薬石を採取したら魔法で合流するからのう」

(賢士)

(それにこの奥の僅かな時空の揺らぎが気になるしの)

(セテイ)

「わかりました、お願いします」

賢士はレナード達と分かれて広場の奥の通路を通って小部屋のような場所へたどり

着いた

(賢士)

「さて薬石はと」

(???)

「探し物はこれかい」

黒騎士2



そうやって昔のついた石を差し出したのは金色の髪をストレートに伸ばした絶世の美少年だった

(賢士)

「そうそうこれこれ…、って汝は!？」

(賢士)

(まさかそんなはずはない、あやつオリジナルは妾のオリジナルとそのマスターがシャイニング・トラペゾヘドロンの存在を否定したはず)

(賢士)

(そしてオリジナルが世界から否定されるということはあやつに連なる同一存在も否定されたはず、存在しているはずがない)

(賢士)

(だがこの圧倒的な魔力とカリスマ性は…)

(???)

「お互いまったく知らないわけじゃないけどこの場合は初めましてだね」

(賢士)

「知らないわけじゃないということはやはり…、だがあの昏き闇を感じられぬのは救いか？」

(???)

「ああ…、あの昏さはオリジナルが繰り返す運命に疲れ切って何もかもがすり減って
いたからね、仕方がないよ」

(賢士)

(落ち着け…、落ち着いてこやつ情報をまとめよう)

(賢士)

(こやつオリジナルは魔術の天才たる魔人、存在の不滅を因果律に刻み込むような術式があってもおかしくない、だがシャイニング・トラペゾヘドロンによって否定された存在が存在出来るのはおかしい、それは明らかな矛盾となる、もし妾がその矛盾と扱
うとしたら…)

(賢士)

(もしや存在を否定される原因そのものを消し去ることで存在そのものをやり直すことを善しとすれば矛盾は大幅に緩和される)

(賢士)

(それをもつて善しとすれば存在否定と因果律とのパラドックスを避けることが出来るから世界法則がそれで善しとした、ついでに存在の継続によるパラドックスを避けるために世界から追放して放浪存在とすることで存在否定との干渉を消したというところか?)

(賢士)

(だからこそのこの世界では初めましてか、なら…、ならば…)

(賢士)

「汝は…、汝はあやつのいったい何だというのだ」

???)

「そうだなあ、僕はマスターテリオンが存在を否定される際に零れ落ちた爪の欠片」

???)

「その爪の欠片が異界の魔法具に触れてその世界に定着した存在」

???)
↓
マスターテリオン・テリアス)

「言うなればマスターテリオンの爪痕、マスターテリオン・テリアスといったところだね」

(テリアス)

「よろしく、オリジナルと極めて近く遥かに遠い世界で生まれた死アトサダー靈秘オプネクロノミコン法外典の
レティシア」

(賢士)

「妾のこともよく知っておるといわけか」

(テリアス)

「僕は時間に縛られないからね、その気になったら色々情報をとれるよ」

(賢士)

「なら妾が暇でないことも知っておろう」

(テリアス)

「でもこんな異世界でオリジナルに縁のあるもの同士が出会えるなんて珍しいから
さ、つつい話したくなる気持ちはわからないかな？」

(賢士)

「そりゃあわからんでもないがの」

(賢士)

「それに気づいてないの、もう僕達は結界の中にいるんだよ」

(賢士)

「そういえば、洞窟の中だというのに洞窟の気配がまったくせぬ」

(テリアス)

「うん、この辺一带の地形を複写した結界なんだよ」

(テリアス)

(この結界の中では外の世界の影響はまったくないんだ、だからここで100年立つても結界を解いて元の世界に帰れば一秒も立ってないからゆっくり話しが出来るよ)

(賢士)

「ふむ、なるほど」

(テリアス)

「それにイシュレニアの話とかレティシアが興味を持ちそうな話でもあるよ」

(賢士)

「なら汝の話しに付き合うのも悪くないかの」

(テリアス)

「それじゃあ、話しに入る前に紹介しておこうか」

テリアスがマントをはためかせるとその中から漆黒の髪的美少女が現れた

(賢士)

「もしやそやつは」

(テリアス)

「そうだよ、これが僕の魔導書ケテウ・ノエルだよ」

(テリアス)

「ご挨拶なさいノエル」

(ノエル)

「イエス、マイマスター」

(ノエル)

「始めましてアウトサイダー・オブ・ネクロノミコン、マスターの魔導書のケテウ・ノエルと申します、どうぞお見知りおきを」

(賢士)

「マスターテリオンのエセルドレーダもそうだがどうも性に合わぬやつよの」

(賢士)

「どこかマスターに媚びておるところが気に食わぬ」

(テリアス)

「どうやらレテイシアのお気に召さなかったようだね」

(ノエル)

「私とネクロノミコンとは大きな隔たりがあるので仕方ありません」

(賢士)

「その隔たりがなんなのか理解しておるのか」

(ノエル)

「オリジナルが敵対していたので埋まらない溝があるのはむしろ当然なのは」

(賢士)

「違うな、オリジナルもそうだが汝は己を主の道具でしかないと思おてそれで満足しておらぬか？」

(ノエル)

「魔導書は主に使われるもの、それが当然のこと」

(賢士)

「妾のオリジナルとは真逆よの、妾のオリジナルは今代の主に出会うまでは主を使命のために使い潰すものと考えておった」

(テリアス)

「確かに真逆だね、でも今代の主に出会うまでということは今とは違うということだね」

(賢士)

「そうよな、妾のオリジナルは今主を愛しておる、そして妾もそれに近いの」

(ノエル)

「魔導書は使う主がいらないと意味のないもの、そんなことはあり得ない」
(レティシア)

「レティちゃんにそう言われるのは何か恥ずかしいけど嬉しいな、あたしもレティちゃんのこと大好きだもん」

(賢士)

「ば…バカ者、そう真つ直ぐ言われると恥ずかしいではないか」

同時進行でノエルの言葉を否定するような出来事が起きていたりする

(テリアス)

「そうだね、僕としては道具というより家族でいたいから君達が羨ましいかな」

(ノエル)

「ま…、マスターまで」

(ノエル)

「ま…マスターが望むのでしたら否はありませんが、その…、家族というものがどうすればいいのかわかりません」

(テリアス)

「まあ、それはじっくり時間をかけてかな」

(ノエル)

「うう…、そもそもあなた達があんなことを言い出すのがいけないのです、勝負なき
い、どちらが優秀な魔導書か思い知らせてあげます！」

(テリアス)

「あんなら、こうなったら止まらないね、それにデウスマキナ同士の戦いなんて随分久し
ぶりじゃないのかい？」

(賢士)

「確かに最近手ごたえのある相手はおらなんだの、だがただ勝負すると言うのも面白
くはなからう」

(テリアス)

「そこで提案なんだけどきみが勝てばその何らかの維持に回してる魔力を僕が肩代わ
りするよ」

(賢士)

「そのようなことが出来るのか」

(テリアス)

「この結界を維持してるのは僕の作った魔法具でね、同じようなやり方できみの維持
してる分をこちらに回すことは出来るはずだよ」

(賢士)

「なるほどのう」

(テリアス)

「それとこの結界の中にいる間は外の世界から時間も含めて隔離されてるから維持に回してる魔力も使うことが出来るはずだよ」

(賢士)

「なんだと」

(テリアス)

「試してみればわかることだよ」

(賢士)

「確かにそうよな」

(賢士)

(魔力の流れを感じれば…、これは…、維持に当てている魔力が亜空間結界へ繋がって
おらぬ、ただ霧散しておるのみか、確かに隔離されておるの)

(賢士)

(ならば維持に当てていた魔力を妾に戻せば)

(賢士)

「おお…、魔力が巡るこの昂揚感、久しく感じてなかつたものよ」

(レティシア)

(うわあ…、すごい、すごいよこの魔力、これがレティちゃんのほんとの力なの)

レティシアが驚くのも無理はない、レティシアが賢士と出会った時点で賢士の魔力の大半が亜空間結界の維持に回されていたのでレティシアにしてみれば魔力が倍増したかのように感じられるのだ

それだけにレティシアは賢士の魔力に当てられて軽く興奮している

(テリアス)

「これで僕もきみも全力を出せる、それにお互い一流の魔導書がある」

(テリアス)

「対等の勝負をするのにこれ以上の条件はないね」

(賢士)

「確かにその通りよの、そして汝が勝った時はどうすると言うのだ」

(テリアス)

「僕が勝った時はこの首輪を着けてもらうよ」

(賢士)

「なっ…、貴様、妾を犬扱いする気か」

(テリアス)

「勿論ただの首輪じゃないよ、この首輪持ち主のは首輪を着けた人の情報を一方的に知ることが出来るんだよ」

(賢士)

「つまりは首輪を着けておる限りプライバシーは一切ないということか、まるで使い魔よの」

(レテイシア)

(レテイちゃんに首輪…、何かかわいいかも)

どうやら賢士の本来の肉体に首輪がついてその首輪の前の部分を両手で掴んでるところを想像してるようだ

(賢士)

「これ、汝も他人事ではないぞ」

(賢士)

「妾と汝は一心同体ということを忘れるでない」

(レテイシア)

「ということとは、負けたらあたしもプライバシーがなくなつて考えてることが何もかも筒抜けになるってこと？」

(レテイシア)

「隠してることなんて何も無いからいいけど、でもやっぱりやだなそういうの」
(賢士)

「なら負けるわけにはいかぬわ」

(テリアス)

「さて、必要なことは確認出来たと思うし勝負に異存はないかい」

(レティシア)

「あたしはいいよ、楽しそうだしね」

(賢士)

「ふん、負けねばよいだけよ、妾の維持魔力を押しつけてくれるわ」

(テリアス)

「ならお互いにデウスマキナを呼び出したところで勝負開始だ」

賢士が両手剣ファングを掲げてデウスマキナの召喚を始める

(賢士)

「憎悪の空より来たりて 邪悪^{はびこ}蔓延る大地に突き立たん

妾と汝が力持て 邪悪を砕く牙となる

現臨^{げんりん}せよ 機械^{デウスマキナ}仕掛けの神

妾が示す名に応えよ エビルブレイカー ファング！」

両手剣を掲げた賢士を中心に魔法陣が展開して両手剣を持った足の装甲がゴツイ巨人が現れる

(テリアス)

「なら僕達も喚び出そう、おいでノエル」

(ノエル)

「イエスマイマスター」

(テリアス)

「機械仕掛けの神の爪痕よ」

闇の魔王の爪痕と共に世界の理にその爪痕を残さん

来たれ機械仕掛けの神リベル・クロー」

ノエルとテリアスを中心に黒い光の柱が立ちその光が収まると共に巨大な人の形をしたものが現れた

それは赤と黒を基調にした装甲に包まれた機械仕掛けの巨人だった

その大きさは賢士の呼び出したファングと同じくらいだけどころかなり細身で身軽な印象を与える

腕の装甲と膝とつま先にギザギザがついていかにも伸びて爪になりそうに見える

(テリアス)

「改めて紹介しよう、これが僕のデウスマキナのリベル・クローだよ」

(賢士)

「ならば妾も紹介せぬわけにはいかぬの、これが妾のデウスマキナ邪悪を砕く牙ファングよ」

互いに名乗るとその身に魔力を纏う

ファングは全身が魔力の光に包まれ両手剣の切っ先にまでその魔力が行き渡る

リベル・クローは細身とは思えないほどの圧倒的な威圧感と共に両手の装甲の爪が伸びる

お互いの機体に魔力が充実して戦いの始まりを告げる

黒騎士3



魔力を全身に纏わせた二機の機械神が距離を詰めて近接距離までくるとリベル・クローが右のハイキックを繰り出してフアングが剣の刃で受けようとするがリベル・クローは右足を刃に当たる直前で引っこめる

結果としてフアングの刃はスルーされて地面を叩く

そこを狙ってリベル・クローは右足を引っこめた反動を利用して右手を掬い上げるに振り上げる

フアングは上体を逸らしてその一撃を避ける

右の連撃を避けられたリベル・クローは左手を地面に地面に着けて左足を蹴りあげるのがフアングは油断せずに避ける

左の蹴り上げで連撃が止まったことを感じ取ったフアングは剣を右から打ち込み返す刃で左から打ち込みそのまま一回転して更に左から打ち込んだがリベル・クローは巧

みに腕の装甲の爪で受け流して有効打にはならなかった

フアングの連撃はそれだけで終わらずに左から剣を打ち込んだ勢いでくるんと回りながら右後ろ回し蹴りを繰り返したがりベル・クローはバク転してかわした

(賢士)

「バク転なんぞしおって、遊んでおるのか」

(テリアス)

「きみの方だつてくるくると回っているじゃないか」

(賢士)

「それはそうだが」

(テリアス)

「久しぶりに動かすからどれだけやれるか試したくなっちゃうね」

(賢士)

「むう…、そうことにしておくか」

(賢士)

「しかし、いつまでもこれではラチがあかぬではないか」

(テリアス)

「ならこれでどうだい」

(テリアス)

「空歩残身衝（マルチプル・インパクト）」

テリアスはリベル・クロウの機動性に魔力を加えて空中に無数の分身を作り出したリベル・クロウの分身達は腕の爪から衝撃波を打ち出してファングを狙い撃つ

(賢士)

「なっ……!」

(レテイシア)

「ちよちよ、これはやばいよ」

主の危機意識を感じ取ったのかファングは足の装甲を展開して位相干渉式シフトジャンプシステムを起動して上空へ逃れることが出来た

(賢士)

「ふいー、性質の悪い攻撃をしてくれるのう」

(レテイシア)

「とにかく分身を消さないよね」

ファングはシフトジャンプシステムで自在に空中を跳び回りつつ次々と剣から撃ちだす衝撃波でリベル・クロウの分身を消していく

最初の内こそは四方八方から衝撃波で狙い撃ちにさるのを避けきれなくて何度か賢

士がシールドを張って防いでいたがだんだんとフアングの動きが良くなっていき死角からの攻撃も避けるようになってきた

(賢士)

(これは…、もう空中戦に慣れてきたというのか)

(賢士)

(それにこれは…、もう目で相手を見ているのではなく気配とか魔力とか殺気といったものを感じて対応しておるといふのか?)

(テリアス)

「これはこれは…、レティシア、きみのパートナーは面白いね、僕はこんなに楽しいのは久しぶりだよ」

(テリアス)

「僕の存在が定着した世界では僕が全力を出せることなんてなかったからね、とてもつまらなかつたんだ」

(テリアス)

「だから僕達は異世界を巡る旅に出たんだ、寿命なんてないからね、ありとあらゆる異世界を旅してきたよ」

(テリアス)

「でもね、今ほど楽しかったことはないよ、デウスマキナ同士で全力を出してぶつかり合えるなんてことは、きつと今この時だけだと思うから」

(テリアス)

「だからもつと楽しもうよ」

リベル・クローの分身があらかた消えたところでリベル・クローの本体がフアングに爪を叩き込もうと飛んでやってきた

リベル・クローは右手の爪で攻撃してフアングが剣で受け止めたところで左足を叩き込もうとしたがそれも右腕でブロックされる

右も左も防がれたリベル・クローは左手でフアングの右腕を掴んだと思ったら素早く態勢を直して新体操の選手のようにフアングの右腕を鉄棒に見立ててくるんと逆上がりのように回転しつつ手を放してフアングと背中合わせの位置に着地する

(賢士)

「やるな」

(テリアス)

「こつからどうしようかなー」

(賢士)

「こつするのよ」

フアングは剣を逆手に持ち替えて後ろに突き出す

…がリベル・クローにはかすりもしなかった

(テリアス)

「わわっ…、何かずるいなー、同じタイミングで後ろを向いてどつちが早く攻撃出来るか、なーんて西部劇のようなこと考えてたのに」

(賢士)

「全力…でやるのであろう」

(テリアス)

「そりゃそうなんだけどね」

(賢士)

(この流れは逃さん)

フアングは両手剣を振り回し先ほどリベル・クローがやったように回転しつつ蹴りも交えてまるで無重力空間のような立ち回りで猛攻を仕掛ける

フアングが前に回転しながら唐竹割りにしようと仕掛けた

リベル・クローはその回転切りを受け止めようと腕の爪を交差させて構えた

カイイイイン

(テリアス)

(衝撃が軽い?、しまった)

フアングはリベル・クローに当てる時に剣を持つ手から力を抜いて剣か両手から抜けてもそのまま回転してリベル・クローの肩にかかと落とすを叩き込んだ

(テリアス)

「うぐおう…、つつう」

(テリアス)

「すごいね、その動きだけじゃなくさつきからの空中戦の動きはレティシアのものは思えないよ」

(賢士)

「もう妾は操縦の半分以上はレティラに任せてあるぞ」

(テリアス)

「レティラってパートナーの名前だよ、ほんとにすごい娘だね」

(賢士)

「こやつとは一緒におるだけでも楽しいしパートナーとして最高よ」

(レティシア)

「えへへ、あたしもレティちゃんに会えてほんとおおおに良かったよ」

(テリアス)

「そうなんだ、僕とノエルはそんな関係にはなれなかったな」

(ノエル)

「申し訳ありませんマスター」

(テリアス)

「ノエルが誤ることじゃないんだけどね」

(テリアス)

「だけど…、いや…だからかな、僕は楽しい何かを求めて異世界巡りを続けているんだ」

(テリアス)

「だからこんな時を過ごせたのは本当に楽しい」

(テリアス)

「だけど体力も残ってないし次の一撃で決めよう」

(賢士)

「よかろう」

(賢士)

「光と炎を司る炎陽の魔人よ…」

ファンクの剣の切っ先に灼熱の魔力が集まる

(テリアス)

「全てが凍りつく極寒の奈落を統べる王よ……」

リベル・クローを中心に凍てつく魔力が集う

(レテイシア)

「ちよつ…、ちよつと、これってぶつかつたらどうなるの」

(賢士)

「少しでも押し負けた方が消し飛ぶであろうな」

(レテイシア)

「消し飛ぶって、だめ、だめだよそんなの」

(賢士)

「もはや止められぬわ」

(テリアス)

(ちよつとやりすぎたかな、でももう止められないよね)

(レテイシア)

(こつちの力は熱くてあつちの力は冷たい、それも極端な方へ極端な方へといってる、

これってもしかして…)

(賢士・テリアス)

「我が力となりて・わが前に立ちはだかる全てに等しく滅びを与えんことを」
 (賢士)

「炎陽焦熱 (フレイロード・インフェルノ)」

(テリアス)

「氷陰奈落 (アビソリユート・ゼロ)」

お互いに全ての力を切っ先に込めてぶつかり合った

その力は凄まじくぶつかり合ったポイントを中心にして壁が燃えて赤く染まるエリアと壁が凍りついて粉雪の舞うエリアの二つにわかれた

その力は拮抗しどちらが押しているのかわからないまま体感時間だけが過ぎていった

だか両者共に力尽きたかのようにぶつかり合ってる力はだんだんと萎んで消えていった

(賢士)

「これは… (ぜいぜい)、どうなって… (ぜい)、おるのだ… (ぜい)」

(テリアス)

「これは… (ぜいぜい)、まさか… (ぜい)、引き分け… (ぜい)」

(ノエル)

「マスター…、私の力が…、至らないばかりに…、申し訳ありません…」

(レティシア)

「どっちも…、残ってる…、よかったあ…、上手くいった…」

(賢士)

「上手くいったって…、まさかこの結果は？」

(レティシア)

「熱い力と冷たい力だったからまったく同じ強さにしたら大丈夫かなって思ってた」

(テリアス)

「ばかな…、僅かでも力に差があれば確実に吹き飛ばすというのに完全にコントロールしたというのか」

(賢士)

「つ…、つくづく底が知れぬのう」

(賢士)

（これはもう敵に回さなくて良かったというレベルではないわ、存在自体が怖いわ、でも…）

(レティシア)

「よかったあ、どっちも無事で、レティちゃんのごことは大好きだしテリアスさんも悪い

人って感じがしないしどっちかいなくなっちゃうなんてやだもん」

(賢士)

「ふぎや(顔真つ赤)(こ…こやつ恐ろしい程の力を持つとるくせに無邪気な笑顔でこのようなことを言いおつてからに)」

(賢士)

(それでも良いと思えてしまうあたりこやつの手玉にとられておるのやもしれぬのう)

(賢士)

(…あー、もうこのことは考えぬようにせねばのう、良くも悪くも考えておつても意味がなかろう)

(テリアス)

「しかしまいったな、引き分けの時のことなんて考えてなかったよ」

(テリアス)

「でもまあいつか、イシュレニアと騎士のことについてお話するよ」

黒騎士4



賢士とテリアスの勝負の賭けは負けたらどうするか決めてなくて引き分けの時はどうするのか決めてなかったので問題になるかと思われたが

(テリアス)

「でもまあいつか、イシュレニアと騎士のことについてお話するよ」とあつさり言ったので賢士もそれでよしとした

二人ともデウスマキナから降りてくつろいだ姿勢で話しをすることになった

(テリアス)

「騎士は元々一万年以上前にイシュレニアによって作られたのは知ってると思うけど」

(賢士)

「その当時の時代を生きておったからの、よお知っておるわ」

(テリアス)

「その時代のある森の深くに当時の基準で普通よりも遥かに高い技術と高い魔力を持った村があつたんだ」

(賢士)

「村？」

(テリアス)

「うん、ひっそりとしてたから隠れ里ってやつだね」

(テリアス)

「でもイシュレニア帝国に見つかってしまったんだ」

(テリアス)

「それもアスヴァーンと戦争してて女王ミューレアスの圧倒的な魔力で圧されてた頃だね」

(テリアス)

「そんな時に見つけた超技術の村だからね、イシュレニアはその村を…、ミクータ族を利用しようと考えたんだ」

(テリアス)

「イシュレニアは自分の部隊をアスヴァーンの部隊に仕立て上げてミクータ族の村を

襲撃したんだ」

(テリアス)

「そして全滅しない程度に村を焼き、そこに駆け付けたイシユレニアの部隊がアスヴァーンの部隊に偽装した部隊を追い散らしてミクーテ族を保護したんだ、利用するためにね」

(テリアス)

「そしてイシユレニアに保護さアスヴァーンへの復讐心を煽られたミクーテ族は後にシンナイトと呼ばれる5体の騎士を完成させたんだ」

(テリアス)

「騎士達のおかげで戦争の形勢は逆転しアスヴァーンを追い込みはするものの今一つというところで押し切れないイシユレニアはミクーテ族に更なる研究をさせたんだ」

(テリアス)

「シンナイトの研究の時に次元の狭間で見つけた騎士の素体を誰でも契約出切るようにとコアに学習能力を持たせたりとかしてとうとうイシユレニアの技術だけで量産型の騎士を作れるところまでいったんだ」

(テリアス)

「騎士の研究がそこまでいったらイシユレニアにとってミクーテ族はもう必要ない、

それどころか他国に騎士の技術が漏れる可能性があるとしてイシュレニアはミクーテ族を処分することにしたんだ」

(テリアス)

「再びアスヴァーンの部隊に仕立て上げてミクーテ族の村を襲撃したんだ、それも今度は全滅するまで徹底的にね」

(テリアス)

「そしてその情報を利用してイシュレニアにいるミクーテ族の研究者達を全員殲滅した村に集めて皆殺しにしたんだ」

(賢士)

「ひどいものよな」

(テリアス)

「そのひどいシナリオを書いたのはイシュレニア皇帝のマドラスだよ、今はカーラの兄にとり憑いてウイザードという組織を作っているね」

(賢士)

「なるほど…、納得いくのう、と言うよりもそんな外道は一人いるだけでも十分すぎるわ」

(テリアス)

「まあまあ、まだ話しは終わってないから」

(テリアス)

「量産型騎士を完成させたイシュレニアはマドラスの命令で赤子を量産型騎士の契約者にしたんだ」

(賢士)

「基礎もなにもない赤子ではいくら騎士に学習能力があろうと無茶がすぎるであろうが」

(テリアス)

「量産型とはいえ騎士の装甲は分厚いからね、戦闘経験なんて騎士に積ませればいい、契約者など自我もなく命令を聞くだけの人形であればいい」

(テリアス)

「マドラスはそう考えたんだらうね」

(賢士)

「やはりマドラスは人の皮を被ってるだけの外道よな」

(テリアス)

「そしてイシュレニアはアスヴァーンへ攻めるための慣らしとして量産型騎士の部隊で虫の谷へ侵攻したんだ」

(テリアス)

「だけどイシュレニアはここで手痛い反撃を受けることになる」

(テリアス)

「虫の谷のトロール族のマグスが率いる勇者部隊に大敗を喫したんだ」

(テリアス)

「量産型騎士は装甲が分厚いだけで中身はないに等しく本能的に戦うだけだからね」

(テリアス)

「トロールの勇者相手では量産型騎士三体で一人を囲まないと相手にならなかったそうだよ」

(テリアス)

「だけどトロール族も剣も弓も量産型騎士にはほとんど効果がなかったのだから負けはしなかったものなかなかなか倒せずに手こずっていたが、棍棒が効果があることに気づいて棍棒を持ったトロールを中心にして、棍棒を持ってないトロール達はそこら辺にある石を掴んで殴ったり投げたりしてイシュレニア軍を打倒したんだ」

(テリアス)

「現在のトロールの武器が棍棒なのはその名残だよ」

(テリアス)

「量産型騎士のほとんどが再起不能にされたイシュレニアは再編した量産型騎士の部隊の契約者に熟練の騎士を少しだけ混ぜて白騎士と黒騎士もつけて再度虫の谷へ侵攻したんだ」

(テリアス)

「ところが虫の谷ではバツケイヤの住民が中心になってイシュレニアの騎士への対策として勇者マグスのために聖剣グランサーを完成させたんだ」

(テリアス)

「バツケイヤがグランサーを用意したこともあってイシュレニアの二回目の侵攻は白騎士と黒騎士がマグスの右目を潰したものの量産型騎士は全滅の憂き目にあったんだ」

(テリアス)

「量産型騎士は生産のコストがバカにならないとか学習能力があまり意味がないなどの意見もあってそれ以降は作られなくなったんだ」

(テリアス)

「それと共にその内白騎士達の契約者にしようと調整されていた五人の幼子達も用無しになったんだ」

(テリアス)

「イシュレニアの研究者の中でも良心のある者がその五人の幼子が処理される前にド

グマ神殿の隠された部屋にある冷凍睡眠装置で長い眠りにつかせたんだ」

(テリアス)

「そしてイシュレニアは五体の騎士を中心に今度こそ虫の谷を制圧したんだ」

(テリアス)

「トロール族の勇者マグスはその戦いを最後まで雄々しく戦い抜いて死んだ」

(テリアス)

「そして虫の谷攻略の中心となった五体の騎士は称えられ真なる騎士として真騎士と
呼ばれるようになったんだ」

(賢士)

「なるほどのう、色々と知らぬ話しもあつたし汝の話しを聞けて本当に良かった、礼を
言う」

(テリアス)

「こちらこそ楽しい時間を過ごさせてもらって礼を言うよ」

(テリアス)

「それと薬石のついでにこの薬をセティに渡してあげて」

(賢士)

「これは？」

(テリアス)

「この薬石を材料にしている常備薬で抵抗力を高めるためのものだよ」

(テリアス)

「セティにマドラスがとり憑いてるのはわかってると思うけど、セティの体を使うだけじゃなく他にも色々とやってるみたいでねセティの体にはいない時はマドラスの暗示で好き勝手されないように自分を保つための薬として飲んでるみたいだよ」

(賢士)

「そうか、セティも苦労しておるのう」

(テリアス)

「それでも直接とり憑かれたらどうしようもないんだけどね」

(賢士)

「それはどうしようもなからう、わかった、この薬は確かに渡しておこうぞ」

(テリアス)

「それじゃ結界を解くから自分の魔力維持してるやつの準備をしてくれろ」

(賢士)

「うむ」

(テリアス)

「それじゃ、ノエル結界を解いてくれる」

(ノエル)

「イエス、マイマスター」

(賢士)

「くうう、やはり亜空間結界の意地で魔力半減はきついとう」

賢士が結界の維持の負荷で顔をしかめてる横でテリアスは結界維持のための魔力経路を魔道具に繋ぐ作業をしていた

(テリアス)

「ここをこうして…、うんうん、こうしたら」

(賢士)

「何をしておる?」

(テリアス)

「何って、結界維持の魔力を肩代わりする準備だよ」

(賢士)

「あの勝負は引き分けであつたはずだがの」

(テリアス)

「勝ち負けよりもあの時間が楽しかったことが大事だよ」

(賢士)

「そ…、そうか、なら…ふむふむ…そうか…、汝もそう思うか…」

(賢士)

「なら汝が勝った時につけることになっておった首輪をもらおうぞ」

(テリアス)

「え…、だってあれは」

(賢士)

「あの時間は妾達にとっても楽しい時間であったぞ」

(テリアス)

「えーと、達つてことはパートナーも同じ意見…」

(テリアス)

「あつはつはつ、ほんときみ達は面白いな」

(テリアス)

「さすがに首輪はやりすぎだからこの水晶のついたネックレスをつけといて」

(賢士)

「これは？」

(テリアス)

「このネットワークレスの所有者はつけてる人を中心にした半径10mでの事象を記録して自由に確認することの出来る記録用のアイテムだよ」

(賢士)

「うむ、では首輪の代わりにつけることとしよう」

そしてしばらくして

(テリアス)

「よし、魔力回路から経路へのバイパスを設置して魔道具を通して僕の魔力で維持出切るになったよ」

(賢士)

「うむ、確かに今まで出せなかった領域にまで魔力を出せるようになったわ」

(テリアス)

「それじゃ、僕はこの時代での戦いを見届けさせてもらおうとするよ」

(賢士)

「お互い世話になったのう、達者でな」

(テリアス)

「レテイシアとレテイラも元気だね」

賢士は軽く挨拶してから転移魔法でレナード達と合流した

黒騎士5



場所はセティの家

テリアスとやりあつた賢士も転移でレナード達と合流して全員集まつてる

(セティ)

「それでは騎士のことについて話しましょうか」

(レナード)

「その前に一つ聞きたいけどどうして黒騎士があなたを助けたんですか」

(ユウリ)

「そうよね、王様を殺したようなやつがなんで？」

(セティ)

「それは私にもわかりません」

(賢士)

「落ち着けユウリ、黒騎士がバランドール王を殺したと決まったわけではあるまい」

(ユウリ)

「どうして?」

(賢士)

「よお思い出してみい、城でシズナが攫われた時黒鎧のドレギアスは二人おったぞ」

(ユウリ)

「あつ…」

(エルドア)

「確かに、あの時は私もレティシア殿も黒鎧のドレギアスという者の止められてみす

みすシズナを攫われてしまったな」

(賢士)

「二人おる以上国王殺しと黒騎士が同じとは言い切れぬよ」

(ユウリ)

「うん…、うーん、確かにそうよね」

(賢士)

「目立つ所ばかりに気をとられて偏った見方ばかりしておると思わぬところで真実を

見落とすやもしれぬぞ」

(ユウリ)

「うん…、気を付けるね」

(賢士)

「それとなセテイ、薬石はこれでよいのであろう?」

(セテイ)

「はい間違ありません、ありがとうございます」

(賢士)

「それと戻ってくる途中で汝のことをよく知る妾の知り合いからこれを渡すように頼まれての、大丈夫と思うが後でよお確認するとよい」

(セテイ)

「これは私の薬?、どうして」

(賢士)

「そこまでわからぬよ、常識ではかれぬやつだしの、過去の亡霊に負けるでないぞ」

(セテイ)

「重ね重ねありがとうございます」

セテイは中身をよく確認してから水筒の水で早速薬を一回分飲んだ

(セテイ)

「さて、話が逸れてしまいました。が今度こそ騎士についてお話ししましょう」

(セティ)

「騎士とは一万年前のドグマ時代にとても高度な技術で作られた恐るべき戦争兵器のことです」

(セティ)

「しかしその騎士もあるものがなければただの鎧にすぎません」

(レナード)

「そのあるものとは？」

(セティ)

「それは契約者の魂です」

(ユウリ)

「契約者の魂？」

(セティ)

「はい、契約者が魂を騎士に捧げることで騎士は強大な力を振るうことが出来る真の騎士になるのです」

(セティ)

「しかしその力が大きすぎたためか騎士を作り出したイシュレニアの権力者は騎士の

契約者が反乱を起こすことを恐れました」

(セテイ)

「そのためか権力者は契約者を自我のない赤ん坊にすることで自分に都合のいい操り人形にしたと言われています」

(レナード)

「赤ん坊つていくらなんでも無茶すぎるだろ」

(セテイ)

「理論上は可能だったんでしょね、騎士はそれ自体が戦闘経験を蓄積出来ると言われていますので」

(エルドア)

「つまり契約者は魂さえあればいい、だから赤子が好都合ということか」

(シーザー)

「ひでえ話しもあつたもんだな」

(賢士)

「だけどそれは量産型騎士と共に頓挫したはずよ」

(セテイ)

「なぜそんなことが言えるのですか？」

(賢士)

「妾は一万年前の人間の意識体なのでな、イシュレニアは敵ではあったがそれなりに情報はつかんでおるのよ」

(賢士)

(と言うことにしておこうぞ、テリアスのことは妾以外に関係ないしの)

(セテイ)

「あなたも古人だったのですか、全然そうは思えなかったのですが…」

(賢士)

「妾は意識体だから幽霊のようなものだしの、この者と合意の上で体を借りておるから見た目はこの時代の人間よ」

(セテイ)

「いささか信じられないくらいの話ですが…」

(レナード)

「その反応もわからんいわけじゃないんだけどね」

(ユウリ)

「一緒に旅してからね、ほんとのことだってことがよくわかるのよ」

(セテイ)

「それで量産型騎士というのは？」

(賢士)

「騎士でアスヴァーンと決戦する前に白騎士や黒騎士のデータを元にイシュレニア独自の量産型騎士を作ったそうだが、初陣の虫の谷の戦いで契約者にされた多くの赤子共々惨憺たる結果となってその戦い以外で使われることはなかったようだよ」

(セテイ)

「そうですか」

(セテイ)

「今の話しにも出てきましたが一万年前のドグマ戦記と呼ばれた時代イシュレニア帝国とアスヴァーン王国という強大な力を持った二つの国は戦争をしていました」

(セテイ)

「イシュレニア帝国は騎士を作り出したことでアスヴァーンを圧倒していましたが、アスヴァーン王国も命をかけて封印呪を使うことで騎士を封じることになりました」
(エルドア)

「ん…(おかしい、白騎士ワイルドの寝返りなど色々とあつた上に騎士を封印したのは戦いの後ではないか)」

その時セテイがエルドアを見て驚いた顔をする

(セテイ)

(よく見れば古人ではないですか)

(セテイ)

「でも戦いはそれで終わりではありませんでした」

(セテイ)

「予言によつてイシユレニア帝国皇帝マドラス、一万年後に再び帝国を興す、アスヴァーン王国の女王ミューレアスとシンナイトの契約者の生まれ変わりは一万年の時を経てマドラスと決着をつけると」

(賢士)

「星詠みのシーカーの予言よな、妾もその予言があらばこそ時をこえてきたのよ」

(シーザー)

「それじゃ、俺はどうしてグリードに預けられたんだ？」

(セテイ)

「これ以上詳しい話しは場所を移してからにしましょう」

(レナード)

「それはどうして」

(セテイ)

「どうやらここ数日私は監視されているようです」

(セテイ)

「そこであなただと接触したのですからもう安全とは言えないでしょう」
(賢士)

「して続きを話すのはいずござ？」

(セテイ)

「バンハイブン荒野をこえた先にあるシンカ村で」

(セテイ)

「私も準備してから行きますので町の門の所で待っていてください」

(シーザー)

「わかった、それじゃ行こうぜ」

(レナード)

「ああ」



時は少しさかのぼりレナード達がバランドールに着いた日の夜明け

ーシズナの夢の中ー

(???)

(太陽王…、マドラス…)

(シズナ)

(太陽王はマドラスの騎士ということ？)

(???)

(困難)

(シズナ)

(太陽王がマドラスの騎士なら復活を防ぐのは確かに困難ね、それなら倒す方法を考えた方が)

(???)

(騎士…、聖剣…、勇者…、巨石…)

(シズナ)

(勇者？、巨石？…、まさかグランサーを)

(シズナ)

(でもあれなら確かに太陽王を倒せるかも)

(シズナ)

(でもどうやって…)

(??)

(騎士殺し…、受け継ぐ意志…)

(シズナ)

(グランサーは騎士を倒すための聖剣、同じ方向の意思を持つレナード達なら巨石に行きさえすればなんとか)

(シズナ)

(ならば)

シズナは決意と共に目を覚ます

(シズナ)

「部屋の見張りの方、至急そちらのリーダーのグラールゼルと話したいことがあるのでお伝え願えませんか」

(シズナ)

「太陽王に関するお話でもあると言えばグラールゼルも興味を持つことでしょう」

わかりましたと言って見張りは伝声管で通信兵に伝えて通信兵がグラールゼルにシズナの話しを伝えた

しばらくしてビッグロでシズナの前にグラールゼルが姿を現す

(グララーゼル)

「このような姿で失礼シズナ姫、それでお話しとは？」

(シズナ)

「次にレナード達と会う時は虫の谷のマグスの巨石で会ってください、そうしていただければ太陽王の封印を解くことに協力しましょう」

(グララーゼル)

「わかりました、ではその条件で」

黒騎士6



時は再びレナード達がセテイを待っている時間に戻る

ーセテイの家ー

(セテイ)

(これで準備は出来ましたね)

(???)

「準備は出来たようだな」

どこからともなく黒いもやのようなものが現れてセテイを包み込む

(セテイ)

「ちよくせ……つ……く……き……」

(セテイ)

(自分を取り戻せたのにもう……うばわ……れる……の……か)

セティの髪から色が抜けて銀色に染まる

(セティ?)

(レダムの方では連絡を受けたがシズナ姫が会いたがっているようなのでな)

セティ?はビグロを使ってシズナ姫と取引をすると家に仕掛けをしてからモノシツ
プへ転移した



20:00 バランドール町の大門

(シーザー)

「しっかし遅えなあ、セティのやつ何やってんだよ」

(賢士)

(セティか…、生命波動が太陽王によく似ておるしい予感がしないのう)

ズウウウウウン

その時大きな爆発音が響いた

(レナード)

「いったい何があったんだ」

(ユウリ)

「あの方向はセテイさんの家の方向？」

(シーザー)

「行ってみようぜ」

現場についてみるとセテイの家の方向ではなく正しくセテイの家が燃えていた

(レナード)

「何なんだよいったい」

(野次馬の男)

「わからねえ、でも男の死体が一つ見つかったんだ、かわいそうにな」

(エルドア)

「消されたのか…」

(カーラ)

「確かにそのようなこと言ってたな」

(賢士)

「む…、屋根に黒いビグロがおるぞ」

賢士の声に気づいて黒いビグロは路地の方へ逃げていった

レナード達が追っていくと路地裏の瓦礫の上に着地してどこかセテイに似た銀髪の

青年の姿を映し出した

(銀髪の青年)

「お初にお目にかかる、私の名前はグラールゼル、ウイザードの司令官のようなものだ」

(レナード)

「きさまがウイザードの…、シズナはどこにいる」

(グラールゼル)

「くつくつくつ、そのシズナ姫との取引でな」

(シーザー)

「何、あの姫さんと取引だって」

(レナード)

「そんなばかな」

(グラールゼル)

「まあ真偽のほどは本人と話しが出来る機会があればその時に聞けばいい」

(賢士)

「して汝は何の用でこのようなことをしておる、単なる顔合わせではあるまい」

(グラールゼル)

「よくわかつているな、お前達にはアークを持って虫の谷のマグスの巨石まで来ても

らおう」

(グラールセル)

「シズナ姫が出した条件が今度お前達と会う時はマグスの巨石で会ってほしいということだからな」

(賢士)

(シズナはグランサーを知っておるようだの、しかし随分と思いつたことをしてるものよ)

(エルドア)

「シズナの方から出した条件と言うことはシズナに何かしらの狙いがあるということだな」

(グラールセル)

「まあ、そうだろうな」

(レナード)

「なら行つてやる」

(グラールセル)

「楽しみに待っていていよう」

その言葉を最後にグラールセルのビッグロは飛び去った

黒騎士7



グラールゼルのビグロが去った後で賢士達は情報の整理をしていた
(レナード)

「それにしてもそのマグスの巨石という所に何があるんだ」

(賢士)

「マグスか…、ならグランサーのことやもしれぬのう」

(シーザー)

「グランサーってなかなかいかした名前だけど何なんだそりや？」

(賢士)

「それも含めてシズナと直接話しをしてみるかの」

(シーザー)

「直接話すってお前一人でか？」

(賢士)

「いや、皆で話しが出来るよう手を打つつもりだがの」

(賢士)

「そのためにも合成屋へ行くぞぞ」

―合成屋・バランドール支店―

コンコンコン、コンコンコン

(合成屋店主)

「いったい何だゲコ、営業時間はもう終わってるゲコ」

賢士は文句を言う店主に一枚のカードを見せる

(合成屋店主)

「こゝ、これはプラチナVIP会員カードゲコ」

(合成屋店主)

「このガマローネ印の合成屋、プラチナVIP会員様には24時間営業で誠心誠意をもつて対応させていただくゲコ」

(賢士)

「うむ、少々奥の合成作業場を使わせてもらおうぞ」

(合成屋店主)

「どうぞどうぞだゲコー、素材は持ち込みだけど作業道具はいくらでも持つてくるゲコー」

そして一時間後、賢士は子供くらいの大きさの人形を完成させた

(ユウリ)

「レテイシア、その人形っていったい何なの？」

(賢士)

「これは依代よりしろ人形と言うての、意識体を召喚して憑依ひょういさせるための触媒よ」

(レナード)

「それって…、どうなるんだ？」

(賢士)

「説明するよりやって見せた方が早かろう」

(賢士)

「汝のおかげで良い仕事が出来た、感謝するぞ」

(賢士)

「では達者での」

(合成屋店主)

「またいつでもいらしてくださいゲコー」

店から出た時には既に太陽が沈みかけていたのでまずは宿をとって夕食を食べた
その後は部屋に集まって防音の結界を張った

(賢士)

「さて準備するかの」

(賢士)

(シズナの生命波動はと…、ここよな、やはり結界が張っておるか、予想通りとはいえ
肉体ごと向うへ行くのもこちらへ飛ばすのも無理よな)

(賢士)

「シズナ…、シズナ…」

(シズナ)

「その声はレティシアですか」

(賢士)

「その通りよ、これより汝の意識体を妾達の元へ喚ぶからそのままベッドで横になっ
ておれ」

(シズナ)

「え…、あ…、んー、わかりました、レティシアを信じます」

(シーザー)

「おい、見ろよ」

(カーラ)

「人形の顔が…」

(ユウリ)

「シズナに変わっていく」

(シズナ↓シズナ人形)

「ん…、皆さん…、これは？」

(賢士)

「うむ、きちんと人形の目で見えておるようなのだ」

(賢士)

「話しをしたり聞いたりといったことで何か不都合なことはないかの」

(シズナ人形)

「それはないみたいですが…、どうなっているのですか、レティシアの声が聞こえてレティシアの言ったようにベッドで横になっただら意識が遠くなってる」

(シーザー)

「気がついたら今のこの状況ってことかい？」

(シズナ人形)

「そう、その通りです」

(シーザー)

「どうやらレティのやつが姫さんの意識だけを人形に宿らせたみたいだね」

(シズナ人形)

「人形に？、そう言えば…、何か動きにくいわね」

(賢士)

「人間の体と人形の体とでは色々と違いがあるからの、だが色々と話しをするためにはこういった方法しかなかるうて」

(ユウリ)

「あは、何か人形のシズナもかわいい」

(シーザー)

「わかるなー、よちよちしてるのがいいんだろ」

(レナード)

「おいおいユウリにシーザーも」

(シズナ人形)

「もうからかわないでください」

(カーラ)

「すまんが少し席を外させてもらおうぞ」

（シーザー）

「どうしたんだ」

（カーラ）

「少し夕食を食べすぎたみたいだな」

シーザーはそれで納得したのか手をひらひらと振って見送る

（賢士）

「妾も…おそらくはシーザーも汝を信じておるが気を遣わせてしまったようだの」

（カーラ）

「気にするな」

（エルドア）

「それでシズナはどうしてマグスの巨石を指定なされたので」

（シズナ人形）

「それは騎士殺しの聖剣グランサーがそこにあるからです」

（レナード）

「聖剣グランサー？」

（賢士）

「その昔トルル族の勇者マグスがばったばったとイシュレニアの量産型騎士を切り刻んだ剣のことよな」

(シーザー)

「ああ、セテイの家で聞いたあれか」

(レナード)

「その聖剣を手に入れろということですか」

(シズナ人形)

「はい、シンナイト五体が集まれば世界の危機になるほどの力とされています」

(エルドア)

「ということはグランサーを手に入れてまずは明確に敵である黒騎士を斬る、ということですか」

(シーザー)

「ちよつと待てよ、そんな時は確実に敵もいるじゃねえか」

(シズナ人形)

「いえ、勇者として伝えられてるマグスの剣です、イシュレニアの流れを組むウィザードには決して手に入れることは出来ないでしょう」

(シーザー)

「かといって俺達だって手に入れる方法なんて知らねえし」

(レティシア)

「でも今までだって確実なことなんてなかったんだよ」

(ユウリ)

「そんな時になれば何とかなるんじゃない」

(レナード)

「今までだって何とかなかったしな」

(シーザー)

「はあくあ、お気楽だねえお前達」

(賢士)

「まあ、その時はその時として、シズナにはもう一つ聞いておきたいことがあるのだが」

(シーザー)

「そうそう、ウィザードとの取引ってどんな取引をしたんだ」

(シズナ人形)

「それは、今度レナード達と会う場所をマグスの巨石にする代わりに太陽王の封印を解くことに協力することです」

(ユウリ)

「ええー、何それ、シンナイトを揃えちゃいけないとか言つといて封印を解くなんて矛盾してない?」

(シズナ人形)

「それはそうなのですが太陽王は私が協力しようがしまいが遅かれ早かれ封印は解けてしますのです」

(賢士)

「確か一万年前の太陽王の契約者はイシュレニア皇帝のマドラスであったな」

(シズナ人形)

「はい、そして私を攫う前からウィザードは黒騎士を復活させています」

(レナード)

「確かに、黒騎士が初めて出てきたのがノルディア坑道だし、あの頃は奴らは砂漠の遺跡を狙ってたと思うからあの短い時間でシズナに力を使わせるというのも考え難いな」

(エルドア)

「となるとほつといってもウィザード独自の力で太陽王は復活するということか」

(シーザー)

「だったら太陽王のことを取引材料にして少しでもグランサーを手に入れやすくして
あわ良ければ黒騎士でもぶった切ろうかいつてことか…、姫さんもえらい勝負師だな」

(シズナ人形)

「でもこれ以上の方法は思いつかなかったものですから」

「エルドア」

「ならこの勝負負けるわけにはいかんな」

(レナード)

「シズナ、聖剣グランサーは必ず手に入れるからな」

(シズナ人形)

「期待していますレナード」

(賢士)

「それではそろそろシズナを元の体に戻すとするかの」

(シズナ人形)

「ええ、お願いします」

「一方カーラの方はと云えば…」

(カーラ)

(私のことを信じている…か)

(カーラ)

(信頼とは時としてもものすごく重荷になるものだぞレティシア)
そう思いつつ部屋に戻ると窓辺に一羽のビグロがいた

(カーラ)

(これは兄さんの…)

(グラーゼル)

「カーラ、アークはまだ手に入らぬのか、随分とのんびりしてるものだな」

(カーラ)

「申し訳ありません兄さん」

(グラーゼル)

「ベルシタンといいなぜこれほど無能な部下が多いのか愚痴を聞かせていたところだ、なあシャブルー」

(シャブルー)

「ははあ」

(グラーゼル)

「お前もベルシタンと同じか、それともまさか情でも移ったか」

(カーラ)

「いえそのようなことは決して…」

(グラールゼル)

「どちらにせよこのままでは埒が開かない、次が最後の機会だ、よいな」

(カーラ)

「はい…」

(カーラ)

(どうすれば兄さんを元の兄さんに戻せるのがわからない、可能性が限りなく低いことだってわかってはいる、わかりたくはなかったことだが…)

(カーラ)

(すまない…、すまないみんな…)

(カーラ)

(それでも私は兄さんを見捨てることは出来ない)

(カーラ)

(兄さんを一人にすることは出来ないんだ、本当にすまない)

黒騎士8



翌日レナード達はシーザーがグリードに連絡をつけて呼んだゴンドラに乗って一度グリードへ行き、定期便のゴンドラに乗り換えて虫の谷へやってきた

虫の谷は縦横に溝が走っている峡谷で緑が生い茂っているために空気が澄んでいる

(ユウリ)

「うっわー、虫の谷ってきれいなところなのねー」

虫の谷の風景に感動してる人の横で文句を言ってる人もいる

(シーザー)

「おーやだやだ、何でこんなところを通らなきゃいけないんだ」

(レナード)

「しょうがないだろ、マグスの巨石へいくにはここを通るしかないんだから」

(ユウリ)

「何でそんなに嫌がるのよー、こんなに景色のきれいなとこなのに」

(エルドア)

「そんなことを言っつていられるのも今の内だけだ」

(ユウリ)

「へ…、それどういうこと？」

(カーラ)

「じきにわかる、嫌でもな」

しばらく歩くとカーラの言う所の嫌でもわかることに出くわした

峡谷の下側を縦横に溝を塞ぐくらい大きな虫が歩いているのを見かけたのだ

(ユウリ)

「なにあれ…」

(エルドア)

「あの巨大な虫はグリーバーだ、この峡谷の溝はこいつの通り道となつて出来たものだろう」

エルドアはその言葉に続けてグリーバーの上空を指さす

(エルドア)

「そしてあれが虫の谷に住まうハピタル族の民だ」

風の民は単座式の飛行機のようなもの数機でグリーバーの上空を飛びグリーバーに向けて飛行機のようなものに格納されていた丸っこいものを落としたり

その丸っこいものはグリーバーに当たると割れて派手な音と閃光を撒き散らした
グリーバーはそれにびっくりすると反射的にガスを撒き散らした

風の民達はマスクをしつかりつけた上でグリーバーのガスの中に飛び込み飛行機のようなものについてる袋を膨らませて歓声を上げテンションを上げて出てきた

(ユウリ)

「あれっていったい……」

(賢士)

「どうやら虫の生体器官と機械を組み合わせた小型の飛行機のようなのだ」

(賢士)

「あんなものはアスヴァーンにもイシュレニアにもないものよ、大したものよな」

(シーザー)

「風の民はその大したものであるグライダーに乗って袋にガスを詰めて生計を立てているのさ、グリードでも結構いい値段で買ってるみたいだぜ」

(カーラ)

「それでさっきの喜びようというわけだな」

(シーザー)

「そういうこと」

(ユウリ)

「ううう…、あんな大きな虫…」

シーザーが気楽に言ってる隣でユウリが楽しそうだったさつきとは一転して嫌なものを見たと落ち込んでいた

(エルドア)

「グリーバーのガスで随分と視界が悪くなったな、今日のところは近場で場所を見つけてキャンプにしよう」

(カーラ)

「そうだな…、確かにこれでは不意を突かれても仕方がないくらいだな」



虫の谷キャンプ地 ー深夜ー

たき火の近くで夜食を食べてるシーザーの近くにカーラがやってきた

(シーザー)

「おう、何だもう交代の時間か」

(カーラ)

「ああ、お前もそれ食い終わったらもう寝たらどうだ」

(シーザー)

「ふう、寝てる間にどっかいっちまうつもりか」

(カーラ)

「なんのことだ」

(シーザー)

「とぼけんなよ、俺の龍の眼ってやつは結構自分勝手な上に食欲でな、他人が胸の中に秘めてることとか色々わかつちまうんだよ」

(シーザー)

「セティ兄さんを助けるつもりならやめた方がいいかもな」

(カーラ)

「何、第一誰が誰の兄さんだ？」

(シーザー)

「お前にとつて兄さんなら俺やレナードにとつても兄さんだな」

(カーラ)

「何を馬鹿なことを」

(シーザー)

「レテイシアがそういう情報を仕入れてんだよ、なっレテイシア」

(賢士)

「ほんとに性質タチの悪い眼だの」

(カーラ)

「レテイシア、起きていたのか」

(賢士)

「ちゃんと見張りをしてから妾に挨拶をしてから去るつもりだったのか?」

(カーラ)

「ああ、そのつもりだったんだがな、それよりシーザーやレナードの兄弟と言うのは?」

(賢士)

「二万年前イシュレニアが量産型騎士を実用化しようとしておったのは前にきいておったな」

(カーラ)

「兄さんがバランドールで話していたことね」

(賢士)

「そしてその裏でマドラスは量産型の実用に成功しシンナイトがいなくともやっていけるようになればシンナイトの契約者達を処分し赤子を契約者にして己の操り人形にしようとする計画が進んでおったのよ」

(賢士)

「もつともその計画は量産型が虫の谷でトロルの勇者部隊にコテンパンにされて実行に移す^{めど}用途が立たなくなったがな」

(賢士)

「だが契約者の予備と言える赤子達は残っておった、幼子と言えるくらいには成長しておる太陽王の契約者も含めてな、それに契約者としての調整も全て出来ておったのよ」

(賢士)

「だが計画自体が頓挫したとなればこの赤子達は処分される、そう考えた当時の研究者の一部達は赤子達をドグマ神殿の隠し部屋の冷凍睡眠装置に入れて未来ほ託したというわけよ」

(シーザー)

「そーいやー、17年前に大地の大異変が起きてドグマホールとか古代遺跡とかジャ

ンジャン出てきたって聞いたことがあるな」

(賢士)

「おそらくはその時にミディアスにドグマホールで発見されてあちこちへと預けられたのだろうな」

(カーラ)

「ちよつと待て、話しを聞く限りだとその赤子達は契約者が生きている時に生まれたことになるな、それがなぜ当たる予言で契約者の生まれ変わりなどと言われている、おかしいではないか」

(賢士)

「それは因果の必然としか言えぬであろうな、魂は時間に縛られぬと聞いたことがあるが、もしやすると死して後に過去へと移動して生まれ変わったのやもしれぬし、あるいは冷凍睡眠しておる自我の薄い幼子に契約者としての縁に引かれて憑依してそのまま乗っ取ってしまったのかもしれない、まあその過程はどうあれ時間のずれを無視して結果がでておることになるの」

(カーラ)

「妙な話しではあるがそれ以上は考えない方がいいかもな、今更な話だし」

(シーザー)

「その冷凍睡眠してたのがお前とセティ兄さんに加えて俺とレナードってことだろ」
(シーザー)

「そしてセティ兄さんは太陽王の契約者だろ」

(賢士)

「その上マドラスがとり憑いておるの」

(シーザー)

「あの性質の悪い過去の亡霊がセティ兄さんを手放すとは思えないぜ」

(カーラ)

「それでも私はセティ兄さんを助けたい」

(賢士)

「セティを助けるか…、妾は精神とか霊的存在を攻撃する術はある、だがの…、だがのう…、とり憑かれてる者を巻き込まずに済ますことが出来ぬのよ」

(シーザー)

「専門家でもいればよかつたんだけどな、いや、いても時間がないか」

(賢士)

「時間がない？」

(シーザー)

「ああ、カーラのやつ今度が最後の機会だと釘を刺されてんだよ」

(カーラ)

「シーザー、なぜ知ってる」

(シーザー)

「俺の龍の眼は自分勝手だつて言っただろ、勝手に読んで伝えてきやがったのさ」

(賢士)

「マドラスはつくづく人を信じぬクソツタレよな、自我を持つ手駒を長期に渡つて直接操れぬ状況が不安なのかもな」

(シーザー)

「それにカーラに違和感を覚えてる可能性もあるんじゃないか？」

(カーラ)

「違和感…、だと？」

(賢士)

「あり得るかも、妾が渡したブローチの力で暗示をかけられとる間だけ自意識を避難させて自分を取り戻しとることを隠しおおせておるとしても完全な操り人形とはどこか違いが出ておるやもしれぬの」

(賢士)

「まあ、操り人形ではなくなくなっておることがばれたとしても、使える駒である限り自我を消されることはなかるうがの」

(シーザー)

「へえー、そりやまたどうしてだ?」

(賢士)

「マドラスが量産型騎士の契約者を赤子にすることが出来たのはおそらく最初から自我がなかった故であろう」

(賢士)

「だがマドラスがセティとカーラを手に入れた時には既に自我があつたはずよ」

(賢士)

「そして一度芽生えた自我を完全に消し去つた状態でも契約者足りえるのかどうかまではさすがにわからなかつたのではないかのう」

(賢士)

「だからこそセティにとり憑いて自我が消えぬ程度に操り人形にしてカーラも暗示をかけて操つたのであろう」

(シーザー)

「そうなのか?」

(カーラ)

「いや、わからん、長いこと操られていたこともあつて既に忘却の彼方だな、ブローチの力で探すのも難しいわ」

(賢士)

「まあその話しは置いてくとして、カーラの決意は変わらぬであろうし、それを踏まえ
て問題を解決せねばな」

(シーザー)

「問題？」

(賢士)

「おそらくはマグスの巨石での取引の時にカーラにレナードかシーザーを殺すように
仕向けるであろうな」

(カーラ)

「確かに兄さんはそのつもりだ」

(賢士)

「ならば妾も協力するからシーザーを崖から落とす方向にしてみらえぬか」

(シーザー)

「ええー、俺を」

(賢士)

「龍騎士なら白騎士と違ごうて翼があるから問題ないであろうし、カーラもそれではつきりとウィザード側と見せることが出来るであろう」

(カーラ)

「止めることが出来ないならリスクを減らして送り出すということか」

(賢士)

「汝がどのような道を選ぼうとも一度繋いだ絆は切れはせんし忘れることもあるまい、妾達はいつでも仲間よ」

(シーザー)

「勿論俺もな」

(賢士)

「ともかくマグスの巨石までは共に行こうぞ」

(カーラ)

「…わかった…(まったたくいつらはどこまでも…、どこまでも…)」

カーラは心で泣いていた

黒騎士9



翌日レナード達は再び視界が良好になったことを確認してからキャンプを畳んでマ
グスの巨石を目指す旅を再開した

しばらく道なりに進むとロジックストーン、世界各地に点在する古代遺跡アーティファクトが存在する
ポイントについて

(ユウリ)

「常々不思議に思ってるんだけどこのロジックストーンって何なんだろうね」

(賢士)

「確かにのう、いつになっても全容が明らかになつたとの話しは聞いたことがないし
のう」

(賢士)

「だが一つ噂を聞いたことがあるのう」

(ユウリ)

「噂？」

(賢士)

「うむ、ロジックストーンに語ることで時を刻むことが出来るとの噂があるのよ」

(レナード)

「それどういう意味なんだ」

(賢士)

「妾にもわからぬ、だがこれはここにあるというだけで旅人達の良い目印となっていることは確かだの」

(エルドア)

「ならそれで良いのかもしれぬな」

その時カーラが注意を促す

(カーラ)

「ちよつとまずいかもな、あれを覚えてみるよ」

カーラに促されて奥へ進む道の方へ目を向けると巨人サイズのととても大きな蜘蛛が道の真ん中でふんふんとかがささそとか蠢いていた

(エルドア)

「まずいな、巢を作るつもりかもしれん」

(ユウリ)

「ええー、そんなのやだよ」

(レナード)

「俺が叩き潰してやる」

(シーザー)

「さてさて、この道幅で白騎士はちよつとまづくないか」

(レナード)

「じゃあどうするんだよ」

(シーザー)

「こうするんだよ、変身！」

シーザーが龍騎士に変身して上空で羽ばたく

(エルドア)

「確かに龍騎士なら落ちる心配はないな」

(シーザー)

「話しは聞こえてたよな、ここは俺達で切り抜けるぞ」

(マスタードラゴン)

「わかりました、マスター」

(シーザー)

「さーて、どう攻めるかな」

(マスタードラゴン)

「うかつに接近して糸に絡まれたりするのは避けたいところですね」

(シーザー)

「ならこれでどうだ」

龍騎士は槍が届かない遙か遠くから大蜘蛛に向かって乱れ突きを打ち出す

届くはずのないその突きの一つ一つが風属性の衝撃波となって大蜘蛛へ向かって飛んでいく

だが大蜘蛛は素早く前へ動いてその攻撃を避けた

龍騎士の攻撃に合わせて追い打ちをかけようと大蜘蛛の前で構えていたレナード達は慌てて大蜘蛛を避けるがカーラだけが逃げ遅れて大蜘蛛に激突されて吹き飛ばされる

どうやら吹き飛ばされた時に左腕を打つたみたいでカーラは左腕を押えながら立ち上がった

ちなみに賢士は弓で追い打ちをかけるつもりだったので巻き込まれずに済んだ

(賢士)

(ちいい、存外素早いのが、まずはあの動きを何とかせねばの)

そう思い大蜘蛛のいるあたりをよく見てみると、大樹の根が張り出して根っこが道を飾るアーチのようになっていて大蜘蛛はそのアーチの真下にいた

(賢士)

(これはチャンス)

(賢士)

「ロッド・バイール・エンタングル」

賢士の呪文に応えてアーチになっている根から無数のツタが伸びて大蜘蛛を縛りつける

こうなると風属性の衝撃波で切り刻むのは簡単なことだった

戦いが終わって安全な場所へ避難してからユウリがカーラに回復呪文をかけていた

(ユウリ)

「大丈夫、カーラ」

(カーラ)

「ああ、これぐらい平気だ」

(シーザー)

「魔法で回復したとしてもしばらく動かさないう方がいいな」

そう言っつてシーザーはカーラの左腕に布を巻いて左腕があまり動かないように吊るした

カーラはシーザーにだけ聞こえるように小声で問う

(カーラ)

「なぜだ、私のマグスの巨石についての行動はわかっているのだろう」

シーザーも小声で答える

(シーザー)

「今はまだ仲間だ、それで十分だろ」

(カーラ)

「くう…」

その言葉にカーラは顔を背ける

その行動がカーラの動揺を表している

その間レティシアはマーシャに大蜘蛛を倒したことを報告していた

なんでもロジックストーンの近くは競争率が高いらしくてレティシアの早い報告にマーシャはすごく感謝していた

(エルドア)

「そろそろ進むか」

(レナード)

「そうだな」

黒騎士10



レナード達は大蜘蛛を倒してマグスの巨石を目指して進んでいた

しばらく歩いた先で風の民の飛行機グライダーらしきものに向かって何やらごそごそしてらち

びつ子ウサギがいた

(ユウリ)

「あれって昨日見たのと同じような風の民じゃないの」

(シーザー)

「何やってんだ、ありゃ」

(レナード)

「とにかく行ってみよう」

(賢士)

「妾はカーラのケガの具合を見てから行くからの」

(シーザー)

「おう」

(カーラ)

「ちよ…」

カーラが何か言おうとした時には既にレナード達は走り出していた

賢士は近くの道祖神のような石像のところでカーラの左腕を吊るしている布を解いて
た

(カーラ)

「なぜあんなことを言った？」

(賢士)

「あーゆるハプニングに関わると大抵とんでもないことが起こるのでな、いざという
時には黒騎士も含めて自由に使える状態にしておきたかったのよ」

(賢士)

「それにしても左腕はもうすつかり元通りよな」

(カーラ)

「元々大したことなかったからな」

(賢士)

「ほほう、それなのに大人しく左腕を吊るしたままにしたのはどういいうわけかの」
賢士がにやにや笑って意地悪く聞いてみる

(カーラ)

「こつ…、これはちゃんと後で洗って返す」

(賢士)

「まあいいけどの」

(レテイシア)

「レテイちゃん、何がそんなに楽しいの？」

(賢士)

「ん…、汝にはまだちよつとばかし早いかの？」

(レテイシア)

「そういうもんなの？」

(賢士)

「そういうもんよな」



一方レナード達はグライダーをいじるちびっ子ウサギの元へやってきてた

(ユウリ)

「いったいどうしたの」

(ちびっ子)

「え…、わあ！、び…びっくりしました」

(ユウリ)

「あつ…、あはは、ごめんねー、そんなつもりはなかったんだけど」

(レナード)

「ただ何をしてるのかなーと思ってね」

(ちびっ子)

「ああ、それはですね、グライダーが調子悪くなっちゃって、何とかここまで持つてきて不時着することは出来たんですけどねー、その後はうんともすんとも言わなくなっちゃって」

その時ちびっ子ウサギの後ろの崖から昨日キャンプを張る原因になったどでかい虫をミニチュアサイズにしたようなものが顔を出した

丁度レナード達と向き合う形である

(ちびっ子)

「あのう…、どうかしましたか」

(ユウリ)

「あ…あれ…、後ろ」

ちびっ子ウサギはなーんか嫌な予感がしつつ後ろを向く

(ちびっ子)

「うし…ろ…」

そこで虫がタイミング良くちびっ子ウサギに向かって吠える

(虫)

「シャアアアアアアアアアアア」

(ちびっ子)

「ひぎやあああー!」

(レナード)

「まがい」

レナードとシーザーは駆け出しながら騎士に変身する

ユウリはちびっ子ウサギの手を引いてグライダーのところへ連れて行き、エルドアはサークルブリスト田陣加速の力でグライダーごと防御結界に包み込む

賢士は援護するためにユウリ達の元へ行き、カーラはフック付きロープで崖の途中ま

で下りてから魔法でレナード達の状況を把握していつでも行動出来るように構えている

白騎士は虫を叩き斬ろうとしたが歯で受けられた

龍騎士がそこに割り込むように虫の腹を狙って突いた

虫はそれを嫌がって白騎士の剣を放して間合いをとった

それから白騎士と龍騎士は斬ったり突いたりして攻め立てたが、虫は意外なほど俊敏に動いて攻撃を避けるので大きなダメージを与えることが出来なかった

(賢士)

「うぬ…、よく見ればあの虫動きは早いが…」

(ちびっ子)

「ああ、そうですそうです、あの虫リトルグリーパーはジャンプが出来ないんです」

(賢士)

「うむ、確かに、それに頭はよく動いて攻撃を避けておるが後ろ足が軸となつて必ずどちらかの足が地についておるではないか」

(ユウリ)

「それなら後ろ足を狙えば」

賢士は魔法で声を大きくしてから狙いどころを伝えた

(賢士)

「レナード、シーザー、虫の後ろ足を狙うがよい！」

リトルグリーパーは白騎士のソニッククロスを左へ避けようとし縦斬りの分は避けたが横斬りの分を後ろ足に食らいその動きを読んでいた龍騎士に左からの突きをまとも食らう

更に追い打ちをかけることでリトルグリーパーを崖から突き落とすことに成功する

(シーザー)

「落しちまえば終わりだろ」

そう言つてレナードとシーザーは元の姿に戻る

だがリトルグリーパーは落とされながらも触手を伸ばしてシーザーを捕まえる

(シーザー)

「ワアアアアアアアー！」

(レナード)

「シーザー！」

(カーラ)

「…たく詰めが甘い、変身！」

黒騎士に変身したカーラはリトルグリーパーの触手をぶった切つてシーザーを助け

出す

黒騎士はそのままレナード達がいる崖上にゆっくり飛んで行ってシーザーを下した

(レナード)

「く…黒騎士、何で黒騎士が？」

(シーザー)

「さあねえ、俺も契約者だしあいつらも騎士を揃えてどうとかなんてことはやってないし、まだ死んでもらっちゃ困るんじゃないのか」

(エルドア)

「まあ、確かに用はすんでいないな」

黒騎士はそのまま何も言わずに飛び去り…、レナード達から離れて元の姿に戻った

(ちびっ子)

「あ…あのう」

(シーザー)

「あつ、そう言えばこいつを助けにきてたんだつた、さっきの騒ぎですつかり忘れてた」

(ちびっ子)

「忘れてましたか、いやそうなんだよね、いつもそうなんだよね」

(ユウリ)

「ちよつとシーザー!、いえ違うのよ、忘れてたんじゃなくて…」

(ちびっ子)

「いいんです、いつものことですから」

(ちびっ子)

「今日だって採取の帰りにグライダーの調子が悪くなってみんなからだんだん離されていったのに誰も気づいてくれなくて、ここで応急処置することになっちゃいまして、いつもこんな感じなんです」

(ちびっ子)

「あつ…でもでも助けてくれたことには変わりありませんからほんとにありがとうございます」
「違います」

改めてよく見るとちびっ子ウサギは髪の色がミルクティーのような色をしたおっぱいは頭のハピタルだった

(ちびっ子↓ロッコ)

「僕の名前はロッコと言います」

(カーラ)

「ところでそいつは直るのか?」
グライダー

といつの間にか合流していたカーラが聞いてみる

(ロッコ)

「それがどうにも上手くないかなくて」

(賢士)

「風の民の技術は独特だからのお、妾では修理の役に立たん、エルドア、カーラ、汝等はどうだ？」

静かに首を横に振る二人

(ロッコ)

「はう、どうしたらいいんでしょう」

(レナード)

「なあロッコ、きみの村は近くにあるのかい？」

(ロッコ)

「ええ、ありますけど」

(レナード)

「なら村までライダーを運んでいけばいいじゃないか」

(ロッコ)

「ええー、無茶ですよー、ライダーは見た目より軽いから動かせるとは思いますが」

ど、この大きさですからグライダーを運ぶなんてとてもとても」

(シーザー)

「こいつを使えばいいのさ、ここにこうやって貼ると」

シーザーが縮小符をグライダーに貼るとグライダーはどんどん小さくなってプラモ
デルサイズになった

(ロッコ)

「わっわっ、すごいです」

(シーザー)

「これなら問題なく運べるだろ」

(賢士)

「ところで妾達もついて行っていいののか？」

(ロッコ)

「僕の恩人だから大丈夫です、風の民は義理人情に厚いんです」

(レナード)

「じゃあ一緒に行こう」

(ロッコ)

「はいです♪」

黒騎士11



ロッコを保護してからしばらく歩くと遠目に村らしきものが見えてきた

(ユウリ)

「ねえ、この先に村があるみたいよ」

(シーザー)

「あっちゃー」

(カーラ)

「これはまずいな」

(シーザー)

「ロッコの村があそこだったなんてな」

(エルドア)

「よし、すぐ離れよう」

（??）

「もう遅いな、この風の民の縄張りを侵した者は生かして帰さん」

（レナード）

「ちよちよつと待ってくれよ」

（??）

「問答無用」

リーダーらしき男の合図で投網を十重二十重に投げられて全員捕縛されてしまう

（ロツコ）

「ほんとにちよつと待っててくださいよー」

ロツコも例外なく捕縛されていた

（??↓リーダー）

「あれ、この声はロツコ?」

リーダーの男はキョロキョロと回りを見てから

（リーダー）

「あつ、そこにいたんだ」

（ロツコ）

「最初からいましたよー、この人達は僕の恩人ですよ」

(ロッコ)

「というか僕がいることに気づいてなかったでしょ」と言つてジト目でリーダーを見るロッコ

(リーダー)

「いやだなー、ロッコくん、そんなわけないじゃないか」

(リーダー)

「さっきまでののは軽い冗談だよ冗談」

(ロッコ)

「へえー、僕がいるのがわかつていて捕縛したのが軽い冗談ですか」

と言つて更にジト目で睨むロッコ

(リーダー)

「あー、その、君たち、ロッコが世話になつたみたいだね」

それに耐えかねてかあからさまに話しを逸らすリーダー

(リーダー)

「我々ウインドライダーズは受けた恩は決して忘れない、何でも君たちの力になろうじゃないか」

(レテイシア)

「それならまずこの縄ほほどいてくれないかなー」

(リーダー)

「お、おう、みんなでちやつちやつとほどいてやってくれ」

(リーダー)

「それでロツコさん、どうしてそんなに素敵な笑顔を浮かべているのかなー」

確かロツコはすごく素敵な笑顔を浮かべているが目がちつとも笑っていなかったたりする

(ロツコ)

「それはもちろん、リーダーにO☆H A☆N A☆C H Iがあるからですよ」

(リーダー)

「ちよ…、待て、それは字がちが…」

リーダーが慌てて何か言ってるがロツコはそんなことはお構いなしですごくいい笑顔のまま黒い気配とすごいプレッシャーをばら撒きつつリーダーを物陰に引きずっていった

その場にいた風の民の何人かがリーダーに向けて十字を切る、逝ってらっしやいということだろうか

ロツコのO☆H A☆N A☆C H Iはレティシア達が解放された後もしばらく続いた

そうな

ウインドライダーズの村バツケイヤの入り口でえらい歓迎を受けたレナード達は憔悴しきったリーダーのオズモンドの案内で酒場に來ていた

(オズモンド)

「まあ、その、なんだ、今日は俺の奢りだ、好きなだけ飲んで食え」

(シーザー)

「それじゃ、遠慮なく」

(レテイシア)

「でもねー、お酒は飲まないようにねー」

未成年だし正しい言葉ではある、少なくとも日本では

レナード達は酒場でご馳走になりつつオズモンドに今までのことを話した

(オズモンド)

「なるほど、近頃やけに国のもんでもないのに金属鎧でガチガチに固めたやつらがうろついていると思っただらそういうことか」

(オズモンド)

「なら我々にもやらせてくれ、我々の力なら奴らをぶつ潰すことも出来ないことじゃないはずだ」

(レナード)

「いやそれはまずい、シズナが捕まってるんだから」

(オズモンド)

「そうかうーん、とりあえず村の施設は自由に使ってくれ」

(レナード)

「ありがとう」

(オズモンド)

「それと行く時は声をかけてくれ、マグスの巨石は我々の聖地だし歩いて行くには大変な所だから送って行ってやる」

(レナード)

「それは助かる、ほんとにありがとう」

(オズモンド)

「それじゃ、また後でな」

酒場でたつぷり食べた後は村を一通り見て回ることにした

(ユウリ)

「なんかあそこにグライダーがたくさん置いてあるよ」

(エルドア)

「グライダーの工房ではないのか」

(ロッコ)

「みなさーん」

(シーザー)

「よおロッコ、グライダーの調子はどうだ」

(ロッコ)

「それが一部の部品が老朽化していて取り換え修理になっちゃったんです」

(シーザー)

「そうか、それは残念だったな、でも修理がすんでからまた頑張ればいいじゃねえか」と言つてロッコの頭を軽くぽふぽふと叩く

(ロッコ)

「はいです♪」

グライダー工房から出て村を回っていると武器屋の近くで地面に落書きをしてる子供達がいた

その落書きは子供らしく破壊的で辛うじて顔の回りにぼうぼうと何かが生えた男らしいとわかるものだった

(レナード)

「それは？」

(風の民の子供)

「あつれー、お兄ちゃん知らないの、これはマグス様だよー」

(ユウリ)

「この右目らしいとこの線は何かな？」

(風の民の子供)

「マグス様は右目が見えなかったんだよー」

(風の民の子供)

「でもね、後ろにも目がついてるんじゃないかってくらいすごく強かったんだって」

(シーザー)

「確かイシユレニアの騎士達相手に一步も引かずに戦ってその強さで虫の谷を守り抜いた英雄がトロール族のマグスだって言い伝えがあるな」

(エルドア)

「それを称えて作った像の中でも一番大きいのがマグスの巨石と呼ばれているのだから、聖地となるわけだな」

(賢士)

「しかしよおそんな言い伝えを知ったのう（一万年も経てば脚色とかは免れんと

思おとつたが)」

(カーラ)

「それじゃそろそろオズモンドに挨拶しとくかい」

(レナード)

「そうだな、そうしよう」

レナード達は村めぐりを終えてオズモンドの家に行った

(オズモンド)

「よお、もう村での用事はすんだのか」

(レナード)

「ああ、後はシズナを助けるだけだ」

(賢士)

「まったくレナードの奴はシズナシズナと呆れるほどのにぶちんよな」

(レテイシア)

「だよね、ユウリの気持ちにちっとも気づいてないみたいだし」

(賢士)

「まったくユウリが騎士の契約者と気づいておるのは生命波動を確認出来る妾と、竜眼のおせっかいで妾の心を読んだであろうシーザーだけで他に知っておるものはおら

ぬはず」

(賢士)

「つまりバランドール城へのワイザードの襲撃に巻き込まれた後でシズナを助けに行くかどうか選択する機会はあつたはず」

(賢士)

「だがユウリはレナード以外に理由がないにも関わらず旅のメンバーに加わり強くなることを望んだ」

(賢士)

「レナードの奴がその意味を少しでも理解出来ねばユウリの奴があまりにも哀れよ」

(オズモンド)

「さてさて、そんなに慌てるな、お前らを送る準備もしないといけねえし今日は酒場に泊まつてけ、俺から言つとく」

(エルドア)

「そうだな…、その方がいいだろう」

(シーザー)

「せっかく送っていつてくれるって言ってるんだし、その話に乗らない手はないよな」
(レナード)

「それもそうだな」

そして翌日、酒場の前で待ってたオズモンドの案内でレナード達は六機のグライダーに分乗することになった

陸路では村からマグスの巨石への道はろくに存在せず所々に生えてる巨大タンポポを使って風に乗らないとまともに進めないそうである

レナード達はその話を聞いて心の底から送ってもらって良かったと思ったそうである

レナード達はマグスの巨石の直前のロジックストーンがある場所で降りしてもらった

(レナード)

「送ってくれてありがとう」

(オズモンド)

「おう、お前達も頑張れよ、じゃあな」

(エルドア)

「いよいよだな」

(レナード)

「ああ、この先にシズナが待っている」

ユウリはその言葉に答えずにやれやれと首をふるだけだった

黒騎士 1 2



マグスの巨石の手前のロジックストーンから少し進むと広場のような場所に出た

その奥には巨大な石像が一体鎮座しておりその前にバランドールでビッグロを通して話しをした銀髪の青年、ウィザードの司令官であるグラールゼルがいてその傍らにシャブルの姿も見える

シャブルの反対側のグラールゼルの傍らには二人のウィザード兵に後ろ手に拘束されたシズナの姿があつた

(レナード)

「シズナ！」

(賢士)

(確かに見た目はシズナだが身に着けておるのがエアロスローブではなく城にいた時の誕生祭のドレスとな)

(賢士)

(あのドレスは目立つし荷物になるのでマーシャのところに預けたままのはずで、それにこの生命波動は…)

(グラールゼル)

「よく来た、私のことはもう紹介するまでもないだろうが一応名乗っておこう」

(グラールゼル)

「我が名はグラールゼル、ウィザードの司令官だ」

(グラールゼル)

「早速だが取引に入ろうか」

(賢士)

(あのシズナはあまりに怪しいからの、隠密捕縛結界起動準備)

(グラールゼル)

「まずはアークを渡してもらおうか」

(賢士)

(隠密捕縛結界静振^{せいしん}展開)

賢士の密やかな呪文に依えて捕縛用の結界陣がレナードを中心に誰にも気づかれる

ことなく展開していく

(レナード)

「シズナが先だ」

(賢士)

(全開で魔力を使えるようになったおかげで回復効率も段違いに跳ね上がって
おるわ、この程度の境界を維持するくらいならコストの内に入っておらぬ)

レナードの言葉にグララーゼルはシズナに剣を突きつけることで応える

(グララーゼル)

「アークを先に渡さねばこの女がどうなるかわからぬぞ」

(エルドア)

「安い脅しだな、シズナの力を必要としてる貴様がシズナに手を出せるわけがある
まい」

(グララーゼル)

「勘違いするな、この女は封印を解くことさえ出来ればそれでいい、この綺麗な顔を切
り刻もうと足を切り落とそうと封印を解くための口と手が残っていればそれでいい」

(ユウリ)

「くっ…、なんてやつ」

(賢士)

「カーラ、もうあやつは完全に乗っ取られてるように見えるがそれでも決意は変わらぬか？」

(カーラ)

「ああ、もう決めたことを覆すくつがえつもりはない」

(賢士)

「そうか……」

(シーザー)

「こりやあやべえなあ、とりあえず言う通りにした方が良さそうだな」

(レナード)

「くっ……、仕方がない」

レナードとシーザーはアークを持って前に進み出る

(グララゼル)

「そうだ、そこにアークを置いて下がれ」

(シーザー)

(アークに結び付けた極細ワイヤーは異常ないな)

アークを仲間とグララゼル達との中間点に置いた二人は仲間の元へ戻った

(レナード)

「さあ、シズナを渡せ」

(グラールゼル)

「よかろう」

賢士はこっそりと戻ってくる二人と自分に向けて呪文を唱える

(賢士)

(フライト・レント・オント、フライト飛翔)

こっそりと唱えた飛翔の魔法は問題なく三人に効果を発揮する

(賢士)

(なくてもいけようが一応保険よ)

拘束を解かれたシズナが後ろを気にしながらレナードの方へ歩いてくる

(シーザー)

(なあんかおかしいな…)

シーザーは違和感を感じつつグラールゼルの方を見るとグラールゼル達には何の動きも

なかった

(シーザー)

(何で動いてないんだ、何をするにしても今がチャンスだろ?)

シズナは途中まで歩きだったが中間点を過ぎたあたりからレナードの元へ駆け出し

てレナードに抱きついた

(レナード)

「シズナ？」

(シズナ?)

「レナード」

(ユウリ)

(あれ、シズナってこんな声だっけ?)

(シーザー)

(そうか、まずい)

レナードに抱きついたシズナが懐に隠し持ったナイフをレナードに向けて振り上げたところでレナードを中心にして展開してる捕縛結界が反応してシズナに電流が流れてシズナを痺れさせる

(賢士)

「随分と未熟よの、外見を似せただけで惑わされおつて」

(賢士)

「妾は一目で気づいておつたがの」

(シーザー)

「なるほどー、それで結界をレティシアが用意してたわけか」

(シーザー)

「ちつとも気づかなかったぜ」

(賢士)

「アークに取引にシズナの偽物だから、レナードが狙われると思おてこっそりと隠密結界を張っておったのよ」

その時カーラが剣を抜いて賢士に斬りかかる

(カーラ)

「やはりお前が一番切れるな」

賢士は背中の両手剣を抜いて受け止める

(賢士)

(このタイミングでくるか)

(ユウリ)

「カーラ、どうして？」

(カーラ)

「つくづく甘いやつだ、目の前の現実を受け入れられないか」

(シーザー)

「やっぱ決意は変わらねえのか」

(カーラ)

「ああ、昔の兄さんに戻る可能性がゼロとは思いたくないからな」

(シーザー)

「だけど俺も負けるわけにはいかないぜ」

シーザーは槍を構えて賢士の援護に入る

だがカーラはシーザーの突き攻撃を見切つて軽く動いてかわしつつ賢士に回転斬りを仕掛ける

その殺陣たては舞うように美しい

(グララゼル)

(アークさえ手に入ればいい、巻き込まれたとしても一発では死なんだろう)

(グララゼル)

「アークイド・フィジヨウド・サンニグ・ブラスト、ライトニングブラスト」

賢士達が戦っている上空に雷雲が立ち込め賢士達目がけて雷が落ちる

(賢士)

「危ない！」

賢士は素早く察知して体当たりしてシーザーを吹っ飛ばす

カーラも賢士の声に反応して素早く飛び退く

賢士とシーザーは雷をかわしてのはいいが崖っぷちで突き飛ばしたために二人共崖から落ちてしまった

(カーラ)

「兄さんいつたい…?」

(カーラ)

(私を巻き込もうとしたのか)

(グラールゼル)

「ふん、落ちたか、まあいい、あの高さなら助かるまい、アークもないしな」

(グラールゼル)

「さてアークはと…、ぬ?」

アークを置いてあるはずの場所を見るとそこにアークはなくレナードが白騎士のアークを左腕にはめているところだった

レナードはグラールゼルが賢士達に気をとられてる隙についてアークを取り戻していた

だがそこに龍騎士のアークはなかった

(レナード)

「シーザー！、…きさまは許さん、変身！」

レナードを中心に魔法陣が展開してレナードの姿は白騎士へと変わる

(カーラ)

(シーザー…、レティシア…)

とるべき行動を決めたとはいえ今まで共に旅をしてきた仲間のことを気にしてカーラは少しばかり気が滅入っていた

だがそんなカーラを叱りつけるようにカーラの意味に直接賢士の声が聞こえた

(賢士)

「何をしよぼくれておる、妾達が落ちるのは予定通りのことよ、むしろ邪魔が入ったおかげでより自然に落ちることが出来たわ」

(カーラ)

「無事なのか」

カーラの声に出さない問いかけもすっかりと聞こえているのか賢士が答える

(賢士)

「妾もシーザーもピンピンしておるわ」

(カーラ)

(そうか…(無事とわかって安堵してるのか？、まだ…引きずっているというのか、未

練だな……)

(グラールゼル)

「ぬう、いつの間に、きさまら奴を倒せ」

グラールゼルの声に應えてシズナの偽物を拘束していた二人のウィザード兵がカードを取り出す

(ウィザード兵 (人形))

「アドベント」

ウィザード兵の体は魔人との契約で食い尽くされ両手に剣を持った魔人が二体現れた

双剣魔人デュークギガスである

だがよく見ると魔人はそれぞれ持っている武器が違っている

一体は細身の剣の二刀流であり、もう一体はおもいつきり重そうなゴツイ剣の二刀流だった

黒騎士13



二体のデュークギガスは重い剣で防御越しに衝撃を与える力任せの攻撃と細身の剣で確実に攻撃を当てて牽制する攻撃を連携によって組み合わせている

(ユウリ)

「ちよつと、あんなの無茶苦茶よ」

(ユウリ)

(二体で連携だけでもきついのに二刀流で更に二倍になるから…、実質1対4じゃないの)

事実白騎士はユウリ達の補助魔法で強化されながらも防戦一方になっていて反撃をする隙もなかった

レア・メタリカの盾の弾く力がなければ既に勝負が決まってもおかしくなかった



ウィザード軍モノシツプの一室

シズナはモノシツプの中に軟禁されていてレナード達の状況を知る術もなく祈り続けるしかなかった

(シズナ)

(レナード、どうか無事で)

そして、その祈りに応えようとする存在があった

(???)

(この祈りに応えてやりたいけどモノシツプからでは距離がありすぎるわね)
そこに彼女へ何者かの意思が語りかけてきた

(賢士)

「久しぶりよの、ミューレアス」

(???)

「この声…、というか意思はレテイ？」

(???)
↓ミューレアス)

「本当に久しぶりねレテイ、でもどうして？」

(賢士)

「シズナが汝の生まれ変わりであることはわかっておったからな」

(賢士)

「こうして話しをするくらいは容易いことよ」

(ミューレアス)

「ほんとにあなたはびっくりするようなことを平然とやってのけるのね」

(賢士)

「それで何か問題があるのではなかったのか」

「あまりそこに突っ込まれたくないのかさつさと本題を持ち出して話しを逸らす賢士だった」

(ミューレアス)

「ええ…、いつもあの祈りに応えてきたし今回も応えてあげたいのだけど…」

「ミューレアスも緊急事態とわかっていながら話しを逸らしたとわかっていても追及せずに本題の話しに入っていた」

「賢士はミューレアスの意思を聞いてモノシツプを一瞥してから答える」

(賢士)

「なるほど、距離か」

(ミューレアス)

「ええ…、封印に届く前に祈りが拡散してしまうの」

(賢士)

「ならシズナの偽物を使えばどうだ」

(賢士)

「肉体そのものには問題がない上に中身空っぽの人形だから、器として最適だと思うぞ」

(ミューレアス)

「私は幽霊じゃないんだけどな」

(ミューレアス)

「でも確かに中継点としては使えるかも」

(ミューレアス)

「試してみる価値はありそうね」

ミューレアスがシズナの偽物に入り込むとシズナの偽物がビクンと体を震わせてから手を組んで祈り始めた

そうするとシズナの偽物は淡く白いオーラを纏いそれに堪えるにマグスの巨石は真ん中から真つ二つに割れて左右に開く

そして左右に開かれたその中から眩い光が放たれる

そして眩い光は少しずつ収まっていき割れた巨石に挟まるような形で一本の剣になつた

(グララゼル)

「あれは……」

(カーラ)

「まさか……」

(レナード)

「グランサー」

(グララセル)

「いかん、あの剣をとらせるな」

二体のデュークギガスはその命令に従って白騎士への攻撃を中止して巨石に挟まれてる剣へと向かつていった

だがデュークギガスが巨石にたどり着くよりも早く

(シーザー)

「こいつは俺がもらつたぜ」

龍騎士と賢士が巨石の後ろの崖から飛び出して賢士は巨石の左半分の上に着地し龍

騎士は巨石に挟まれた剣に手を伸ばした

だが龍騎士が剣に触れようとすると剣を包むように張られている結界に弾かれてしまった

カーラは巨石に向かって無邪気なまでに無防備に一直線に走るデュークギガス達を見て危機感を募らせる

(カーラ)

(これはいかん、無防備に白騎士に背を向けている、所詮は人形か)

(カーラ)

「古の闇を支配する、漆黒の翼、ディニヴァスよ我に力を…変身！」

(レナード)

「カーラ！」

剣に触れることの出来なかつた龍騎士は体勢を立て直すために空へ舞い上がっていった

その下ではデュークギガス達がグラールゼルの命令に従って考えなしに剣を掴みとろうとしていた

(グラールゼル)

「いかん、とれない剣をとるよりも先に…」

セリフの途中でグラールゼルの足元に矢が三本刺さる

(賢士)

「そうはさせぬよ」

そのまま賢士は魔法で三人に分身してレテイラの読みの力も借りてどう避けても避け切れない軌道で矢の雨を降らせた

(賢士)

「襲^{レインアロー}雨、レテイラの修正版よ」

だがその矢の雨は黒騎士が庇ったことでグラールゼルには届かなかった
だがデュークギガスへの命令を変更する時間はなくなつた

(龍騎士)

(こいつはチャンスだな)

龍騎士は右手で槍を新体操のバトンのようにくるくると回して槍を包むような真空の輪^わを作り出していた

デュークギガスが巨石の剣を掴もうとすると結界に弾かれた

龍騎士はその隙を逃さずにデュークギガスに向けて槍を回して作った輪を投げつけた

(シーザー)

「食らえ、風輪列斬」
ふうりんれつざん

龍騎士の投げた真空の輪は剣が重くて立て直しの遅い重剣のデュークギガースを直撃して切り裂いた

(グラールゼル)

「ぬう、デュークギガースが、それにしてもなぜあの巨石が」

グラールゼルはそう思い回りを見渡してシズナの偽物が祈っているのを見つける

(グラールゼル)

「あれはまさか…、船から祈って私の人形を利用してるとしてもいいのか」

(グラールゼル)

「私の人形の分際で私以外の者に利用されるなど許せん」

(グラールゼル)

「デュークギガースよ、あの人形を巨石の前へ運べ」

細剣のデュークギガースは命令に従ってシズナの偽物を掴んで巨石の前の重剣のデュークギガースの死体の所に運んだ

(賢士)

「偽物を利用しておることに気づきおったか、だがもう遅いのう」

(ミューレアス)

「ええ、後はレナード達がやるべきことだから」

(グラールゼル)

「さあ唱えよ、アドベント」

(シズナ (偽物))

「アドベント」

シズナの偽物を生贄に捧げてデュークギガースの体を一つにまとめて伝説に名を残す緑色の魔獣を呼び出す

その魔獣の名はラミアアコメス

黒騎士14



ラミアコメスが伝説の魔獣と伝えられているのが伊達ではないことがその威容、そのプレツシャーでよくわかる

(ラミアコメス)

「キュオオオオオオオオオン！」

その咆哮は人に恐怖を刻み付けその身をすくませるものだっただろう
ただの人間が相手なら

(シーザー)

「伝説の魔獣だかなんだか知らねえか倒しちまえば同じことだろ」

ラミアコメスにとって不幸だったことはこの場にいる人間が巨獣とか魔獣といった存在に慣れていて随分と肝が太いことであろうか

龍騎士が空から攻撃しようとするがラミアコメスが翼についている目で龍騎士を睨

むと龍騎士は平衡感覚を失くして墜落した

(マスタードラゴン)

(私の精神防御をこえた精神攻撃とは)

どうやら伝説の魔獣としての意地を見せたようである

(シーザー)

「くうう…、どこが上か下かもわからねえ…」

(賢士)

「まったく、しょうがないのう」

賢士は龍騎士を回復するための術式を展開する

(レナード)

「なら代わりに俺が倒す」

(シーザー)

「奴の眼は見るなよー」

白騎士は盾を構えつつ慎重に前に出て剣で攻撃してみたけど体を包むように展開してる翼にあっさりと弾かれ力比べになってもあっさりと押し負けてしまった

(レナード)

「ちくしょう、なんて硬い翼なんだ」

白騎士が手こずってる間に回復魔法の術式が完成する

(賢士)

「右手にリフレツシユ、左手にリフレツシユ、合体治癒魔法リフレツシング」

賢士がリフレツシユを合体させた最上位状態異常回復魔法を使って問答無用で龍騎士を回復させる

(シーザー)

「くうう、ようやくまともに動けるぜ」

(シーザー)

「俺が奴の相手をするからお前は剣をとってこい」

(レナード)

「あれってとれなかったんじゃ？」

(シーザー)

「いいから行け」

(レナード)

「わかったよ」

龍騎士はラミアコメスの翼の目を見ないようにしつつじりじりと動きながら睨み合
いをしている

その間に白騎士はなんとかして剣をとれないものかとマグスの巨石をよく見て調べている

(レナード)

(何とかして剣を手に入れないと、あれ…?)

マグスの巨石をよく見てみるとちゃんと両目がついている

(レナード)

(マグスは右目が見えなかったんじゃ…)

(レナード)

(もしかしてこれか)

ためしに右手を巨石の右目に突っ込んでみる

すると巨石の中に右手が入って中にある何かを掴んで引っ張り出す

それは魔法で右目に隠されていた剣だった

(レナード)

「こいつがグランサーか」

(シーザー)

「よし、手に入れたか、ここから反撃開始だな」

(レナード)

「うおおおおお！」

白騎士はラミアアコメスの目を見ないように盾でかばいながらラミアアコメスとの距離を詰めて斬りつける

ラミアアコメスはさつきと同じように翼で防御するがグランサーでの一撃はその翼をやすやすと切り裂いた

(ラミアアコメス)

「キュアアアアアアアアアーン!？」

(カーラ)

「これは、まずい」

黒騎士がラミアアコメスの援護に入ろうとするのをグラールゼルが止めた

(グラールゼル)

「カーラ、ここは下がれ」

(グラールゼル?)

(ラミアアコメスの翼を切り裂くとは、やはりグランサーなのか、量産型騎士を次々と斬り倒して私の計画を潰したあの剣が相手では黒騎士でも潰されるかもしれん)

(カーラ)

「しかしこのままでは」

(グララゼル)

「私の計画には一体の騎士も欠くことは許されないのだ」

(カーラ)

「わかりました兄さん」

(グララゼル)

(そう、五体のシンナイトの力を吸収して騎士王を完成させるまではシンナイトを欠けさせるわけにはいかん)

カーラとグララゼルが話してる間にラミアコメスとの戦いは決着の時を迎えていた

(シーザー)

(やつこさん、予想外のダメージに泡くってやがるな、今がチャンス)

龍騎士はその隙を逃さずに必殺技の龍閃でラミアコメスに突撃した

ラミアコメスを貫くことは出来なかったものの大きなダメージを与えて体勢を崩すことは出来た

(レナード)

「これで決める、ソニッククロス」

(ラミアコメス)

「キュアオオオオオオ」

ラミアコメスは大きなダメージを受けたもののまだ倒れない

(レナード)

「しい・ぶ・と・いいー」

レナードの気迫に応えて大技を使った反動で硬直してた白騎士が動き出す

(レナード)

「聖・剣・解・放、グランレイヴ！」

再び動き出した白騎士はグランサーでラミアコメスを右から左から、斜めから上から、目にも止まらぬ速さであらゆる角度かに切り刻んで最後に唐竹割りに叩き斬った

ラミアコメスは悲鳴も上げられずに倒れた

(グラールゼル)

「ぐずぐずはしていられん、退くぞ」

(カーラ)

「はい」

(賢士)

「カーラ、その道で後悔はせぬな？」

(カーラ)

「後悔はするかもしれない、良い仲間にも恵まれた本当に楽しい旅だったからな」

(賢士)

「なら…」

(カーラ)

「だけどこの道を途中で投げだすつもりはない」

カーラはグラーゼルから転送符を受け取ってそのまま転送符の効果で姿を消した

黒騎士15



カーラ達が消えてからそう時間が経たない内にウイザードのモノシップが飛び去っていくのが見えた

それとほぼ同時にズズ…と地鳴りのような音が聞こえた

(エルドア)

「まずいな、戦いの音で虫が目を覚ましたようだ」

(シーザー)

「んでウイザードのモノシップを見つけて動き出したってか、冗談じゃないぜ」

(ユウリ)

「このままじゃまずいよ」

その時レナード達の近くにグライダーが五機着陸した

(オズモンド)

「お前ら乗れ、脱出するぞ」

(シーザー)

「こいつはありがとうえ」

(賢士)

「世話になるぞ」

全員相乗りしてマグスの巨石から飛び立った

だが運の悪いことにモノシップを追うグリーバーとはち合わせすることとなりグリーバーの背中すれすれを飛んでやりすごそうとするが、それはグリーバーの体毛の間を抜けることとなりまるで森の中を飛んでいるかのような状態になっている

その上グリーバーが走る度にグリーバーの体が峡谷に当たって石が落ちてきたりグリーバーがガスを吹き出して視界が悪くなったりしたのでさしものウインドライダーズも翼をぶつけてしまつて全機グリーバーの背中に墜落することになってしまった

(ユウリ)

「あいつたたたたた…、みんな大丈夫？」

回りをみるとレティシアはコロコロと転がった挙句グリーバーの体毛に当たつたらしく仰向けで両足を上げたまま倒れていた

(レティシア)

「くぎゆう…」

シーザーは何事もなかったかのように歩いてきた

(シーザー)

「おーい、みんな無事か」

こんな調子でオズモンド達を含めて10人全員が合流することが出来た

(オズモンド)

「しかしウインドライダーズともあろうもんがドジったぜ」

(レナード)

「いや、あれは操縦技術でどうこうなるもんじゃなかったと思うよ」

(ユウリ)

「しかしえらい速さで走ってるわね」

(オズモンド)

「これじゃウインドライダーズの救援もこれないぞ」

(エルドア)

「なら虫の習性を利用しておとなしくしてもらえないかな」

(レナード)

「虫の習性？」

(オズモンド)

「頭の方へ行つて触手をガツーンと殴つて黙らせる気か」

(シーザー)

「そりやまた豪快な作戦だな」

(賢士)

「とはいえ、他に手はなさそうだしやるしかなからう」

全員身に着けてるもので失くしたものがなかどうか確認してからオズモンド以外のウインドライダーズを墜落で壊れたグライダーの確保に残してグリーバーの頭部へ進むことになった

しばらく進んで頭部らしき所へくるとグリーバーは「ぐばあ」と口を開けて大量のガスを吐き出しその中から柱のように太くて長い触手が伸びてきて先端についでレナード達を見下ろした

(ユウリ)

「なんで虫の触覚に睨まれなくちゃならないのよ」

(オズモンド)

「しょうがねえだろ、グリーバーは触覚に目がついてるんだからな」

(レナード)

「とにかくあれを叩いておとなしくさせればいいんだな、我に力を…変身！」

(シーザー)

「あつ、ならそつちは任せた、こつちは雑草刈りだ」

オズモンドとシーザー達は触覚を守るようにいつの間にか無数に生えてきてる触手をザクザクと切り始めた

改めて触覚の方を見ると白騎士に見劣りしない大きさをしているが攻撃パターンが触覚全体での体当たりとか単純なものしかなかったから白騎士の敵ではなかった

触覚が白騎士の攻撃に耐えかねて引っこむとグリーバーの動きが鈍りそのまま倒れこんだ

その後ウインドライダーズの救助隊によって崖の上まで運ばれたがグライダーの数が足らないので先にウインドライダーズを村へ返すことになった

ウインドライダーズの迎えを待つ間レナード達は賢士からカーラのことを聞いていた

(レナード)

「カーラにそんな事情があったのか」

(ユウリ)

「それに、セテイさんがグラールゼルだったなんて」

(賢士)

「あの薬はセテイを守るためのものだったが、どうやらマドラスが直接とり憑いとるらしいのう、あれでは薬も意味がないわ」

(シーザー)

「カーラのやつ、また一緒に旅が出来るといいな」

(賢士)

「そうよのう」

(オズモンド)

「おい、お前から待たせたな」

レナード達は迎えに来たオズモンド達のグライダーに相乗りしてバツケイヤの村に戻った

(オズモンド)

「どうだい、俺達も役に立っただろう」

(レナード)

「本当に助かったよ、ありがとうオズモンド」

(ロツコ)

「これでご恩返しが出来ましたね」

(オズモンド)

「そういやお前達にお客さんが来てるぜ、俺の家で待つてもらってるから会ってやればどうだ」

(レナード)

「そうするよ」

オズモンドの家に着くと

(???)

「お久しぶりです皆さん」

(レナード)

「お前は…」

(シーザー)

「セティ」

なんとなくみんなしてセティを見ると虫の谷を越えてきたとは思えないくらい靴がきれいだった

(ユウリ)

「これって…」

(シーザー)

「確定だな

(賢士)

「それはそうと気を取り直して」

(賢士)

「汝は生きておつたのだな、火事で死体が出たと言うておつたから諦めておつたぞ」

(セテイ)

「どうやら私の命が狙われていたようなので身を隠していたのですが、どうやらその間に私を訪ねてきた人が犠牲になったようです」

(シーザー)

「そうか…、それにしてもお前ここにくるまでの道をよく渡つてこれたな」とシーザーがいけしやあしやあと試ってみる

(セテイ)

「ええ、まあ、何とか、それよりも急ぎましよう、ウィザードの動きが活発になってきました」

(セテイ)

「このままではウィザードが太陽王を復活させるのも近いと思われます」

(セテイ)

「そしてウイザードの飛行船の動きからして太陽王はおそらくドグマホールに」

(エルドア)

「そうなる」と目的地はドグマホールか？」

(セテイ)

「いえ、まだ皆さんに話していないこともあるのでその手前のシンカ村へ向かうこと
になります」

(エルドア)

「どちらにしろバンハイブン荒野をこえていくことになるな、あそこは広い」

(シーザー)

「今日は色々あつて疲れたー」

そこまで話して一区切りついたと判断したのかシーザーが脈絡のないことを言った

(賢士)

「そうよな、一晩泊めてもらった方が良からう」

(セテイ)

「そうですね、そうしましょう」

(オズモンド)

「おう、それなら遠慮なく俺の家を使ってくれて構わないぜ」

(ユウリ)

「お世話になりまーす」

その夜レナード達はレティシアの部屋で作戦会議をしていた

(レナード)

「セティがグラールゼルだつてのはわかってるんだろ、それなのにどういふつもりだ？」

(賢士)

「それはな、生命波動を始めとして色々と見てみた結果今のセティの体ま主導権はグラールゼルが7でセティが3といった割合よ」

(ユウリ)

「それってどういうこと？」

(賢士)

「マドラスがとり憑いとる今はマドラスが名乗るグラールゼルが主導権をとつておるのは確かだが、セティ本来の意思も必死に抵抗して色々と干渉しておるようでのこの際つきあえるところまでつきおうて情報を引き出そうと思うてな」

(エルドア)

「二万年前の生き証人がここに二人もいるから情報を歪めて引つ掛けようとしても無駄だしな」

(賢士)

「そこでこんな物を用意した」

(ユウリ)

「これは…、腕輪？」

(賢士)

「これは広域心輪と言うてな、この腕輪をつけた者同士は言葉にせずとも意思のみで会話出来るようになるものよ」

(シーザー)

「面白そうだな、早速試してみるか」

(シーザー)

「ユウリ聞こえるか？」

(ユウリ)

「聞こえるわよ、シーザーどうぞぞ」

(レナード)

「これで情報の歪みを訂正しつつセティにつきあうわけか」

(賢士)

「そういうことよ」

レナード達はその後部屋に戻って休むことにした

そして翌日、レナード達はシンカ村へ向かって出発した

(賢士)

(さてさて、狐と狸の化かし合いの始まりよ)

第五章

太陽王 1



レナード達はバツケイヤから旅立ってシンカ村へ向かうためにバンハイブン荒野を歩いてきた

この荒野は他の地域よりも一層モンスターが強いとされているがしばらくこの荒野を歩いているレナード達にはその意味が身に染みるほどよくわかっていた

アイスジャイアントにアイスドラゴン、ウイングドラゴンにケルベロス巨人サイズのモンスターがそこかしこを平然と闊歩しているのだ

レナード達でなければこの荒野を通り抜けることすら難しかっただろう

更に地下には所々で古代から設置されているであろう大扉が道を塞ぎセテイの地図を頼りに大回りしていかなければいけなくなっていた

地図に書いてある所の地下の真ん中あたりにまできた時にはその絶景にみんなから

感嘆の音が漏れていた

(レナード)

「地下にこんな緑に恵まれた場所があるなんて」

(ユウリ)

「見て見て、この川の水すごく透明ですごくきれい」

(エルドア)

「吹き抜けになっておいているおかげでこのような場所が出来たのだな」

(レティシア)

「水がきれいってことは飲めるのかな、…うん美味しい」

(エルドア)

「よし、ここでキャンプを張ろう」

(セティ)

「そうですね」

その夜、レティシアとユウリは見張り当番として起きていたが、ユウリは体がなんとなく落ち着かなくて夜空を見上げた

(ユウリ)

「あつ、そうか、今日は満月だったんだ」

(ユウリ)

「どうりで落ち着かないわけだ」

(レティシア)

「そうなの？」

(ユウリ)

「うん、昔から満月の時はやたらと体が元気になるというかちつとも落ち着かなくて全然眠れないのよ」

(ユウリ)

「ここで見える満月は特にきれいねー」

(レティシア)

「ほんときれいだねー」

(賢士)

(月姫の契約者であることと関係ありそうよな)

翌日キャンプを畳んで再びシンカ村へ向かって歩き始めたが村の手前の所ですぐも意外なものを見ることになる

(レナード)

「お…おい、あれって城を襲った大砲を背負ったモンスターだよな」

(ユウリ)

「そ…、そうだよね」

(賢士)

「合成魔獣の名が示すように作られた存在であるが故、管理されておるはずなのだがのう」

(ユウリ)

「それがなんでトロルやドラゴンみたいに平然とうろついていたりするのよ」

(シーザー)

「やれやれ、ウィザードのやつら、管理が杜撰ずさんなんじゃねえのか」

(エルドア)

「文句を言っても始まらない、目の前にいるのは確かだしな」

レナードとシーザーがやれやれといった感じで騎士に変身する

合成魔獣とはいえたった一頭では騎士二体の敵ではなかった

ちなみに巨大モンスターを倒す度にマーシャに連絡してるからこの荒野一帯の巨大モンスターの死体は全部マーシャが経営する店の系列店に回収されるだろう

それといつの間にかマーシャの店にちゃんと手入れされたカーラが使っていた装備一式が届けられていたそうである

その中にとても珍しい武器であるダンシンググシミターもあつたので間違いない

(賢士)

(あやつも難儀なもんよのう)

(賢士)

(律儀ではあるがの)



合成魔獣を倒して元の姿に戻ったレナード達はそこからしばらく歩いてシンカ村にたどり着いた

(エルドア)

「ここがシンカ村か」

(セテイ)

「そうです、ここがある意味すべての始まりと言えるシンカ村です」

(シーザー)

「そうは言っても、随分と廃墟になっちまってるな」

(ユウリ)

「でもなんだろう、すごく懐かしい感じがする」

(ユウリ)

「確かこつちの方だったかな」

ユウリはそう言って一見の廃屋へ入っていった

(レナード)

「おい、ユウリどうしたんだよ」

ユウリが廃屋のガレキをどかしていると何か見つけたようだ

(ユウリ)

「わあ、これきれいな弓」

見つけたのは白銀の立派な弓のようだ

(賢士)

「こんな廃墟には似つかわしくないほどきれいな弓だのう、魔法処理でもされておるのか劣化しとる気配すらないぞ」

(ユウリ)

「あつ、でも弓と言えばレティシアだからレティシアが使うことになるのかな」

(賢士)

「いや、この弓はユウリに見つけて欲しかったのではないのかの」

(ユウリ)

「そうかな」

(賢士)

「そうでなくては迷わずに見つけることなど出来まい」

(シーザー)

「そりや言えてる」

その間村の中央ではセティが枝を集めてエルドアが焚き火をつけていた

(セティ)

「それでは皆さん、そろそろ話しをしますよ」

(賢士)

「ぬう、セティの気配が感じられぬな、ということは完全に抑え込まれたか」

(レナード)

「それってまずいじゃないか」

(賢士)

「心配するでない、ウソがあれば妾とエルドアで逐一教えるからの」

(レナード・ユウリ・シーザー)

「わかった」

(セテイ)

「事の始まりは17年前の大異変からとなります」

(セテイ)

「その異変によつて世界のあちこちにドグマ戦記時代の古代の遺跡が現れました」

(レナード)

「もしかしてラグニツシユ砂漠の遺跡も」

(セテイ)

「ええ、おそらくそうでしょう」

(賢士)

(確かにあの遺跡はそうであつておかしくないのう)

(セテイ)

「そしてそんな遺跡の中でも最大級のものがこの西に存在するドグマ神殿跡、私達はドグマホールと呼んでいます」

(セテイ)

「17年前にドグマ戦記時代の遺跡にただならぬ関心を持つある団体がドグマホールを調査した所、驚くべきもの発見したのです」

(レナード)

「その驚くべきものとは？」

(セテイ)

「それは古代遺跡の容器に入った四人の赤子と五才くらいの少年でした」

(セテイ)

「その容器は冷気の濃い容器でひんやりとしていました、容器に記されている古代文字に従って容器を開けるとその中の赤子は生きていました」

(賢士)

(おそらくは一万年前の量産型騎士が上手くいった時にシンナイトの契約者にするために調整されていた赤子達のことよな)

(シーザー)

(つてことはもしかして俺達は…)

(セテイ)

「当時バランドールに白騎士らしきものがありバンカーロードの龍が守る鎧が龍騎士に似ていることをドグマホールを調査してた団体は知っていました」

(セテイ)

「そして赤子達を見つけた隠し部屋に保管されていた資料を読み解くことで赤子達がシンナイトの契約者であることを知りました」

(セテイ)

「そこでその団体のリーダーでもありこの村の村長でもある一人の男は赤子達と同じ場所にいることの危険性を考えてばらばらに里親を探すことにしました」

(シーザー)

「つてことはその赤子は俺やレナードやカーラつてことか」

(セテイ)

「ええ、その通りです」

(シーザー)

「そして里親に出した村長つてのはやつぱり…」

(セテイ)

「予想してるとは思いますが私の父ミディアスです」

(エルドア)

「ここまでの所はなんらおかしいところを感じぬがレティシア殿はどうだ？」

(賢士)

「妾も突っ込みたくなるようなウソは感じられぬ」

(レナード)

「しかし、俺にシーザーにカーラとばらばらに預けられた子供が出会うなんてすごい

偶然もあつたもんだな」

(セティ)

「はたしてそれは本当に偶然なのでしょうか」

(賢士)

(おや、何だか怪しくなってきたのう)

(セティ)

「もし意図して集められたとしたら」

(レナード)

「それはないだろ、カーラはグラールゼルが会わせたにしてもシーザーは偶然だろ」

(セティ)

「では白騎士を手に入れたのも偶然ですか」

(賢士)

「ふむ、白騎士は確かにレナードが契約者の可能性が高いと思おてエルドアにそれを

伝えたがの」

(賢士)

「何しろ襲撃してきてウィザードの切り札らしき合成魔獣は人の手でどうこうできるものではないからのう」

(賢士)

「あの頃は白騎士を引つ張り出すしかなかったのう」

(セテイ)

「はたして本当にそれだけですか」

(賢士)

「なぬ？」

(セテイ)

「もしかしたら白騎士がなくても何とかすることが出来たのではありませんか」

(賢士)

「それはどういう意味かの？」

(セテイ)

「そのままの意味ですよ」

(賢士)

. . .

「だとしたら見当違いだのう、妾の力である合成魔獣をどうにか出来るわけではないわ」

(レナード)

「そーいやノルディア坑道でレテイシアのシンナイトのようなものを出した時はこの

世界の力じゃないから出来るだけ使わずにすませたいとか言ってたっけ」

(賢士)

「フアングは異世界の機械仕掛けの神だから、あれは本来この世界に在らざる力よ」

(セテイ)

「そうですか、でもその魔獣を理由にして白騎士を復活させたことは確かですね」

(賢士)

「それは否定せんがの」

(セテイ)

「レテイシアさん、エルドアさん、あなた達は古人ですね」

(エルドア)

「確かに私もレテイシア殿も魔法を使ってこの時代にやってきた一万年前の人間だから古人という言い方は間違いではないな……」

エルドアがそこまで言ったところでそれ以上の言葉を遮るかのように大きい声で言葉を紡ぐ

(セテイ)

「あなた達は強大な力を持つ騎士を集めて何を企んでいるんですか」

(レナード)

「きたな」

(ユウリ)

「それでここからどうするの？」

(シーザー)

「セティをいい気にさせるために二人には別行動をとってもらうか？」

(賢士)

「それも面白いのう、広域心輪でいつでも話しは出来るし転移魔法で簡単に合流出来るしの」

(エルドア)

「それにやつがどうボロを出すのかも楽しみだな」

(ユウリ)

「じゃあ、一芝居打ちますか」

(ユウリ)

「そういやシズナを助けた時も城に帰さずに一緒に旅をした方がいいと主張してたわね」

(レナード)

「まさかそれも騎士を多く手に入れるためなのか」

(セティ)

「ありえますね」

(エルドア)

「ううむ…」

(賢士)

「しょうがないのう」

そう言うのと賢士の転移魔法で賢士とエルドアは姿を消した

(ユウリ)

「なんてこと、信じていたのに」

かなり雑で棒読みな演技ではあったが上手くいったとばかりに密かににやりと笑っているセティは気づかなかったようである

(レナード)

「それで合流するまでレティシア達はどうするんだ？」

(賢士)

「先にドグマホールに行って古代の魔法生物をファンングで片付けておくわ」

(レナード)

「魔法生物？」

(賢士)

「土や石のゴーレムがやたらとうろついているのよ」

(賢士)

「それにこういう人目のない所でないとファングは使えんしの」

(レナード)

「わかった」

(セテイ)

「あの人達が何を企んでいるかわかりませんが、それにウィザードは太陽王を狙っていることでしょう」

(セテイ)

「早く行きましょう」

(シーザー)

「まあ待て、ドグマホールへの道は結構きついんじゃないのか？」

(セテイ)

「ええそれなりに」

(レナード)

「なら一晩休んでから行こう」

(セティ)

「ええそうですね、わかりました」
こうしてレナード達は翌日にドグマホールへ向かって出発した

太陽王2



ドグマホールへ向かうレナード達はその途中の広場でガレキになったゴーレムらしきものを見た

(レナード)

「うわ、これ何だ」

(シーザー)

「こっちはロックガーディアンで…」

(ユウリ)

「これは…、ゴーレムかしらね」

(セテイ)

「おそらくは古代遺跡の守護者ではないでしょうか」

(レナード)

「しかしゴーレムとかガーディアンとかが三体なんてちよつとぞつとしないな」

(シーザー)

「それよりもこいつらを片付けたのが何者なのかが問題なんじゃないのか」

(セテイ)

「そうですね、これをやったのがウィザードにしてもレティシアさん達にしても恐るべき力ですね」

(シーザー)

「おー、怖い怖い」

(シーザー)

《で、実際の所どうなんだ》

(賢士)

《予想はついとると思うがファングで蹴倒してやったのよ》

(シーザー)

《やっぱりね》

(セテイ)

「ここから先は何があるかわかりませんが慎重に進みましょう」

それからしばらく進んでドグマホールの全景を見れる場所になるとセテイはドグマ

ホールについて話し始めた

(セテイ)

「ドグマホールは正確には外園部を通り抜けた後の神殿部分、つまりは中央のみを指す言葉です」

(セテイ)

「その神殿部分はダンジョンになっているので警戒は怠らない方がいいでしょう」

(ユウリ)

「結構歩いて疲れたしこの辺でキャンプにしない」

(セテイ)

「いいえ、神殿前は広場になっているのでそこの方がいいでしょう」

(セテイ)

「それまで頑張ってください」

(ユウリ)

「ふあい」

そして日が暮れる頃になって神殿前に到着した

(ユウリ)

「よし、キャンプだキャンプ」

(レナード)

「テントは俺とユウリで張っておくから食事の準備は…」

(シーザー)

「あー俺、俺がやるわ」

(セテイ)

「私がやろうと思っていたのですが」

(セテイ)

「料理は割と得意なので私なりのキャンプ料理を振る舞おうと思っていたのですが」

(シーザー)

「それはまた今度機会があればな」

(シーザー)

《つーかセテイに料理作らせて薬でも盛られたらたまらん》

(レナード)

《それは言えてる》

(レナード)

「じゃあセテイは薪になる枝を集めてきてくれ」

(セテイ)

「わかりました」

そして深夜、人数が減ったので見張りのローテーションを組んでセテイ一人で見張りをしている時間……

音の鳴り難い軽鎧に身を包んだウイザード兵が1ダース程レナード達のテントを取り囲む

見張り当番のセテイはそれを見て椅子代わりの石から立ち上がりウイザード兵と合流した

(セテイ)

「予定通りだな、それでは……」

(レナード)

「やれやれ、調子に乗らせれば新しい情報が出るかと思っただけ」

(シーザー)

「調子に乗りすぎておじやんになっちまったな」

(ユウリ)

「どおりでここに着く前にキャンプを張るのを嫌がってたわけね」

(セテイ)

「おや、気づいていましたか」

(セテイ)

「気づかずにいれば楽に死ねたものを」

(セテイ)

「それにしても、いつ怪しいと思いましたか」

(シーザー)

「決定的なのは靴だな」

(ユウリ)

「そうそう、バツケイヤは虫の谷の中にあるんだから」

(ユウリ)

「あんなきれいな靴で来ること自体がおかしいのよ」

(レナード)

「靴を汚さずに来る方法は2つ」

(シーザー)

「魔法で転移するか空から来るか」

(レナード)

「ただ魔法で転移するためにはその場所の情報が必要だ」

(シーザー)

「転送符みたいに予め情報が入っているか」

(ユウリ)

「それともバツケイヤに来たことがあるかよね」

(シーザー)

「だけどあんな場所気軽にひよいひよい来る場所じゃねえぜ」

(レナード)

「そうなると空から来たとした考えられない」

(シーザー)

「んで俺達が持つてるもん以外でバツケイヤへ来れる空飛ぶものとなると」

(レナード)

「グリードのゴンドラの特別便かグライダーかモノシップだけ」

(ユウリ)

「でもグライダーと特別便は他人が乗ることは出来ないし」

(シーザー)

「バツケイヤのハピタルと特に知り合いと言うわけでもなかった」

(レナード)

「なら答えは一つと言うわけだ」

(セテイ)

「なるほど、それは気づきませんでしたね」

(セテイ)

「でも3人くらいならこの人数でも」

(賢士)

「天空魔法陣・縛」

その声と共にレナード達のテントを中心に上空で捕縛用魔法陣が起動しその光が地面に投影されて効果を発揮する

セテイだけは魔法陣が効果を発揮する前に逃れることが出来たがウイザード兵は全員動けなくなり手に持った松明を落とした

魔法陣が展開した後でテントの後ろから二人の人物が姿を現す

(賢士)

「三人くらいならなんだって」

(エルドア)

「残念だが五人いるぞ」

(セテイ)

「なぜあなた達がそこに？」

(賢士)

「それは汝が太陽王の契約者だからよ、グラールゼル」

(セテイ)

「どういうことだ？」

(賢士)

「妾は生命波動という固有パターンを見ることが出来る、そして騎士と契約者の生命波動は酷似しておるのでよおわかるのよ」

(賢士)

「カーラが接触してきた時も黒騎士の契約者だとすぐにわかったからの、色々世話をして呪縛から解放してやったわ」

(セテイ)

「ぬう、カーラの態度が何かおかしいと思ったがそういうことか」

(賢士)

「だがカーラはの、解放されてからもこれからを考えに考えてそれでも汝を一人にしようはないと妾達と違う道を行くと決めたのだぞ」

(賢士)

「その想い、少しでも受け取ってほしいものよな」

セティは「ふん」と言つて指を鳴らすとその足元に魔法陣が現れ魔法陣の光に包まれて姿が見えなくなる

魔法陣の光が収まり再び姿を現した時にはその姿はグラールゼルになっていた

(グラールゼル)

「人形よ、魔法陣から出ろ」

グラールゼルのその言葉が響き渡ると捕縛結界で動けないはずのウィザード兵達は何かに引きずられるように無理矢理結界の外へと這い出す

「どう見ても体に負担がかかるほど無理矢理這い出したせいで足とか手とかを捻っているものや皮がずりむけて血が出ているものもいるがそれに気づいた様子はまったくなかった」

(ユウリ)

「ひ…、ひどい…」

(賢士)

「な…：汝はそこまで人であることを壊して楽しいのか！」

(グラールゼル)

「私に従うものが人である必要はない」

(シーザー)

「カーラも同じことだっていうのか」

(グラールゼル)

「契約者の自我を完全に壊してしまつては契約者たりえるのかどうかわからないのでな、言いなりに出来ないのは面倒ではあるが思い通りに動いてくれればそれでいい」

(シーザー)

(カーラ、お前は救いたいと言っているが望みはなさそうだぜ)

(グラールゼル)

「それよりもどうして私が結界に捕まらずにすんだかわかるか」

(賢士)

「そう言えば最初からテントから距離をとって囲んでおるのう」

(グラールゼル)

「そう、遠巻きにしていたおかげで結界から逃げる事が出来たのだよ」

(賢士)

「という事は…、しまった」

グラールゼルが指を鳴らすとテントもレナード達も巻き込んで神殿前広場の中央を包むように赤い魔法陣が現れて光り始めた

レナード達が逃げ出すよりも早くその光は弾けて魔法陣の中の地面を砕いて下へと

落とした

(賢士)

「つつう、どじったわ」

(グラールゼル)

「ははは、あなたの使用した魔法陣が天空式で助かりましたよ」

(グラールゼル)

「私の設置型の魔法陣と干渉せずにすんだのですから」

(グラールゼル)

(これだけ距離が近ければ太陽王を見つけることが出来るだろう)

(グラールゼル)

「それではごゆっくり」

グラールゼルはそう言って魔法陣で空けた穴に一枚の紙切れを投げ込んで去っていった

その紙切れは穴の底に着くと巨大な魔法陣を展開してその中から何か巨大な存在が現れようとしていた

(賢士)

「……これは、この感じは、バランドールに攻めてきた魔獣を思い出すのう」

(エルドア)

「だがあの魔獣よりも凶暴そうだ」

魔法陣から現れた存在はバランドール城を襲ったグレアデイモスに似ているが、大きな違いとして全身が赤い装甲で包まれていることと背中に大砲の代わりに細長い巨大なクリスタルを背負っていることがあげられる

(賢士)

「これは…、合成魔獣を魔法技術で更に強化したというのか」

(シーザー)

「やれやれ、落とし穴くらい簡単に脱出出来ると思ったのにあいつが本命かよ」

(レナード)

「とにかく備えないと」

(レナード・シーザー)

「我に力を…変身！」

二人が変身してる間にユウリとエルドアと賢士は飛翔の魔法で落とし穴から外に出ている

クリスタルを背負った魔獣デイノグレアデイモスはまずは小手試しと言わんばかりに右前足で白騎士を引っ掻こうとした

だが白騎士の盾に激しく弾かれてたたらを踏むことになった

龍騎士はその隙を逃さずに魔獣の喉を突いたが貫くことは出来ずに装甲の表面を滑っただけだった

魔獣にとつてはそれでも十分刺激になったらしく力む様子を見せるとクリスタルの先に無数の光球が現れた

魔獣がその光球を前方の広い範囲にばら撒くと光球は爆発して白騎士と龍騎士に少なからずダメージを与えた

(シーザー)

「くう…、こいつはやべえな」

(レナード)

「体中硬められてるしどこを狙えばいいんだ」

(シーザー)

「そうだよな…、ん…あそこはどうかかな」

(レナード)

「あそこって?」

(シーザー)

「ほら、クリスタルと背中にくっついてる部分だよ」

(シーザー)

「あつこなんとかしてクリスタルを使えないようにすれば楽になるんじゃないか？」

(レナード)

「そうか、あーでもちよつと届かないかな」

(シーザー)

「だから俺がやるんだ、そこでお前にちよつと頼みがある」

(レナード)

「攻撃の届かない俺に頼みって…、囿になれってこと」

(シーザー)

「おお、よくわかったな」

(シーザー)

「とりあえず俺は空から隙を伺うからあいつを上手く怒らせてくれよ」

(シーザー)

「まあ、空中に浮かんでいれば少なくとも両方が攻撃をくらうことはないし奴さんにはお前に集中してもらわないと上手く当たらないかもしれないしな」

(レナード)

「わーった、俺がやる、その代わり一発で決めろよな」

(シーザー)

「了解」

白騎士が魔獣との距離を詰めて龍騎士が空を飛ぶ

白騎士が魔獣の左前足に乱れ斬りを叩き込むが装甲の表面をこすれてキュリギユリと嫌な音を立てるだけでダメージには至らない

だけどその嫌な音に反応してか魔獣は右前脚で再び白騎士を引つ掻こうとして盾に弾かれて再びたたらを踏む

(シーザー)

「……だ、風・輪・列・斬」

龍騎士が真空の輪を魔獣とのクリスタルと体の間の結合部を狙って投げる

だが魔獣は体を沈めてクリスタルの部分で真空の輪を受けた

真空の輪が当たった部分にダメージらしいダメージは見当たらない

(シーザー)

「なんなんだよあのクリスタルは」

魔獣は白騎士と龍騎士をうっとおしそうに見ると一声吠えてクリスタルの先に無数の雷球を作り出した

白騎士は攻撃に備えて盾を構え、龍騎士は捲きこまれないように更な高く飛び上がった

た

だが打ち出された雷球は前方の広い範囲で弾けると共に空高く登り龍騎士を直撃した

(シーザー)

「うわあああああー!」

雷撃を食らった龍騎士はそのまま穴の底へ墜落した

(レナード)

「シーザー!、大丈夫かシーザー」

盾で雷を弾いた白騎士が龍騎士に駆け寄る

(シーザー)

「まあ…、なんとかかな。つつう…」

(マスタードラゴン)

「私の存在にかけてマスターは死なせはしません」

(マスタードラゴン)

「とはいえダメメージがひどすぎます、これでは全力を出すことは出来ませんし龍閃のような大技を出すことも出来ません」

(シーザー)

「そうか、きついな……」

(レナード)

(あの時の、砂漠の遺跡の時のような力があれば)

(レナード)

(いや、あの力を出せても倒れてしまったは意味がない)

(レナード)

「みんな、俺が戦っている間にシーザーの治療を頼む」

賢士が素早い行動で龍騎士に飛翔の魔法をかけた。「わかった」と答える
そして白騎士はソニックブレードの構えをとって魔獣と睨み合う

(レナード)

(なんだろう、やたらと心が静かだな)

(レナード)

(攻撃は通用しない、一発食らって龍騎士がやられる)

(レナード)

(そんな絶望的な状況なのに、なんでこんなに心が静かなんだろ)

(賢士)

(レナードよ、清心合一よ)

(レナード)

(清心合一?)

(賢士)

(己を劍とし劍を己とせよ、劍の隅々まで己の意思を行き渡らせよ)

(レナード)

(わけわかんないよな、でもまあ…いいや)

(レナード)

(劍を意識して、劍の当たるところ、劍の視界、色々感じ取ってみる)

(レナード)

(なんていうか、今だから出来る何かがある気がする)

太陽王3



レナードは絶対絶命の窮地に追い込まれていた

(レナード)

(攻撃は通用しない、一発食らって龍騎士がやられる)

だがそんな状況とは裏腹に心は静かに研ぎ澄まされていた

(レナード)

(そんな絶望的な状況なのに、なんで心はこんなに静かなんだろ)

賢士はその様子を感じ取ったのか広域心輪でレナードに言葉を贈る

(賢士)

「レナード、清心合一よ」

(レナード)

「清心合一、わけわかんないな、でもまあ…いいや」

(レナード)

(なんていうか、今だから出来る何かがある気がする)

(レナード)

(意識を体の隅々まで…、剣の先にまで行き渡らせる)

(レナード)

(…静かに…、研ぎ澄ませるほどにわかってくる)

(レナード)

(見ていないのに剣に触れる木の葉が二つに切れることまでわかる)

(レナード)

(白騎士に包まれているのに土を踏みしめる感触までわかる)

魔獣が白騎士を引き裂こうと右前足を振り上げる

(レナード)

(そして、敵が仕掛けようとしてるのも)

魔獣の右前足が振り下ろされる

(レナード)

(今だ)

だがその瞬間白騎士の姿は消え次にその姿が見えた時は剣の柄で魔獣のアゴを打ち

上げて上空へ飛ばしていた

予備動作のない無拍子でいかなる存在にも悟られることなく一瞬の間に魔獣の懐ふところに潜り込み全力を一点に集中して魔獣を打ち上げたのである

魔獣を打ち上げた白騎士はそのまま魔獣を追撃するため飛び上がり無数の斬撃を繰り出す乱舞技であるシャイニングレイヴを叩き込む

だんだんと空中へ打ちあがる勢いが衰えてピタツと止まったところで前へ一回転して勢いをつけた白騎士の兜割りを叩き込まれる

強烈な一撃で仮面がボロボロになりながらも今度は地面へ真つ逆さまに落ちる魔獣を白騎士が更に追撃する

(レナード)

(五月雨突きを、いや…、もつと速くもつと鋭く)

魔獣に追いついた白騎士はグランサーで無数の突きを繰り出す

その突きの数がだんだんと増えていき突きの中に光が見え始める

地面が近づいてくる頃には無数の光の突きで魔獣の装甲がスタボロになっていた

(レナード)

「うおおおお、スターダストレイヴ！」

無数の光の突きはいみじくもレナードの言った通り無数の星屑が降っているようで

あつた

白騎士は最後に渾身の力で一突き突きを入れて魔獣を地面に叩きつけた
全身ズタボロとなった魔獣はもう動かなかつた

(エルドア)

「これは…、すごいな」

(賢士)

「妾もここまでするとは思わなんだな」

白騎士が光に包まれて元のレナードに戻るが消耗したのかふらついているようだ

(ユウリ)

「レナード大丈夫？」

(レナード)

「ああ、砂漠の遺跡の時ほどひどくはないよ、それよりレティシアサンキュ」

(レナード)

「あの魔獣を倒せたのはレティシアのおかげだよ」

(賢士)

「妾は一言助言しただけよ、倒せたのは汝の実力よ」

(賢士)

「もつともあそこまですごいことになるとは思わなんだがな」

(エルドア)

「ともかくだ、ここでキャンプにするぞ」

それにはだれも異存はなかった



キャンプを終えてドグマホールの中へ入るとウイザード兵で溢れかえっていた

神殿前の広場に御大層なワナを仕掛けていたくらいだからドグマホールがウイザー

ドの手に落ちているのは簡単に予想できることではあったが

意外なことかもしれないがレナード達がまともなウイザード兵と戦うのはこれが初めてである

(ウイザード小隊長)

「新たなイシュレニア帝国を築くためにもここは通すなー!」

(ウイザード兵達)

「オオー!」

実力はレナード達の足元にも及ばないが人形にされているわけでもないただの人間

であることが問題であった

ズヴ…

レナードへの攻撃を払いのけ隙だらけの腹を反射的に刺す

(ウイザード兵)

「くふう…、こんな…簡単に…」

それっきりウイザード兵は動かなくなる

(レナード)

「殺したのか…、人形にされているわけでもないただの人間を殺したのか…」

ユウリは攻撃を仕掛けてきたウイザード兵の剣をショートソードで受け流し反撃しようとしたところへ別のウイザード兵が襲おうとしていた

ズヴリ…

ユウリを襲おうとして他への注意が疎かになっていたその無防備な背中に槍が突き刺さる

槍が肺まで達して血を吐くところを振り向いたユウリが目の当たりにする

(ユウリ)

「ヒイ…」

(シーザー)

「割り切れ、割り切るんだよ」

(シーザー)

「確かにこいつらは人間だ、操らてるわけでもねえただの人間だ」

(シーザー)

「だが、グラールゼルは、マドラスは世界を支配しようとしてやがる」

(エルドア)

「そうだ、そのためにシンナイトを集めている、大いなる目覚めとやらを起こそうとしている」

(賢士)

「そうなれば死にゆくのは兵士達だけではない、何の関係もない民達とて犠牲になるのだぞ」

(シーザー)

「そうさせねえためにもやるしかないんだよ」

(レナード)

「うおああああああ！」

レナードは叫びながらもワイザード兵を斬り倒す

(レナード)

(人を殺すことに体が震えることに変わりはない)

(ユウリ)

「ハアア！」

ユウリのショートソードが過あやまたずにウィザード兵の心臓を貫く

(ユウリ)

(体に…、心に…、魂に…、私の全てが人殺しの罪を背負うことに違いはない)

(レナード・ユウリ)

(だけど…、だけど今だけは)

ウィザード兵を蹴散らし要所に配置された黒騎兵を白騎士か龍騎士で叩き潰して神

殿跡の地下へ続く階段のある広場に到着した

(賢士)

「よし、ここで結界を張って一息入れるぞ」

エルドアがレナードとユウリの顔が青ざめ限界に近いのを見て取って賛成する

(エルドア)

「そうだな、そうした方がいいだろうな」

(レナード)

「そんな、俺はまだ戦える、このまま一気に…」

(賢士)

「このうつけが！、そんな青ざめた顔してよお言うわ」

(賢士)

「まあ、気持ちはわからんでもないがの」

(シーザー)

「そういやあんた達の話しを全てしつかりと聞いたわけじゃなかったな」

(シーザー)

「この際だから話しちゃくれないか」

(賢士)

「そうよの、それも良いかも」

(エルドア)

「だがあまり時間はかけていられんだろうな」

(賢士)

「承知した」

(賢士)

「妾は元々異世界の者での、この世界に来てしばらくは気ままに暮らしておったが偶然ミューレアスのやつと出会っての、ウマが合うのかすぐに意気投合して親友になった

ものよ」

(賢士)

「それからはよくミューレアスのやつのことを手伝うようになったが妾はこの世界からすれば異邦人だから、ちよつと遠慮して歴史に残らぬような地味な仕事とか厄介事などを片づけたものよ」

(賢士)

「だがそれもドグマ戦記で一変することとなった」

(賢士)

「なんとかしてマドラス操る太陽王を倒したがそこに至るまでにミューレアスがマドラスのワナにかかってしまったので、そのせいで白騎士の契約者であるワイルドが死んでしまうたのよ」

(賢士)

「そしてミューレアスのやつは儀式による補助もせず急いで禁呪のリバースを使っておつての」

(賢士)

「その効果でワイルドは生き返つたがミューレアスに禁呪の影響が表れてミューレアスはリバースが完全に進行したら死んでしまう儂き命となった」

(賢士)

「そしてリバーズは本来儀式による補助で命が定着するまで支えておらねば生きてはおれぬものでな、完全に進行したとしても人間一人分の命を支えられるほど安定するものではなくての、ミューレアスと共にワイルドも死んでしまうたわ」

(賢士)

「リバーズとは元々そうゆう効果だったのか、それとも不完全だったからかは知れぬが切なき」とよ」

(賢士)

「それ故の不安定さを感じとったのかミューレアスのやつはドグマ戦記の後にすぐに王位を譲りワイルドと妾を伴って騎士やら古代遺跡やらを封印する旅に出おったのよ」

(賢士)

「砂漠の遺跡を封じたりマスタードラゴンに龍騎士を預けたり月姫の様子を見るついでにユグラと話しをしたりと色々あったわ」

(賢士)

「そして旅を終え白騎士を封印してからこれで役目が終わったとばかりに二人共逝きおったわ」

(賢士)

「そしてしばしの時がたつてから予言者から一万年後のことを聞いての、ドグマ戦記に深く関わりかつ生き残った少数の者を呼んでみたが一人しか応えなかったわ」

(エルドア)

「私のことだ」

(賢士)

「うむ、応えてくれたのは元黒騎士の契約者のクライヴのみよ」

(エルドア)

「私は全ては帝国のためと思い帝国を裏切った親友と命をかけて戦ったりもしたが、その全てが帝国のためではなく皇帝陛下個人のためと知った」

(エルドア)

「それ故レテイシア殿の呼びかけに応じたのよ」

(賢士)

「うむ、予言を聞いてから妾は血眼になって時をこえる手段を探したものよ」

(賢士)

「そして見つけ出した禁書に載っておった禁呪のクロノドライブを用いてクライヴをこの時代へと送り込んだのよ」

(エルドア)

「そしてこの時代についた私は禁呪でと時をこえた影響で色々と変わってしまったな、それで名前をエルドアに変えた」

(賢士)

「そして妾は禁呪ではなく時をこえる方法を探しておったがふとした時に意識体のみで時をこえれば大丈夫なのではないかと思おてな」

(賢士)

「それで色々と調べてみたらなんとかなりそうだったので準備をしつかりと整えて妾も時をこえることにしたのよ」

(賢士)

「予言通りであれば確実に戦いが待つ未来へ送り出して自分で自分だけのほんとしてるわけにはいかなんだからの」

(賢士)

「それで妾もこの時代に来たのだが、時にこえる際に場所がずれておる可能性があったので場所を確認しておいたら声をかけられたのよ」

(レナード)

「声をかけられたってこつちのレティシアにか？」

(賢士)

「こつちの？、ああ、言うておらんのだ」

(賢士)

「妾達が一つとなつて行動を開始する際に彼女には妾の名前を名乗ってもらつておつたのよ」

(賢士)

「見た目がまるつきり違う故にエルドア：いやクライヴにわかりやすくするために妾の名前が必要であらうと思つての」

(レテイシア)

「結果的には必要なかつたけどね」

(賢士)

「それは言わんでくれ」

(ユウリ)

「最初つからレテイシアつて名乗つてたから気づかなかつたわよ」

(レナード)

「確かにな」

(シーザー)

「なんとなく違和感があるような気がしてたのはこれだったのか、害がなさそうだ」

からほっといたけど」

(レテイシア↓レテイラ)

「それじゃ改めて自己紹介するね、あたしの名前はレテイラだよ」

(ユウリ)

「レテイシアにレテイラ、よく似た名前ね」

(シーザー)

「改めてよろしくな」

(賢士↓レテイシア)

「それで話しは妾が場所を確認してきよろきよろしておる時にレテイラに声をかけられたところからであったな」

(レナード)

「うん」

(レテイシア)

「妾は意識体、つまりは幽霊のようなもので普通は見えないはずの存在だから声をかけられた時は妾のこととは思わなんだぞ」

(レテイラ)

「あたしは無視されたと思って触ろうとしたら触れなかったどころかすり抜けたもん、

驚き慌ててびっくりしたよ」

(レティシア)

「それで色々とおつてこの時代でマドラスの野望を阻止するために共生することにしたのよ、共生と言うよりは運命共同体と言った方がわかりやすいがのう」

(レティシア)

「それから後は何事もなくパーモ村でユウリに会ったから妾のことで特に言うことはないのう」

(レティシア)

「話さねばならぬことがあるとすればカーラのことかの」

(レティシア)

「カーラのやつは最初に見た時から黒騎士の契約者であることはわかっておつた」

(レティシア)

「バランドール城を襲撃した時もドレギアスとして参加しておつたが指揮をとつておつただけで人は殺しておらぬぞ」

(シーザー)

「なるほどな」

(レティシア)

「カーラは最初はグララーゼルのやつに色々暗示をかけられて操り人形にされておつたが妾が色々世話をして己を取り戻してからは自分で道を決めれるようになったのよ」

(レティシア)

「だが、汝らも知つての通りグララーゼルとはセティにマドラスがとり憑いて作り出した人格でありそのセティはドグマ神殿で冷凍睡眠になつておつた少年のことよ」

(レティシア)

「そしてカーラは一緒に冷凍睡眠されておつた赤子の一人でセティとは特に仲が良くての、マドラスからセティを取り戻すことを諦めきれずに妾達から離れていったのよ」

(レナード)

「そうだったのか…」

(シーザー)

「それでその…、セティを取り戻せる可能性というのは？」

(レティシア)

「ここしばらくはマドラスが直接とり憑いておるようだな…、はつきり言つて絶望的よ」

(ユウリ)

「そんな…」

(シーザー)

「くっ…、せめてカーラだけでも助けたいな」

(レナード)

「行こう、この先に、きっとシズナもカーラも待っている」

太陽王4



ーウイザード軍・モノシツプ・司令官室ー

(カーラ)

「兄さん、今更シンナイトを集めて古代の帝国を復活させてなんになるというの」

(グララゼル)

「カーラ、前にも言ったはずだ、私の志は曲げられぬとな」

(グララゼル)

「私はシンナイトを集めて崇高すいこうなるイシュレニア帝国を再建するのだ」

(カーラ)

「兄さんは自分が皇帝の血を引いていると本気で信じているんですか？」

(グララゼル)

「無論だ、レダム司祭の教えに間違いはない」

(カーラ)

「あのたまに見かけるといふ話しか聞こえない部屋から動かないような男のことをどうしてそこまで信じられるのですか」

(カーラ)

(もつともレティシアの読みが当たっていればレダム司祭は自意識も自我もない人形でたまにマドラスがとり憑いて動かしているだけということになるがな)

(グラールゼル)

「レダム司祭こそが遥か古よりの使者」

(グラールゼル)

「それに…、それに…、この時代の人間が何をした、俺を本当に愛してると思っていた
ミディアスまで俺を殺そうとした」

(カーラ)

(本当にミディアスが殺そうとしたの、むしろマドラスが何かしてそうだった可能性の方が…)

(グラールゼル)

「だから殺される前に殺したのよ、この世界の人間が俺に居場所を認めないならその前にイシユレニア帝国を再建して皇帝になってやる」

(カーラ)

(でも今の兄さんにその言葉を言っても届かない)

(グララーゼル)

「私の居場所を奪われる前に世界の支配者になって全ての居場所を奪ってやる」
カーラは結局止めることの出来ない自分の不甲斐なさに歯噛みして拳を握りしめる
ことしか出来なかった

(シャブール)

「グララーゼル様、やつらが来たようです」

(グララーゼル)

「そうか、いよいよだな」

グララーゼルはそう言ってシズナを軟禁している部屋へと向かった

(グララーゼル)

「シズナ姫、いよいよあなたの力が必要な時が来ました」

(シズナ)

「約束は守ります、太陽王の所へ案内しなさい」

(シズナ)

(たとえば太陽王が復活してもシンナイトは四体、まだ大丈夫、頼みましたよレナード)



レナード達は階段を下りてドグマホールの更に奥へと踏み込んだ

ウィザード兵や黒騎兵に加えてウィザードの技術者が修復した古代兵器も戦列に加わったり転送装置もあつたりしたが決意を強くしたレナード達を阻むことは出来なかつた

そして何度目かの転送装置の使用で地上部分に出たがそこで一人の男が待っていた

(レナード)

「シャブール」

(シーザー)

「あんたがここにいるってことは、この奥にグラールゼルと姫さんが」

(シャブール)

「その通りだ、そろそろ用事を終えられる頃だろう」

そう答えたシャブールの右腕に見慣れない黒い籠手をはめられていた

奥の扉が開きそこから二人の人物が出てくる

シャブールは跪いてその人物を迎える

(レナード)

「シズナ、無事でよかった、もしかして太陽王は既に？」

(シズナ)

「ええ、こちらから持ち掛けた約束を破るわけにはいきませんので」

(グララゼル)

「そういうことだ諸君、もつとも太陽王は元々私の物だからどのような経緯であれいずれは私の物となったはずだ」

(シズナ)

「ですが封印はつい今し方解いたもの」

(エルドア)

「つまり太陽王での戦闘経験はないということか」

(シーザー)

「なるほど、つまり今が一番倒しやすいということか」

(グララゼル)

「こちらとしても白騎士と龍騎士は手に入れたいからな、決戦といこうか」

(レナード)

「望む所だ」

(グラールゼル)

「古の天空に輝きし、万物を統べる太陽の王アドルメアよ」

(レナード)

「古の剣をたずさえし、白き勇者ウイゼルよ」

(シーザー)

「古の大地を焦がす、紅き翼竜ラーヴェインよ」

(グラールゼル・レナード・シーザー)

「我に力を…変身！」

白騎士と龍騎士に対面する形で金色の鎧の巨人…、太陽王が姿を現した

シャブールはその金色の姿に神々しさと畏怖を覚えた

(シャブール)

「これが…、これがグラールゼル様の騎士か」

白騎士は剣と盾を構え

龍騎士は槍を構え

太陽王は虚空に灯した炎から双刃剣を取り出して

決戦の火ぶたは切って落とされた

(グラールゼル)

(ふん、まずは小手調べ)

(グラージェル)

「炎刃衝波」
えんじんしょうは

太陽王が剣を横薙ぎに振るうとそれに沿って炎が吹き出した

その炎を白騎士は剣の結界で防ぎ龍騎士は翼を生かしたハイジャンプでかわした

(グラージェル)

(簡単に防がれているな、魔力が上がってないのか)

ハイジャンプで太陽王の攻撃をかわした龍騎士はそのまま太陽王に向けて乱れ突きに乘せた風の衝撃波を放つ

だが太陽王は剣で正確に衝撃波を叩き落とす

(グラージェル)

(なぜだ、太陽王の力なら一振りですとめて吹き飛ばせるはずだ)

龍騎士の攻撃に合わせて白騎士が突っ込んでくる

(レナード)

「ソニッククロス」

太陽王はそれを剣で受け止める

(グラージェル)

(なぜだ、なぜ力が出ない、これは不慣れというものではないだろ)

(グララーゼル)

(これでは炎刃斬舞えんじんざんぶも紅蓮疾走《フレア・ドライブ》も使えないではないか)

(レナード)

「はああ、聖・剣・解・放グランレイヴ」

ソニッククロスを受け止めてそのままになっていた太陽王の剣は聖剣解放の闘気に弾かれてまともに攻撃を食らってしまふ

(グララーゼル)

(なぜこんなに力が出ない、まさか…)

その時グララーゼルは見た、白い光に包まれて祈るシズナとシズナを守るユウリ達三人の姿を

(グララーゼル)

「あの女か…」

太陽王は消耗してる所に白騎士の攻撃を食らって耐えきれずに元の姿に戻った

元の姿に戻ったグララーゼルは剣を抜いて祈りで無防備なシズナを狙って走り出す

(グララーゼル)

「この魔女めがー!」

それを止めようとユウリがショートソードで受け止めたが

(グラールゼル)

「邪魔だ」

一つ吠えてユウリを吹き飛ばす

再び攻撃しようとしたが今度はエルドアに防がれる

(ユウリ)

「もうセティさんを救うことが出来ないなら…」

(エルドア)

「いつその場で終わらせるべきか」

エルドアはグラールゼルの剣を受け止めたまま強化魔法を使って身体能力を上げてグラールゼルを吹き飛ばす

そのままグラールゼルに止めを刺そうと剣を振り下ろす

だがその剣は見覚えのある剣で受け止められた

太陽王5



エルドアがこれでグラールゼルを終わらせるために振り下ろした剣は見覚えのある剣で受け止められた

それは黒騎士のアークであるディニヴァスの剣であった

そしてその剣を持っているのは仮面こそは脱いでいるもののドレギアスの鎧に身を包んだカーラであった

(カーラ)

「兄さん、早く逃げて」

(グラールゼル)

「くう……この魔女め、この屈辱はいつかはらす」

そう言ってグラールゼルはモノシツプへ逃げ込んだ

誰もグラールゼルを追跡しはしなかった、それはグラールゼルよりもカーラの方が重要だ

と認識しているということである

(シーザー)

「カーラ、セティ兄さんはもう…」

(カーラ)

「そうなんだろうな、わかってる」

(カーラ)

「だが一度決めた道を覆したりしたら私に何が残る」

(レティシア)

「その鎧は決意の証ということかの」

(カーラ)

「ああ…、色々と私を縛りつけてくれたこの鎧だからこそこの場には相応しい」

(シーザー)

「もう幼くも幸せだったあの頃には戻れないのか」

(レナード)

「俺も色々と話しを聞いて意識するようになってから思い出してきたよ」

(レナード)

「まだシンカ村にいた頃はシーザーとカーラは特に仲が良くしてお花畑とかで遊んでた

な

(ユウリ)

「私とレナードだって…」

ユウリが何か言いかけたのをレティシアが止める

(レティシア)

「ここにはまだシャブールがおるし月姫の契約者だとばれるのはまずかろう」

(カーラ)

「無邪気で幸せだったあの頃にか…、戻れるものなら戻りたいな」

(カーラ)

「だがもう戻れはしない、それにセティ兄さんももういない」

(シーザー)

「やるしか…ないのか」

(カーラ)

「ああ、古の闇を支配する漆黒の翼、ディニヴァスよ我に力を…変身！」

カーラの姿は漆黒の翼の騎士へと変わる

(カーラ)

「ダイクネス・ドレイブ
漆黒疾走」

(シーザー)

「龍閃」

今二体の翼の騎士がぶつかり合う

お互いに突進技を繰り出し交錯して着地する

(シーザー)

「さすがに強いな」

(カーラ)

「よく言う」

お互いに左上腕部の装甲に一筋の鋭い切り傷が入っていた

ガシーン

そのままお互いに横薙ぎに武器を振るいっつ半回転して打ち合う

(レナード)

「シーザー俺も」

(シーザー)

「いや、やめてくれ」

(ユウリ)

「どうして?」

(レティシア)

「自分で決着をつけたいのであろう」

(レティシア)

「兄弟と言つても血が繋がってるわけではないの」

(レティシア)

(まあ、それはレナードとユウリにも言えることではあるが、レナードがあればはのう)

何度も隙については攻撃を仕掛け、それをあるいは受け流し、あるいは避け、二人のスタミナは限界近くまで消耗したが、それでも決着がつかずにただ時だけが流れていく

(カーラ)

ヒートエッジ

「赤熱刃」

刀身が高熱に包まれて赤銅色に輝き龍騎士の鎧を焼き切ろうとして攻撃する

(シーザー)

ラストウイング

「吹きつける翼」

龍騎士はその攻撃を翼で起こした突風で上手く受け流す

その突風に煽られて黒騎士は体勢を崩す

龍騎士はそのチャンスを逃さずに攻撃する

(シーザー)

「風輪列斬」

だが黒騎士は辛うじてその攻撃をかわす

(シーザー)

「なぜだ、なぜ武器破壊ばかり狙う」

(シーザー)

「もつと確実にダメージを与えることだって出来たはずだ」

(カーラ)

「そういうお前だって腕や足を狙ってばかりではないか」

(カーラ)

「今のだって急所を狙っていれば避け切れはしなかった」

しばらくお互い黙っていたが

(カーラ)

「ぷっくくくくく」

(シーザー)

「あっはははははは」

二人して突然笑い出した

二人共元の姿に戻って心ゆくまで笑い続けた

(カーラ)

「そうか、なんだそういうことだったんだ」

(カーラ)

「私は昔のセテイ兄さんばかり追いかけていたんだな」

(カーラ)

「いつの間にか人が変わってしまつて、私も操られて、レティシアのおかげで自分を取
り戻して」

(カーラ)

「過去の亡霊がとり憑いていることを知つて、望みが薄いと忠告されても助けること
の出来る可能性を諦めきれなくて」

(カーラ)

「がむしやらに前しか見てなくて、それを否定したら何も残らないと思つてしまつて
いた」

(カーラ)

「でも違つたんだな、兄さんを助けることの出来ない現実」

(カーラ)

「それを受け入れても私にはまだあるんだな」

(シーザー)

「言っただろう、何があるうとお前は仲間だって」

いつの間にかカーラの背後にシャブールが立っていた

(シャブール)

「カーラ様、裏切るつもりですか」

油断があった

(カーラ)

「私はレーザーレに従っているわけではない、兄さんを助けたかっただけだ」

カーラと仲間としての空気を再び共有出来たことに安堵していた

(シャブール)

「残念です、あなた様ほどのお人がレーザーレ様の崇高なる志を理解出来ないとは…

ね！」

だから反応出来なかった

(カーラ)

「ぐふっ…、ぐふう…」

シャブールの右腕にはめられた黒い籠手から無数の触手が伸びてカーラを刺し貫い

た

肺にもダメージがあつたのかカーラの口から鮮血がこぼれる

だから間に合わなかつた

触手は一度引き抜かれその際に手でカーラの右手に持ったディニヴァスの剣をカーラの右手ごと掴む

(シーザー)

「やめろ…、やめろー！」

(シャブール)

「カーラ様の黒騎士、私がもらいますよ」

籠手の触手がディニヴァスの剣に潜り込み同調を促すように怪しく光を放つ

(エルドア)

「あの籠手は超古代遺品アーティファクトなのか？」

(シャブール)

「ははははは、グラールゼル様より授かったこの力で黒騎士は私のものとなる」

レティシアはこの世界で初めて遭遇する異常事態に打つ手もわからずにただただ祈ることしか出来なかつた

(レティシア)

（誰ぞ、誰ぞカーラを助けてくれ、誰でもよいからカーラを助けて、カーラを助けてくれ）

打つ手を思いつかぬ歯がゆきとなんとかせねばならぬとの焦りが行き場のない憤りとなつて想いを力の限り飛ばす

全員の広域心輪がその八つ当たりの負荷に耐えきれずに砕け散る

だがその祈りは届いた

（???)

《懐かしい波動を感じたと思つたらお主じゃったか、まだ生きておつたとは思わなんだわ》

（レテイシア）

《その声はユグラか、久しいのう》

（ユグラ）

《状況は理解したぞ、まずは黒き呪縛を断ち切らねばなんとも出来ぬ》

（レテイシア）

《それは黒騎士の力を奪つて変身するものを倒せば良いということかの》

（ユグラ）

《命の灯火が消えぬ限り何とかする、してみせる》

(ユグラ)

《だから思いつきりやれ》

(レテイシア)

《汝に最大級の感謝を》

(シャブール)

「古の闇を支配する漆黒の翼、テイニヴァスよ、我に力を…変身！」

テイニヴァスの剣の力が籠手に取り込まれたのか、剣は籠手と同調してシャブールの契約の宣誓に応える

(レナード)

「うおおおおおお！」

白騎士が突っ込んで速攻でソニッククロスを黒い魔神の腹に叩き込むが効いた様子がない

ちなみに黒い魔神は下半身が地面に埋まっているようで上半分が生えているような形になっているので腹への攻撃となったのである

(レナード)

「くそう、ちつとも効かない」

(シーザー)

「なら俺が、変身！、くそう、変身、変身！」

(エルドア)

「無理だ、あれだけダメージを受けているのに変身なんて出来るわけがない」

(シーザー)

「ちきしょう…、ちきしょう…、カーラを救うことは出来ねえのかよ」

(レティシア)

「いや救える、あの魔神さえ手早く倒せば妾の友が救ってくれる」

(シーザー)

「だがダメージを与えることも出来ねえんだぞ」

（??）

「私もささやかながら力を貸しましょう」

声のした方を見るとシズナが白い光に包まれて祈っていた

（レナード）

「シズナ？」

（レテイシア）

「いやミューレアスよな」

ミューレアスがシーザーの方を見てにこりと微笑むと龍騎士のアークであるラー

ヴェインのベルトが柔らかい光を放つ

（ミューレアス）

「今はこれが精一杯ですけど」

「これはまさか？」とシーザーが聞くとミューレアスはこくりと頷いた

（シーザー）

「古の大地を焦がす紅き翼竜ラーヴェインよ、我に力を…変身！」

その声に応じてシーザーは龍騎士になる

（シーザー）

「すげえ…、ダメージが全て消えてる」

(レティシア)

「ならば妾も出来ることをせねばな」

(レティシア)

「その体は想いで出来ていた

血潮は信念　心は祈り

全ての戦場において敗走はなく無敵

一度も折れることもなく

一度も歪むこともなく

数多の絶望を越え　常に限界の先を行く

彼の物は約束を果たす地に立つ

ああ… その体はきつと想いで出来ていた

アブリミッド・ブーレスト
限界突破

レナード達全員に限界を超えた力が沸き起こり

白騎士は体が赤く染まりはしないものの各パーツが展開されてリミッターが解除される

(レティシア)

「カーラを助けるためにもさっさと終わらせようぞ」

(レナード達戦闘メンバー全員)

「オオー！」

白騎士と龍騎士は前線で上と下に分かれて魔神を攻撃し他のメンバーは後方から騎士達のサポートについてる

だがシャブールが変化したと思われる魔神の部分は鎧が硬くてなかなか攻撃が通らない

(レナード)

「ソニッククロス！」

技の一つも叩き込んでみても鎧の表面に跡がつくだけである

(シーザー)

「クソツ、ふうじんれつぱ風神裂波」

乱れ突きに乗せた無数の風の衝撃波も効果はなかった

まだ魔神はその姿での戦いに慣れていないのか両腕で叩き潰そうとするだけで騎士達にとって避けるのは難しくないがこのままじゃ埒があかないことも確かである

(エルドア)

「まずいな、このまま埒が開かなければカーラが持たぬぞ」

(ユウリ)

「そんな、助けなきやいけないのにあんなところに埋め込まれてるしどうすればいいのよ」

(レテイシア)

「あんなところに埋め込まれておるから遠慮のない攻撃魔法も使えぬし人質にとられておるようなものよの」

(レテイラ)

「こういつちやなんだけど邪魔なくらいだね、引っこ抜ければいいのに」

(レテイシア)

「ん、今何と言った？」

(レテイラ)

「えっ、邪魔になるくらいだねって？」

(レテイシア)

「その次は」

(レテイラ)

「引っこ抜けばいいのにだけど」

(レテイシア)

「それだ、そうよ引っこ抜けば良かったのよ」

(レティシア)

「くくく、なんとも間抜けなことよ、こんな簡単なことに気づかなんだとはの」

(ユウリ)

「えつと、何か思いついたの？」

(レティシア)

「ああ、とつておきの手がな」

レティシアは急いで広域心輪と同じ効果を出す術式を組立て全員に意思で話しが出るようにした

(レティシア)

「皆、聞こえておるか」

(レナード)

「これは？」

(シーザー)

「レティシアかい」

(レティシア)

「カーラを助ける方法を見つけたぞ」

(レナード)

「それは本当か」

あまりにレナードの食いつきが良すぎてちよつとばかり引いてしまいうくらいである

(ユウリ)

「レナードのやつこういう時にはすごい勢いになるからね…」

(レナード)

「い…いや、ついな…」

(シーザー)

「それでカーラを助けるにはどうすりゃいいんだ」

(レティシア)

「なにやること自体は簡単よ、あの黒い魔神からカーラを…、黒騎士を引っこ抜けば良

いだけだからの」

(シーザー)

「問答無用でか？」

(レティシア)

「問答無用でだ、そのための力となる門ゲートを設置するのでな、ゲートを潜ってカーラを助

け出して…」

(レティシア)

「四聖の門を守りし聖獣よ 妾の声聞こえるならば

妾の声に応えたまえ 退けぬ戦いに打ち勝つために」

(レティシア)

「四聖獣王陣」

レティシアの目の前に異世界の伝承に残る四聖門を模かたどった魔法陣が現れる

龍騎士がその四聖門を潜り赤い光に包まれる

(シーザー)

(すげえな、この力ならいけるぜ)

(シーザー)

「食すらえ、朱雀飛斬すざくひざん雨！」

乱れ突きの衝撃波が正に雨あられのように黒い魔神の正面に降り注ぐ

さすがに魔神に傷をつけるとまではいかないが防御態勢をとらせて足止めすること

は出来た

その間に白騎士とレティシアが四聖門を潜る

青い光に包まれたレティシアが白騎士に飛翔魔法を使い

白い光に包まれた白騎士が龍騎士と共に黒い魔神の直上へ飛び上がる

(レナード)

「引っこ抜くためにはまずこうしなくちゃな、びやごじりゆうせう白虎流星雨！」

四聖の力で強化されたスターダストレイヴによる無数の光の刺突で黒騎士が埋め込まれてる黒い魔神の首回りを集中的に突きまくり装甲をズタボロにする

白騎士の攻撃に続けて龍騎士が龍閃で黒騎士の背後に下り立ち両腕で黒騎士をガツチリとホールドして引っこ抜くために力を込める

だが黒騎士のアークを取り込んで変身してるためなかなか引っこ抜くことが出来ずにいるが白騎士も一緒になって踏ん張って引っこ抜こうとしている

しかし、時間がかかれば黒い魔神が体勢を立て直して邪魔者を排除しようとするのは当然であり黒い魔神は右手を叩き付けることで邪魔な騎士達を排除しようとした

だが白騎士も龍騎士も黒い魔神の行動など関係ないとばかりに黒騎士を引っこ抜こうと力を込めている

なぜならば、白騎士も龍騎士も黒い魔神の攻撃が止められると確信していたから

(ユウリ)

「げんぶれつこうだん玄武裂鋼弾！」

シンカ村で拾った銀の弓から放たれたのは二条の光

その光は容易く黒い魔神の右手に風穴を空け魔神は悲鳴と共にジタバタと暴れだし

黒騎士にまとわりつく邪魔者を気にしていられなくなった

(ユウリ)

(で…、できた)

そう、ユウリにとっては一か八かの賭けだった

黒い魔神が黒騎士を引っこ抜こうとする騎士達を叩き潰そうとした時ユウリは何とかして二人を助けたいと思っていたがショートソードで援護出来るような技はなく魔法は補助系や神聖系を中心にして覚えていたためにカウンターとして使えるほど速攻で使える遠距離魔法は覚えていなかった

そんな時に思い出したのがシンカ村で拾った弓である、レナード達が魔法陣のゲートを潜っていたことを思い出し弓を構えながらゲートを潜ると黒い光に包まれると共に凄まじいまでの力が沸き起こり力が満ちる昂揚感に流されるままに撃つたのが上手くいったのが実状であった

黒い魔神が暴れだしたことで黒騎士を引っこ抜こうとしてる騎士達は踏ん張りにくくなったが暴れる勢いを利用して前後からしっかりと抱え込んでタイミングを合わせて引っこ抜く方法に変えた

それは上手いき黒騎士の腹や腰あたりにくっついていた無数の管のようなものを

ぶちぶちと引きちぎりながら黒騎士を引っこ抜くことが出来た

黒騎士が引っこ抜かれたことで黒騎士も黒い魔神も変身が強制解除されて光に包まれる

だが黒騎士は変身解除とは違う緑色の光に包まれて姿を消した

(シーザー)

「お、おいカーラ、せっかく助け出したってのにどうなってるんだよ」

(レティシア)

「安心せい、妾の友が安全な場所へと転移しただけよ」

(シーザー)

「そうなのか？」

(レティシア)

「うむ、悪い知らせも来ておらぬしカーラは助かる、大丈夫ぞ」

(シーザー)

「なら後で会いに行こうぜ」

(レティシア)

「あんな別れ方をしたのでは会わせる顔がなからう」

(シーザー)

「そんなん気にしてないってのな、なあレナード」

(レナード)

「ああそうだな、俺もカーラには帰ってきて欲しいな、グリードでレンも待つているだろうし」

(ユウリ)

「二人共そういうところは全然わかってないんだから（もう諦めたけど）」

(エルドア)

「カーラが自分を許せるようにならないと顔を出せるわけがないだろうに」

(レナード)

「そういうものなのか？」

(ユウリ)

「そうよ」

(エルドア)

「そういうものだと思っておけ」

(レテイシア)

「納得いかんかもしれないがこれでカーラを助けることが出来たのは確かぞ」

カーラを助けることが出来たという実感がだんだんとわいてきて気が緩んできたそ

の時に良い雰囲気の水を差すやつがいた

(シヤブール)

「ふふふ、ははははははははは、これだ、これが私の力だ、私のものになったのだー！」
皆一様にげんなりとした表情になる

特にユウリなんて「ああいたね、あんなやつ」と顔に書いてある

レティシアは不粋なやつを討つために矢を撃つたが命中する前に姿が消えた
おそらく転移符か何かであろう

(レティシア)

「ちっ、逃げましたか」

逃げた苛立ちに舌打ちするほどである

そこまで嫌われていたかシヤブール

終章

終章1



ドグマホールでレティシア達はカーラを解放してシズナを救出してやるべきことは
全て終えた

(レナード)

「後はここから帰るだけ…、って随分遠いよな」

それを聞いてかシズナが口を挿んだ

(シズナ)

「すいませんが私をあそこへ連れて行ってもらえませんか」

シズナは中庭の端を指さした

(レティシア)

「ああ、良いがそれよりも…」

レティシアがシズナに近づいてシズナだけに聞こえるように小声で言う
(レティシア)

「今出ているのはミューレアスであろう、随分と消耗しておるようだが大丈夫かの」
(シズナ (ミューレアス))

「まだ大丈夫です、ここでやり残したことがあるのでそれが終わったら休ませていただきます」

(レナード)

「大丈夫か、俺も手伝うぞ」

レナードも一緒になってシズナを中庭の端へ運ぶ

(レティシア)

「ほれ着いたぞ、それで何をするつもりぞ？」

(シズナ (ミューレアス))

「翼を起こします」

(レナード)

「翼？」

(シズナ (ミューレアス))

「天駆ける古の白き翼シャグーナよ…」

シズナの祈りと共にシズナの体が白い光に包まれしばらくしてからドグマホールの崖下から何かが飛び出して空へ消えたと思ったたら静かに中庭へと下りてきた

それはモノシツプより小型の飛行船だった

それは抽象的に鳥を模したような流線型のデザインで白一色の美しい機体だった

(レティシア)

「シャグーナか、すっかり忘れておったな」

(レナード)

「シズナの光が消えたと思ったたら倒れたんだけど大丈夫なのか」

(レティシア)

(ええい、一万年ぶりだということにもう少し感慨にふけらせろ)

(レティシア)

「シャグーナを、この飛行船を呼びたすのに疲れただけよ、心配いらぬわ」

さあ乗った乗ったとみんなをシャグーナに乗せてレティシアはシャグーナにパイ

ロット席に座る

(ユウリ)

「レティシアって飛行船の操縦出来るの？」

(レティシア)

「この程度のものならば軽いわ、心配はいらぬ」

レイシシア達六人はシャグーナに乗って無事にバランドールの郊外に着陸した。ちなみにグラールゼルとシャブールはある孤島本拠地へと帰りそこで新生イシユレニア帝国を立ち上げる準備を進めることになる

そしてドグマホルルの遙か西方に存在するとある場所では

森の中に存在するとある国の首都の更に奥深くの特別な場所で巨木の目の前に緑の燐光に包まれて突如現れた人物がいた

その人物はきれいな金髪の女性で背中に酷い傷を負っていた

???)

「どうやら間に合ったようじゃの」

???)

「後は月姫と共にじっくりと静養すれば心配はなからう」

???)

「完治してからどうするかは本人に聞けばよからうな、あ奴らがくるまでそれなりに時間もあるじゃろうしな」

終章2



シャグーナに乗ってバランドールまで戻ってきたレナード達はバランドールの郊外に着地してこのシャグーナをどうするか話しをして城に帰ってから知らせて取りに行ってもらおうということで一区切りついた

それからレナードが真面目な顔をして一つ問いかけた

(レナード)

「そういや今までタイミングを逃してたから聞けなかつたけど前に砂漠の遺跡でシズナを助けた時は城に帰るのはまずいと言ってたけど今は大丈夫なのか？」

(レティシア)

「うむ、今は大丈夫であろう、やつらがシズナを狙う一番の目的は達しておるであろうから」

(ユウリ)

「一番の目的？」

(エルドア)

「太陽王か」

(レテイシア)

「うむ、かつてマドラスが使っておった騎士で圧倒的な戦力になる故に早急に手に入れておきたかったのは想像に難くあるまい」

(レテイシア)

「それにシンナイト最後の一体である月姫は容易くは封印を解けぬしな、ウィザードもそのあたりはある程度は知っておろう」

(レテイシア)

「それだけに月姫の封印を解くためだけにシズナを長時間監禁するのはやつらにとつてあまりメリツトはなかるう」

(レナード)

「つまり優先順位があまり高くないと？」

(シズナ)

「なら早く戻って皆を安心させてあげなければなりませんね」

(エルドア)

「それとここからは公の場というものになるからちゃんとしズナ姫と呼ばないといけないからな」

(シーザー)

「いや、いくらなんでもそれぐらいわかってるだろ」

そしてブランドールの町に戻ったレナード達はすごい歓迎をされながら城へ向かうことになった

キング・クリムゾン

町に入ってから過程を飛ばして城でサイラス達と対面してるといふ結果のみを残す

(シズナ)

「皆の者、心配をかけてしまいましたね、ただいま戻りました」

(サイラス)

「シズナ姫、ご無事で何よりです」

(サルベイン)

「シズナ姫、よくぞお戻りになりました」

(シズナ)

「あら、何か思った以上に歓迎されてるみたいですが」

(サルベイン)

「それはもちろんのことです、シズナ姫がない間どれ程大変だったか身に染みて思
い知らされました」

(サルベイン)

(実際サイラスがいなければここまで持つことなくブランドールは滅びていただろ
う、今となってよくわかる、私は実権を握れる器ではなかった)

(サルベイン)

(あんな野心を抱いてウイザードと通じていた過去の自分のなんと愚かしいことか)
(シズナ)

「それなら出来ることはやらなければなりませんね、書類とか随分とたまっているこ
とでしょう」

(サルベイン)

「それは明日からお願いするとしましよう、シズナ姫のご無事をお祝いするパー
ティーの準備も進んでおりますので今日一杯はごゆるりとお休みくださいませ」

(シーザー)

「そのパーティー俺達も出ていいのかな？」

(サイラス)

「というよりもあなた達が主役です、ぜひとも参加してください」

そして、キングクリムゾン

・レナード

ラパッチワインで働きながらシズナの私設騎士としてちよくちよく厄介事を処理することになる

・ユウリ

レナードと一緒にラパッチワインと私設騎士の二足の草鞋をはいている

レナードのことはすっぱりと諦めたようだ

・シーザー

グリードに帰って領主の地位を引き継ぐ

その後はバランドールとの友好を示すようによく町にきてはレナード達と会っている

・エルドア

・レテイシア

その能力の高さから完全に城勤めになっている

とはいえシズナの騎士としてレナード達と一緒に任務に出ることも多い

白騎士物語 時をこえた物語 完